新発田市埋蔵文化財調査報告　第 56

五十公野館跡 発掘調査報告書

新発田市立東小学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７

新発田市教育委員会

新発田市埋蔵文化財調査報告　第 56

五十公野館跡 発掘調査報告書

新発田市立東小学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７

新発田市教育委員会

五十公野館跡出土 観音立像（187）

華報寺墓跡出土 観音立像

例　　言

1　本書は，新潟県新発田市五十公野字櫓下（しばたしいじみのやぐらした）4859 ～ 4864・4871 番地に所在する五十公野館跡（いじみのやかたあと）の発掘調査記録である。

2　発掘調査は，新発田市立東小学校建設に伴うもので，新発田市教育委員会（以下，市教委）が調査主体となり平成 25 年 8 月と平成 26 年 8 月に確認調査を実施した。本調査は株式会社ノガミに業務を委託し，平成 27 年 7 月 2 日～ 11 月 27 日に現地調査を，同年 12 月～翌年 3 月まで基礎整理作業を実施した。本格整理は平成 28 年 6 月～平成 29 年 3 月まで行い，調査報告書を刊行した。

3　本発掘調査に要した経費は，事業主体である新発田市が一般財源から支出した。

4　遺物と記録類は，新発田市教育委員会が一括して保管している。出土遺物の注記は「五十ヤ」とし，グリッド・遺構・遺物番号・層位・日付を記し，本書での掲載遺物については通し番号を橙色で追記した。

5　調査成果の一部は，現地説明会・平成 28 年度年報で記載しているが，本報告書をもって正式な報告とする。

6　遺構の実測は，調査担当の福山俊彰の指示で調査員の湯原勝美と作業員が行なった。また，遺構等の性格づけについては，市教委の鶴巻康志監督員の指示を得た。遺構の撮影は福山・湯原である。

7　遺物の接合・復元・実測・トレースは市教委の田中耕作監督員，株式会社ノガミの戸根与八郎の指示で整理作業員が行った。挿図と写真のレイアウト及び観察表の作成は，戸根の指示のもと調査員の秋山泰利・大谷祐司と整理作業員が行った。遺物の撮影は，観音立像と石製品を田中，他は大谷である。

8　本書の執筆は，第Ⅰ章 1・3・5 を田中，第Ⅰ章 2・4・第Ⅱ章・第Ⅲ章 1・2 を戸根，第Ⅲ章 3 ～ 6 を戸根・秋山・大谷，第Ⅳ章 1 ～ 3 を戸根・秋山，4 ～ 6 を戸根，第Ⅵ章 1 を田中，2 ～ 5 戸根が担当した。編集は戸根が行った。

9　第Ⅴ章の自然科学分析のうち，人骨に関しての所見は新潟医療福祉大学の奈良貴史・佐伯史子氏に，観音立像の化学分析については，株式会社第四紀地質研究所にそれぞれ業務を委託し，分析結果を掲載した。

10　付編は，新潟県内で長年日本中世史を研究している阿部洋輔氏に執筆を依頼し，玉稿を頂いた。

11　巻頭図版の「華報寺墓跡出土観音立像」は新潟県指定文化財であり，所有者の御厚意により撮影・計測・化学分析をさせていただいた。

12　第 1 図 歴代の校舎の写真は，新発田市立五十公野小学校から提供を受けた。

13　発掘調査から本書の作成まで，下記の諸氏・機関から多くの御協力・御支援を賜った。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

阿部　聡　川上貞雄　久保智康　佐藤榮征　関　雅之　水澤幸一　村木二郎

新発田市立五十公野小学校　新潟県教育庁文化行政課　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県立文書館

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　発掘調査地点の土地履歴と小学校の沿革 …… 2

3　確認調査の概要 …… 4

4　本調査と整理作業の経過 …… 6

5　調査体制 …… 8

第Ⅱ章　遺 跡 の 環 境 …… 9

1　遺跡の位置と立地 …… 9

2　五十公野地区の遺跡 …… 10

3　周辺の遺跡 …… 11

第Ⅲ章　遺構と基本層序 …… 13

1　調査区とグリッドの設定 …… 13

2　基本層序 …… 14

3　遺構の概要 …… 16

4　調査区② …… 17

5　調査区③ …… 18

6　調査区⑥・⑨ …… 26

第Ⅳ章　遺　　物 …… 45

1　概　　要 …… 45

2　土器・陶磁器 …… 45

3　木製品 …… 59

4　金属製品 …… 60

5　鍛冶関連遺物等 …… 61

6　石製品 …… 63

第Ⅴ章　自 然 科 学 分 析 …… 76

1　新潟県新発田市五十公野館跡出土人骨の人類学的報告 …… 76

2　新潟県新発田市五十公野館跡出土観音立像の化学分析 …… 80

第Ⅵ章　ま　と　め…… 84

1　遺跡の範囲について …… 84

2　遺構について …… 84

3　土器・陶磁器について …… 86

4　金属製品について …… 88

5　2 枚の絵図から …… 91

《要　　約》…… 94

《引用・参考文献》…… 95

付 編　五十公野氏と新発田氏についての粗描 …… 98

挿　図　目　次

第 1 図　歴代の校舎 …… 3

第 2 図　確認調査トレンチ位置図 …… 4

第 3 図　確認調査の遺物 …… 5

第 4 図　本調査区割位置図 …… 7

第 5 図　五十公野地区周辺の中世遺跡分布 …… 9

第 6 図　五十公野城略測図 …… 10

第 7 図　主な中世城館跡・集落遺跡の分布図 … 12

第 8 図　調査区・グリッドの設定と基本層序の位置 …… 13

第 9 図　基本層序 A ～ D …… 15

第 10 図　基本層序 D・E …… 16

第 11 図　調査区② 平面図・溝 1 …… 17

第 12 図　調査区② 溝 1 断面図…… 18

第 13 図　調査区③ 平面図…… 19

第 14 図　調査区③ 土坑…… 20

第 15 図　調査区③ 井戸 1 …… 22

第 16 図　調査区③ 井戸 2 …… 23

第 17 図　調査区③ 井戸 3 …… 24

第 18 図　調査区③ ピット …… 25

第 19 図　調査区⑥・⑨ 平面図（1）…… 26

第 20 図　調査区⑥・⑨ 平面図（2）…… 27

第 21 図　調査区⑥ 竪穴建物 1 …… 28

第 22 図　調査区⑨ 竪穴建物 2 …… 29

第 23 図　調査区⑨ 土坑（1）…… 31

第 24 図　調査区⑨ 土坑（2）…… 32

第 25 図　調査区⑨ 土坑（3）…… 33

第 26 図　調査区⑨ 井戸 4・6 …… 35

第 27 図　調査区⑨ 井戸 5 …… 36

第 28 図　調査区⑨ 溝 8 ～ 10 平面図 …… 38

第 29 図　調査区⑨ 溝 断面図 ……39

第 30 図　調査区⑨ ピット列…… 40

第 31 図　調査区⑥・⑨ ピット …… 41

第 32 図　調査区② 出土遺物…… 46
第 33 図　調査区③ 出土遺物…… 47
第 34 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（1）…… 49
第 35 図　調査区⑨ 出土遺物…… 50
第 36 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（2）…… 51
第 37 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（3）…… 53
第 38 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（1）…… 55
第 39 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（2）…… 57
第 40 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（3）…… 58
第 41 図　木製品 …… 59
第 42 図　金属製品 …… 62
第 43 図　鍛冶関連遺物等 …… 63
第 44 図　石製品（1）…… 65
第 45 図　石製品（2）…… 66
第 46 図　石製品（3）…… 67
第 47 図　石製品（4）…… 68
第 48 図　五十公野館跡と城跡 …… 84
第 49 図　井戸の模式図 …… 85
第 50 図　出土遺物破片数 …… 87
第 51 図　出土遺物の継続年代 …… 88
第 52 図　県内出土金銅仏の分布 …… 90
第 53 図　五十公野耕地絵図（部分） …… 92
第 54 図　五十公野村田畑宅地其他地引絵図 …… 92

表　目　次

表 1　五十公野小学校の沿革 …… 2
表 2　遺構観察表（竪穴建物） …… 42
表 3　遺構観察表（土坑） …… 42
表 4　遺構観察表（井戸） …… 43
表 5　遺構観察表（溝） …… 43
表 6　遺構観察表（ピット列） …… 44
表 7　遺構観察表（ピット） …… 44
表 8　出土銭貨一覧 …… 61
表 9　遺物観察表（1）確認調査 出土土器・陶磁器 …… 69
表 10　遺物観察表（2）調査区② 遺構外出土土器・陶磁器 …… 69
表 11　遺物観察表（3）調査区③ 遺構出土土器・陶磁器 …… 69
表 12　遺物観察表（4）調査区⑥・⑨ 遺構出土土器・陶磁器 …… 70
表 13　遺物観察表（5）調査区⑥・⑨ 遺構外出土土器・陶磁器 …… 71
表 14　遺物観察表（6）木製品（1）…… 72
表 15　遺物観察表（7）木製品（2）…… 72
表 16　遺物観察表（8）木製品（3）…… 73
表 17　遺物観察表（9）金属製品（1）…… 73
表 18　遺物観察表（10）金属製品（2） …… 73
表 19　遺物観察表（11）金属製品（3） …… 73
表 20　遺物観察表（12）金属製品（4） …… 73
表 21　遺物観察表（13）金属製品（5） …… 74
表 22　遺物観察表（14）金属製品（6） …… 74
表 23　遺物観察表（15）金属製品（7） …… 74
表 24　遺物観察表（16）銭貨 …… 74
表 25　遺物観察表（17）鍛冶関連遺物（1） …… 74
表 26　遺物観察表（18）鍛冶関連遺物（2） …… 74
表 27　遺物観察表（19）その他の出土遺物 …… 74
表 28　遺物観察表（20）石製品（1） …… 75
表 29　遺物観察表（21）石製品（2） …… 75
表 30　出土遺物破片数 …… 87
表 31　観音立像比較 …… 89
表 32　県内の出土金銅仏一覧 …… 90

図　版　目　次

巻頭図版　五十公野館跡・華報寺墓跡出土観音立像
図版 1　遠景
図版 2　調査前近景
図版 3　調査区②・③
図版 4　調査区③ 土坑 3 ～ 6・8 ～ 10
図版 5　調査区③ 土坑 11, 井戸 1
図版 6　調査区③ 井戸 2
図版 7　調査区③ 井戸 1 ～ 3
図版 8　調査区⑨
図版 9　調査区⑥・⑨ 竪穴建物 1・2, 土坑 1・12, 溝 2, ピット 1 ～ 3
図版 10　調査区⑨ 土坑 12 ～ 16・18
図版 11　調査区⑨ 土坑 19 ～ 24・26
図版 12　調査区⑨ 井戸 4 ～ 6（1）
図版 13　調査区⑨ 井戸 4 ～ 6（2）
図版 14　調査区⑨ 溝 2 ～ 5, 土坑 26
図版 15　調査区⑨ 溝 4・6 ～ 10, ピット列 1・2
図版 16　調査区⑨ 溝 7, ピット群 , 観音立像出土状況
図版 17　中国陶磁器 , 瀬戸美濃焼
図版 18　珠洲焼 壺・瓶・甕
図版 19　珠洲焼 甕（1）
図版 20　珠洲焼 甕（2）
図版 21　珠洲焼 片口鉢
図版 22　越前焼 壺・甕
図版 23　越前焼 鉢・擂鉢
図版 24　笹神窯 , 土師質土器 , 瓦器
図版 25　古代土器 , 近世後期～近代骨蔵器
図版 26　木製品
図版 27　金属製品 , その他
図版 28　石製品 石臼
図版 29　石製品 硯・砥石

凡　　例

〈共　通〉

1　土色と遺物の色調は,『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）と『大辞泉（カラーチャート）』（小学館 1995）を参考とした。

2　第Ⅴ章及び付編の図表・写真は, 各項の中でそれぞれ番号を付けた。

3　引用・参考文献は巻末に一括して掲載し, 本文中では著者と発行年を括弧書きで示した。ただし, 第Ⅴ章については当該項の文末に示している。

〈遺　構〉

1　本書に掲載の地形図は, 国土地理院発行 1/50,000 地形図「新発田」（平成 15 年）及び 1/25,000 地形図「新発田」（平成 22 年）を必要に応じ縮小して用いた。方位は, 第 1・2 図では天が真北を示す。
その他の図面では, 記号の方向が磁北を示す。磁北は真北から西偏約 7° 20′ である。

2　本書に掲載した遺構は, 竪穴建物・土坑・井戸・溝・ピット列・ピットに区別し, 遺構番号は, 整理作業時に振り直した。

3　平面図のうち, 遺構は黒の実線で, 撹乱は破線で示した。

4　断面図の位置を示す平面図上のポイントは, 各部分図ごとにアルファベットで示した。

5　遺構図の縮尺は 1/40 ～ 1/200 で, 挿図中に縮尺とスケールで示した。

6　遺構写真にスケールとして写し込んだピンポールは, 直線部分が 50㎝である。

〈遺　物〉

1　遺物実測図は基本的に遺構ごとに掲載し, 遺物写真は材質・産地・種別で配列した。各遺物に付した番号は挿図・図版とも同一の通し番号である。

2　遺物実測図の縮尺は 1/3 を基本としたが, 大型および小型の遺物は縮尺を適宜変え, 各挿図中に縮尺とスケールで示した。

3　遺物写真は, 主要な遺物について縮尺不同で掲載した。ただし, 陶磁器類は約 50% である。

4　土器･陶磁器の器種分類・年代観については, 青磁は［上田 1982］, 白磁は［森田 1982］, 青花は［小野 1982］, 瀬戸美濃焼は［藤澤 2008］･［愛知県史編さん委員会 2007］, 珠洲焼は［吉岡 1994］, 越前焼は［田中・木村 2005］, 五頭山麓窯址笹神支群は［鶴巻 2005］, 中世の土師質土器は［鶴巻 2004］･［水澤 2007］, 瓦器は［立石 1995］, 古代の土師器は［春日 1999］を参考にした。なお, 五頭山麓窯址笹神支群は本文・観察表で笹神窯と略記する。

第Ⅰ章　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯

a 統合小学校の建設計画

新発田市は，平成15年7月に豊浦町と，平成17年5月には紫雲寺町・加治川村と合併したことで，市内の小学校の数は26校となった。しかし，少子化に起因する児童数の減少が続き，当市においても1校11学級以下の小規模校が，平成20年には小学校全校の6割に達する状況となった。

こうした現状を踏まえ，子どもたちにとっての「望ましい教育環境」を中心テーマとする「新発田市教育制度等検討委員会」が，平成20年9月に設置された。新発田市教育委員会（以下，市教委）では，その検討委員会報告を基に，「新発田市立小・中学校の望ましい教育環境に関する基本方針」を平成22年3月に策定し，この基本方針に基づいて通学区域の再編成（学区再編）を実施することとなった。

その基本方針の中で示された小学校統合の将来パターン図には，東中学校の校区に含まれる五十公野小学校・松浦小学校・米倉小学校・赤谷小学校の4校の統合案もあった。市教委ではこれに基づき，東中学校に隣接する五十公野小学校の校舎を改築して統合校とする案を作成し，平成22年10月から4校の児童の保護者と各自治会の代表者を交えて協議を行った。しかし，この協議の結果，新たな学校用地を東中学校に近い場所に求めることとなり，平成24年3月に各自治会が中心となって「東中学区内4小学校関係者合同会議」が設立され，地元説明会も実施された。しかし合意には至らず，各区長会長・各小学校のPTA会長・各保育園の保育会長，そして地元選出市議会議員により構成された「東中学校統合小学校建設候補地選考委員会」が平成25年5月に立ち上がり，候補地の再検討が行われることとなった。この選考委員会では，東中学校から半径1キロメートル程度の範囲で候補地の検討を行い，学区内全戸への意見公募も実施した。その結果，五十公野小学校敷地を統合校の用地として校舎を建て替えることが，平成25年7月に内定した。平成25年11月，この選考委員会に4校の各小学校長と東中学校長を加えた「東中学校区統合小学校開校準備協議会」が設立され，より具体的な統合校開校へ向けての準備が始まった。のちに，地元での公募により統合小学校の名称は「東小学校」と決まった。

b 校舎建設と発掘調査の調整

五十公野小学校地は五十公野館跡として遺跡地図に周知されており，平成25年度になり発掘調査が現実味を帯びてくると，調査期間が開校までのタイムスケジュールに大きく影響することが明らかとなった。

校舎建設計画は市教委教育総務課が担当しており，校舎建設工事の施工監理については新発田市建設課への委託である。また，発掘調査は市教委生涯学習課（のちの文化行政課）が担当し，調整を取りながら作業を進めてゆくこととなった。

五十公野小学校には，現在3代目となる鉄筋コンクリート作りの校舎が建っているが，度重なる建て替えで遺物包含層や遺構がどの程度遺存しているのか把握する確認調査が必要であり，そこに工事で掘削される範囲が定まって，始めて本調査の調査面積・調査期間と経費の積算が可能となる。

平成25年7月，教育総務課から平成26年度にグランドに仮設校舎を建設したいので，平成25年8月の小学校夏季休業中に確認調査を実施して欲しい旨の要請が生涯学習課にあった。しかし，発掘調査を担当する専門職員は，全員がすでに他の発掘調査への従事が予定されていたため，急きょ新潟県教育委員会（以下，県教委）文化行政課に職員の派遣を依頼し，確認調査を実施した。

平成26年4月から関係部署において工程の調整を行った結果，平成26年8月後半に校舎敷地の確認調査を実

施し，平成 27 年 4 ～ 6 月に校舎上屋の解体工事，6 ～ 12 月に本発掘調査，平成 28 年 1 ～ 3 月に基礎解体工事，そして平成 28 ～ 29 年度に校舎建設工事，平成 30 年 4 月開校と計画された。

なお，平成 27 年度の本調査にあたっては，市教委に調査要望が多く，専門職員を長期にわたって五十公野館跡の調査に従事させることが難しかったため，民間調査会社への発掘調査委託を導入することで庁内関係部署の合意を得た。ただし，県教委の指導に基づき，市教委専門職員が監督員として現地指導を行う体制をとった。本調査の対象地は，体育館トイレ増築工事（床面積 45.57㎡）と新校舎建設工事（床面積 1986.37㎡）範囲であり，平成 27 年 6 月 4 日付け教総第 403 号 - 2 で文化財保護法第 94 条第 1 項による「埋蔵文化財発掘の通知」を新発田市長から県教委教育長へ提出した。県教育長は，平成 28 年 6 月 18 日付け教文第 310 号の 2 で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）で，市長に対して工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

そして，平成 27 年 5 月 27 日付けで，株式会社ノガミと「五十公野館跡発掘調査業務委託」を締結し，平成 27 年 6 月 24 日付け文行第 369 号で文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による発掘調査の着手「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を市教委教育長から県教委教育長へ提出し，平成 27 年 7 月 2 日に現地調査を開始した。終了は同年 11 月 27 日で，県教委への調査終了報告は同年 12 月 17 日付け文行第 942 号の「埋蔵文化財発掘調査の報告について」である。また，出土した遺物の文化財認定は，平成 27 年 12 月 14 日付け教文第 983 号の 10 での県教委教育長通知による。

なお，株式会社ノガミから基礎整理作業を終えての業務完了届が平成 28 年 3 月 18 日に提出され，遺物と図面等の記録類が市教委へ引き渡された。

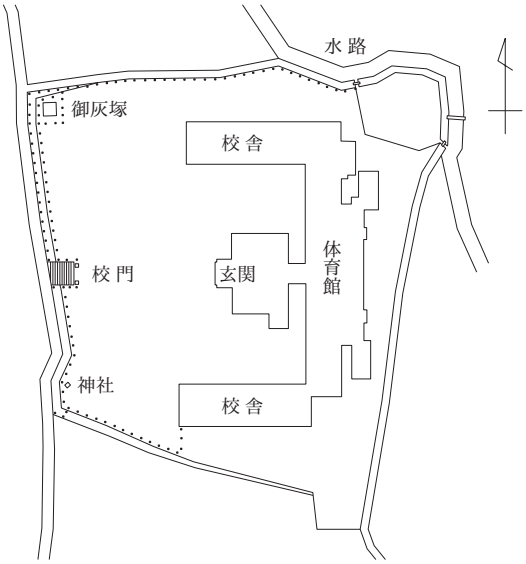
2　発掘調査地点の土地履歴と小学校の沿革

発掘調査地点は，江戸時代（天明年間）においては「加左衛門ヤシキ」と呼ばれた屋敷地に含まれていた。ここは，明治時代になると学校の創設に伴って五十公野小学校の沿革と非常に深い関係をもつようになった。明治 6 年 6 月白蓮寺にて仮開学した五十公野小学校は，明治 9 年 5 月に新校舎（初代校舎）の竣工に伴い，現在地へ移転してくる。グランド等はなく，校舎の前面や裏面を屋外広場として利用していたらしい。明治 44 年には生徒数も増加したため初代校舎の増改築工事が行なわれ，同年 12 月に竣工した。昭和 10 年 12 月には，校舎新築工事（2 代目校舎）が竣工した。2 代目校舎は正面 2 階にバルコニーを備えた洋風の玄関を持つ。この表玄関をコ字状に囲むように，北側と南側には校舎が，東側には体育館が配置されている。この体育館は昭和 52 年に新体育館が竣工するまで利用されていた。なお，昭和 24 年の建設省地理調査所による航空写真では，校舎の南側にすでにグランドが写っている。昭和 44 年 3 月に 3 代目の新校舎が竣工した。鉄筋コンクリート製の校舎で，その姿は木造校舎から一変している。校舎は 3 代にわたって同一敷地の中で建て替えられてきた。平成 30 年 4 月に開校する東小学校の校舎も同敷地の中に竣工する予定になっている。

表 1　五十公野小学校の沿革

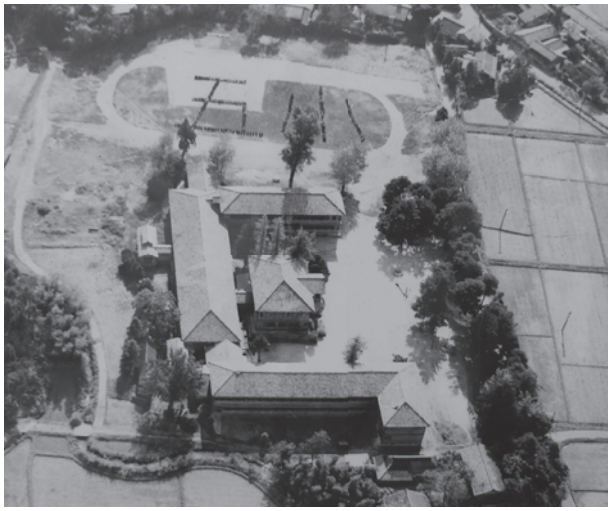
明治 6 年 6 月	北蒲原郡五十公野村 188 番地白蓮寺にて仮開学
明治 9 年 5 月	北蒲原郡五十公野村 4862 番地へ移る 校舎の竣工（初代校舎）
明治 44 年 12 月	初代校舎増改築竣工
昭和 10 年 12 月	新校舎の竣工（2 代目校舎）
昭和 24 年 6 月	表玄関・バルコニー改装
昭和 30 年 3 月	新発田市に合併　市立五十公野小学校と改称
昭和 39 年 8 月	校舎改築の地鎮祭を挙行（3 代目校舎）グランド用地の登記 北西隅石仏庵（大麟庵）の墓地の買収
昭和 40 年 4 月 ～ 42 年 3 月	2 代目校舎の北・南・正面校舎の解体
昭和 44 年 3 月	新校舎の竣工（3 代目校舎）・プールの竣工
昭和 46 年 7 月	校地内の石仏（近世釈迦如来座象）を七軒町墓地へ転座
昭和 47 年 2 月～ 11 月	水洗トイレ工事・ガス配管工事竣工
昭和 48 年 3 月	五十公野小学校創立百年記念式典を挙行
昭和 52 年 10 月	新体育館の竣工
昭和 52 年 11 月	給食センター（調理場）開始
昭和 58 年 2 月	南側コンピューター棟の竣工
平成 27 年 4 月 ～ 28 年 3 月	3 代目校舎の解体

初代校舎
（明治９年５月竣工）



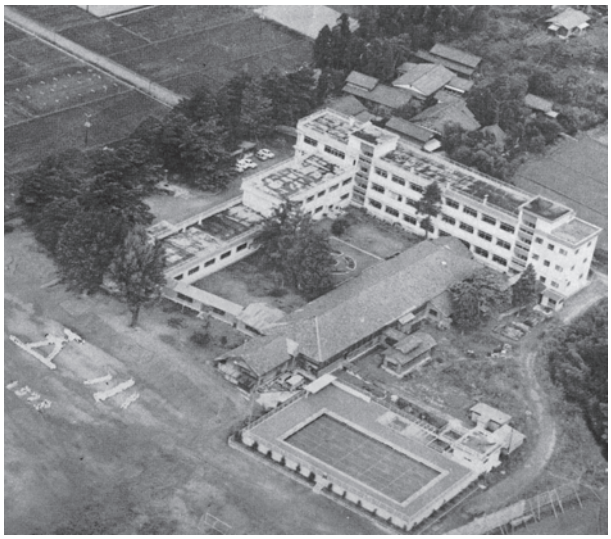
２代目校舎配置図（縮尺不詳）

２代目校舎・正面（西から）
（昭和 10 年 12 月竣工）



２代目校舎全景（北から）

３代目校舎校門・管理棟（西から）



３代目校舎全景（南東から）
（昭和 44 年３月竣工）

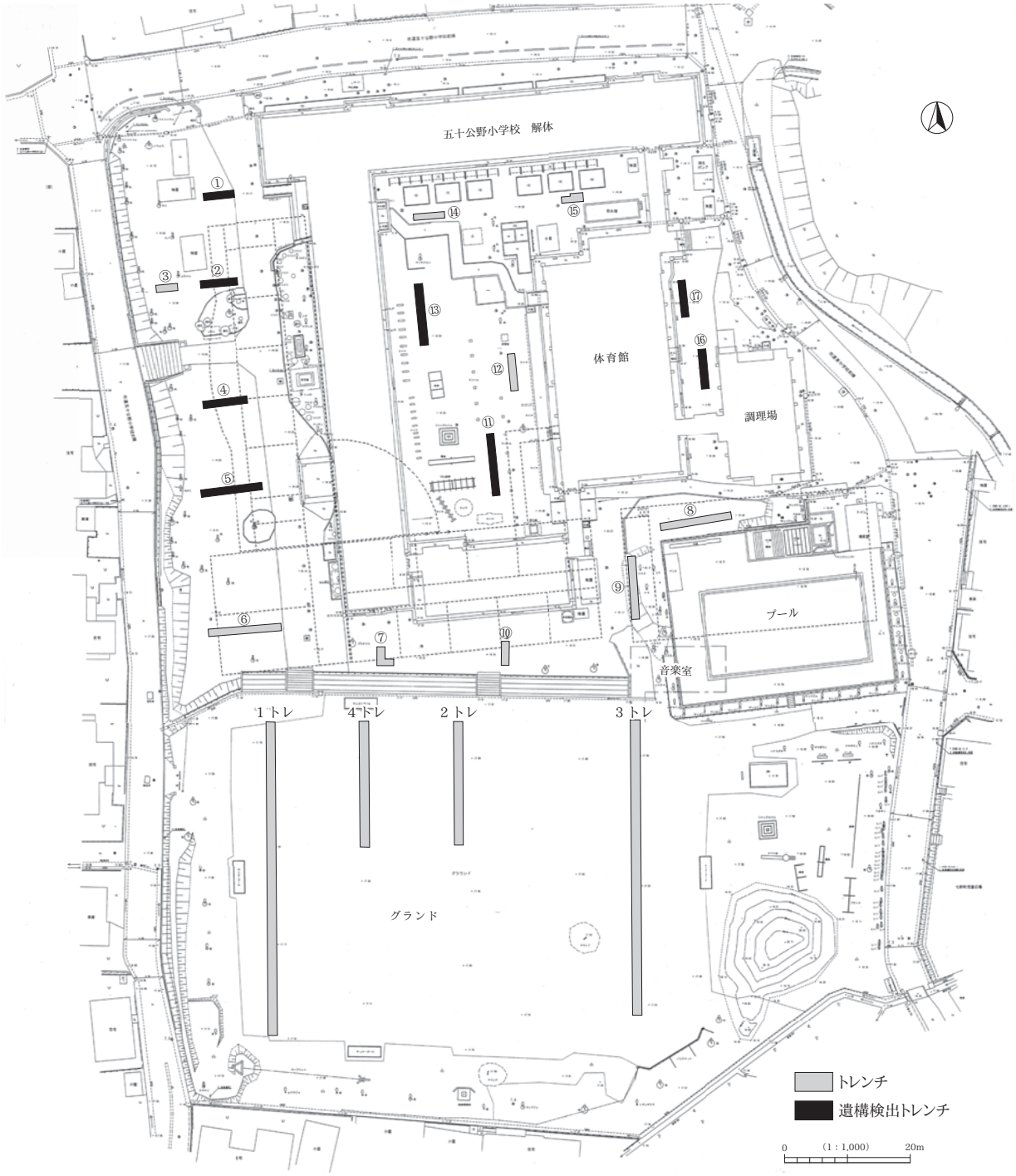
第１図　歴代の校舎

3　確認調査の概要

a グランド部分の確認調査（第 2 図）

平成 25 年 8 月 21 日（水）～ 27 日（火）の実質 4 日間で，県教委文化行政課 埋蔵文化財係 小野本主任調査員を担当者として，グランドでの確認調査を実施した。調査は，仮設校舎建設（第 4 図）に先立って実施したもので，グランドの南北方向に 4 箇所のトレンチを設定した(第 2 図)。掘削は，0.25㎥級バックホーに 1.5m 幅のノリバケットを装着して行い，全体の調査面積は 211.5㎡である。

基本層序は，Ⅰ・Ⅱ層がグランドの客土，Ⅲ層は褐灰色土(旧水田耕土)，Ⅳ層が黄褐色砂質シルト～砂層～礫層で，



第 2 図　確認調査トレンチ位置図

Ⅳ層がいわゆる地山に相当する。遺構は検出されなかった。なお，校舎敷地地上面と比べて，グランドは標高が1.4mほど低く，1トレンチ北端の地山では，校舎敷地との比高差は2.1mほどとなる。

調査で出土した遺物のほとんどが，中・近世陶磁器の細片で，Ⅲ層から出土している。遺物包含層と判断できる土層の堆積は認められなかった。

調査に係わる文書は，平成25年8月6日付け文行第332号で文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を市教委教育長から県教委教育長へ報告し，調査終了の報告「埋蔵文化財発掘調査の報告について」は平成25年11月12日付け文行第534号で提出した。

b 校舎敷地の確認調査（第2図）

平成26年8月18日(月)～27日(水)の実質7日間で，市教委が直営で実施した。調査対象地は校舎敷地全体で，17箇所のトレンチ（①～⑰）を設定した（第2図）。掘削は0.2㎥級のバックホーで行ったが，中庭部分については，0.1㎥級のバックホーを使用した。各トレンチの長さは3.0～11.6mで，全体の調査面積は141.6㎡である。トレンチの埋戻しに際しては，適宜転圧機を使用し，また砕石を敷いて養生した。

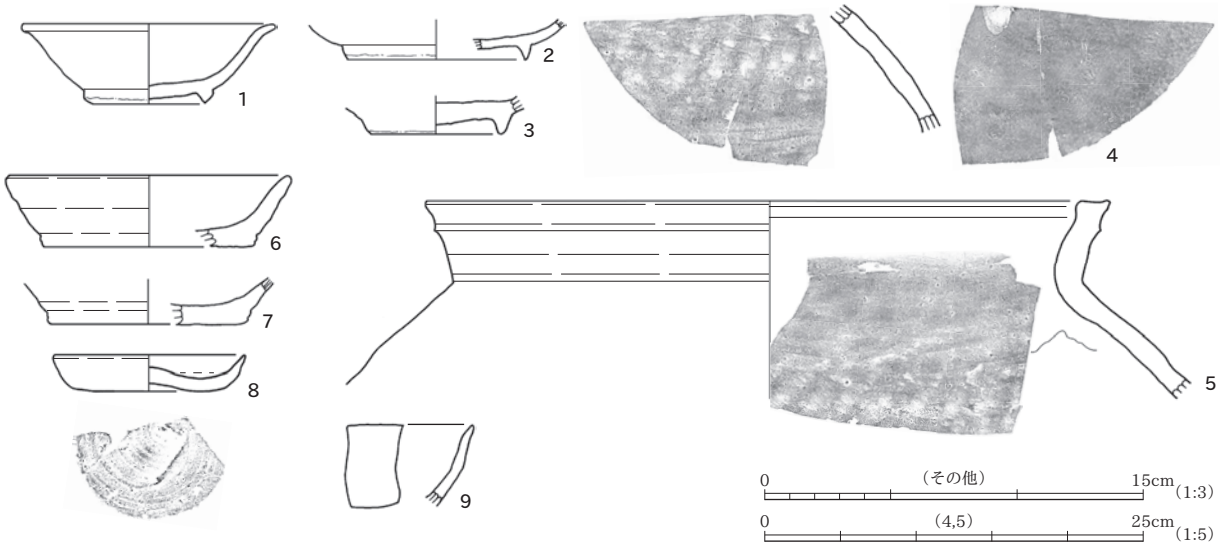
基本層序は，表土・撹乱層の直下が黄褐色・灰オリーブ色細砂のいわゆる地山である。明確な遺物包含層は認められなかった。遺構は，前庭の①②④⑤トレンチ，中庭の⑪⑬トレンチ，体育館東側の⑰トレンチで，溝・土坑・柱穴を検出し，特に中庭は遺構の遺存状態が良好であった。体育館東側の⑯トレンチでは，上幅2.2m以上，確認面からの深さ45㎝の東西方向に延びる溝若しくは堀の一部を確認した。遺物は，撹乱層や遺構の埋土から中世後期の土師質土器や陶磁器が出土した。以上の結果，校舎敷地には遺跡が遺存していることが明らかとなった。

文書は，平成26年7月15日付け文行第237号で文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を市教委教育長から県教委教育長へ報告し，調査終了の報告「埋蔵文化財発掘調査の報告について」は平成26年9月9日付け文行第340号で提出した。出土遺物の文化財認定は県教委教育長からの平成26年10月2日付け教文第851号-3による。

c 確認調査の遺物（第3図）

グランドからは，青磁碗，珠洲焼片口鉢，越前焼擂鉢，土師質土器皿・小皿，近世陶磁器，石臼が出土し，校舎敷地からは白磁碗・皿，青磁碗，青花碗，志野碗，越前焼大甕，土師質土器皿，古代の土師器杯，近世陶磁器が出土している。陶磁器は，⑫トレンチの越前焼大甕以外は小片・細片がほとんどである。

1は白磁の端反り皿で，⑭トレンチから，2は白磁皿で，⑫トレンチから出土した。ともに高台畳付以外は，内外



第3図　確認調査の遺物

全面に白磁釉が掛けられ，2の高台際では釉切れが見られる。15世紀後半から16世紀前半に比定される。

3は白磁碗の底部で，④トレンチから出土した。見込みは蛇ノ目状に釉剝ぎされ，高台内は無釉である。15世紀代と考えられる。

4・5は越前焼の大甕で，⑫トレンチから出土した。同一個体である。4は肩部で，外面に自然釉が掛かり，内面上半に成形時の指頭圧痕が認められる。5は口縁～肩部で，濃緑色の自然釉が掛かり，わずかに降りものが付着する。内面下部に，成形時の指頭圧痕が認められ，内面くびれの下に，内容物と考えられる黒色の雨垂れ状付着物が見られる。15世紀後半に比定される。

6～8は土師質土器である。6・7は皿で，⑪トレンチから出土した。7の底部は回転ヘラ切りである。いずれも15世紀前半に比定される。8は小皿で，①トレンチから出土した。底部は回転ヘラ切りである。13～14世紀に比定される。9は古代の土師器杯で，④トレンチから出土した。

4　本調査と整理作業の経過

a 発掘作業の経過（平成27年度）

6月末日～7月14日　仮設ハウス・仮設トイレ等の搬入を6月下旬に完了し，調査区のグリッド設定を行う。7月2日から発掘作業を開始する。調査区①･④～⑧では校舎のコンクリート基礎残存部（地中梁）内の土砂を深さ1.5m以上重機で掘り下げたが，撹乱により遺構の遺存状況は非常に悪い。調査区⑥で溝2に切られた竪穴建物1と，Dfグリッドの一角で土坑・ピットが数基検出されたにすぎない。調査区②は3日に着手し，東西に走る溝を1条検出した。7月10日から15日に調査区⑩の調査を行った。13日には調査区①・④・⑤・⑦・⑧・⑩では遺構を確認できず，写真撮影をして調査を完了した。

7月15日～7月31日　調査区⑥の調査を継続しつつ，15日から調査区③の表土除去を重機で開始した。17日に調査区②を完掘し溝1の平面実測と写真撮影を行い，この区の作業を完了する。同日，調査区⑥の竪穴建物1を完掘し図化・写真撮影を行い，作業を完了する。21日から調査区③の遺構確認を行い，この調査区に作業を集中させる。遺構は表土直下の黄褐色細砂上面で確認した。撹乱の範囲が広く，東西・南北に5本のトレンチを入れてその範囲を把握した。検出した遺構は井戸3基，土坑10基，ピット5基である。

8月3日～8月20日　3日から，調査区③の井戸･土坑等の掘削を開始する。井戸からは中世の土器類（珠洲焼･越前焼・古瀬戸・土師質土器）や雁股鏃が出土したが，土坑からの遺物の出土は極めて少ない。

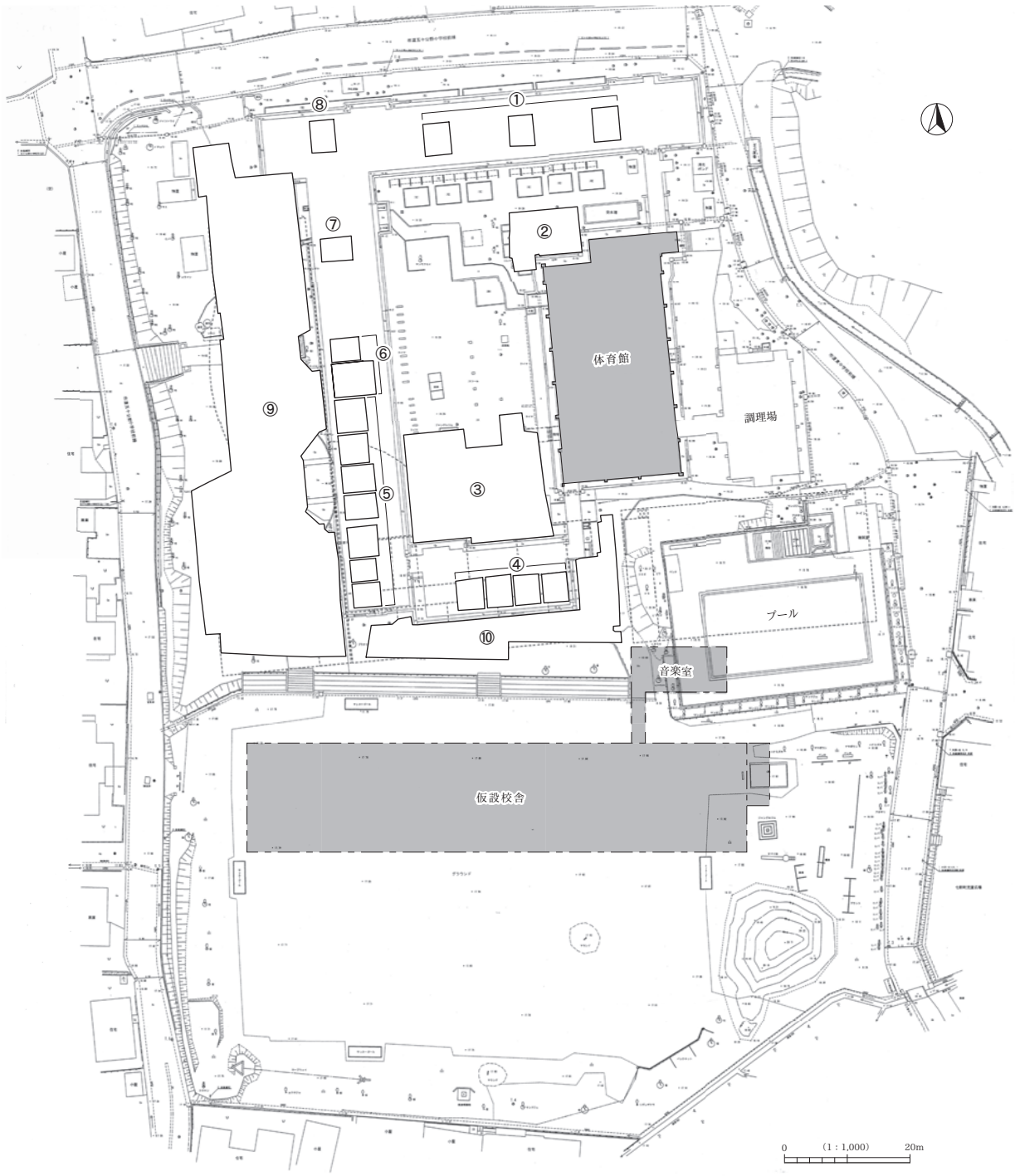
8月21日～9月15日　24日に調査区⑨の北側から表土除去を開始する。調査区③の土坑等の調査はほぼ終了し，井戸を集中的に調査する。井戸2から鉄鍋が出土する。8月末には井戸1～3の上部を完掘し写真撮影を行う。調査区⑨の表土除去が7日に概ね完了する。南側に比して北側は撹乱の範囲が広く，遺構の遺存状況は非常に悪い。調査区⑨の遺構確認を行い，井戸・土坑・溝を確認した。調査区⑨の南側の地山が急傾斜するため，トレンチを入れて確認する。10日には土坑12から珠洲焼の大甕が潰れた状態で出土した。

9月16日～9月30日　調査区⑨の遺構の掘り下げを土坑を中心に開始する。16日に北側の撹乱坑から小型の青銅製観音立像が出土する。この付近より銅製仏具の蓋も出土した。24日に土坑14から骨蔵器が出土する。素焼きの土師質土器で，近世後期以降のものである。

10月1日～10月30日　調査区⑨の土坑･溝に調査の中心を移す。土坑や溝からは珠洲焼･越前焼･瀬戸美濃焼･青花のほか石臼も出土した。大型の土坑は井戸と判明し，20日には井戸4～6の上部の調査を終えた。また，8～22日に南端斜面の調査を行った。22・23・26日に，五十公野小学校と東中学校の児童・生徒対象の現地説明を実施した。24日には一般市民対象の現地説明会を開催し，参加人員262名を数えた。27日，調査区全景と遺跡遠景の空撮を実施した。28日には，井戸下部調査のためバックホーでその周りの掘削を開始した。

11 月 4 日～ 11 月 30 日　4 日に調査区③で井戸 1 ～ 3 下部の平面形を確認し , 11 日に完掘した。また調査区⑨の井戸 4 ～ 6 は , 10 日に下部の遺構の検出を行い , 井戸 6 よりも井戸 4 が新しいことを確認した。4 ～ 13 日は , 調査区南端斜面の下部掘削と土層断面図の作成を行った。14 日から調査区⑨の補足調査を行い , 18 日には井戸を含む全ての遺構調査を完了した。なお , 6・10 日には , ドローンによる遺構撮影を実施した。19 日には器材・資材の撤収を行い , 井戸周辺の深掘りの埋戻しを開始した。27 日に市教委の教育総務課・文化行政課 , 市建築課が立会いのもと , 現地の引き渡しを行い , 現地調査は完全に終了した。

12 月 1 日～ 3 月 18 日　株式会社ノガミ埋蔵文化財調査室で図面点検と修正 , 写真の整理等の基礎整理を行った。なお , 遺物の水洗い・注記は現地の発掘に並行して実施した。



第 4 図　本調査区割位置図

b 整理作業の経過（平成 28 年度）

6 月 13 日に , 市教委埋蔵文化財整理室から株式会社ノガミ埋蔵文化財調査室に遺物等を搬入し , 本格整理作業に着手する。遺物の接合・復元を行った後 , 市教委監督員と協議して実測個体の選別を行う。また人骨の鑑定 , 仏像の成分分析について業務委託を行う。7 月から出土遺物の実測図の作成 , 遺物観察表の作成を行う。その後 12 月までトレースを行うとともに , 遺構及び遺物図版・写真図版のレイアウトを作成する。1 月には原稿の執筆を本格化し , 報告書の編集作業を行う。2 月には報告書の印刷･製本の発注を行い , 3 月に報告書を刊行した。3 月 31 日に , 報告書および遺物・図面・台帳類・写真データを新発田市教育委員会に納品し , 整理作業を完了した。

5 調 査 体 制

a 平成 25 年度（グランド部分確認調査）

監 理	大山 康一	（教育長）	調査担当	小野本 敦（新潟県教育委員会文化行政課埋蔵文化財係 主任調査員）
	船山 隆	（生涯学習課長）	調 査 員	鶴巻 康志（生涯学習課文化行政室 埋蔵文化財係長）
総 括	田中 耕作	（生涯学習課文化行政室長）	事 務 局	鈴木 暁（生涯学習課文化行政室 主任）

b 平成 26 年度（校舎敷地確認調査）

監 理	大山 康一	（教育長）	調査担当	津田 憲司（生涯学習課文化行政室 主任）
	船山 隆	（生涯学習課長）	調 査 員	田中 耕作（ 〃 〃 室長）
総 括	田中 耕作	（生涯学習課文化行政室長）	事 務 局	鈴木 暁（ 〃 〃 主任）

c 平成 27 年度（本調査）

監 理	大山 康一	（教育長）	調査指導	戸根与八郎（株式会社ノガミ 埋蔵文化財調査部 調査室長）
総 括	田中 耕作	（文化行政課長）	調査担当	福山 俊彰（ 〃 〃 調査員）
監督員	鶴巻 康志	（文化行政課 埋蔵文化財係長）	調 査 員	湯原 勝美（ 〃 〃 調査員）
事務局	渡邊美穂子	（ 〃 主任）		

d 平成 28 年度（整理・報告）

監 理	大山 康一	（教育長）	調査指導	戸根与八郎（株式会社ノガミ 埋蔵文化財調査部 調査室長）
総 括	平山 真	（文化行政課長）	調査担当	金内 元（ 〃 〃 調査員）～ 8 月
監督員	田中 耕作	（文化行政課 文化財技師）	調査担当（代行）	戸根与八郎（ 〃 〃 調査室長）9 月～
事務局	渡邊美穂子	（ 〃 埋蔵文化財係長）	調 査 員	秋山 泰利（ 〃 〃 調査員）
			調 査 員	大谷 祐司（ 〃 〃 調査員）

第Ⅱ章　遺 跡 の 環 境

1　遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は，新潟市街地の東方約 25km に位置する人口約 10 万人の地方都市である。総面積 532.82㎢のうち東寄りの約 7 割は飯豊連峰・櫛形山脈・二王子岳・五頭連峰による山地である。二王子岳の西方に位置する中心市街地付近は，飯豊連峰から流れる加治川によって形成された扇状地の扇端部にあたり，旧新発田藩の城下町を基礎としている。周囲には稲作を主体とする農村地帯が広がっている。現在の加治川は、五十公野丘陵の東側を流れ，姫田川と合流して北流するが，古くは五十公野丘陵の南側を流れ，現在の新発田市街地のある扇状地を形成したと考えられる（荻野 1980・国土地理院 1993）。その痕跡は、太田川周辺の旧河道やこれに面する自然堤防の地形に認められる。さらに古くは幾筋の細流となって流れ，その中央を流れるものが現在の新発田川にあたるという（大家 1997）。

五十公野館跡（市遺跡№ 116）は，新発田市五十公野字櫓下に所在し，現在は市立五十公野小学校敷地である。標高 18m 前後の台地上にあって，「殿様の屋敷」であったとの伝承から五十公野城に関連する館跡といわれている。小学校敷地から安楽寺・千光寺付近が五十公野城の根小屋であったともいわれている（伊藤 1980）。また，周辺の字名には櫓下，外城など城館に関連する地名も見られる。

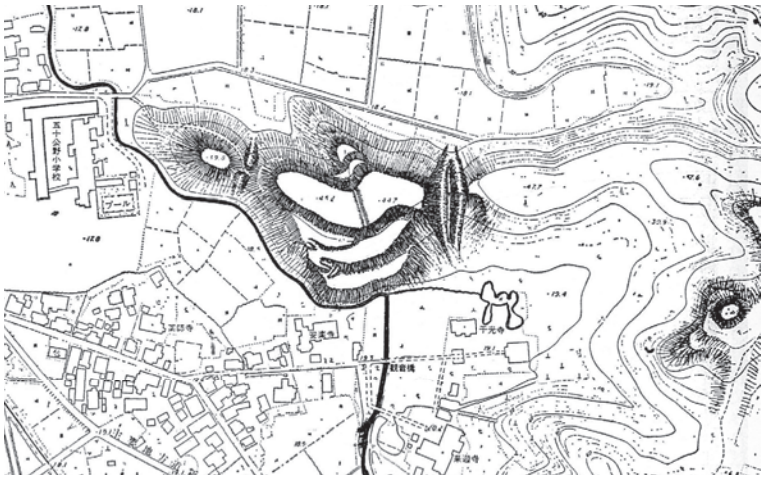
（国土地理院地形図「新発田」1:25,000 を改変）

第 5 図　五十公野地区周辺の中世遺跡分布

2　五十公野地区の遺跡

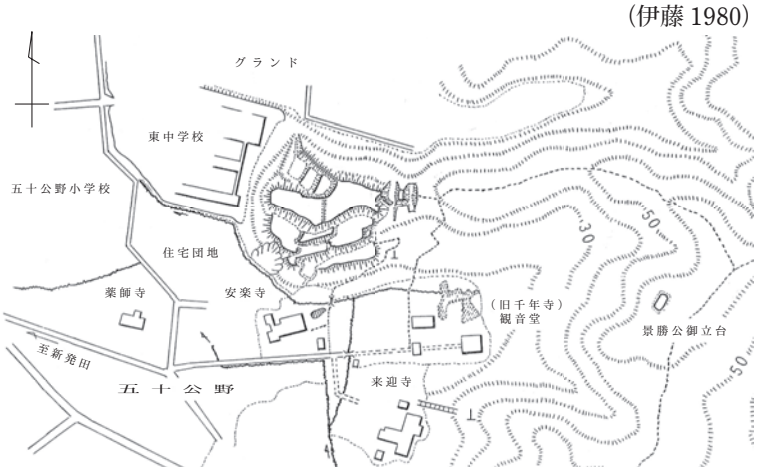
五十公野地区は新発田市街地の南東約 4km に位置する。近世には，五十公野丘陵端を走る三国街道中通りと新発田城下を東進した会津街道が村中央部で連結する交通の要地となり，追分の宿場として栄えた。地区内の中央部は上町，道路沿いの北部に下町，南部に外城村，上町の西側に小路村に分かれていた。集落の東側には南北 2.5km, 最高所 86m の五十公野丘陵があり，南西側の丘陵上（通称「御城山」）に五十公野城跡が立地する。元禄年間に成立したとされる『管窺武鑑』等の記載から、中世後期にこの地を治めていた新発田氏の一族である五十公野氏の居城と伝えられ，土塁・空堀・郭などの遺構が残っている。標高 50m 強の尾根先端部を利用して築かれた小規模な要害で，主郭は東西 100m, 幅は広い所で 25m の「く」の字状で，その中央部にある小土塁によって二郭に分かれている。主郭の東側には，尾根のくびれを利用した二重の空堀がある。主郭の西側には、かつて土橋を伴った空堀と長径 15m 程の長楕円形の郭があったが，昭和 45 年に新発田市立東中学校建設に伴って削平された（第６図）。主郭の南側及び北側には腰郭があり，特に南側に設けられた三段の腰郭は，大手の虎口の一部をなすものであろう。本城跡の東南約 200m, 標高 60m の尾根平垣面には，天正 15 年（1587）上杉勢が五十公野城を包囲攻撃した際，上杉景勝の陣所であったと伝わる土壇と削平地が残り，「上杉景勝陣所跡」ないしは「景勝公御立台」などと呼ばれている。土壇は高さ 3m, 径約 9m の円形で，ここからは南側の谷間や五十公野城跡も間近に見下ろすことができる。この他に，五十公野丘陵上には金谷城跡・升潟山城跡がある。五十公野城防衛のために構築された砦であろう（伊藤・斉藤 1980）。

御灰塚　新発田藩の初代藩主，溝口伯耆守秀勝は慶長 15 年 9 月 28 日に 63 歳で死去，その遺骸は「五十公野栃山」（詳細な位置は不明）で火葬されたと伝わり，その場所に，灰を集めて塚を作り石仏を建て「御灰塚」と呼んだという。その傍らに一宇の庵を結び，石仏庵（後に大麟庵と改称）と称し，江戸・吉祥寺の末寺となった。明治 44 年，五十公野小学校増築のため，堂宇は取り壊され小学校敷地の北西隅に移築したという（相馬 1952）。昭和 46 年に移築場所へ道路が敷設され，現在位置（第５図）に再移転された。



（伊藤 1980）

五十公野御茶屋庭園（国指定名勝）五十公野丘陵の西麓にあり，新発田藩主溝口氏の別邸であった。明暦元年(1655) ３代藩主宣直が面積 34, 000 坪の別邸を構えた。４代藩主重雄の時に幕府の茶道方で遠州流の茶人，縣宗知を招いて庭を作り，別邸を茶寮とした。茅葺・数寄屋造りの簡素な建物と心字池を中心とした回遊式庭園である。



第６図　五十公野城跡略測図　（大家 1997）

神社・仏閣　古四王神社・豊田神社・

日枝神社などがあり，古四王神社は大彦命を祀る。「古四王神社」は，新潟県の阿賀野川流域を南限とし，東北地方の日本海側に集中的に分布する。豊田神社は、歴代の新発田藩主を祀る奉先堂を，廃藩に伴って新発田城本丸から五十公野御茶屋庭園に遷宮し，明治 10 年（1877）に社格を得た。 大正 8 年（1919）に現在地の通称「勝手山」へと移築された（新発田市 1980）。仏閣には来迎寺・千光寺・安楽寺・龍昌寺などがあり，安楽寺は五十公野城主の菩堤寺と伝えられている。また，安楽寺･龍昌寺･千光寺･薬師寺の境内地，七軒町の墓地などには中世（室町期）の板碑や石仏が数多くある。付近の岡田の大日堂には源頼朝の供養塔と伝えられる五輪塔のほか多数の石造物が存在する。新発田市内では板碑・石仏の所在地数は 140 ヶ所近くあり，県内でも有数の集中区の一つである。

3　周 辺 の 遺 跡

新発田市を含む旧北蒲原郡域は，古代（奈良・平安時代）においては越後国沼垂郡であったといわれている。10 世紀に成立した「和名類聚抄」では沼垂郡には沼垂・賀地・足羽の郷が所在し，現在の新発田市付近は後に立荘される加地荘との地名的類似からおおむね賀地郷に属していたと考えられている（桑原 1980）が，これら 3 郷の位置や範囲は推測の域を出ないのが現状である。

鎌倉に幕府を開いた源頼朝は，備前児島の藤戸の戦いで功があった佐々木盛綱を越後加地荘の地頭に任じている。その子孫は加地氏として在地領主化していく。所領は分割相続されるようになり，一族から新発田・竹俣などの諸氏が派生した。惣領家は加地氏であるが，同族の新発田氏・竹俣氏らが次第に有力化し，室町時代初期から戦国期には加地荘の国人として並び立つ存在となっていたことが古文書からうかがい知ることができる。市内には中世城館跡が多く分布するが（第 7 図），古文書の記述や伝承，地名から，主に加地氏が現在の加治川右岸の北西部，竹俣氏が加治川右岸の南東部，新発田氏が加治川左岸を領していたと考えられている（伊藤 1980）。

加地氏の本拠とされる加治城跡（市指定史跡）は櫛形山脈の南端に位置し，標高 165m の山頂から 3 方向にのびる尾根にはそれぞれの郭群が認められる。櫛形山脈の主稜線には数多くの山城が分布し，加治城跡の北には麓城跡･滝城跡・鳥屋峯城跡・七曲城跡・菅谷城跡・水ノ尾城跡が続いている。竹俣氏の本拠と考えられる三光川左岸の三光地区には宝積寺館跡・三光館跡・岡塚館跡・東城館跡などの館跡と竹俣城跡・竹俣新城跡などの山城が分布している。三光館跡・岡塚館跡は，いずれも小規模な発掘調査のため不明な点も多いが，15 世紀から 16 世紀の遺物が得られている。宝積寺館跡は，発掘調査の結果，一辺 200m を越す大規模な方形居館跡であることがわかった。総柱建物・掘立柱建物などが検出され，出土遺物から 15 世紀が主体といわれている（田中・鶴巻 1990）。なお，竹俣氏は，戦国時代には同族の加地氏・新発田氏と並び越後有数の国人層に成長したが，やがて上杉氏に服属して謙信・景勝に仕えて数多くの軍忠を重ね，上杉氏の会津への国替えの際にはこれに従った。現在の加治川左岸には新発田城跡・猿橋館跡・池ノ端館跡などの館跡と浦城跡などの山城がある。この地域は新発田氏の所領と考えられ，城館跡の分布も加地氏・竹俣氏の推定領域に比して濃い。また，中世の集落跡や散布地も濃密で，出土遺物から見ても開発が古くから行われたと考えられる。標高約 8m の微高地に築かれた新発田城跡は，慶長 3 年（1598）に加賀大聖寺から入封した溝口秀勝によって築城され，明治維新を迎えるまで溝口氏の居城であったが，中世においては新発田氏の居館が置かれていたと考えられている。旧二ノ丸（通称「古丸」）からは 14 世紀代の堀跡，土坑，溝などの遺構と 14 世紀から 15 世紀の高級磁器や土師器皿の一括出土品がある（鶴巻ほか 1997）。池ノ端館跡は新発田城跡から南約 3.7km, 太田川流域の自然堤防上にあって，東の五十公野城跡とともに新発田城跡の重要な支城である。館跡の範囲は東西 360m, 南北 270m に及び，本郭の周囲には堀跡が残っている。

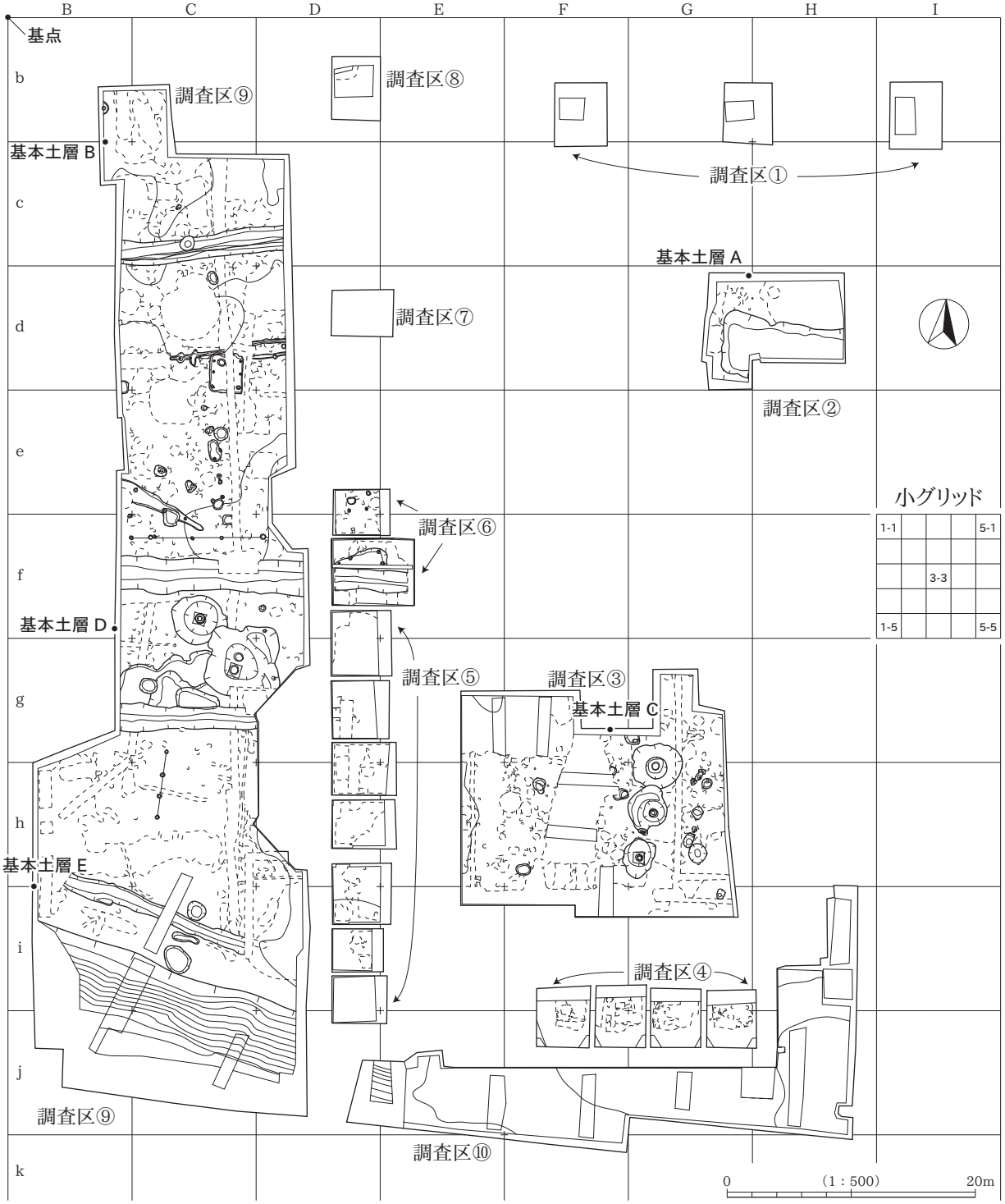
（国土地理院地形図「新発田」1:50,000 を改変）

第７図　主な中世城館跡・集落遺跡の分布図

第Ⅲ章　遺構と基本層序

1　調査区とグリッドの設定

発掘調査に当っては，旧校舎のコンクリート基礎部分（地中梁）を残した状態で解体業者から引き継いで発掘調査を実施した。調査区①・④～⑧については建物の基礎部分を避けて重機で掘削し，遺物包含層や遺構が存在して



第８図　調査区・グリッドの設定と基本層序の位置

いた場合は人力で対応することとした。調査区②・③については障害物が存在しないが，調査区⑨の南側Ｂ・Ｃｈ付近には数本の松樹大木根があった。

グリッドは調査区全体をおおう形で設定した。グリッドは国家座標軸Ｘ軸=214375（北緯37°55′40″），Ｙ軸=74725（東経139°21′00″）の交点である調査区北西を基点（Bb1）として一辺10m四方の大グリッドを方眼に組み，西から東へ大文字のアルファベットでＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・・・とし，南北は北から南へ小文字のアルファベットｂ・ｃ・ｄ・ｅ・・・とし，両者を組み合せて表示した。さらに大グリッドを南北と東西に五等分して一辺2mの小グリッドとし，数字の座標で呼称した。

２　基 本 層 序（第８図～第10図）

基本層序は調査区ごとに異なるために調査区ごとに記載する。調査区①･④～⑧については，旧校舎のコンクリート基礎部分（地中梁）の上面にある床スラブを破砕して1.5～2mまで重機で掘削した。調査区⑥では竪穴建物の一部が検出されたが，これ以外は旧校舎の基礎部分保全のための搬入盛土で，遺構・遺物は全く存在しない。

基本層序を第９図・第10図，その位置を第８図に示す。基本層序Ａは調査区② Gdグリッド北壁，基本層序Ｂは調査区⑨ Bcグリッド西壁，基本層序Ｃは調査区③ Fgグリッド北壁，基本層序Ｄは調査区⑨ Bfグリッドの西壁，そして基本層序Ｅは調査区⑨ Biグリッド西壁の測図である。

基本層序Ａでは表土下は浅黄色細砂，黄色細砂，黄褐色細砂の盛土整地層でその下が黄褐色土，黄褐色砂質土の地山となる。上部２枚の盛土整地層は比較的固くしまっており，層中に炭化木片を若干含むブロックや真砂土を敷きつめた範囲も見られる。

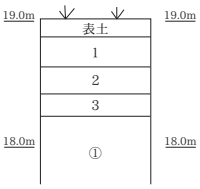
基本層序Ｂでも表土下に黄褐色砂質土・暗褐色砂質土が盛土整地層で基本層序Ａと同様，層中に炭化木片を含むブロックや黄褐色細砂ブロックを含んでいる。そして地山の黄褐色砂質土となる。基本層序Ａ・Ｂでは遺物包含層は認められず，遺物は表土及び盛土整地層から出土している。盛土整地層の範囲は南北ラインのｂ・ｃ・ｄ以北を占めるものと思われる。

基本層序Ｃ・Ｄでは表土の厚さはバラツキがあり，一律ではないがほぼ平坦で水平になっている。表土下には地山の黄褐色細砂，灰オリーブ細砂，黄褐色細砂，砂礫と４識別される。これらの地山の厚さは一律ではないが表土とほぼ並行している。地山①層の黄褐色細砂は表土の整地で上部が削られた可能性がある。地山①・②層の黄褐色細砂・灰オリーブ細砂は撹乱を大々的に受けている。遺構の確認面は表土直下の地山上面であるが，地山が大幅に削平されていることから，現地表面からの深さは20㎝～140㎝で場所によって大きく異なっている。全てではないがカクランと表示したカクラン穴からは，木炭・ガラス・瓦・針金など近現代の遺物が出土し，不用物の処理に掘られたものも少なからずある。

また，地山直上の表土の中にも真砂土を敷いた範囲も見られ，盛土整地と認められよう。遺物は遺構内及びカクランの一部から出土しているが，一括遺物はほとんどない。

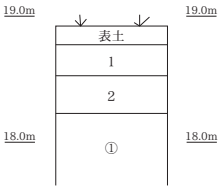
基本層序Ｅでは約30度の角度を持って地山⑤層の褐色粗砂が南側に傾斜している。１層のにぶい黄褐色砂質土が旧表土，6・7・8・10層は斜面堆積である。10層が斜面堆積の最下層となる。表土下層にある３・４・５層は，旧水田等の堆積土で水平堆積をし，５層は旧耕土と考えられる。6・7・8層は旧耕土で7・9層からは珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼・青磁などが出土しているが，これらの遺物に混じって17世紀末から18世紀の唐津焼・肥前焼の破片も出土している。珠洲焼等の日本製陶磁器は破片が多いが，接合するものはほとんどない。１層の旧表土上の盛土は暗灰色粘質土でグラウンド整備に伴う盛土であり，南側へ行くに従って厚く盛られている。また，盛土を約2m近く深く掘り下げたカクランは昭和47年に行った水洗トイレ設備工事に伴うもので西側へ続く。

基本層序 A　調査区②(Gd グリッド)



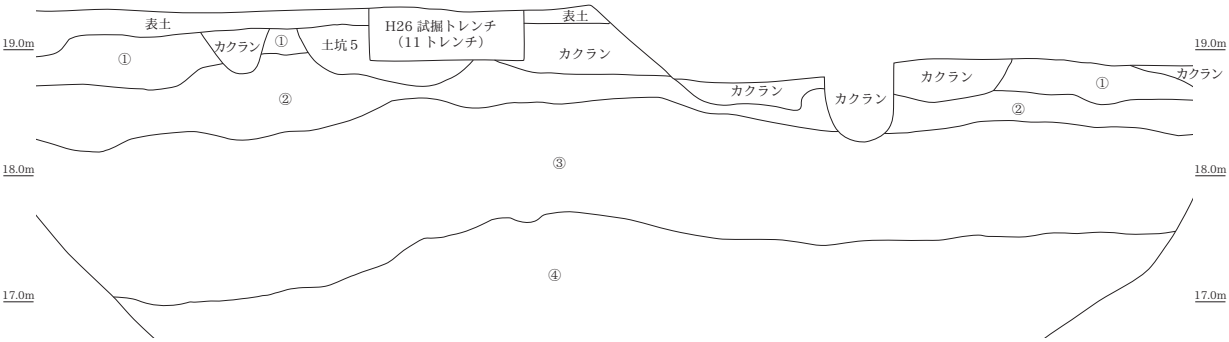
盛土整地 1 層　浅黄色細砂
盛土整地 2 層　黄色細砂
盛土整地 3 層　黄褐色細砂
地山①層　黄褐色土

基本層序 B　調査区⑨北端（Bc グリッド）



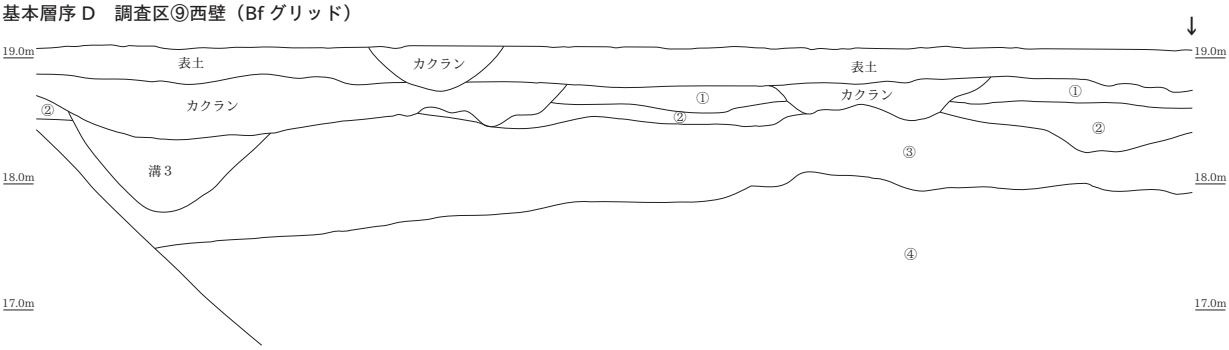
盛土整地 1 層　黄褐色砂質土
盛土整地 2 層　暗褐色砂質土
地山①層　黄褐色砂質土

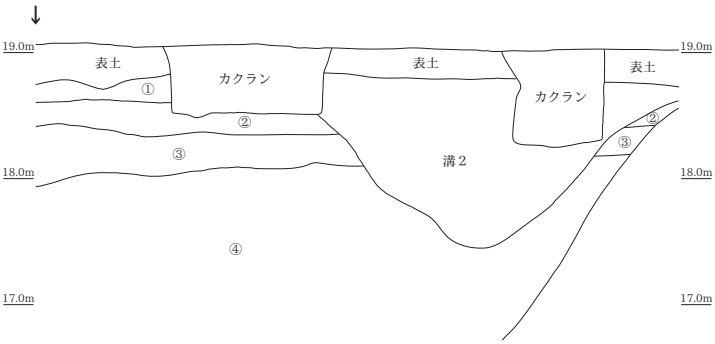
基本層序 C　調査区③北壁（Fg グリッド）



地山①層　2.5Y5/4 黄褐色細砂
地山②層　5Y6/2 灰オリーブ細砂　部分的に粗砂を層状に含む。
地山③層　2.5Y5/3 黄褐色細砂　金雲母を多く含む。部分的に粗砂を層状に含む。
地山④層　砂礫　粗砂層とφ40 ～ 120mm 大の円礫層が互層をなす。
※遺構は表土層直下の地山①層上面で検出した。

基本層序 D　調査区⑨西壁（Bf グリッド）



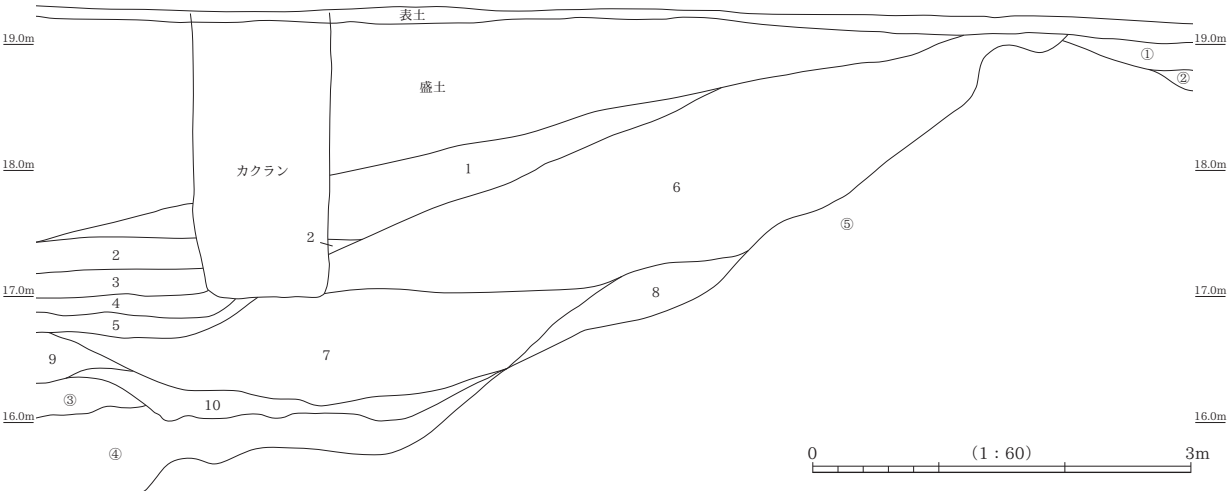


地山①層　2.5Y5/4 黄褐色細砂
地山②層　5Y6/2 灰オリーブ細砂　部分的に粗砂を層状に含む。
地山③層　2.5Y5/3 黄褐色細砂　部分的に粗砂を層状に含む。
地山④層　砂礫　粗砂層とφ20 ～ 120mm 大の円礫層が互層をなす。
※遺構は表土層直下の地山①層上面で検出した。

0　（1：60）　3m

第 9 図　基本層序 A ～ D

基本層序Ｅ　調査区⑨南側斜面（Bi グリッド）



1 層　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 110mm 大の円礫を少量含む。旧表土。
2 層　2.5Y5/4 黄褐色細砂　粘性なし。しまりあり。φ20 ～ 200mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを水平に敷き固める。
3 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 20mm 大の円礫を少量含む。旧耕土。
4 層　10YR5/2 灰黄褐色土　粘性なし。しまりあり。
5 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。旧耕土。
6 層　10YR3/3 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 110mm 大の円礫を少量含む。
7 層　10YR2/2 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 60mm 大の円礫を少量含む。
8 層　10YR3/3 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 50mm 大の円礫を少量含む。
9 層　10YR2/2 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、10YR5/2 灰黄褐色土を少量含む。
10 層　2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ5 ～ 10mm 大の円礫を少量、10YR3/2 黒褐色土を少量含む。
地山①層　2.5Y5/4 黄褐色細砂　粘性なし。しまりあり。
地山②層　2.5Y6/4 にぶい黄色中砂　粘性なし。しまりあり。
地山③層　砂礫　粘性なし。しまりあり。粗砂層とφ10 ～ 30mm 大の円礫層が互層をなす。
地山④層　10Y6/1 灰色中砂　粘性なし。しまりあり。
地山⑤層　10YR4/4 褐色粗砂　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 70mm 大の円礫を少量含む。

基本層序Ｄ　東から

基本層序Ｅ　東から

第 10 図　基本層序Ｄ・Ｅ

3　遺構の概要

遺構は調査区②・③・⑥・⑨から，竪穴建物 2 棟，土坑 22 基，井戸 6 基，溝 10 条，ピット列 2 列，ピット 22 基を検出した。各遺構の説明は調査区ごとに記述するが，溝 2 は調査区を超えて延びていることから，調査区⑥・⑨を包括して記載した。

井戸の調査方法

調査区の地山は砂質土を主体とするが，厚さ 15 ～ 60cm の砂層が確認面からの深さ約 1.8 ～ 2.1m 以下にあり，調査掘削中に土層の崩落が予想された。そのため，砂層上面までを調査・記録したのち，井戸周辺の砂層を重機で掘削除去し（図版 13），改めて平面プランの検出を行って調査した。本報告では，遺構検出面から砂層上面までを「上部」，砂層除去以下を「下部」と呼称する。上部と下部のつながりが不明なものは，掘方を推定破線で示した。

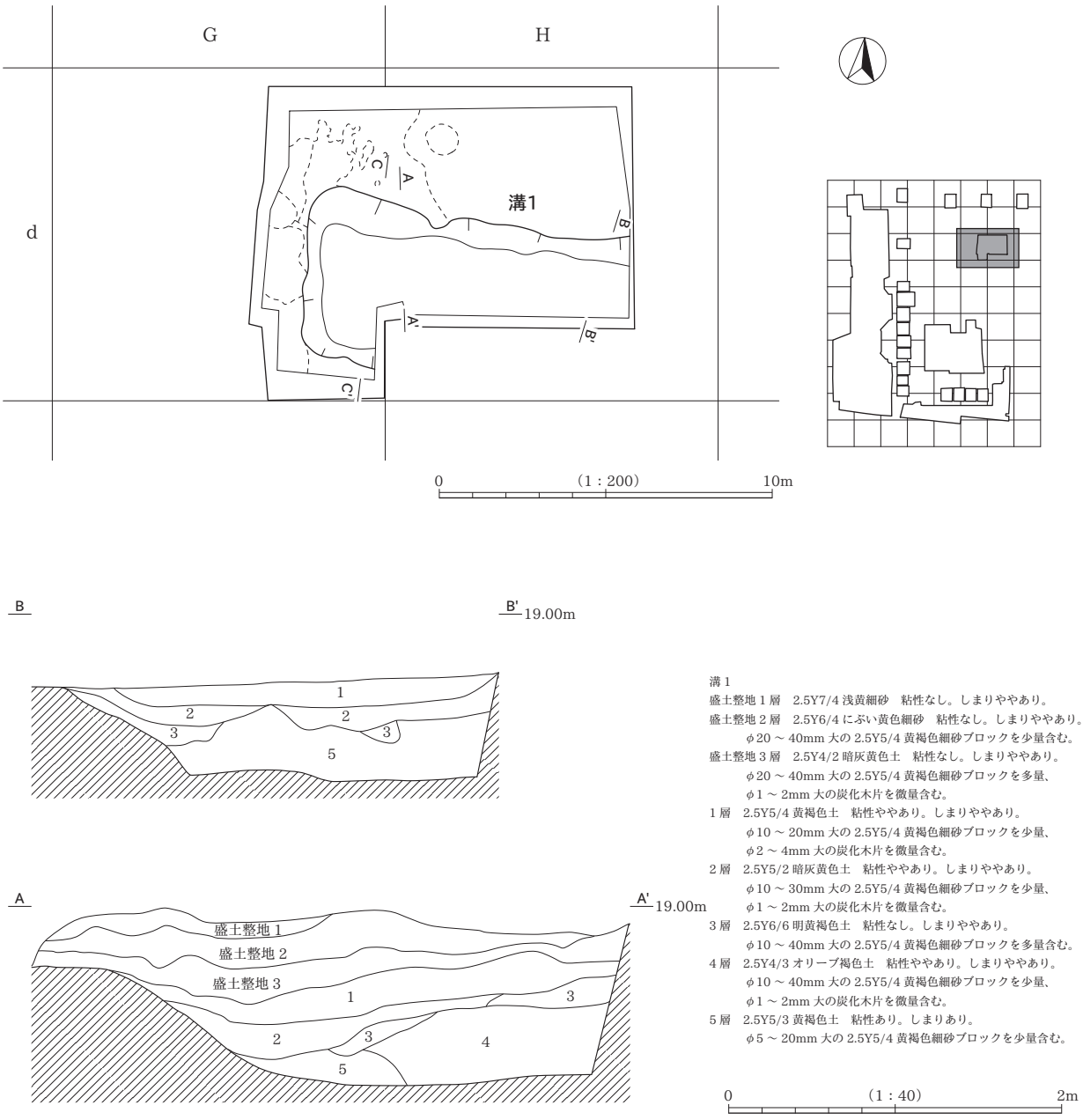
4　調査区②

調査区②は，調査対象範囲の北東部 Gd・Hd グリッドに位置する。遺構はこの堀ないしは溝のみである。性格は判断し得がたいが，壁面の立ち上がりには護岸施設である杭・土留めなどは見られない。

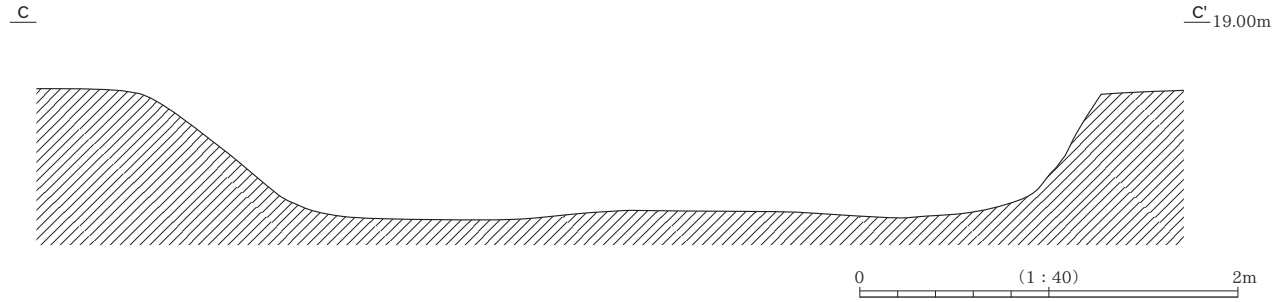
溝 1（第 11・12 図）

長さ 9.86m，上幅 5.05m 確認面からの深さは 0.74m の溝である。東西方向に直線的に延び，西端が立ち上がり，東側は調査区外へ延びる。底面はほぼ平坦で，壁面の立ち上がりは緩やかである。主軸方向は N - 89° - E で，調査区⑨の溝 2・3 とほぼ同じである。埋土は黄褐色土・暗灰黄色土・オリーブ褐色土を主体とし，5 層に分けられる。いずれの層にも黄褐色細砂ブロックを含み，1・2・4 層には炭化木片が微量含まれる。

遺物は全て近世以降の盛土整地層からの出土であり，溝の埋土からは出土していない。



第 11 図　調査区② 平面図・溝 1



第 12 図　調査区② 溝 1 断面図

5　調査区③

調査区③は , 調査対象範囲の中央南寄り , Eg・Ei・Gi グリッドに位置する。

遺構は土坑 10 基 , 井戸 3 基 , ピット 6 基を検出した。

土坑 2（第 14 図）

Fh5-2 グリッドに位置する。規模は長軸 124cm, 短軸 85cm, 確認面からの深さは 47cm である。平面は楕円形で , 壁面の立ち上がりは西側が緩やかで浅い段を有するのに対し , 東側はほぼ垂直である。埋土は黒褐色土が主体であり , 炭化木片の含有から 2 層に分けた。

遺物は , 1 層から 13 世紀頃の珠洲焼片口鉢が出土している。

土坑 3（第 14 図）

Gh3-4·4-4 グリッドに位置する。規模は長軸 157cm, 短軸 148cm, 確認面からの深さは 72cm である。平面は円形で , 壁面はV字状に立ち上がるが , 東側では稜を持つ。埋土は暗褐色土と褐色土が主体であり , 黄褐色細砂ブロックの含有量によって 4 層に分けた。1 層は炭化木片と円礫を少量含む。

遺物は 2 層から越前焼擂鉢と 17 世紀後半～ 18 世紀頃の肥前焼磁器瓶が出土している。

土坑 4（第 14 図）

Gh4-1 グリッドに位置する。規模は長軸 87cm, 短軸 71cm, 確認面からの深さは 68cm である。平面は円形で , 壁面の立ち上がりは急である。埋土は , 暗褐色土が主体であり , 2 層に分けられる。堆積状況から 1 層が柱痕 , 2 層は掘方とも考えられる。土坑 8・9 と共に柱穴列になる可能性もある。遺物は出土していない。

土坑 5（第 14 図）

Fg5-5, Gg1-5 グリッドに位置する。北側が調査区外となるため全体の形状は不明であるが , 平面は隅丸方形と推定される。残存規模は東西 114cm, 確認面からの深さは 52cm である。壁面の立ち上がりは西側が緩やかなのに対し , 東側はかなり急で , 底面南隅に楕円形で深さ 10cm ほどの落ち込みがあることから , 柱痕の可能性が残る。埋土は黒褐色土が主体で , 暗灰黄色・黄褐色細砂ブロック , 炭化木片 , 焼土粒子の含有量により 4 層に区分した。遺物は出土していない。

土坑 6（第 14 図）

Fh2-1·2 グリッドに位置する。南東部は本遺構よりも新しい時期のピット 18 と重複する（図版 4)。規模は長軸 132cm, 短軸 98cm, 確認面からの深さは 47cm である。平面は不整な円形で , 北半に段を持つ。底面は平坦で , 壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で , 黄褐色細砂ブロックを多量に含む。遺物は出土していない。

土坑 7（第 14 図）

Fh5-1 グリッドに位置する。南西側は撹乱を受けているが , 平面は円形か楕円形になると思われる。残存規模は南北 80cm, 確認面からの深さは 39cm である。底面は平坦で , 壁面の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の

単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片と焼土粒子を少量含む。

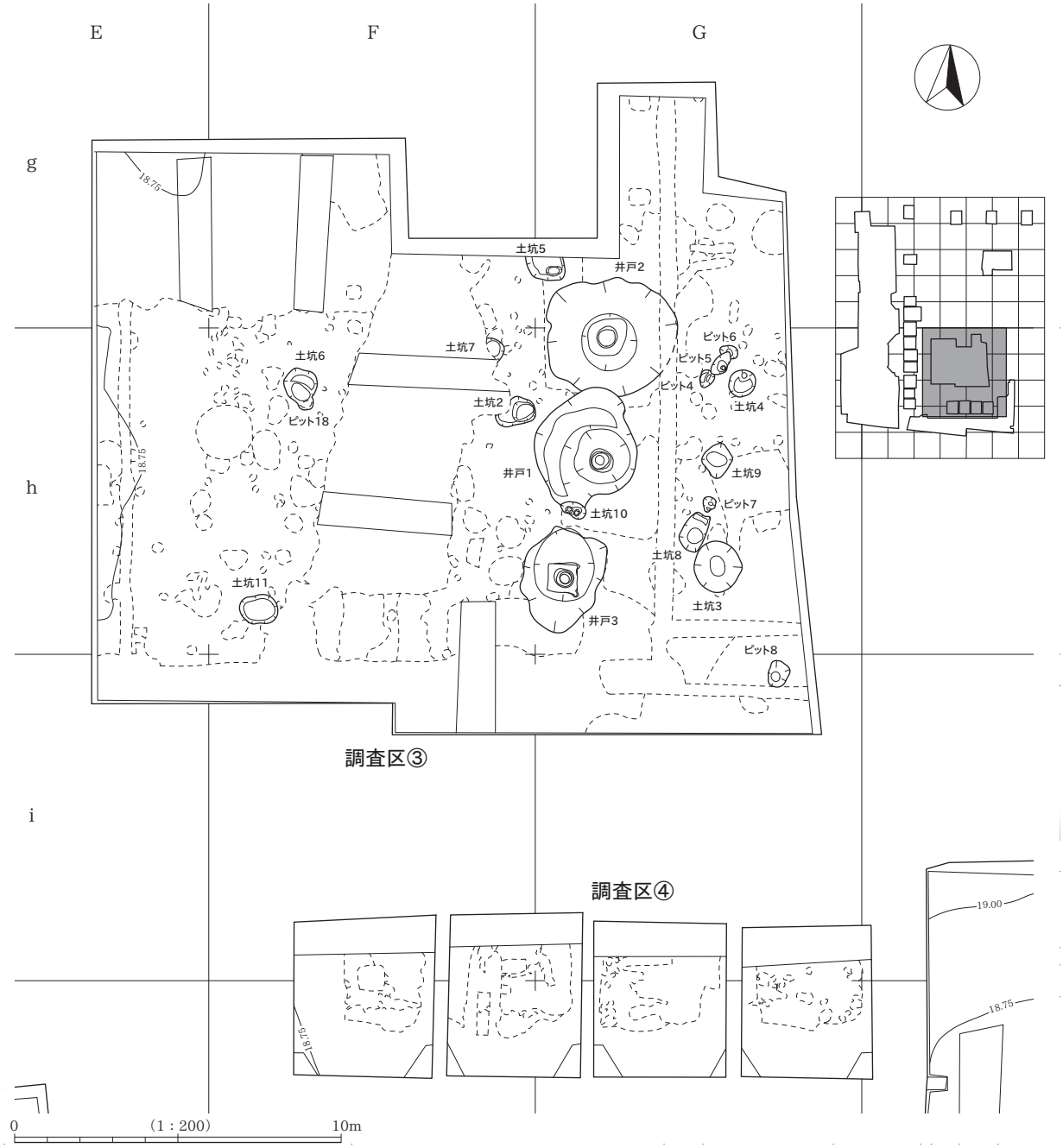
遺物は元豊通寶（第 42 図 189）と皇宋通寶（190）が出土しており，墓坑の可能性がある。

土坑 8（第 14 図）

Gh3-3･4 グリッドに位置する。範囲は長軸 116cm, 短軸 75cm, 確認面からの深さは 70cm である。平面は隅丸長方形で，底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急で，北側の上部には平坦面がある。埋土 1 層は写真図版 4 のとおり柱痕の可能性があり，埋土 2 層は掘方で，黄褐色細砂ブロックを多量に含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

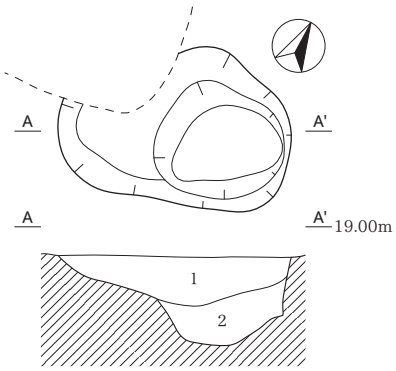
土坑 9（第 14 図）

Gh3-2･3 グリッドに位置する。規模は長軸 108cm, 短軸 90cm, 確認面からの深さは 56cm である。平面は隅丸方形で，底面はゆるい丸底である。壁面の立ち上がりはやや急である。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロッ



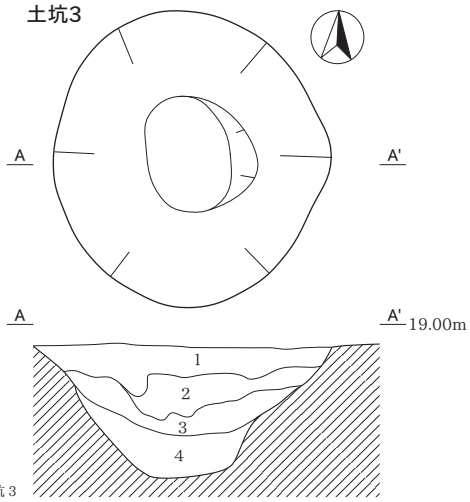
第 13 図　調査区③ 平面図

土坑2



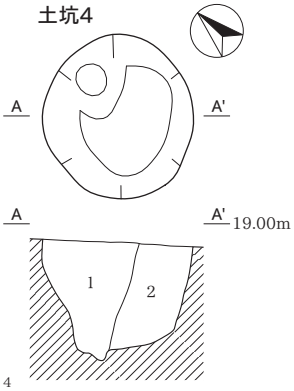
土坑 2
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。
　　しまりややあり。φ5 ～ 20mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、
　　φ5 ～ 15mm 大の炭化木片を少量含む。
2 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。
　　しまりややあり。φ5 ～ 20mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

土坑3



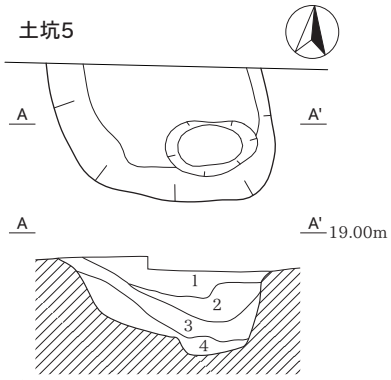
土坑 3
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 10mm
　　大の炭化木片を少量、φ20 ～ 80mm 大の円礫を少量含む。
2 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 40mm
　　大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
3 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ10 ～ 30mm
　　大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
4 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 15mm
　　大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

土坑4



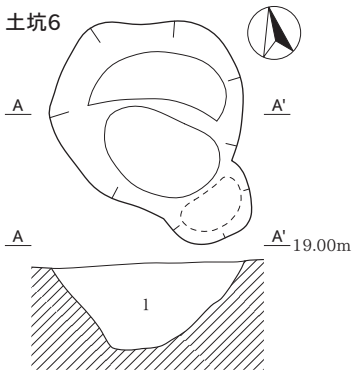
土坑 4
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂
　　ブロックを少量、φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を
　　少量、φ250mm 大の円礫を少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ10 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂
　　ブロックを多量含む。

土坑5



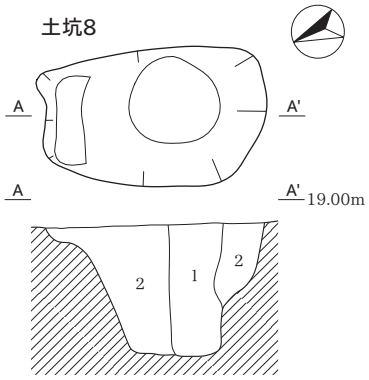
土坑 5
1 層　2.5Y3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ10 ～ 15mm 大の 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
　　ブロックを多量、φ5mm 大の炭化木片を少量、
　　φ3 ～ 5mm 大の焼土粒子を少量含む。
2 層　2.5Y3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりややあり。
3 層　2.5Y3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ20 ～ 50mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
4 層　2.5Y3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりややあり。
　　φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。

土坑6



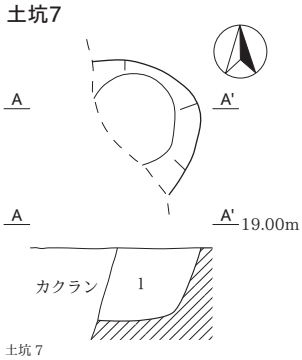
土坑 6
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。
　　しまりあり。φ10 ～ 150mm 大の 2.5Y5/4
　　黄褐色細砂ブロックを多量含む。

土坑8



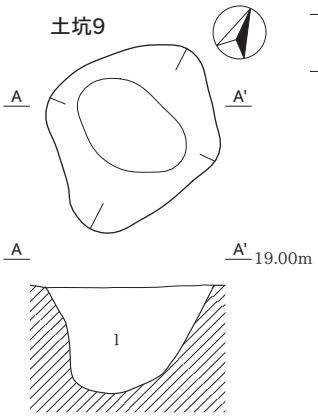
土坑 8
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ5 ～ 15mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ5 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、
　　φ5 ～ 30mm 大の炭化木片を少量含む。

土坑7



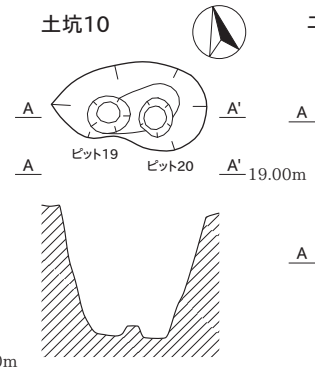
土坑 7
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。
　　しまりあり。φ5 ～ 20mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、
　　φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量、
　　φ3 ～ 5mm 大の焼土粒子を少量含む。

土坑9

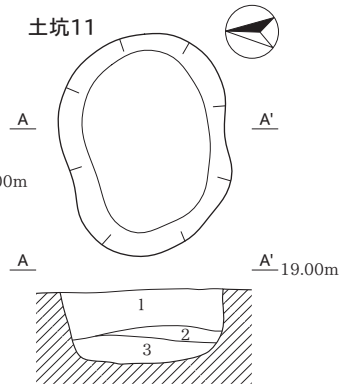


土坑 9
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。
　　しまりあり。φ5 ～ 50mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。

土坑10



土坑11



土坑 11
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ2 ～ 4mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂粒子を少量、
　　φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
2 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ2 ～ 4mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂粒子を少量、
　　φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
3 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ2 ～ 4mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂粒子を少量含む。

0　（1：40）　2m

第 14 図　調査区③ 土坑

クを多量に含む。遺物は出土していない。

土坑 10（第 14 図）

Gh1-3 グリッドに位置する。井戸 1 と重複するが，新旧関係は不明である。2 基のピットの重複の可能性が高く，確認面での規模は長軸 82cm, 短軸 45cm, 壁面の立ち上がりは急である。確認面からの深さはピット 19 が 74cm, ピット 20 が 78cm である。遺物は出土していない。

土坑 11（第 14 図）

Fh1-5·2-5 グリッドに位置する。規模は長軸 118cm, 短軸 88cm, 確認面からの深さは 40cm である。平面は楕円形で，底面は平坦，壁面の立ち上がりは急である。埋土は，1・3 層が暗褐色土，2 層が灰黄褐色土の 3 層に分けられる。

遺物は 3 層から砥石（第 47 図 217）が出土している。

井戸 1（第 13・15 図）

Gh グリッドに位置する。北側で井戸 2 の掘方と重複し，これを切っている。南側では土坑 10 と重複するが，新旧関係は不明である。掘方の平面は不整な楕円形で，北側から西側にかけてテラス状の段を有している。この部分の断面は漏斗状で，井戸掘削時の掘方である。規模は南北方向が 3.45m 以上，東西方向は 3.1m, 確認面からの深さ 3.16m を測り，底面標高 15.68m である。井戸本体は径 70cm の円形を呈し，水溜直上の井戸側壁面に桶の痕跡を確認した（図版 5）。水溜は径 50㎝で，砂礫層に達する水溜底面は，鉄分の沈着による赤化が観察された。埋土は 8 層に分層した。1 ～ 4 層が井戸本体の埋土で，1・4 層は締まりが弱く，2 ～ 4 層は粘性が強い。4 層は黒色の腐植土層で，井戸本体最下層の水溜との境に生じた棚状の段に薄く堆積していた。井戸の使用時に堆積した有機質の層と考えられる。5 ～ 8 層は掘方の埋土で，井戸構築時に井戸本体の周囲に裏込めされたもので，北側では概ね水平に堆積している。黄褐色細砂ブロックを多量に含み，井戸本体の埋土に比べて粘性が弱く，締まる。井戸本体内部からの礫の出土状況は，1 層からこぶし大の礫が少量，2 層から微量，最下層の 3 層からはこぶし大～人頭大が少量出土している。掘方埋土からは，本体埋土に比べて出土量が少なく，5・7 層からこぶし大の石が少量出土しているのみである。

遺物は，井戸本体最下層の水溜（3 層）から越前焼壺（第 33 図 18）・擂鉢（19），図示していないが青花碗 E 群が出土しており，18 が 15 世紀後半～ 16 世紀，19・青磁碗が 16 世紀後半頃に比定される。

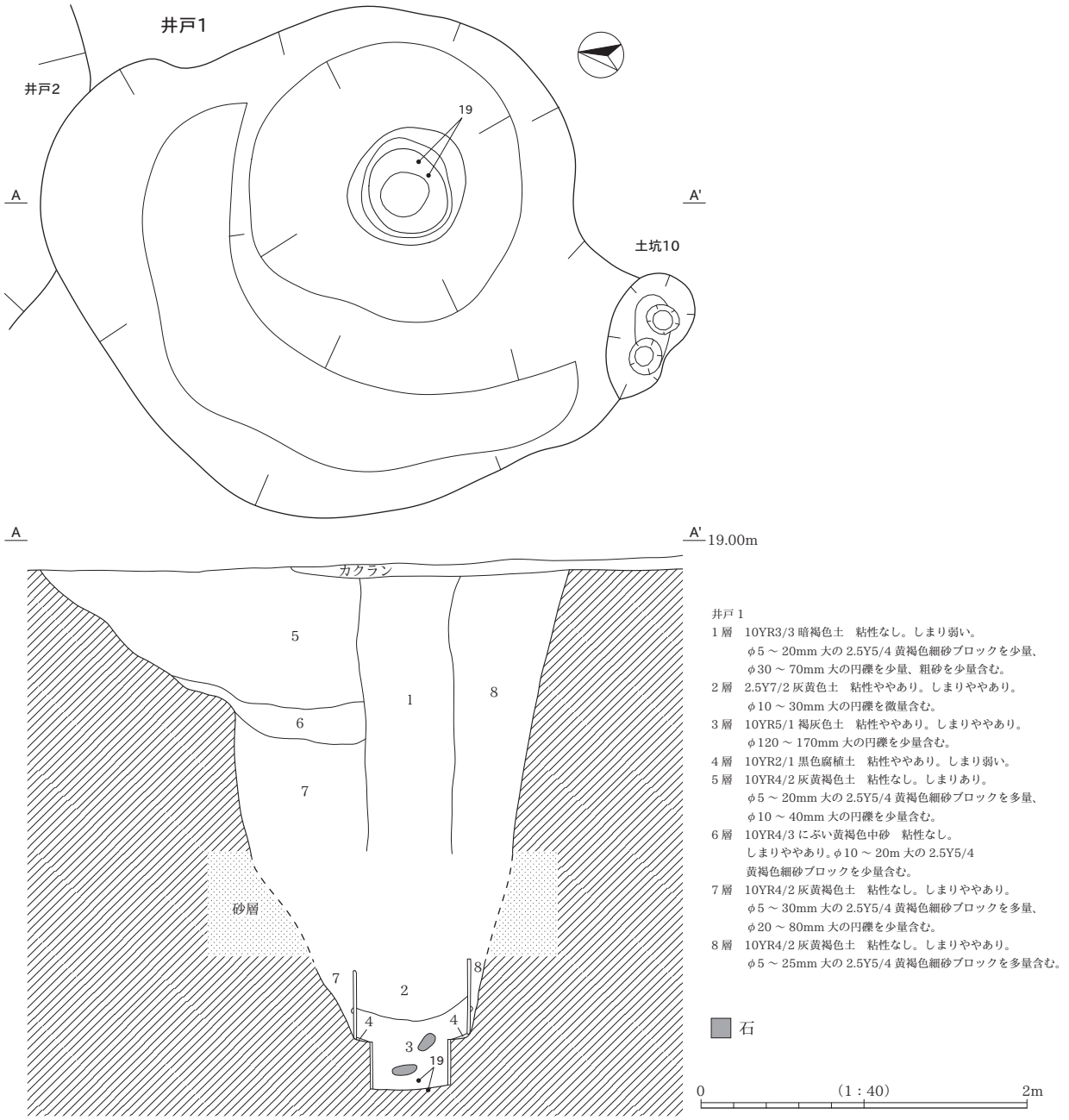
井戸 2（第 13・16 図）

Gg·Gh グリッドに位置する。南側で井戸 1 と重複し，これに切られる。掘方の平面は円形で，断面は漏斗状である。規模は南北方向 3.52m, 東西方向 3.84m, 確認面から底面までの深さ 3.5m を測り，底面標高 15.32m である。井戸本体は一辺約 80㎝の方形で，水溜は径 60㎝の円形の掘り込みの下部に径 46㎝の掘り込みがあり，曲物の痕跡がわずかに観察された。埋土は 10 層に分層される。1 ～ 5 層が井戸本体の埋土で，掘方の埋土に比べて締まりが弱く，3 層には炭化木片が多く含まれる。水溜の最下層の 5 層にはこぶし大～人頭大の多量の礫が混入しており（図版 6），井戸廃棄時に投げ込まれたものと考えられる。2 層から人頭大，3·4 層からこぶし大がそれぞれ少量出土している。6 ～ 10 層はにぶい黄褐色土を主体とする掘方埋土である。埋土からは，井戸本体に比べて礫の出土量は少ない。

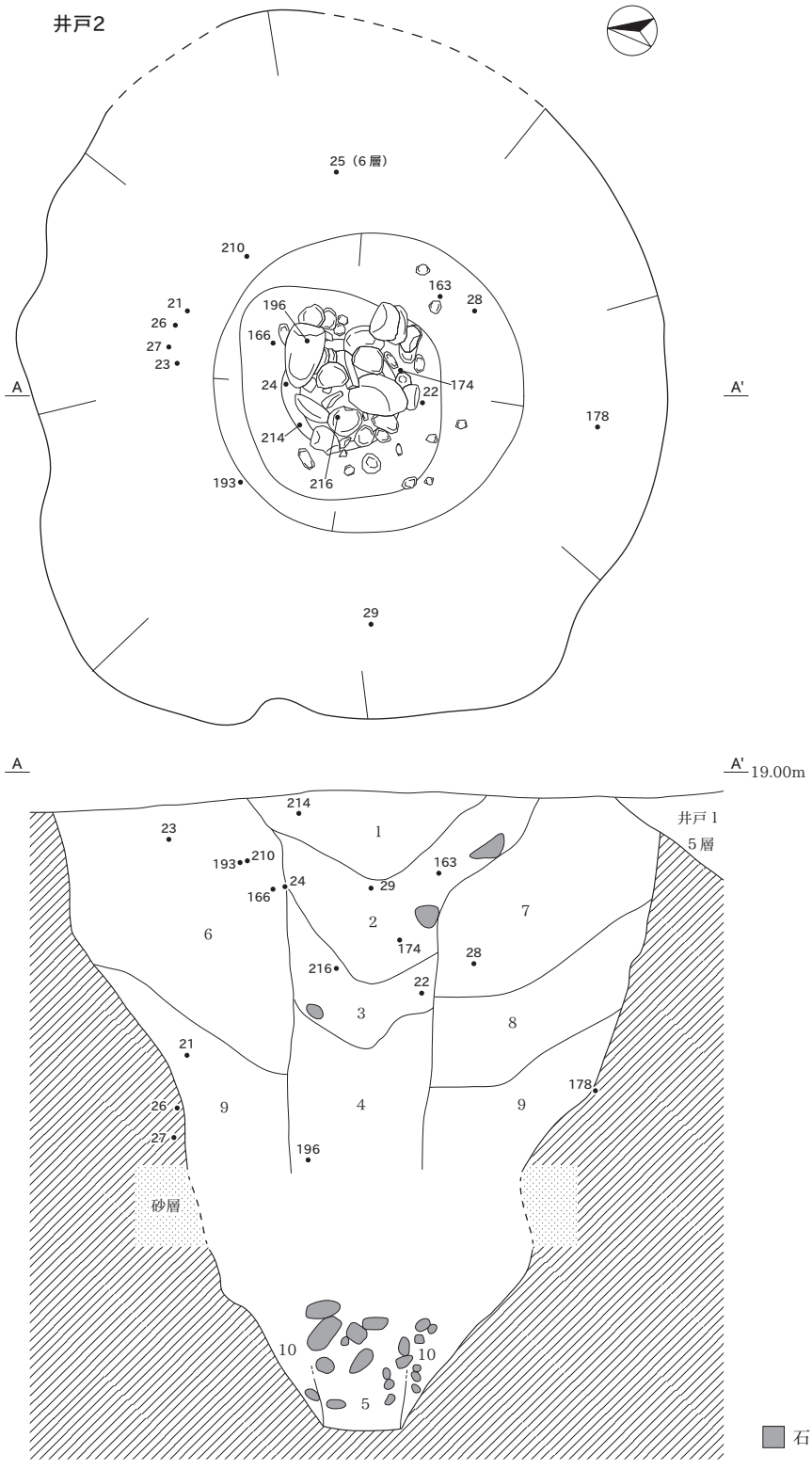
遺物は井戸本体から，古瀬戸瓶子（第 33 図 22），珠洲焼壺（24），鉄製雁股鏃（第 42 図 163），和釘（166），鉄鍋（174），椀形滓（第 43 図 193），鉄滓（196），砥石（第 46 図 214・216），他に珠洲焼大甕が出土しており，22 は古瀬戸中期～後Ⅰ期（14 世紀）に比定される。掘方埋土からは，青磁碗（第 33 図 21），珠洲焼壺（23）・片口鉢（25），瓦器の風炉（29），土師質土器皿（26・27），須恵器無台杯（28），止金具（第 42 図 178），砥石（第 46 図 210）が出土しており，21 が 14 ～ 15 世紀，25 が珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 ～ 15 世紀前半）に比定される。

井戸 3（第 13・17 図）

Fh・Gh グリッドに位置し，南北方向に 3 基並ぶ井戸の南端にあたる。掘方の平面プラン検出当初に設定した位置で半截したところ（第 17 図 A-A'），井戸本体の中心が設定したラインより南側に位置することが判明した。また，井戸中位の地山が砂質であり，調査中に井戸掘方の崩落が予想されたため，確認面からの深さ約 1.8m まで（上部）を調査・記録したのちに，上部を重機で掘削除去し，改めて平面プラン（下部）の検出を行い，第 17 図 B-B' を設定した。掘方の平面は不整な楕円形で，断面は漏斗状である。規模は南北方向 3.12m，東西方向 2.42 m，深さ 3.52 m を測り，底面標高は 15.3 m である。井戸本体は南北方向 84㎝，東西方向 90㎝の方形を呈する。東側の隅部に隅柱の痕跡が確認され，縦板組隅柱横桟留であったと思われる。水溜は階段状に掘り込まれ，上部に径 50㎝の曲物，下部には径 34㎝の曲物が埋置されていた。曲物の遺存状態は悪く，ともに木質の繊維しか残っておらず，水分を多量に含みブヨブヨしている。埋土は 15 層に分層した。1 ～ 7 層が井戸本体の埋土で，粘性が強く，締まりが弱い。



第 15 図　調査区③ 井戸 1



井戸２

１層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 8mm 大の炭化木片を少量含む。

２層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまり弱い。φ10 ～ 50mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ30 ～ 220mm 大の円礫を少量含む。

３層　10YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ10 ～ 50mm 大の炭化木片を多量、φ30 ～ 140mm 大の円礫を少量含む。

４層　10YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。φ10 ～ 60mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ10 ～ 30mm 大の炭化木片を少量、φ20 ～ 30mm 大の円礫を少量含む。

５層　2.5Y3/1 黒褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ50 ～ 220mm 大の円礫を多量含む。

６層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量、φ20 ～ 60mm 大の円礫を少量、粗砂を少量含む。

７層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量、φ30 ～ 60mm 大の円礫を少量含む。

８層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ10 ～ 20mm 大の炭化木片を少量、φ50 ～ 100mm 大の円礫を少量、粗砂を少量含む。

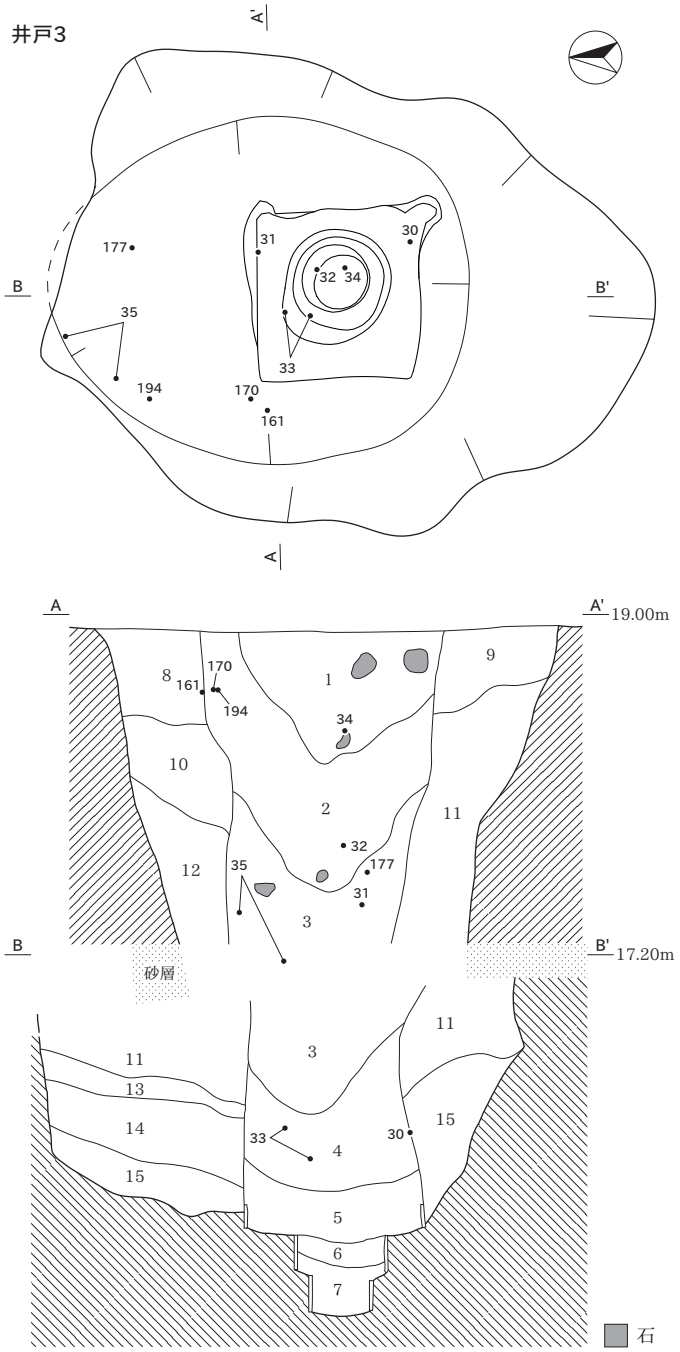
９層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量、粗砂を少量含む。

10 層　2.5Y4/1 褐灰色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ50 ～ 100mm 大の円礫を少量含む。

第 16 図　調査区③ 井戸 2

礫は，1・2 層（上位）からこぶし大～人頭大が多量に出土しており，3 層（中位）から人頭大が少量，5 層（下位）からはこぶし大が少量出土している。上位と中位から多く出土しており，礫の径も大きい。掘方からは，井戸本体の埋土に比べて礫の出土量は極めて少ない。1 層には礫・炭化木片が多量に含まれる。8 ～ 15 層は暗褐色土を主体とする掘方の埋土で，井戸本体の埋土とは対照的に粘性がなく，締まりが強い。13 ～ 15 層は概ね水平に堆積している。

遺物は，井戸本体の埋土から珠洲焼壺（第 33 図 30）・甕（31 ～ 33）・片口鉢（34），この他に曲物側板，板状木製品が出土しており，30 ～ 33 は珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 ～ 15 世紀前半）に比定される。掘方埋土からは，珠洲焼片口鉢（第 33 図 35），刀子（第 42 図 161），和釘（170），鎹（177），鉄滓（第 43 図 194），この他に土師質土器，



井戸 3
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、
φ5 ～ 15mm 大の炭化木片を多量、
φ90 ～ 220mm 大の円礫を多量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量、
φ5 ～ 30mm 大の炭化木片を少量、
φ30 ～ 50mm 大の円礫を少量含む。
3 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまり弱い。
2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量、φ150mm 大の円礫を少量含む。
4 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性ややあり。しまり弱い。
2.5Y7/2 灰黄色中砂を少量、
φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
5 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性ややあり。しまり弱い。
2.5Y7/2 灰黄色中砂を多量、
φ50 ～ 70mm 大の礫を少量含む。
6 層　2.5Y6/1 黄灰色砂質土　粘性ややあり。しまり弱い。
粗砂を少量含む。
7 層　2.5Y3/2 褐色砂質土　粘性ややあり。しまり弱い。
粗砂を多量含む。
8 層　10YR4/4 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量含む。
9 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりややあり。
2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量、
φ15 ～ 25mm 大の 10YR3/3 暗褐色土ブロックを少量含む。
10 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりややあり。
2.5Y5/4 黄褐色細砂と 10YR3/3 暗褐色土が互層をなす。
11 層　2.5Y5/4 黄褐色細砂　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 10YR3/3 暗褐色土ブロックを少量含む。
12 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、
φ20 ～ 30mm 大の円礫を少量含む。
13 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、
φ10 ～ 30mm 大の 10YR3/2 黒褐色土ブロックを多量、
φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。
14 層　2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂　粘性なし。しまりあり。
φ2 ～ 4mm 大の炭化木片を少量含む。
15 層　2.5Y5/3 黄褐色粗砂　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

0　（1：40）　2m

第 17 図　調査区③ 井戸 3

棒状木製品などが出土しており，35 は珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 ～ 15 世紀前半）に比定される。

ピット（第 18 図）

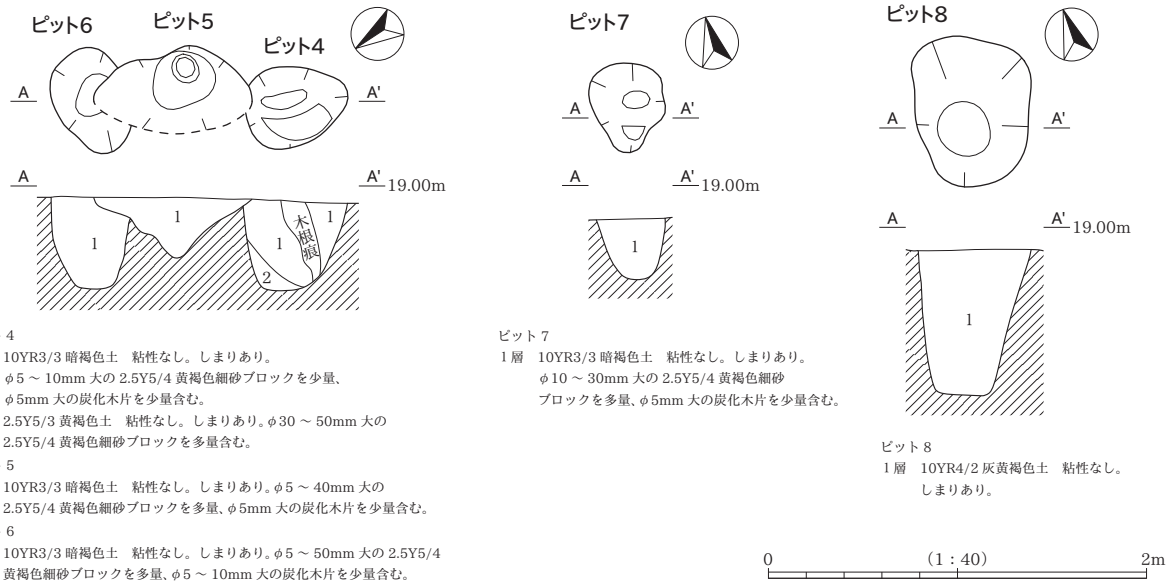
ピット 4　Gh3-1 グリッドに位置する。ピット 5 と重複し，ピット 4 の方が古い。規模は長軸 56cm, 短軸 44cm, 確認面からの深さは 47cm である。平面は不整形，底面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は黄褐色細砂ブロックを含む暗褐色土が主体で 2 層に分けられる。遺物は出土していない。

ピット 5　Gh3-1 グリッドに位置する。ピット 4･6 と重複し，ピット 5 が新しい。規模は長軸 44cm, 短軸 42cm, 確認面からの深さは 36cm である。平面は楕円形で，断面は V 字状で緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

ピット 6　Gh3-1･4-1 グリッドに位置する。ピット 5 に北端が壊される。規模は長軸 57cm, 短軸 40cm, 確認面からの深さは 48cm である。平面は楕円形で，底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

ピット 7　Gh3-3･4 グリッドに位置する。規模は長軸 47cm, 短軸 40cm, 確認面からの深さは 31cm である。平面は不整形で，底面は丸底である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

ピット 8　Gi4-1 グリッドに位置する。規模は長軸 79cm, 短軸 62cm, 確認面からの深さは 76cm である。平面は隅丸長方形で，底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土



ピット 4
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、
　　φ5mm 大の炭化木片を少量含む。
2 層　2.5Y5/3 黄褐色土　粘性なし。しまりあり。φ30 ～ 50mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
ピット 5
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 40mm 大の
　　2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ5mm 大の炭化木片を少量含む。
ピット 6
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 50mm 大の 2.5Y5/4
　　黄褐色細砂ブロックを多量、φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。

ピット 7
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
　　φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂
　　ブロックを多量、φ5mm 大の炭化木片を少量含む。

ピット 8
1 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性なし。
　　しまりあり。

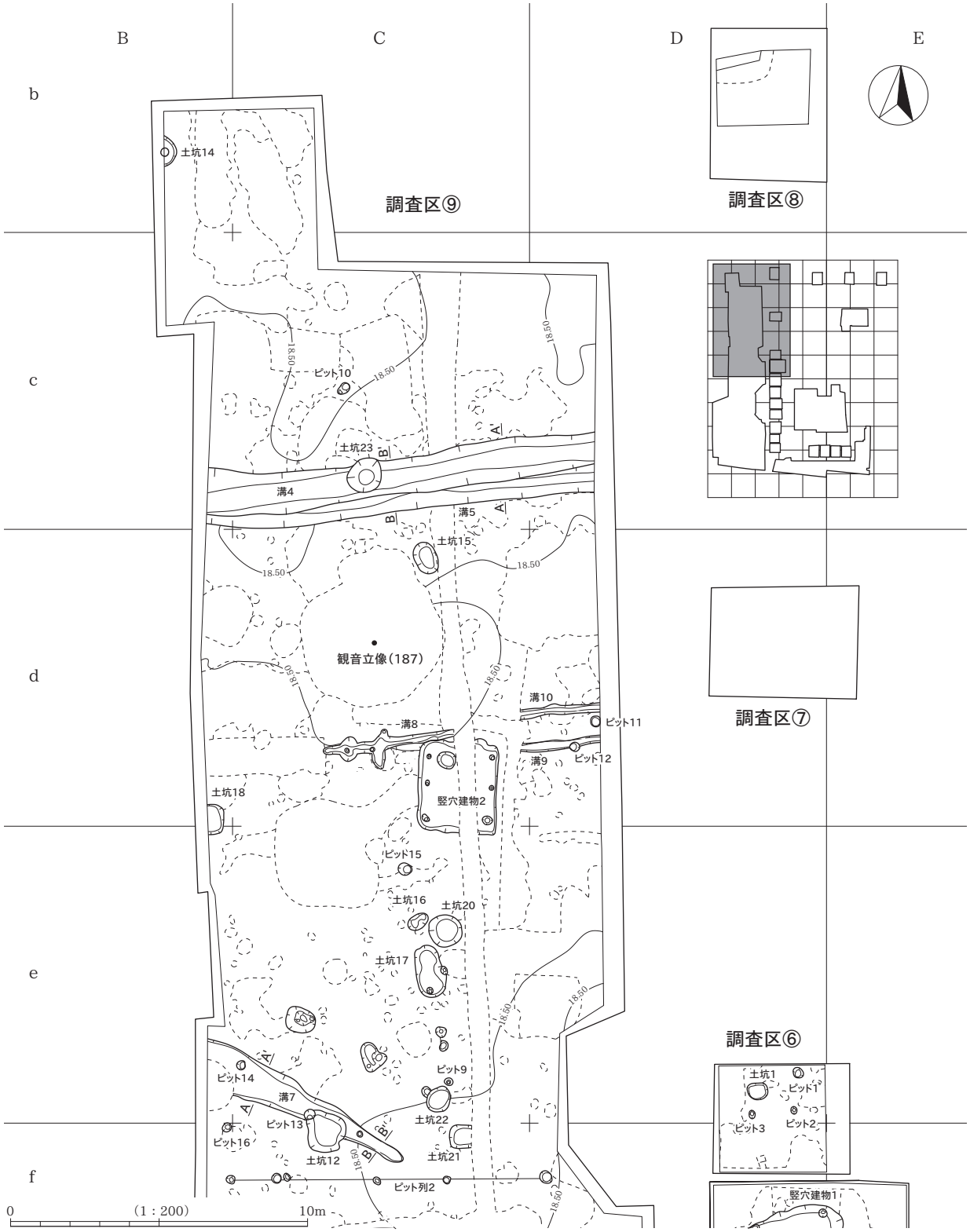
0　（1：40）　2m

第 18 図　調査区③ ピット

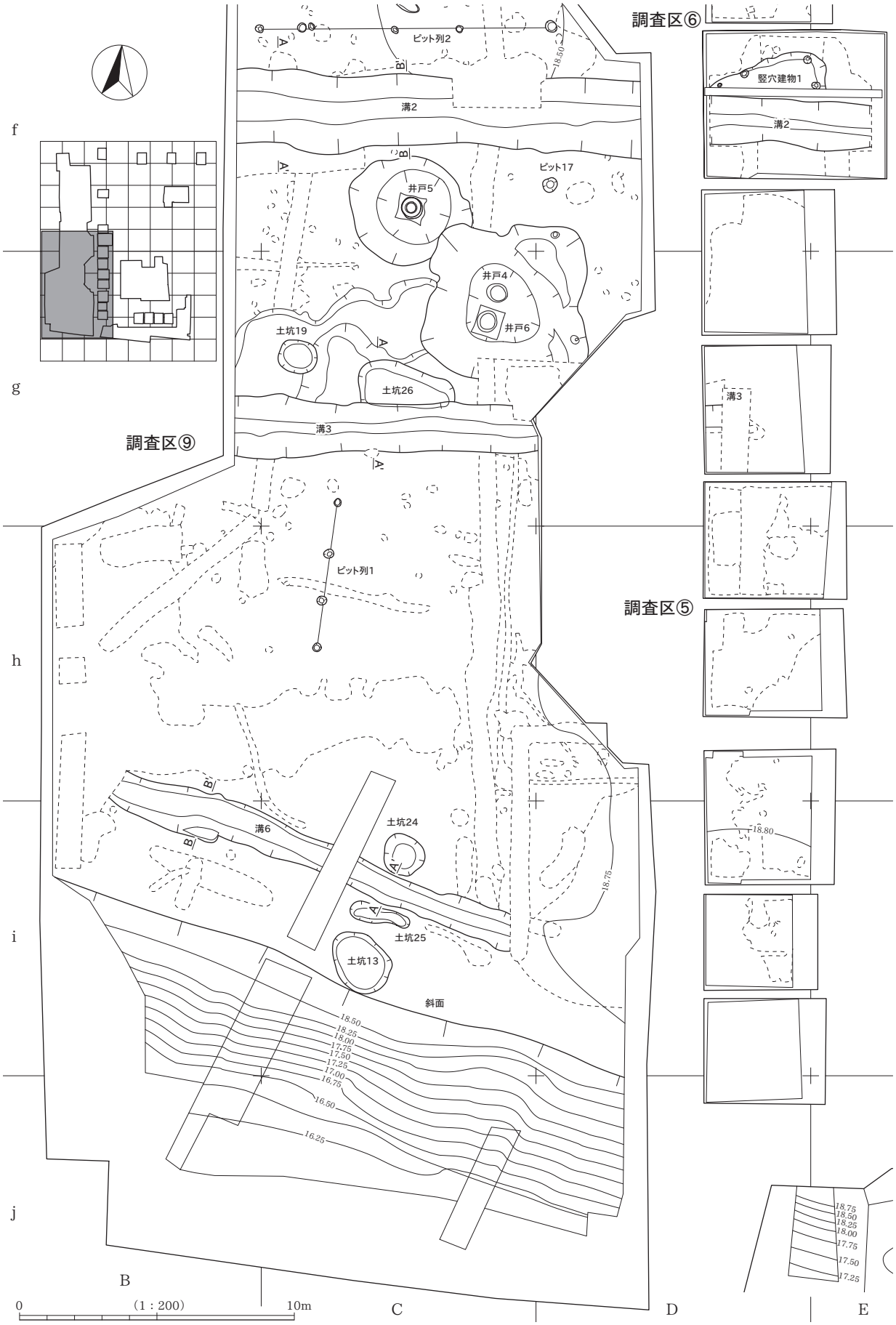
していない。

6　調査区⑥・⑨

調査区⑥は調査対象範囲の中央部の De・Df・Ee・Ef グリッドに位置し , 校舎地下の基礎掘削２個分である。調査区⑨は西側の Bb ～ Bj, Cb ～ Cj, Dc ～ Dj グリッドに位置する。旧校舎西側の前庭部分にあたる。



第 19 図　調査区⑥・⑨ 平面図（1）



第 20 図　調査区⑥・⑨ 平面図（2）

遺構は竪穴建物２棟，土坑 15 基，井戸３基，溝９条，ピット列２列，ピット 12 基を検出した。

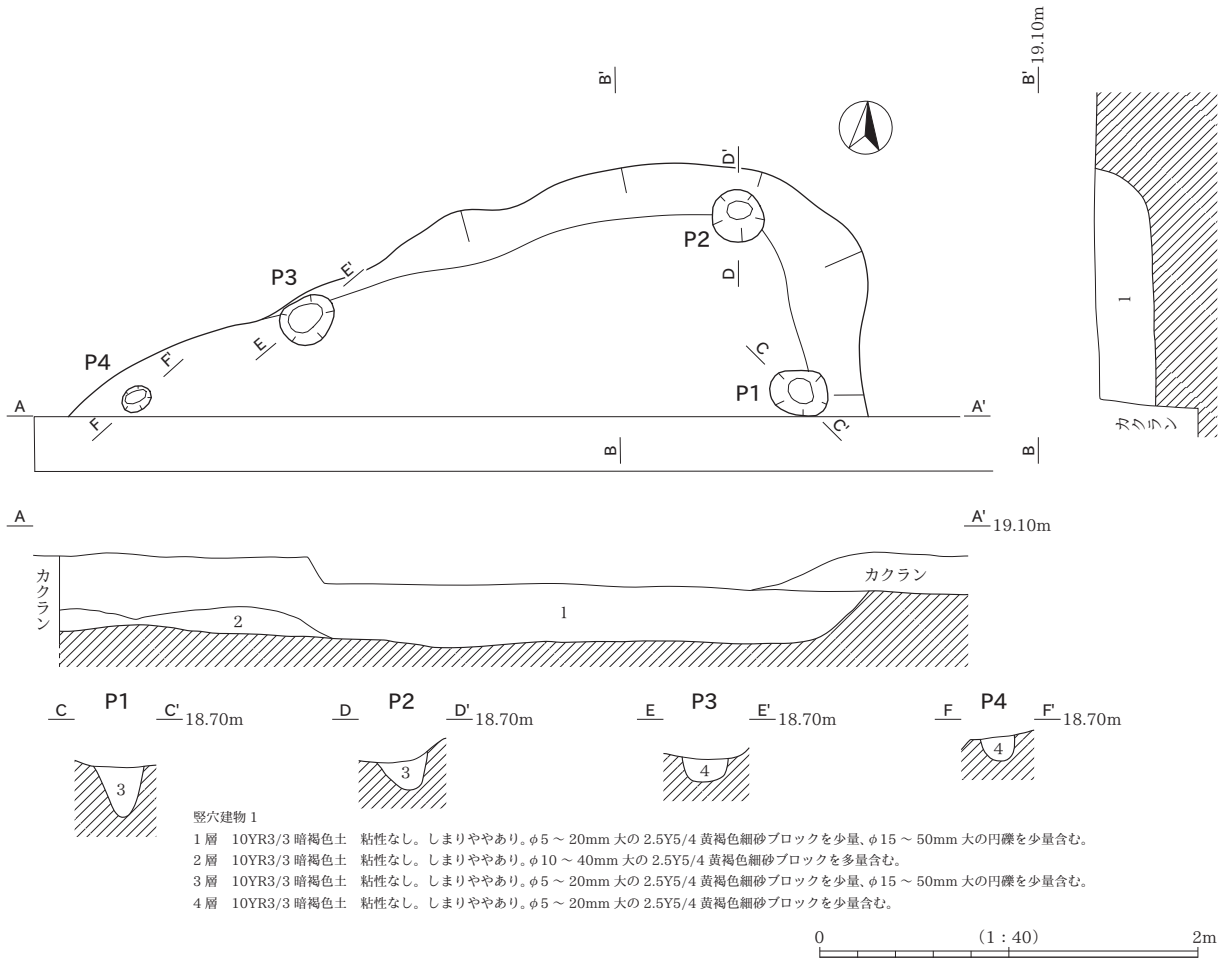
竪穴建物１（第 21 図）

Df ～ Ef グリッドに位置する。南西側が溝 2 に壊されているため全体の形状は不明であるが，平面は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。床面は平坦で，壁面の立ち上がりはやや緩やかである。規模は東西 420cm, 南北 166cm, 残存する壁高は 50cm である。埋土は黄褐色細砂ブロックを含む暗褐色土が主体であり，2 層に分けられる。柱穴は壁際に 4 基確認できた。柱穴の大きさは長軸 16 ～ 32cm, 短軸 13 ～ 27cm, 床面からの深さ 13 ～ 27cm である。柱穴の埋土はＰ 1･2 とＰ 3･4 では異なる。床面や埋土には焼土・炭化物層などは認められない。

遺物は瀬戸美濃焼丸皿（第 34 図 36），越前焼甕（37）が出土しており，36 は大窯第 1 段階（1480 ～ 1530 年頃），37 は 16 世紀前半に比定される。

竪穴建物２（第 22 図）

Cd ～ Ce グリッドに位置する。北西隅で溝 8 と重複するが，その範囲が狭小であったため新旧関係を識別することが困難であった。中央付近では南北に延びる幅 55 ～ 80cm の撹乱溝によって壊されている。平面は方形に近い長方形で，規模は，長軸 307cm, 短軸 265cm, 推定される床面積は 6.8㎡である。長軸方位は N - 1° - E でほぼ真北を示す。床面はやや凸凹するもののほぼ平坦で，残存する壁高は 35cm である。壁面の立ち上がりはやや急である。埋土は，にぶい黄褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，円礫と焼土粒子と炭化木片を少量含む。北西隅付近で長軸 63cm, 短軸 59㎝，深さ 26cm の円形の落ち込みを検出した。竪穴建物の床下の堆積と判断され，竪穴建物の最終機能時には埋まっていたと考えられる。柱穴は 6 基で，東西の壁際に 3 基ずつ並ぶ。柱穴の規模は長



竪穴建物１
１層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ15 ～ 50mm 大の円礫を少量含む。
２層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ10 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
３層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ15 ～ 50mm 大の円礫を少量含む。
４層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

0　（1：40）　2m

第 21 図　調査区⑥ 竪穴建物１

軸 16 ～ 35cm, 短軸 13 ～ 29cm, 床面からの深さ 17 ～ 40cm である。柱間寸法は P1 ～ P2 が 118cm, P2 ～ P3 が 90cm, P3 ～ P4 が 213cm, P4 ～ P5 が 100cm, P5 ～ P6 が 108cm, P6 ～ P1 が 206cm, P2 ～ P5 が 217cm である。竪穴建物 1 と同様に , 床面や埋土には焼土・炭化物層などは認められず , 遺物も出土していない。

土坑 1（第 23 図）

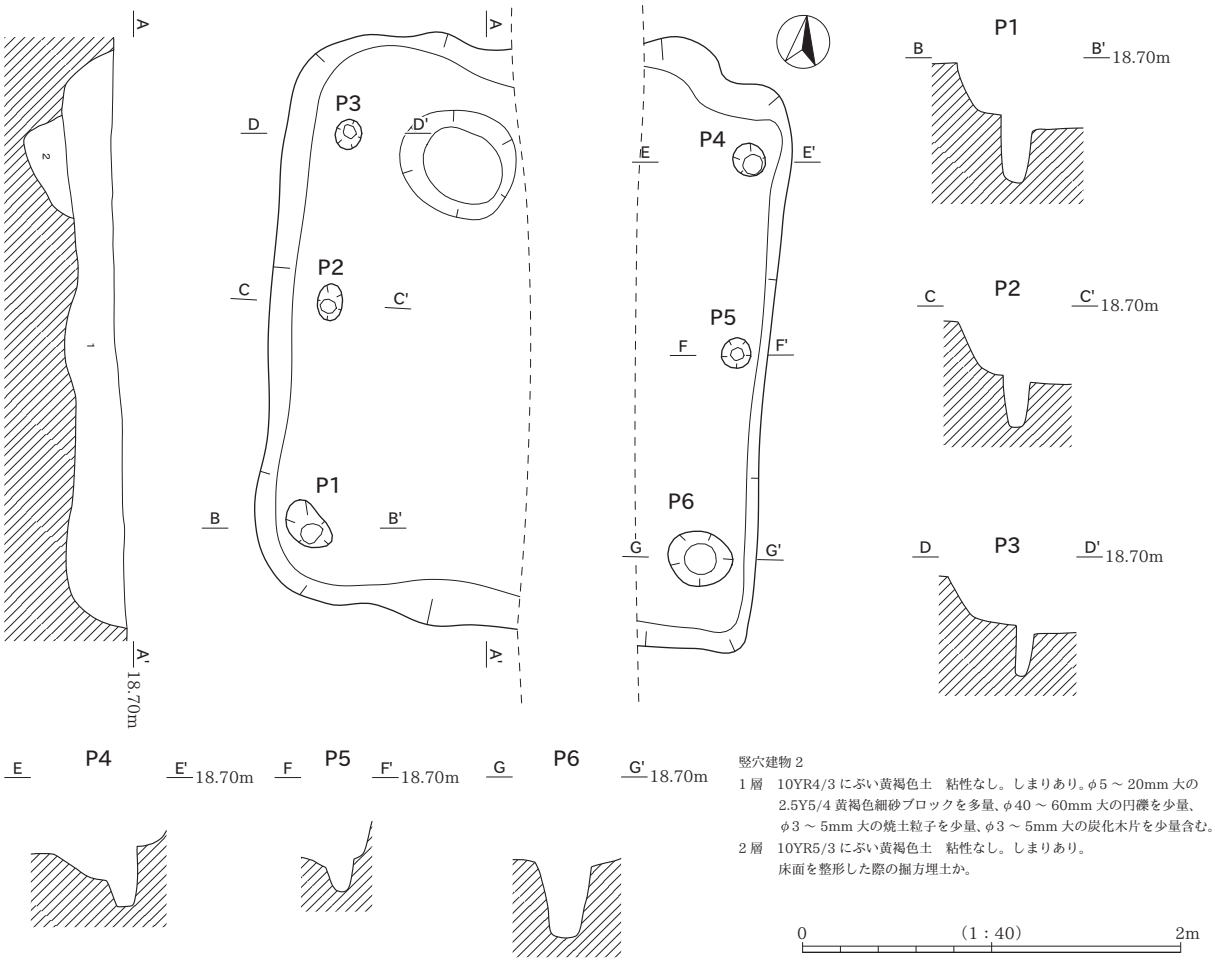
De4-5 グリッドに位置する。規模は長軸 68cm, 短軸 57cm, 確認面からの深さは 30cm である。平面は隅丸方形で , 底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の単層で , 黄褐色細砂ブロックを少量含む。遺物は出土していない。

土坑 12（第 23 図）

Ce2-5, Cf2-1 グリッドに位置する。溝 7 とピット 13 と重複し , これらよりも新しい。規模は長軸 157cm, 短軸 142cm, 確認面からの深さは 25cm である。平面は不整な台形状で , 壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦ながら , 南から北に向かって低く傾斜する。埋土は暗褐色砂質土の単層で , 黄褐色細砂ブロックを多量に , 炭化木片を少量含む。南西部から珠洲焼大甕（第 35 図 47b）が据え置かれた状態で出土した。体部上半は後世の撹乱を受け , かなり欠失しているが , 同一個体の口縁部（47a）が残る。珠洲焼Ⅲ期（13 世紀後半）に比定される。この他に , 和釘（第 42 図 168）が出土している。

土坑 13（第 23 図）

Ci2-3･4, Ci3-3･4 グリッドに位置する。規模は長軸 246cm, 短軸 175cm, 確認面からの深さは 46cm である。平面は不整な楕円形で , 底面は平坦であるが , 南側がやや高くなり , 壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は円礫を少量



第 22 図　調査区⑨ 竪穴建物 2

含む黒褐色砂質土の単層である。遺物は珠洲焼甕・片口鉢，土師質土器皿が出土している。

土坑 14（第 23 図）

Bb4-4 グリッドに位置する。規模は南北 104cm, 東西の残存 43cm, 確認面からの深さは 26cm である。西側が調査区外となるため全体の形状は不明であるが，平面は円形または楕円形と推定される。底面は平坦で，壁面はやや急に立ち上がる。埋土は，にぶい黄褐色砂質土の単層で，円礫を多数含む。土坑の中央底面から 6cm 浮いて正位に置かれた近世後期～近代初頭の土師質蓋付骨蔵器（第 34 図 48・49）が出土している。骨蔵器の中に人の焼骨が確認できた。土坑西側の調査区土層断面を見ると，1・2 層とも撹乱層（整地層）で，この土坑の上部構造は不明である。また，骨蔵器の上部も最終的に撹乱を受けている。骨蔵器の上半部と蓋は破片となって骨蔵器中に落ち込んでいた。口縁の大部分や蓋が存在することから，人骨は埋納された時点での全量が残っていると考えられる。

土坑 15（第 23 図）

Cd4-1 グリッドに位置する。東側の一部が撹乱を受ける。平面は楕円形で，底面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸 110cm, 短軸 74cm, 確認面からの深さは 28cm である。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックと炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 16（第 23 図）

調査区⑨の Ce4-2 グリッドに位置する。平面は楕円形で，底面はやや丸く，壁面の立ち上がりは急である。規模は長軸 75cm, 短軸 48cm, 確認面からの深さは 46cm である。埋土は黒褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 17（第 23 図）

Ce4-3 グリッドに位置する。平面は楕円形で，底面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックを多量に，炭化木片を少量含む。なお，底面南隅には床面からの深さ 13㎝の円形の窪みがある（P1）。土坑との先後関係は不明である。規模は長軸 177cm, 短軸 98cm, 確認面からの深さは 24cm である。

遺物は瓦質香炉（第 34 図 38）が出土している。

土坑 18（第 23 図）

Bd5-5, Be5-1 グリッドに位置する。西側が調査区外となるため全体の形状は不明であるが，平面は隅丸方形と推定され，底面は平坦である。壁面の立ち上がりはかなり急である。規模は南北 102cm, 確認面からの深さは 94cm である。埋土は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロック，焼土ブロック，炭化木材，円礫を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 19（第 24 図）

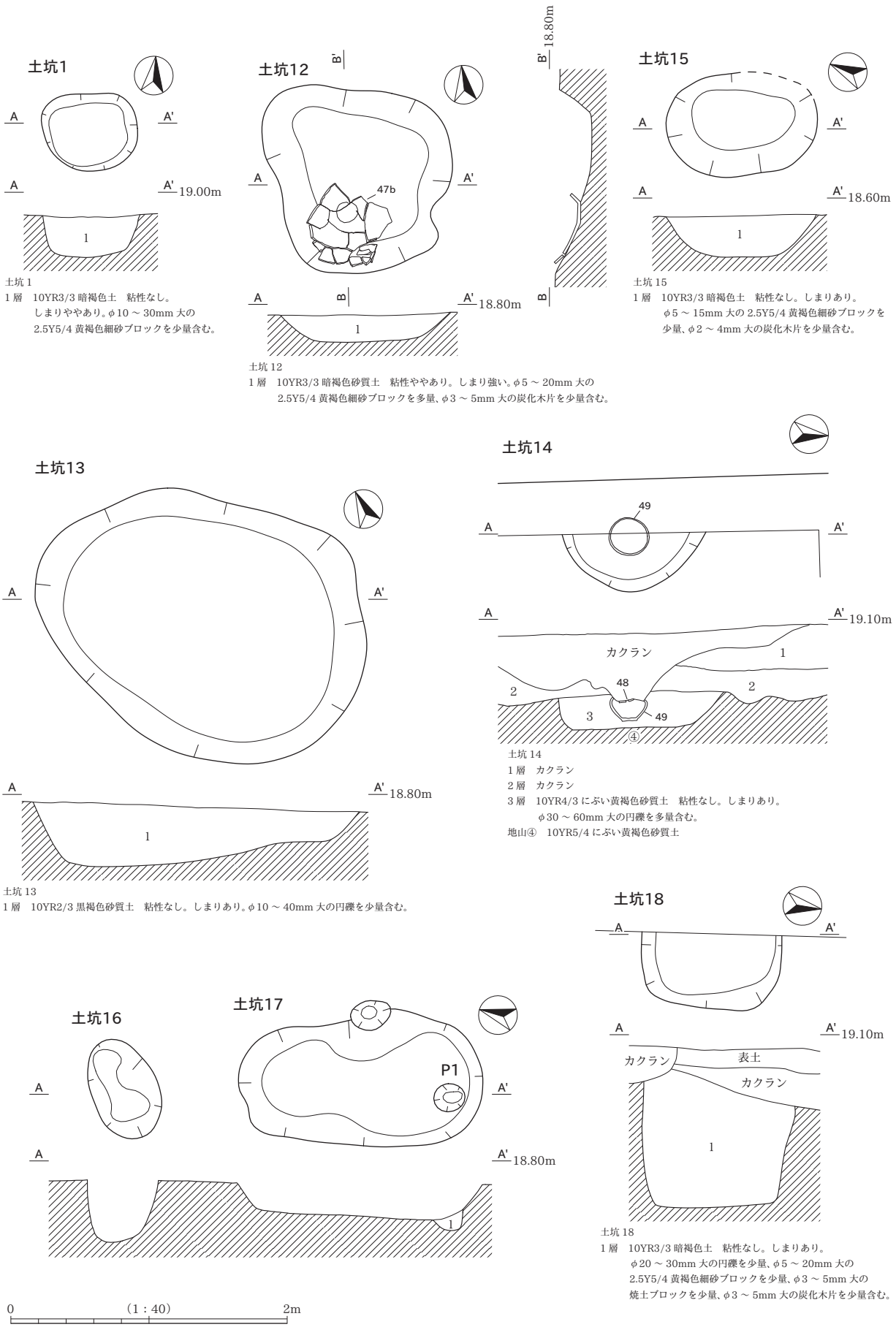
Cg1-2·3 グリッドに位置する。平面は楕円形で，底面は平坦である。壁面の立ち上がりはかなり急である。規模は長軸 140cm, 短軸 134cm, 確認面からの深さは 92cm である。埋土はにぶい黄褐色土，黒褐色土，暗褐色土が主体の 5 層に分けられ，レンズ状に堆積する。1 層は黄褐色細砂，円礫，炭化木片を少量含む。2 層は炭化木片を少量，黄褐色細砂を多量含む。3 層は焼土ブロックと黄褐色細砂を少量，炭化木材を多量に含む。遺物は和釘（第 42 図 169），蝶番（176），元符通寶（191），他に越前焼の擂鉢小片が出土している。

土坑 20（第 24 図）

Ce4-2 グリッドに位置する。規模は長軸 117cm, 短軸 109cm, 確認面からの深さは 36cm である。平面は円形で，底面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土が主体の 2 層に分けられる。1 層は黄褐色細砂ブロックを多量に含み，2 層は円礫と炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 21（第 25 図）

Cf4-1 グリッドに位置する。東側は撹乱を受けており全体の形状は不明であるが，平面は隅丸長方形と推定され



土坑 1
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。
しまりややあり。φ10 ～ 30mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

土坑 12
1 層　10YR3/3 暗褐色砂質土　粘性ややあり。しまり強い。φ5 ～ 20mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。

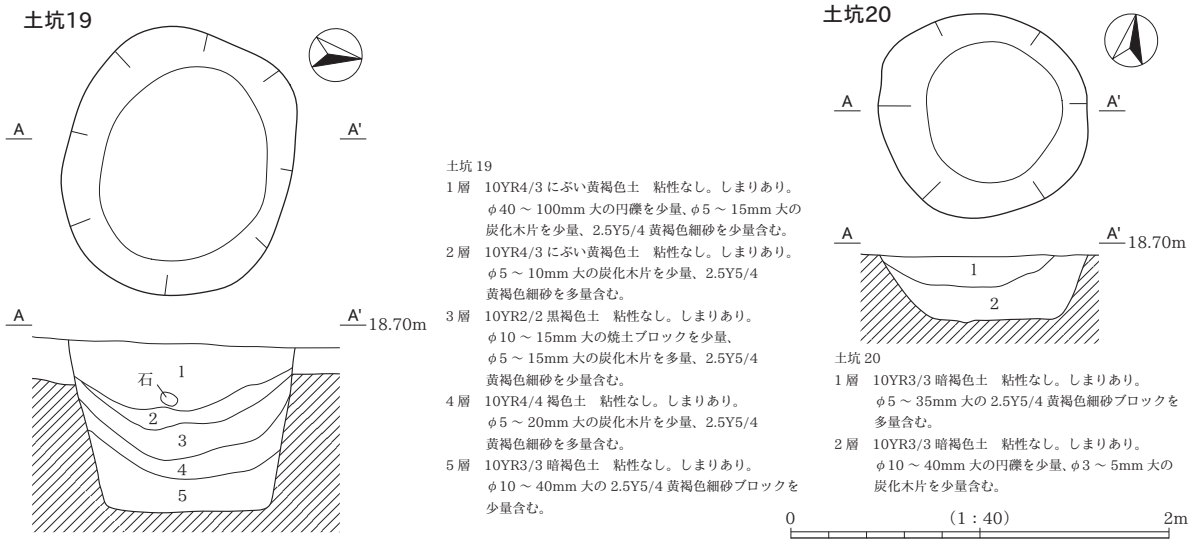
土坑 15
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 15mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを
少量、φ2 ～ 4mm 大の炭化木片を少量含む。

土坑 13
1 層　10YR2/3 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 40mm 大の円礫を少量含む。

土坑 14
1 層　カクラン
2 層　カクラン
3 層　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。
φ30 ～ 60mm 大の円礫を多量含む。
地山④　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土

土坑 18
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ20 ～ 30mm 大の円礫を少量、φ5 ～ 20mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ3 ～ 5mm 大の
焼土ブロックを少量、φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。

第 23 図　調査区⑨ 土坑（1）



第 24 図　調査区⑨ 土坑（2）

る。検出された規模は南北 80cm, 東西の残存は 73cm, 確認面からの深さは 40cm である。底面は平坦で , 壁面の立ち上がりは急である。黒褐色土が主体の 2 層に分けられ , 1 層には黄褐色細砂ブロックと炭化木片を多量に含む。２層は黒色土を少量含む。

遺物は越前焼擂鉢（第 34 図 39a）が出土している。同一個体と考えられる底部片（39b）が土坑 26 から出土している。他に小鎹が出土している。越前焼擂鉢は越前Ⅴ-3 期（16 世紀後葉頃）に比定される。

土坑 22（第 25 図）

Ce4-5 グリッドに位置する。規模は長軸 93cm, 短軸 78cm, 確認面からの深さは 30cm である。平面は不整円形で , 底面は平坦で , 壁面の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の単層で , 円礫 , 炭化木片 , 黄褐色細砂を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 23（第 25 図）

Cc3-4･5 グリッドに位置する。溝 4 に上部を壊され , 残存の規模は長軸 125cm, 短軸 108cm, 確認面から底面までの深さは 64cm である。平面は不整円形で , 底面は平坦で , 壁面はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層で , 遺物は出土していない。

土坑 24（第 25 図）

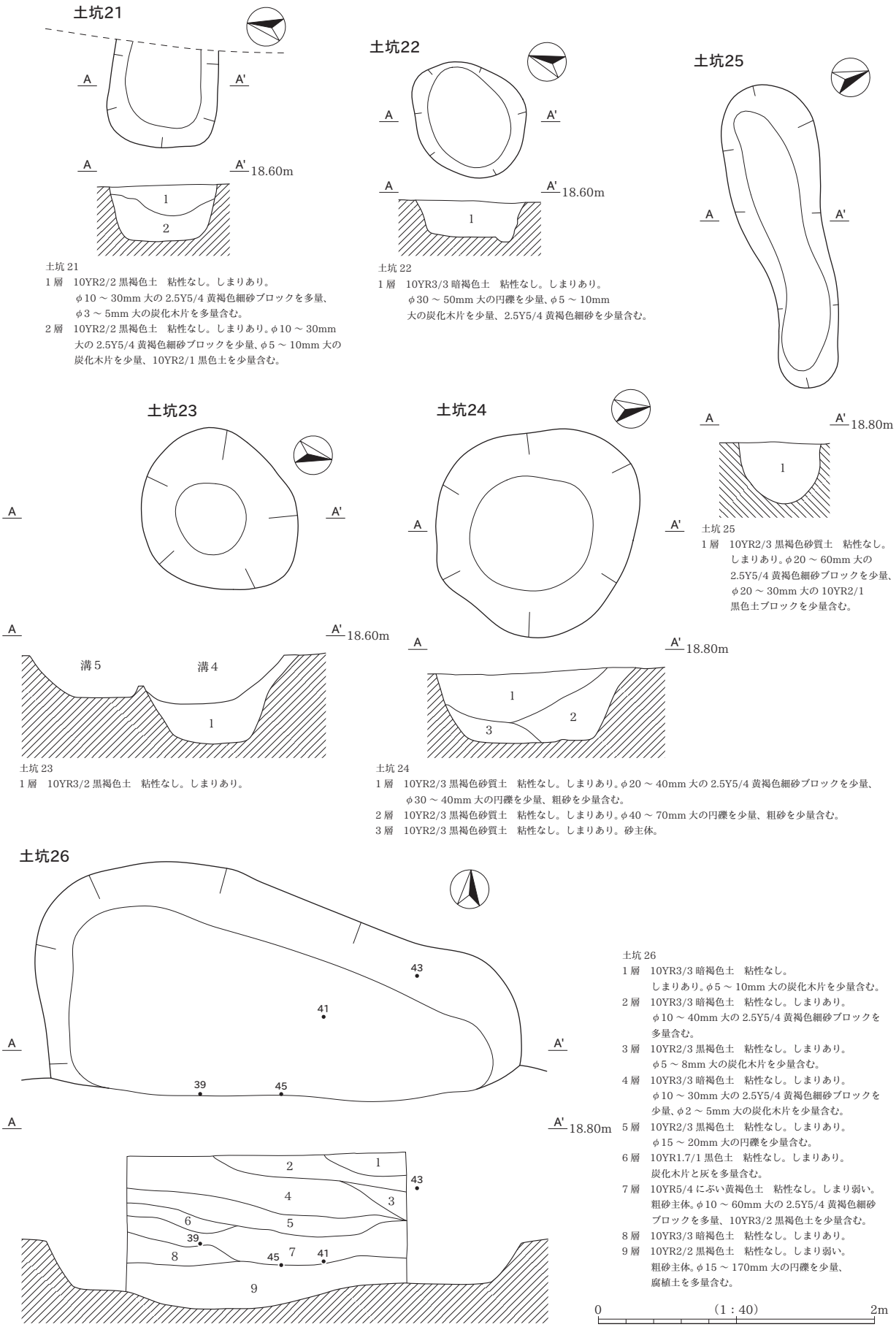
Ci3-1･2 グリッドに位置する。規模は長軸 161cm, 短軸 150cm, 確認面からの深さは 54cm である。平面は不整円形で , 底面は平坦で , 壁面の立ち上がりはやや急である。埋土は黒褐色砂質土が主体で 3 層に分けた。1 層は黄褐色細砂ブロック・円礫・粗砂を少量含む。2 層は円礫・粗砂を少量含む。3 層は砂が主体となる。遺物は出土していない。

土坑 25（第 25 図）

Ci2-2･3, 3-3 グリッドに位置する。規模は長軸 93cm, 短軸 78cm, 確認面からの深さは 45cm である。平面は長楕円形で , 底面は丸く , 壁面の立ち上がりは垂直に近い。埋土は黒褐色砂質土の単層で , 黄褐色細砂ブロックと黒色土ブロックを少量含む。遺物は出土していない。

土坑 26（第 25・29 図）

Cg3-3, 4-3 グリッドに位置する。南側を溝 3 に壊され全体の形状は不明であるが , 平面は楕円形または隅丸長方形と推定される。規模は長軸 3.45m, 南北の残存長は 1.3m , 確認面からの深さは 1.12m である。底面は中央付近がやや凹むが概ね平坦で , 壁面はやや緩やかである。埋土は暗褐色土 , 黒褐色土が主体の 9 層に分けられ , 1･3 層



土坑 21
1 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、
φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を多量含む。
2 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 30mm
大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ5 ～ 10mm 大の
炭化木片を少量、10YR2/1 黒色土を少量含む。

土坑 22
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ30 ～ 50mm 大の円礫を少量、φ5 ～ 10mm
大の炭化木片を少量、2.5Y5/4 黄褐色細砂を少量含む。

土坑 25
1 層　10YR2/3 黒褐色砂質土　粘性なし。
しまりあり。φ20 ～ 60mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、
φ20 ～ 30mm 大の 10YR2/1
黒色土ブロックを少量含む。

土坑 23
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。

土坑 24
1 層　10YR2/3 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ20 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、
φ30 ～ 40mm 大の円礫を少量、粗砂を少量含む。
2 層　10YR2/3 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ40 ～ 70mm 大の円礫を少量、粗砂を少量含む。
3 層　10YR2/3 黒褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。砂主体。

土坑 26
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。
しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを
多量含む。
3 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 8mm 大の炭化木片を少量含む。
4 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを
少量、φ2 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。
5 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ15 ～ 20mm 大の円礫を少量含む。
6 層　10YR1.7/1 黒色土　粘性なし。しまりあり。
炭化木片と灰を多量含む。
7 層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり弱い。
粗砂主体。φ10 ～ 60mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂
ブロックを多量、10YR3/2 黒褐色土を少量含む。
8 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
9 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性なし。しまり弱い。
粗砂主体。φ15 ～ 170mm 大の円礫を少量、
腐植土を多量含む。

第 25 図　調査区⑨ 土坑（3）

は炭化木片を少量，2 層は黄褐色細砂ブロックを多量，4 層は黄褐色細砂ブロックと炭化木片を少量，5 層は円礫を少量，6 層は炭化木片と灰が多量に含まれる。7 層は黄褐色細砂ブロックを多量に含むにぶい黄褐色土が目立つ。

遺物は青花碗（第 34 図 40･41），瀬戸美濃焼丸皿（42），珠洲焼甕（43･44）・片口鉢（45），越前焼擂鉢（39b・46），刀子（第 42 図 160），他に土師質土器皿，板状木製品，棒状木製品，赤漆金箔押し木製品と思われる破片が出土しているが図示できる大きさではない。越前焼擂鉢（39b）は，同一個体と考えられる口縁部片（39a）が土坑 21 から出土しており，越前Ⅴ-3 期（16 世紀後葉頃）に比定される。最も新しい遺物は，16 世紀末～ 17 世紀初頭に比定される青花碗（40）である。

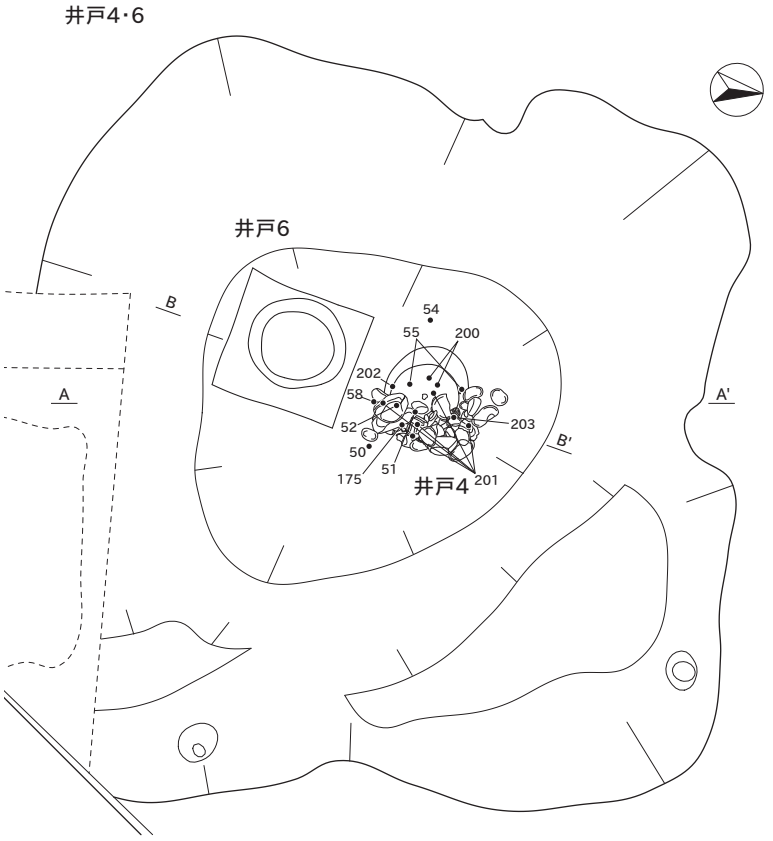
井戸 4（第 20・26 図）

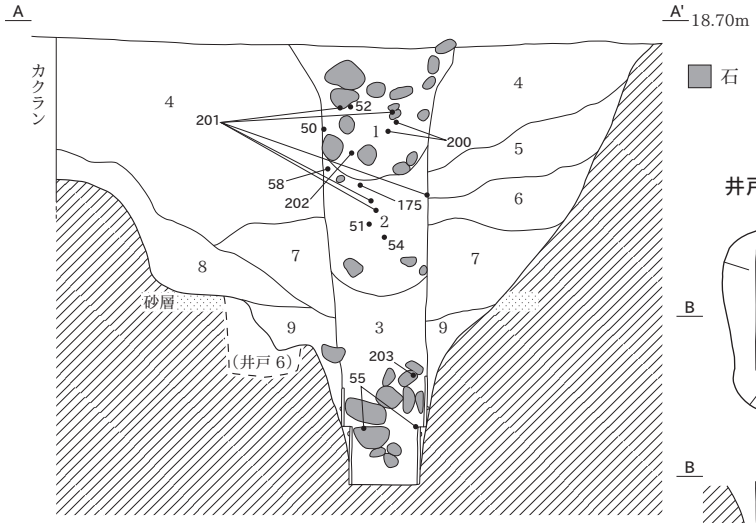
Cf・Cg・Df・Dg グリッドに位置し，北西隅で井戸 5 を壊す。掘方の平面検出プランは，やや不整であるが概ね隅丸方形で，検出時の本体が円形であることから，第 26 図 A-A’ に断面観察位置を設定して上部の調査を開始した。北東から南東部にはテラス状の段を有している。断面は漏斗状で，掘方の規模は南北方向 5.6m，東西方向 5.1 ～ 5.9m である。深さ 3.4m を測り，底面標高は 15.04m である。上部の記録後，重機による掘削を行い，下部の検出時には，本遺構と重複するプラン（井戸 6）を検出し，新旧関係や断面観察などを行うため，改めて第 26 図 B-B’ を設定した。井戸 4 は井戸 6 よりも新しい。井戸 4 の本体は径 66 ～ 80cm の円形で，水溜は断面が階段状である。水溜上部の壁面に径 66cm の桶の痕跡が確認され（図版 13），水溜下部に径 52cm の桶が埋置されていた。埋土は，9 層に分層される。1 ～ 3 層は本体の埋土で，粘性があり，締まりが弱い。井戸廃絶後に投棄されたと思われる多量の円礫や被熱した石臼が含まれる。なお，本遺構の石臼はすべて本体の埋土中から出土しており，第 43 図 200 は溝 2 から出土した破片と接合する。2 層には有機質のものも投棄されたのだろうか，埋土内には空洞となる部分が確認された。4 ～ 9 層は掘方埋土で，細砂や粗砂が含まれ，粘性がなく，締まりが強い。8 層には，黄褐色細砂と粗砂が多量に含まれ，重複する井戸 6 の埋土 4 層と近似する。本遺構は埋土 8 層までを調査掘削したのち重機で周辺を広く掘った際に井戸 6 を検出したため，明確でないが，埋土の堆積状況などから井戸 4 の埋土 8 層の一部は，井戸 6 の埋土 4 層と同じ可能性がある。1 層と最下層の 3 層下部から，こぶし大～人頭大の礫が多量に出土している。掘方の埋土からは，礫がほとんど出土していない。

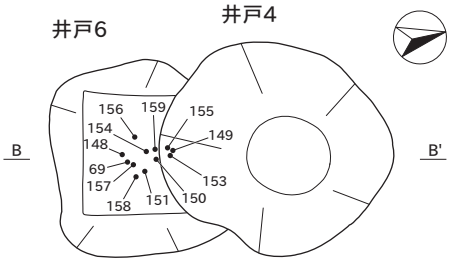
遺物は白磁端反皿（第 36 図 50），青花碗（51），瀬戸美濃焼丸皿（52），珠洲焼壺（53）・片口鉢（54），越前焼壺（55）・甕（56・57）・擂鉢（58･59），土師質土器皿（60），土師器小甕（61），鉄鍋湯口（第 42 図 175），石臼（第 44 図 200 ～ 203），砥石（第 46 図 213），他に白磁皿，曲物側板，井戸側材，板材，和釘が出土している。木製品は腐食が著しく，加工痕の確認はできない。越前焼甕（57）は 1 層と井戸 5 の埋土出土のものと接合し，同一個体とおもわれる破片が溝 3・土坑 13・19 から出土している。白磁端反皿（50）は 15 世紀後半～ 16 世紀，青花碗（51）・越前焼（58・59）は 16 世紀後半にそれぞれ比定される。

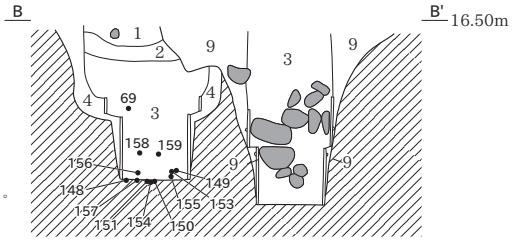
井戸 5（第 20・27 図）

Cf・Cg グリッドに位置する。南東隅で井戸 4 と重複し，これに壊される。本遺構における下部の調査では，崩れやすい地山の砂層を重機で除去したため，2 層と 3・4 層の層界は不明である。掘方の平面はやや不整な円形で，規模は南北方向 3.96m，東西方向 4.54m，深さ 3.04m を測り，底面標高 15.45m である。井戸本体は南北方向 86cm，東西方向 96cm のやや歪んだ方形で，水溜は階段状である。水溜上部に径 72cm の曲物，下部には径 40cm の曲物が埋置されていた。埋土は 11 層に分層した。1 ～ 7 層は本体の埋土で，粘性がある。1・2 層は暗褐色土で，2 層の層厚は約 1.5m を測り，短期的に埋め戻されたと考えられる。2 層と 3 層の層界は不明であるが，2 層とは対照的に 3 ～ 6 層は薄く，概ねレンズ状に堆積しており，少量ずつ堆積した様相を呈している。7 層は，有機質のものが廃棄された痕跡と思われる空洞が確認され，全体的にボソボソとした土質である。8 ～ 11 層は掘方の埋土で，細砂と粗砂が多く含まれ，粘性がなく，締まりがある。









井戸 4

1 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ80 ～ 300mm 大の礫（石臼片含む）を多量、焼土を少量、φ10 ～ 30mm 大の炭化木片を少量含む。

2 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ30 ～ 200mm 大の礫（石臼片含む）を少量、φ10 ～ 70mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ10 ～ 150mm 大の炭化木片を少量含む。有機質の遺物が投棄されたものか一部に径 50cm ほどの空洞あり。

3 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまりあり。粗砂層が薄く互層をなす。礫を多量含む。

4 層　10YR3/4 暗褐色砂質土　粘性なし。しまり強い。φ20 ～ 50mm 大の円礫を少量、φ10 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。

5 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ20 ～ 50mm 大の円礫を少量、φ30 ～ 70mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。

6 層　10YR3/4 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ20 ～ 40mm 大の円礫を少量、φ10 ～ 130mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、粗砂を少量含む。

7 層　2.5Y5/4 黄褐色細砂　粘性なし。しまりあり。黄褐色細砂はブロック状を呈し、粗砂が多量に混入する。

8 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。2.5Y5/4 黄褐色細砂と粗砂を多量含む。

9 層　10YR4/4 褐色土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 150mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ40 ～ 110mm 大の円礫を少量含む。

井戸 6

1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまりあり。

2 層　10YR4/4 褐色土　粘性ややあり。しまりあり。

3 層　10YR3/1 黒褐色土　粘性ややあり。しまりあり。粗砂を少量含む。

4 層　10YR5/6 黄褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。

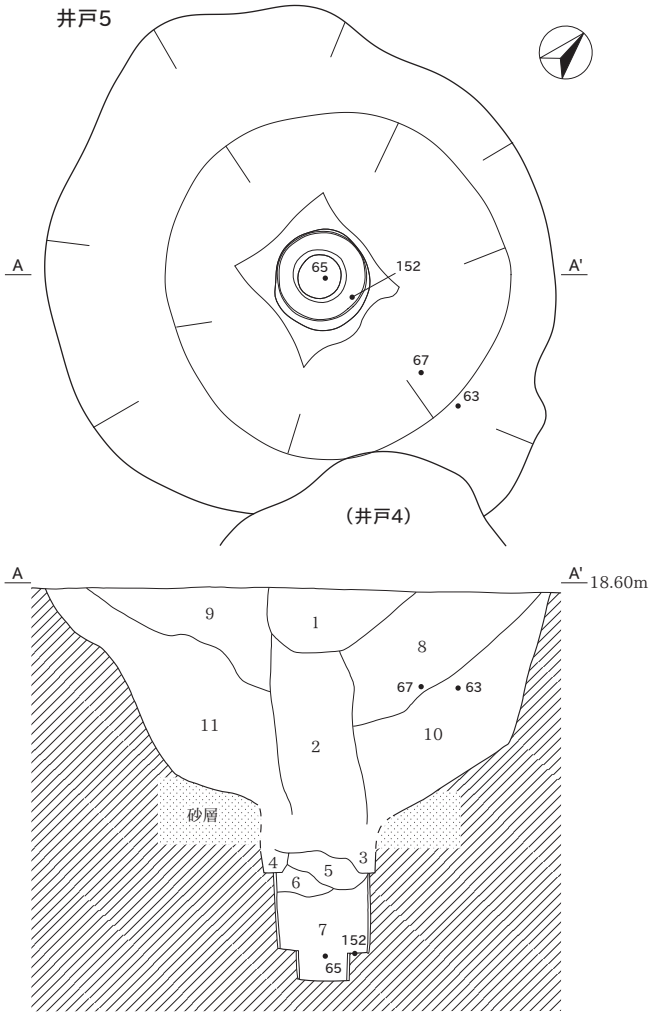
0　（1：60）　3m

第 26 図　調査区⑨ 井戸 4・6

遺物は珠洲焼瓶子（第 36 図 62）・片口鉢（63･64），土師質土器小皿（65）・皿（66 ～ 68），曲物底板（第 41 図 152），元豊通寶（第 42 図 188），他に青磁碗，白磁皿，珠洲焼壺，越前焼甕，曲物側板，板状木製品，杭が出土している。越前焼甕（57）は埋土と井戸 4 の埋土出土のものと接合し，同一個体と考えられる破片が溝 3・土坑 13・19 から出土している。井戸本体埋土の最下層である 7 層出土の土師質土器小皿（65）は 13 ～ 14 世紀，10 層の掘方出土の片口鉢（63）は珠洲Ⅱ期（13 世紀前半）にそれぞれ比定される。井戸廃絶時期を示す遺物は出土していない。

井戸 6（第 20・26 図）

Cg グリッドに位置する。井戸 4 下部の平面プラン確認時に，標高約 16.5m で井戸 4 と重複する遺構を検出した。検出した深さ，平面がやや不整な方形の掘方で，さらにその内側は井戸本体と思われる埋土であったことから井戸 6 とした。検出時，本遺構が井戸 4 に壊されていることが明瞭であった。断面を観察する目的で B-B' を設定したところ，少なくても井戸 6 の埋土 1 層が堆積したのちに井戸 4 が構築されていることが確認された。掘方の平面および断面の形状は，井戸 4 に壊され不明である。遺存する掘方の 1 辺は 1.5m の隅丸方形で，井戸 4 の確認面からの深さは 3.2m を測り，底面標高は 15.24m である。井戸本体の平面は，南北 100cm, 東西 94cm の方形で，水溜は階段状である。水溜上部に径 74cm の曲物，下部には径 54cm の曲物が埋置されていた（図版 13）。埋土は 4 層に分層される。1 ～ 3 層が本体の埋土で，黒褐色土および暗褐色土が堆積しており，粘性がある。4 層は掘方の埋土で，粗砂が主体となり，粘性がなく，締まる。



井戸 5
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ5 ～ 25mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ3 ～ 50mm 大の炭化木片を多量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、粗砂を少量含む。
3 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。
4 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。
5 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。粗砂層が薄く互層をなす。
6 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性ややあり。しまりややあり。
7 層　10YR4/2 灰黄褐色土　粘性ややあり。しまり弱い。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。一部に空洞があり全体にボソボソする。
8 層　10YR3/3 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
9 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。
10 層　10YR2/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 120mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。
11 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 150mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ10 ～ 40mm 大の 10YR2/2 黒褐色土ブロックを少量含む。

0　（1：60）　3m

第 27 図　調査区⑨ 井戸 5

遺物の出土は全て3層からで，珠洲焼片口鉢（第36図69），漆器小皿（第41図148），箸（149～151），曲物底板（153～155），折敷底板（156），板状木製品（157･158），棒状木製品（159），他に曲物側板，杭が出土している。漆器小皿（148）は井戸底面に伏せられた状態で出土した。最下層の3層出土の珠洲焼片口鉢（69）は珠洲Ⅱ期（13世紀前半）で，漆器小皿（148）は13～14世紀に比定される。

溝2（第20・29図）

調査区⑨ Bf5-2, 5-3～調査区⑥ Ef2-3, 2-4グリッドに位置する。東西方向に延び，東側は調査区⑥の外に，西側は調査区⑨の外に延びる。底面の標高は西側が東側よりやや低くなる。現状の規模は，東西長が調査区⑥と⑨の間の未調査部分を含めて23.1m, 幅1.7～2.86m, 確認面からの深さは0.84～1.0mである。底面はゆるく丸味をもち中央付近がやや窪む。壁面の立ち上がりは直線的で緩やかに開く。溝底は東から西へ傾斜する。埋土は流れ込み状の堆積を示し，暗褐色土と黒褐色土が主体の4層に分けられる。1層は黄褐色細砂を多量に，3・4層には長さ10～20mmの炭化木片を少量含む。石臼の上臼（第44図200）が出土しており，井戸4から出土した破片と接合する。

遺物は青花碗（第37図70･71）・皿（72），白磁端反皿（73），瀬戸美濃焼丸皿（74），珠洲焼壺（75･76）・甕（77）・片口鉢（78・79），越前焼擂鉢（80），笹神窯鉢（81），土師質土器皿（82）・小皿（83），鉄滓（第43図195），他に瓦器，古代の須恵器甕と土師器鍋が出土している。70～74の年代から，16世紀中頃以降の埋没となろう。

溝3（第20・29図）

調査区⑨ Bg5-3, 5-4～調査区⑤ Dg4-3グリッドに位置し，東西両端は調査区の外に延びる。北側で土坑26を壊している。溝2と並走し，この2本の溝の間に井戸4～6が収まる。調査区⑤は撹乱が著しく，西端では溝の北壁が70cm程度確認できるだけである。現存規模は，東西長が未調査区域を含め17.8m, 幅1.68～2.36m, 確認面からの深さは0.94mである。断面はV字状で直線的に立ち上がる。埋土は褐色や暗褐色砂質土が主体の5層に分けられ，ほぼ水平に堆積する。2・3層には5～10mmの炭化木片を少量含む。遺物は瓦器の奈良火鉢（第37図84），板状鉄製品（第42図181・182），他に青花皿と越前焼擂鉢の小片，和釘が出土している。

溝4（第19・29図）

Bc5-5～Dc2-4グリッドに位置する。東西方向に延び，両端は調査区外へ続く。南側で溝5と重複し，これよりも新しい。中央部付近の溝底で土坑23を検出した（第25図）。規模は，東西13.21m, 幅1.08～1.62m, 確認面からの深さは0.54mである。断面は概ね半円形である。底面の標高は東側が西側よりやや低くなる。埋土はレンズ状に堆積し，暗褐色土が主体の3層に分けられる。

遺物は，白磁端反皿（第37図85），青磁皿（86），青花碗（87），瀬戸美濃焼丸皿（88），珠洲焼壺（89）・甕（90），越前焼擂鉢（91），石臼（第44図204･第45図205）が出土している。85・87・88から，遺構の廃棄時期は16世紀後半以降である。また，溝4あるいは溝5から鉄製鏨（第42図180）が出土している。

溝5（第19・29図）

Bc5-5～Dc2-5グリッドに位置する。東西方向に延び，両端は調査区外へ続く。北側で溝4と重複し，これに半分以上が壊され，北側の立ち上がりは残っていない。残存規模は，東西13.16m, 確認面からの深さは0.46mである。断面は半円形で，上幅は1.5mほどと推定できる。底面は，溝4と対照的に西側が東側よりやや低い。埋土はレンズ状に堆積し，暗褐色土が主体の3層に分けられる。1層と3層には炭化木片が少量含まれる。遺物は青花皿（第37図92），瀬戸美濃焼丸皿（93）が出土している。遺構の廃棄時期は，93から16世紀中頃以降である。

溝6（第20・29図）

Bh3-5～Ci5-3グリッドに位置する。調査区南端の斜面に沿って西北西～東南東に延びる。両端ともに撹乱を受け，検出した規模は，長さ15.32m, 幅0.98～1.8m, 確認面からの深さは0.38mである。埋土は暗褐色砂質土の単

層で，炭化木片が多量に含まれる。遺物は出土していない。

溝7（第19・29図）

Be5-4～Cf3-1グリッドに位置する。土坑12に壊され，ピット13･14を溝底で検出した。北西～南東方向に延び，北西側は調査区外へ続く。南東端は緩やかに立ち上がる。規模は，長さ7.41m，幅0.43～1.44m，確認面からの深さは0.23mで，底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は引金具（第42図179）が出土している。

溝8（第28・29図）

Cd2-4～4-4グリッドに位置する。東西方向に延び，溝10と平・断面の規模や埋土の特徴が近似していることから同一遺構の可能性がある。検出した規模は，長さ4.30m，幅0.28～0.38m，確認面からの深さは0.15mで，底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単層で，遺物は出土していない。

溝9（第28・29図）

Cd5-4～Dd2-4グリッドに位置する。溝10から南へ約1m離れて東西方向に並走し，東側は調査区外へ延び，西側は撹乱を受けているが，直ぐに末端となろう。検出した規模は，長さ2.70m，幅0.23～0.35m，確認面からの深さは0.14mで，底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単層で，遺物は出土していない。

溝10（第28・29図）

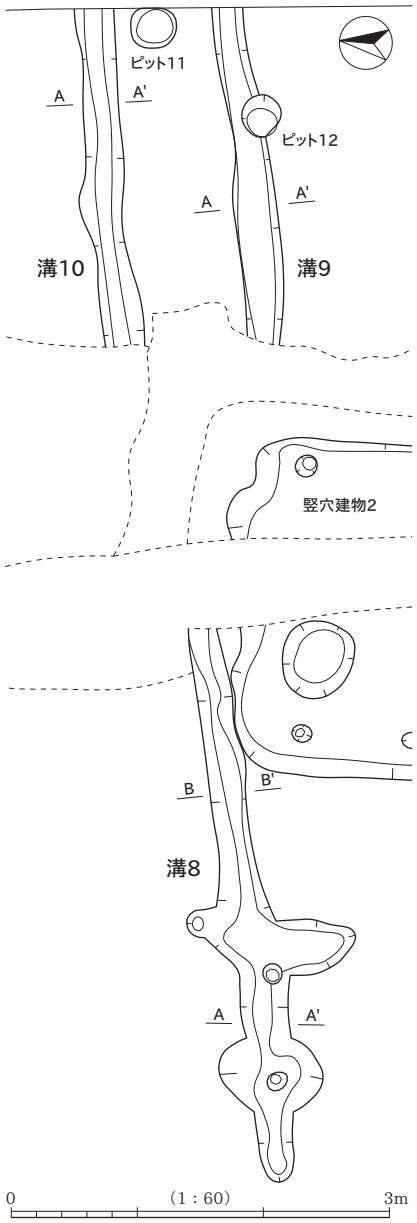
Cd5-4～Dd2-4グリッドに位置する。溝9から北側へ約1m離れて並走する。東側は調査区外へ延び，西側は撹乱を受けて明確ではないが，溝8につながる同一遺構の可能性がある。検出した規模は，長さ2.71m，幅0.26～0.35m，確認面からの深さは0.2mで底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単層で，遺物は出土していない。溝9とほぼ同じ規模の小溝で，埋土が同じことから同時期に埋没した可能性が高い。

ピット列1（第20・30図）

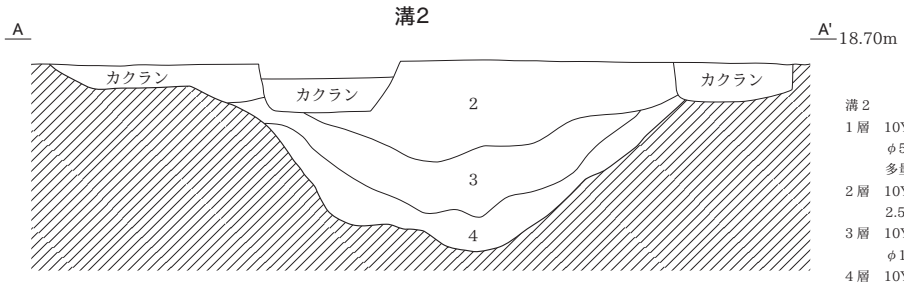
Cg2-5～Ch2-3グリッドに位置する。ピット4基からなる長さ5.37mのピット列で，主軸はほぼ南北方向で，東に3°偏る。柱間寸法はP1～P2が1.72m，P2～P3が1.68m，P3～P4が1.97mである。ピットの規模は長軸29～37cm，短軸25～33cm，確認面からの深さは9～26cm，底面の標高は18.38～18.62mである。平面はすべて円形で，底面はP1～3は丸く，P4は平坦である。すべての埋土がにぶい黄褐色土の単層で，黄褐色細砂ブロックと炭化木片を少量含む。遺物は出土していない。

ピット列2（第20・30図）

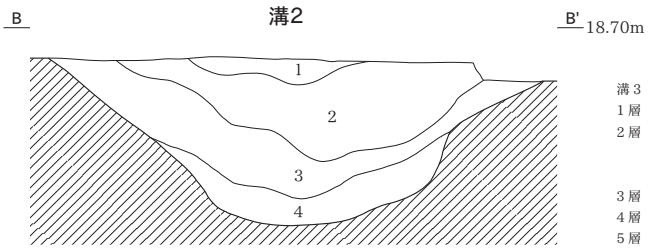
Bf5-1～Df1-1グリッドに位置する。ピット6基からなる。長さ10.57mの杭列で，主軸は東西方向で，溝2に並行する。柱間寸法はP1～P2が1.55m，P2～P3が0.35m，P3～P4が3.02m，P4～P5が2.38m，P5～P6が3.30mである。ピットの規模は長軸27～46cm，短軸22～39cm，確認面からの深さは7～46cm，底面の標高は18.12～18.46mである。平面は円形ないし楕円形で，底面はP1・3が丸く，P2・4～6は平坦である。P1～5の埋土は，黒褐色土の単層で，炭化木片を少量含む。P6は暗褐色土の単層で，黄褐色細砂ブ



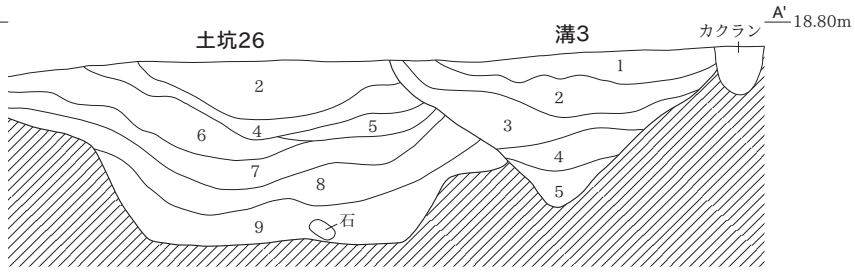
第28図　調査区⑨ 溝8～10平面図

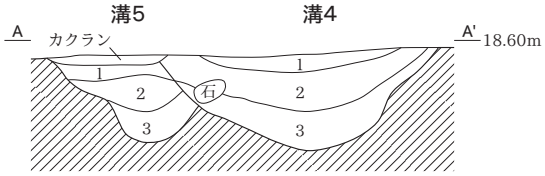


溝 2
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 40mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを
多量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
2.5Y5/4 黄褐色細砂を少量含む。
3 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 15mm 大の炭化木片を少量含む。
4 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ10 ～ 50mm 大の円礫を少量、φ10 ～ 20mm 大の
炭化木片を少量、2.5Y5/4 黄褐色細砂を少量含む。

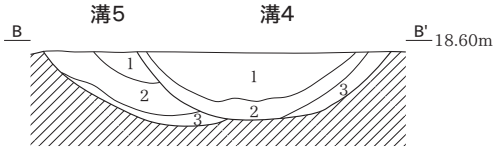


溝 3
1 層　10YR3/4 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。
2 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂主体。φ10 ～ 40mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ10 ～ 60mm 大の 10YR3/2 黒褐色土ブロックを
少量、φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
3 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性ややあり。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の炭化木片を少量含む。
4 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量含む。
5 層　10YR4/4 褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。粗砂を多量含む。

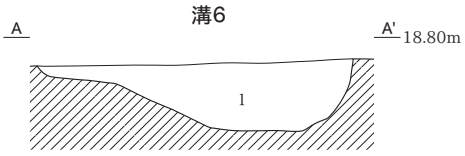


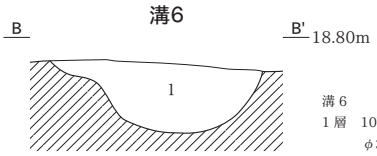


溝 4
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。2.5Y5/4 黄褐色細砂を少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。2.5Y5/4 黄褐色細砂を多量含む。
3 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4
黄褐色細砂ブロックを多量含む。

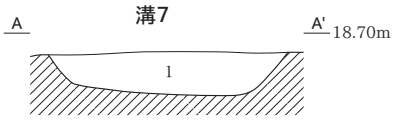


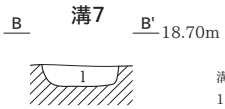
溝 5
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。φ15 ～ 40mm 大の円礫を少量、
φ3 ～ 8mm 大の炭化木片を少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
3 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。



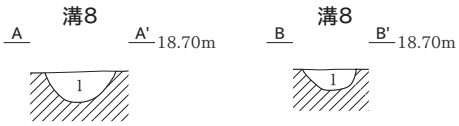


溝 6
1 層　10YR3/3 暗褐色砂質土　粘性なし。しまりあり。
φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を多量含む。

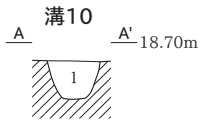




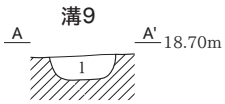
溝 7
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。



溝 8
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。



溝 10
1 層　10YR3/3 暗褐色土粘性なし。
しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の
2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量含む。



溝 9
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりあり。
φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを
多量含む。

0　（1：40）　2m

第 29 図　調査区⑨ 溝断面図

ロックを多量に含む。遺物は出土していない。これらのピット列は柵の機能を持ったものであろう。

ピット1～3・9～17（第19・20・31図）

溝4の調査区北側で検出したP10・17以外は，溝2と溝4の間で検出した。また，土坑1とピット1～3は調査区⑥であり，いずれも黄褐色細砂ブロックを含む暗褐色土で共通することから，これら4基の遺構は同時期に埋まった可能性がある。

ピット1　De5-5グリッドに位置する。平面は円形で，確認面からの深さは28cm, 底面の標高は18.54mである。2層には円礫が多量に含まれる。遺物は15世紀後半に比定される越前焼甕（第37図94）が出土している。

ピット2　De5-5グリッドに位置する。平面は楕円形で，確認面からの深さは16cm, 底面の標高は18.68mである。

ピット3　De4-5グリッドに位置する。平面は楕円形で，確認面からの深さは9cmと浅く，底面の標高は18.68mである。

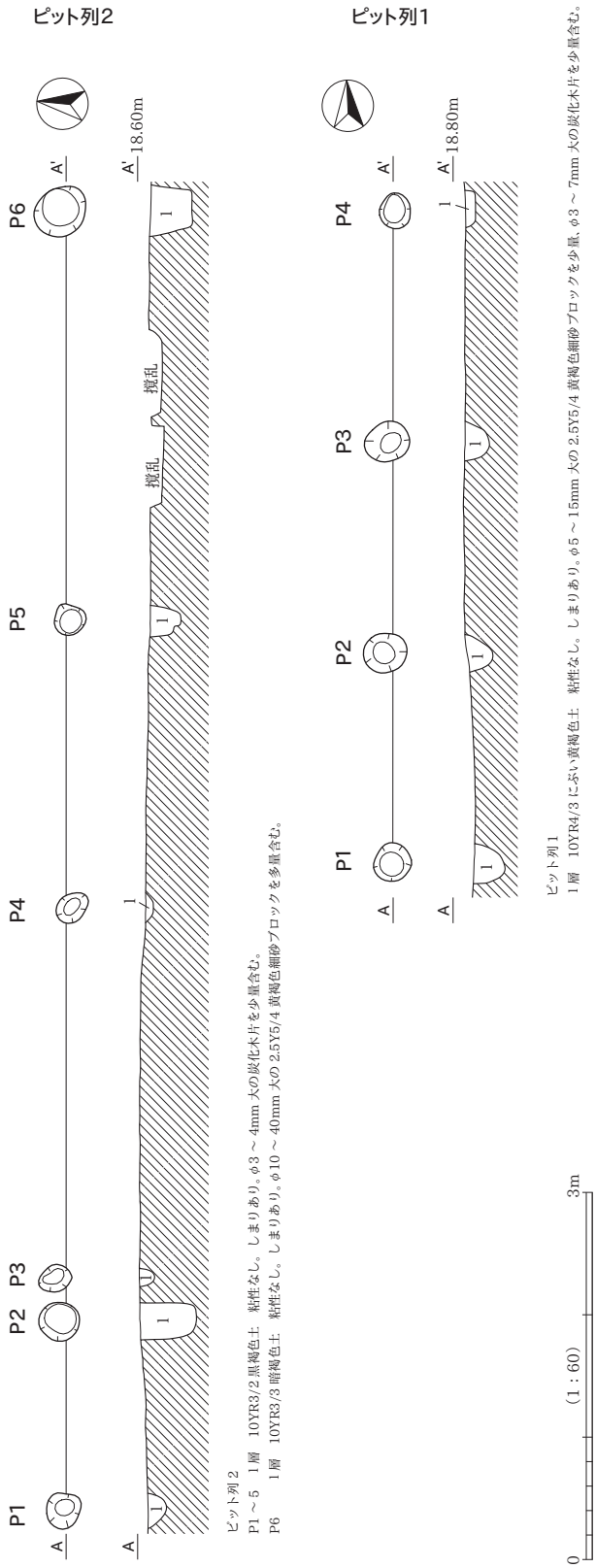
ピット9　Ce4-5グリッドに位置する。平面は円形で，断面はV字状になる。確認面からの深さは26cm, 底面の標高は18.28mになる。遺物は9世紀末から10世紀初頭の土師器椀（第37図95･96）が出土している。

ピット10　Cc2-3グリッドに位置する。確認面からの深さは39cm, 底面の標高は18.14mになる。平面は楕円形で，南西側に段を持つ。埋土は炭化木片と焼土粒子を少量含む。

ピット11　Dd2-4グリッドに位置する。平面は円形で，底面は平坦である。壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。確認面からの深さは39cm, 底面の標高は18.23mである。

ピット12　Dd1-4グリッドに位置する。溝9を切っている。平面は円形で，底面は丸くなる。確認面からの深さは39cm, 底面の標高は18.22mである。

ピット13　Ce2-5グリッドに位置する。平面は円形で，北側へ掘り込まれている。土坑12・溝7と重複するが，これらよりも古く，溝底からの深さは56cm, 底面の標高は17.98mである。

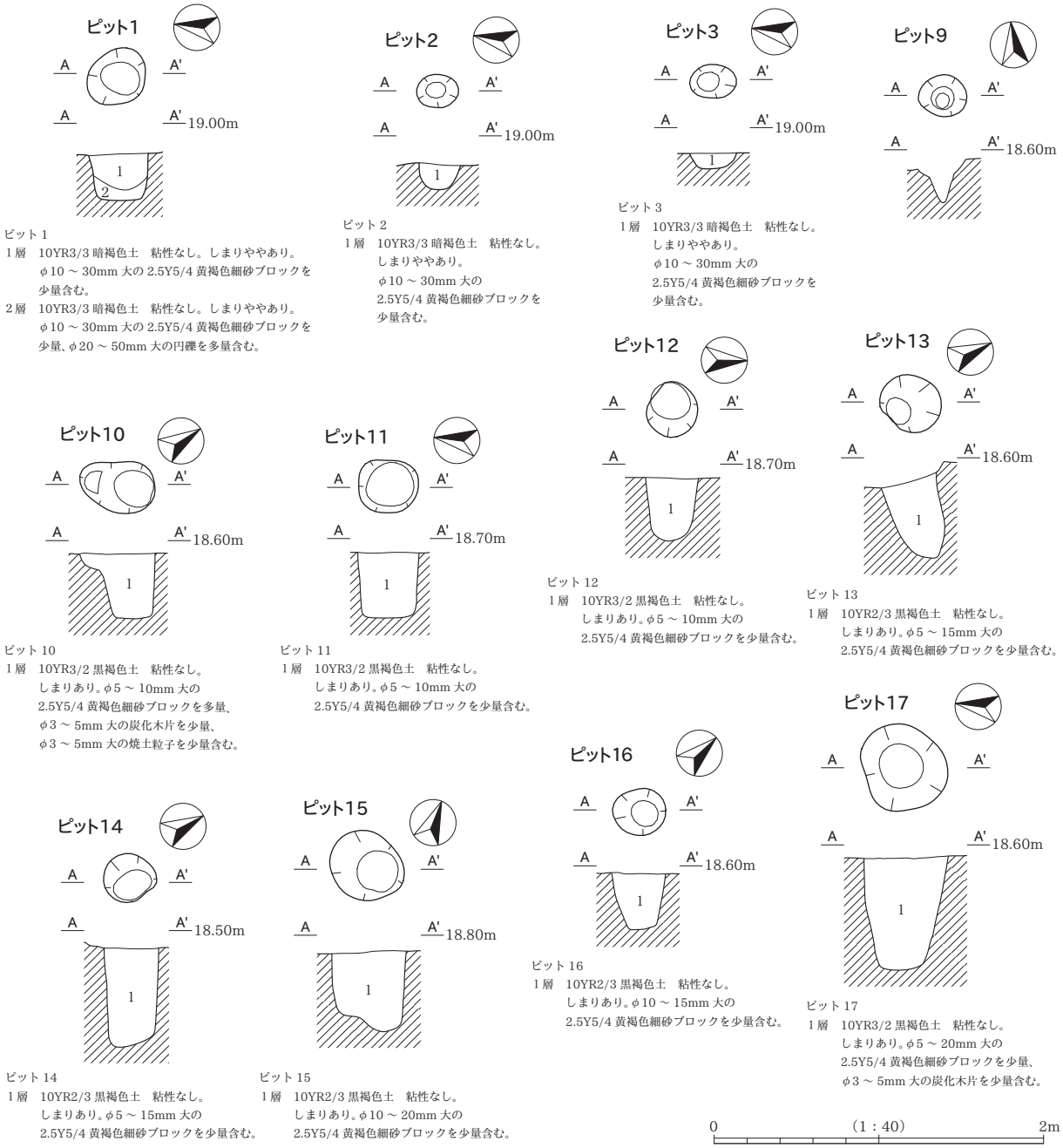


第30図　調査区⑨ ピット列

ピット 14　Ce1-4･5 グリッドに位置する。平面は円形で , 底面は西側へ斜めに下がる。溝 7 の底面での検出で , 溝底からの深さは 60cm, 底面の標高は 17.80m である。

ピット 15　Ce3-1 グリッドに位置する。平面は歪んだ円形で , 底面は平坦で , 西側に段を有する。確認面からの深さは 46cm, 底面の標高は 18.24m である。

ピット 16　Bf5-1 グリッドに位置する。平面は円形で , 確認面からの深さは 35cm, 底面の標高は 18.21m である。



ピット 1
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。
2 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ20 ～ 50mm 大の円礫を多量含む。

ピット 2
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 3
1 層　10YR3/3 暗褐色土　粘性なし。しまりややあり。
φ10 ～ 30mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 10
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを多量、φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量、φ3 ～ 5mm 大の焼土粒子を少量含む。

ピット 11
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 12
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 10mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 13
1 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 15mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 14
1 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 15mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 15
1 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 16
1 層　10YR2/3 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ10 ～ 15mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量含む。

ピット 17
1 層　10YR3/2 黒褐色土　粘性なし。しまりあり。φ5 ～ 20mm 大の 2.5Y5/4 黄褐色細砂ブロックを少量、φ3 ～ 5mm 大の炭化木片を少量含む。

第 31 図　調査区⑥・⑨ ピット

表 2　遺構観察表（竪穴建物）

（　）残存値

遺構名	調査区	グリッド	規模（cm）				主軸方位	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ	面積					平面	断面	
竪穴建物 1	⑥	Df4-2 ～ Ef1-2	（東西）420	（南北）166	50			瀬戸美濃焼丸皿（36），越前焼甕（37）	16 世紀前半	竪穴建物 1 →溝 2	21	21	9
P	主なグリッド		規模（cm）			底面標高	出土遺物		遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）			
			長軸	短軸	深さ								
1	Ef1-2		32	27	27	18.18	なし						
2	Df5-2		28	26	20	18.33	なし						
3	Df4-2		30	25	13	18.73	なし						
4	Df4-2		16	13	14	18.48	なし						

遺構名	調査区	主なグリッド	規模（cm）				主軸方位	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ	面積					平面	断面	
竪穴建物 2	⑨	Cd4-4 ～ Ce5-1	307	265	35	6.8㎡	N－1°－E	なし		溝 8 ↔竪穴建物 2	22	22	9
P	主なグリッド		規模（cm）			底面標高	出土遺物		遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）			
			長軸	短軸	深さ								
1	Cd4-5		29	27	36	18.04	なし						
2	Cd4-5		19	13	27	18.06	なし						
3	Cd4-4		16	14	27	18.07	なし						
4	Cd5-4		18	16	32	18.02	なし						
5	Cd5-5		16	16	17	18.09	なし						
6	Cd5-5		35	29	40	17.85	なし						

表 3　遺構観察表（土坑）

（　）残存値

遺構名	調査区	グリッド	規模（cm）			主軸方位	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
土坑 1	⑥	De4-5	68	57	30	N－80°－W	なし			23	23	9
土坑 2	③	Fh5-2	124	85	47	N－67°－E	珠洲焼片口鉢	13 世紀頃		14	14	
土坑 3	③	Gh3-4・4-4	157	148	72	N－11°－W	越前焼擂鉢，肥前焼磁器瓶	17 世紀後半～ 18 世紀頃				4
土坑 4	③	Gh4-1	87	71	68	N－13°－E	なし					
土坑 5	③	Fg5-5 Gg1-5	（東西）114	（南北）72	52		なし					
土坑 6	③	Fh2-1・2	132	98	47	N－21°－W	なし		土坑 6 → P18			
土坑 7	③	Fh5-1	（南北）80	（東西）54	39		元豊通寶 (189), 皇宋通寶（190）					
土坑 8	③	Gh3-3・4	116	75	70	N－21°－E	なし					4
土坑 9	③	Gh3-2・3	108	90	56	N－22°－E	なし					
土坑 10	③	Gh1-3	82	45	78	N－70°－W	なし		土坑 10 ↔井戸 1			
土坑 11	③	Fh1-5・2-5	118	88	40	N－89°－W	砥石（217）					5
土坑 12	⑨	Ce2-5 Cf2-1	157	142	25	N－40°－W	珠洲焼大甕 (48a・b), 和釘（168）	13 世紀後半	ピット 13 →溝 7 →土坑 12	23	23	9 10
土坑 13	⑨	Ci2-3・4, 3-3・4	246	175	46	N－48°－W	珠洲焼甕・片口鉢，土師質土器皿	15 世紀前半				10
土坑 14	⑨	Bb4-4	（南北）104	（東西）43	26		土師質土器 (骨蔵器) 蓋 (49-1)・壺 (49-2)，人骨（内容物）	近世後期～近代初頭				
土坑 15	⑨	Cd4-1	110	74	28	N－37°－W	なし					
土坑 16	⑨	Ce4-2	75	48	46	N－43°－W	なし					
土坑 17	⑨	Ce4-3	177	98	24	N－13°－W	瓦質香炉（38）					
土坑 18	⑨	Bd5-5 Be5-1	（南北）102	（東西）54	94		なし					10
土坑 19	⑨	Cg1-2・3	140	134	92	N－58°－E	鉄製和釘（169）・蝶番（176），元符通寶（191），越前焼擂鉢	15 世紀後半～ 16 世紀		24	24	11
土坑 20	⑨	Ce4-2	117	109	36	N－32°－W	なし					
土坑 21	⑨	Cf4-1	（南北）80	（東西）73	40		越前焼擂鉢（39a），小鎹	16 世紀後葉頃		25	25	
土坑 22	⑨	Ce4-5	93	78	30	N－34°－E	なし					
土坑 23	⑨	Cc3-4・5	125	108	64	N－27°－E	なし		土坑 23 →溝 4			
土坑 24	⑨	Ci3-1・2	161	150	54	N－25°－E	なし					
土坑 25	⑨	Ci2-2・3,3-3	93	78	45	N－81°－E	なし					
土坑 26	⑨	Cg3-3, Cg4-3	（東西）345	（南北）130	112		青花碗 (40・41), 瀬戸美濃焼丸皿（42），珠洲焼甕（43・44）・片口鉢（45），越前焼擂鉢（39b・46），刀子（160），土師質土器皿，板状木製品，棒状木製品，木製漆金箔片，鉄鏃	16 世紀末～ 17 世紀初頭	土坑 26 →溝 3		25 29	11 14

表 4　遺構観察表（井戸）

（　）残存値

遺構名	調査区	グリッド	規模（cm）			主軸方位	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
井戸 1	③	Gh1-2・1-3・2-2・2-3	(345)	310	316	N－10°－E	越前焼壺（18）・擂鉢（19），青花碗 E 群，土師質土器小皿，和釘	16 世紀後半頃	井戸 2 →井戸 1 ↔土坑 10	15	15	3 5 7
井戸 2	③	Gg1-5・2-5,Gh1-1・2-1	384	352	350	N－63°－E	青磁碗（21），古瀬戸瓶子（22），珠洲焼壺（23･24）・片口鉢（25），土師質土器皿（26･27），須恵器無台杯（28），瓦器の風炉（29），雁股鏃（163），和釘（166），鉄鍋（174），止金具（178），椀形滓（193), 鉄滓（196），砥石（210・214・216），珠洲焼大甕	14 ～ 15 世紀	井戸 2 →井戸 1	16	16	3 6 7
井戸 3	③	Fh5-4・5-5,Gh1-4・1-5	312	242	352	N－6°－E	珠洲焼壺（30)･甕（31 ～ 33）・片口鉢（34･35），刀子（161），和釘（170），鎹（177），鉄滓（194), 土師質土器皿，曲物側板，板状木製品，棒状木製品，鉄鍋	14 ～ 15 世紀前半		17	17	3 7
井戸 4	⑨	Cf4-5・5-5,Cg4-1 ～ 4-3・5-1・5-2,Df1-5,Dg1-1・1-2	510 ～ 590	560	340	N－35°－E	白磁端反皿（50），青花碗（51），瀬戸美濃焼丸皿（52），珠洲焼壺（53）・片口鉢（54），越前焼壺（55）・甕（56・57）・擂鉢(58･59), 土師質土器皿(60), 土師器小甕(61), 鉄鍋湯口(175), 石臼（200 ～ 203），砥石（213），白磁皿，曲物側板，井戸側材，板材，和釘	16 世紀後半	井戸 5･ 井戸 6･ 井戸 4	26	26	12 13
井戸 5	⑨	Cf2-4・2-5・3-4・3-5・4-4・4-5,Cg3-1	454	396	304	N－77°－E	珠洲焼瓶子（62）・片口鉢（63･64），土師質土器小皿（65）･皿（66 ～ 68），曲物底板（152），元豊通寶（188），白磁皿･口剥ぎ皿，青磁碗，珠洲焼壺，越前焼甕，曲物側板，板状木製品，杭	13 ～ 14 世紀	井戸 5 →井戸 4	27	27	
井戸 6	⑨	Cg4-2・5-2	(150)	(150)	320		珠洲焼片口鉢（69），漆器小皿（148），箸（149 ～ 151），曲物底板（153 ～ 155），折敷底板（156），板状木製品（157・158），棒状木製品（159），曲物側板，杭	13 ～ 14 世紀	井戸 6 →井戸 4	26	26	

表 5　遺構観察表（溝）

［　］推定値

遺構名	調査区	主なグリッド	規模（cm）			主軸方位	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長さ	幅	深さ					平面	断面	
溝 1	②	Gd・Hd	986	505	74	N－89°－E		15 世紀前半		11	11 12	3
溝 2	⑥・⑨	Bf5-2,5-3 ～ Ef2-3,2-4	2310	南北 170 ～ 286	84 ～ 100	N－85°－E	青花碗(70･71)･皿(72)，白磁端反皿(73)，瀬戸美濃焼丸皿(74)，珠洲焼壺（75・76）・甕（77）・片口鉢（78・79），越前焼擂鉢(80)，笹神窯鉢（81），土師質土器皿（82）・小皿（83），鉄滓(195)，瓦器，須恵器甕，土師器鍋	16 世紀中頃	竪穴建物 1 →溝 2	20	29	9 14
溝 3	⑤・⑨	Bg5-3,5-4 ～ Dg4-3	1780	168 ～ 236	94	N－86°－E	瓦器奈良火鉢（84），板状鉄製品（181・182），青花皿，越前焼擂鉢，和釘	16 世紀後葉	土坑 26 →溝 3			14
溝 4	⑨	Bc5-5 ～ Dc2-4	1321	108 ～ 162	54	N－77°－E	白磁端反皿(85)，青磁皿(86)・青花碗(87)，瀬戸美濃焼丸皿(88)，珠洲焼壺（89)･甕（90），越前焼擂鉢（91），石臼（204･205），鉄製鏨（180）	16 世紀後葉	土坑 23・溝 5 →溝 4	19		14 15
溝 5	⑨	Bc5-5 ～ Dc2-5	1316	［150］	46	N－78°－E	青花皿（92），瀬戸美濃焼丸皿（93），鉄製鏨（180）	16 世紀中頃	溝 5 →溝 4			14
溝 6	⑨	Bh3-5 ～ Ci5-3	1532	98 ～ 180	38	N－75°－W	なし			20		15
溝 7	⑨	Be5-4 ～ Cf3-1	741	43 ～ 144	23	N－68°－W	引金具（179）		ピット 13･ ピット 14 →溝 7 →土坑 12	19		15 16
溝 8	⑨	Cd2-4 ～ 4-4	430	28 ～ 38	15	N－80°－E	なし		溝 8 ↔竪穴建物 2	28		15
溝 9	⑨	Cd5-4 ～ Dd2-4	270	23 ～ 35	14	N－78°－E	なし		溝 9 →ピット 12			
溝 10	⑨	Cd5-4 ～ Dd2-4	271	26 ～ 35	20	N－79°－E	なし					

表６　遺構観察表（ピット列）

遺構名	調査区	主なグリッド	規模（cm）			主軸方位	ピット数			挿図		図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
ピット列１	⑨	Cg2-5 ～ Ch2-3	537	-	-	N－３°－E	4			30		15
P		グリッド	規模（cm）			底面標高 (m)	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）			
			長軸	短軸	深さ							
1		Ch1-3·2-3	32	32	26	18.38	なし					
2		Ch2-2	36	33	23	18.48	なし					
3		Ch2-2	37	32	21	18.50	なし					
4		Cg2-5	29	25	9	18.62	なし					

遺構名	調査区	主なグリッド	規模（cm）			主軸方位	ピット数			挿図		図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
ピット列２	⑨	Bf5-1 ～ Df1-1	1057	-	-	N－84°－E	6			30		15
P		グリッド	規模（cm）			底面標高 (m)	出土遺物	遺構の上限時期	切り合い（旧→新・不明↔）			
			長軸	短軸	深さ							
1		Bf5-1	32	30	15	18.36	なし					
2		Cf1-1	34	32	46	18.12	なし					
3		Cf1-1	27	22	12	18.34	なし					
4		Cf3-1	29	23	7	18.46	なし					
5		Cf4-1	27	27	25	18.25	なし					
6		Df1-1	46	39	35	18.15	なし					

表７　遺構観察表（ピット）

（　）残存値

遺構名	調査区	主なグリッド	規模（cm）			出土遺物	遺構の上限時期	建物・柱穴列	切り合い（旧→新・不明↔）	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
ピット１	⑥	De5-5	39	32	28	越前焼甕（94）	15 世紀後半			31	31	9
ピット２	⑥	De5-5	25	20	16	なし						
ピット３	⑥	De4-5	29	20	9	なし						
ピット４	③	Gh3-1	56	44	47	なし			ピット４→ピット５	18	18	
ピット５	③	Gh3-1	44	42	36	なし			ピット４·６→ピット５			
ピット６	③	Gh3-1・4-1	57	40	48	なし			ピット６→ピット５			
ピット７	③	Gh3-3·4	47	40	31	なし						
ピット８	③	Gi4-1	79	62	76	なし						
ピット９	⑨	Ce4-5	29	26	26	土師器椀（95·96）	9 世紀末～ 10 世紀初			31	31	
ピット 10	⑨	Cc2-3	47	32	39	なし						
ピット 11	⑨	Dd2-4	36	32	39	なし						
ピット 12	⑨	Dd1-4	34	28	39	なし			溝９→ピット 12			
ピット 13	⑨	Ce2-5	36	32	56	なし			ピット 13 →溝７→土坑 12			
ピット 14	⑨	Ce1-4·5	32	29	60	なし			ピット 14 →溝７			
ピット 15	⑨	Ce3-1	47	38	46	なし						
ピット 16	⑨	Bf5-1	32	28	35	なし						
ピット 17	⑨	Df1-4	55	50	67	なし						
ピット 18	③	Fh2-2	(45)	(24)	14	なし			土坑６→ピット 18			

第Ⅳ章　遺　　物

1　概　　要

遺構全体図（第 8 図）のように，調査対象地の大部分が撹乱を受けており，遺物包含層は確認できなかった。遺物は，土坑・井戸・溝などの遺構と，調査区⑨南端の斜面堆積層からの出土が多く占める。

土器・陶磁器には，中国陶磁器の青磁・白磁・青白磁・天目・青花，国産陶磁器の古瀬戸・瀬戸美濃焼・珠洲焼・越前焼・笹神窯，瓦器，土師質土器，古代の須恵器・土師器，近世以降の肥前焼，土師質土器がある。木製品には，漆器小皿，箸，曲物，折敷，板状木製品，井戸桶側材，棒状木製品などがある。金属製品には，鉄製の刀子，刀，雁股鏃，鉄鏃，鉄鍋，和釘，用途不明の丸玉などがあり，銅製品には，花瓶，蓋，観音立像，銭貨がある。鍛冶関連遺物には，鉄滓と羽口などがある。石製品には，臼，硯，砥石がある。

土器・陶磁器は，調査区②・③・⑥・⑨で遺構と遺構外とに分けて記述する。木製品，金属製品，鍛冶関連遺物，石製品については，遺構の内外を問わず一括して記述する。遺物写真は土器・陶磁器，木製品，金属製品，鍛冶関連遺物，石製品の順に，生産地・器種などを分別し配列した。

2　土器・陶磁器

a 調査区②（第 11 図）

遺構外出土（第 32 図，表 10）

10 ～ 15 は珠洲焼である。10・11 は壺の体部で，11 は綾杉状の叩きにより成形される。12 は甕の体部で，外面は平行叩きにより成形される。13 ～ 15 は片口鉢である。13 は口縁部で，端部は外に小さく引き出され，卸し目は間隔をあけて施される。珠洲Ⅳ期に比定される。14 は口縁部で，口端面に櫛描波状文が加飾される。珠洲Ⅴ期である。15 は幅 3.5㎝で 11 条を一単位とする卸し目が密に施される。

16 は笹神窯産と考えられる甕の口縁部で，受け口状で端部は細くつまみ上げられる。内面はゴマ状の、外面には濃茶色の光沢を持った自然釉が薄く掛かる。断面の胎土は，笹神窯に特徴的な細かく不均一な多方向での割れが目立ち，焼成は良好で堅くしまる。

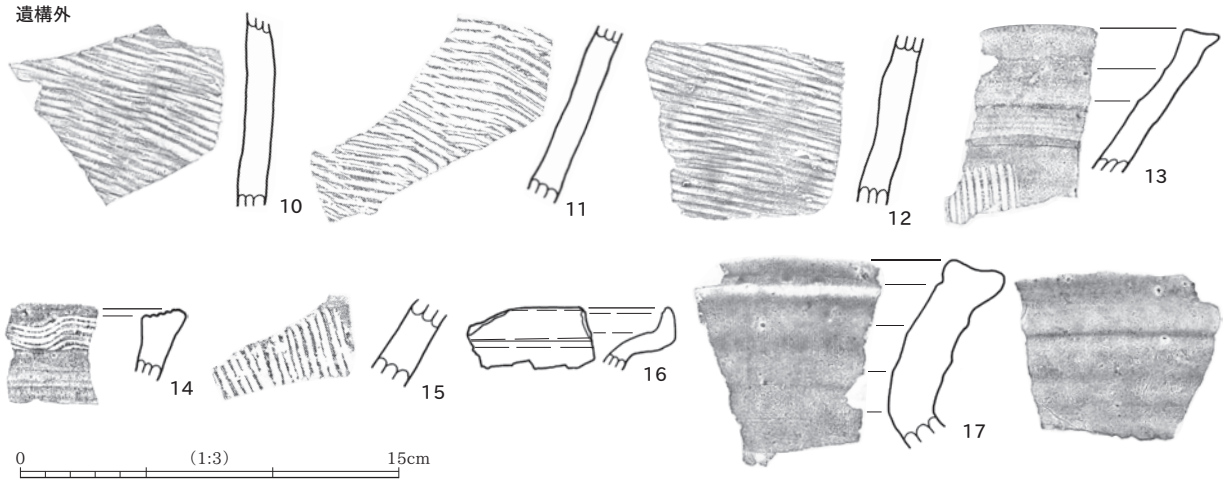
17 は越前焼大甕の口縁部である。口端部から内面に自然釉が掛かり，口端面には降りものが付着する。断面には煤が付着する。

b 調査区③（第 13 図）

井戸 1（第 33 図，表 11）

18 は越前焼壺の肩部である。紐作り成形と考えられ，内面は指おさえ痕が残り，外面には白色がかったゴマ状の自然釉が掛かる。15 世紀後半から 16 世紀に比定される。

19･20 は越前焼擂鉢である。19 は底部外面がなでられ，下端には太い縄の跡が残る。内面に幅 2.6㎝で 9 条を一単位とする卸し目が間隔をあけて施される。口縁端面と内面下部は摩耗が著しく，体部外面～体部内面と底部内面には煤が付着する。16 世紀後半に比定される。20 は底部である。卸し目の条数は，側面と底面とで違うように見えることから，別個の原体を用いた可能性が考えられる。底面には，幅 2.5㎝で 8 条を一単位とする卸し目が確認できる。



第 32 図　調査区② 出土遺物

井戸 2（第 33 図 , 表 11）

21 は鎬蓮弁文の青磁碗である。14 ～ 15 世紀に比定される。

22 は古瀬戸瓶子の体部である。ロクロ回転により成形される。外面は画花文が刻まれ , 濃緑な灰釉が掛けられる。14 世紀の古瀬戸中期から後Ⅰ期様式と思われる。

23 ～ 25 は珠洲焼で , 23・24 は壺Ｔ種の肩部である。23 は綾杉状叩き , 24 は平行叩きにより成形される。Ⅳ期頃に比定される。25 は片口鉢で , 単位不明の卸し目が施され , 底部内面の摩耗が著しい。井戸 3 から出土した 35 と同一個体である。珠洲Ⅳ～Ⅴ期に比定される。

26・27 は土師質土器の皿である。26 は手づくね , 27 はロクロ成形である。底部の切り離しは , 26 が糸切り , 27 は摩滅のため不明である。

28 は須恵器無台杯である。

29 は瓦器風炉の体部である。外面は横位のヘラミガキが施され , 光沢がある。外面に煤が付着する。

井戸 3（第 33 図 , 表 11）

30 ～ 35 は珠洲焼で , 壺・甕は叩きで成形される。30 は壺Ｔ種の肩部で , 印花文が施される。珠洲Ⅳ～Ⅴ期に比定される。31 ～ 33 は甕で , 31 の断面には漆による接合痕がみられる。32 は底部に近い体部下半の桶作り接合部分で , 内外面に上方からの胎土カブリが見られる。33 は体部で , 外面は斜め右下がりの叩きにより成形される。いずれも珠洲Ⅳ～Ⅴ期に比定される。34･35 は片口鉢である。34 は口縁部で , 卸し目の上端がわずかに認められる。珠洲Ⅳ期に比定される。35 は体部～底部で , 井戸 2 から出土した 25 と同一個体である。卸し目は間隔をあけて施され , 底部内面は摩耗が著しく , 数条がわずかに確認できる。体部外面には指抜き痕と思われる指頭痕がみられる。底部の切り離しは静止糸切りである。珠洲Ⅳ～Ⅴ期に比定される。

c 調査区⑥・⑨（第 19・20 図）

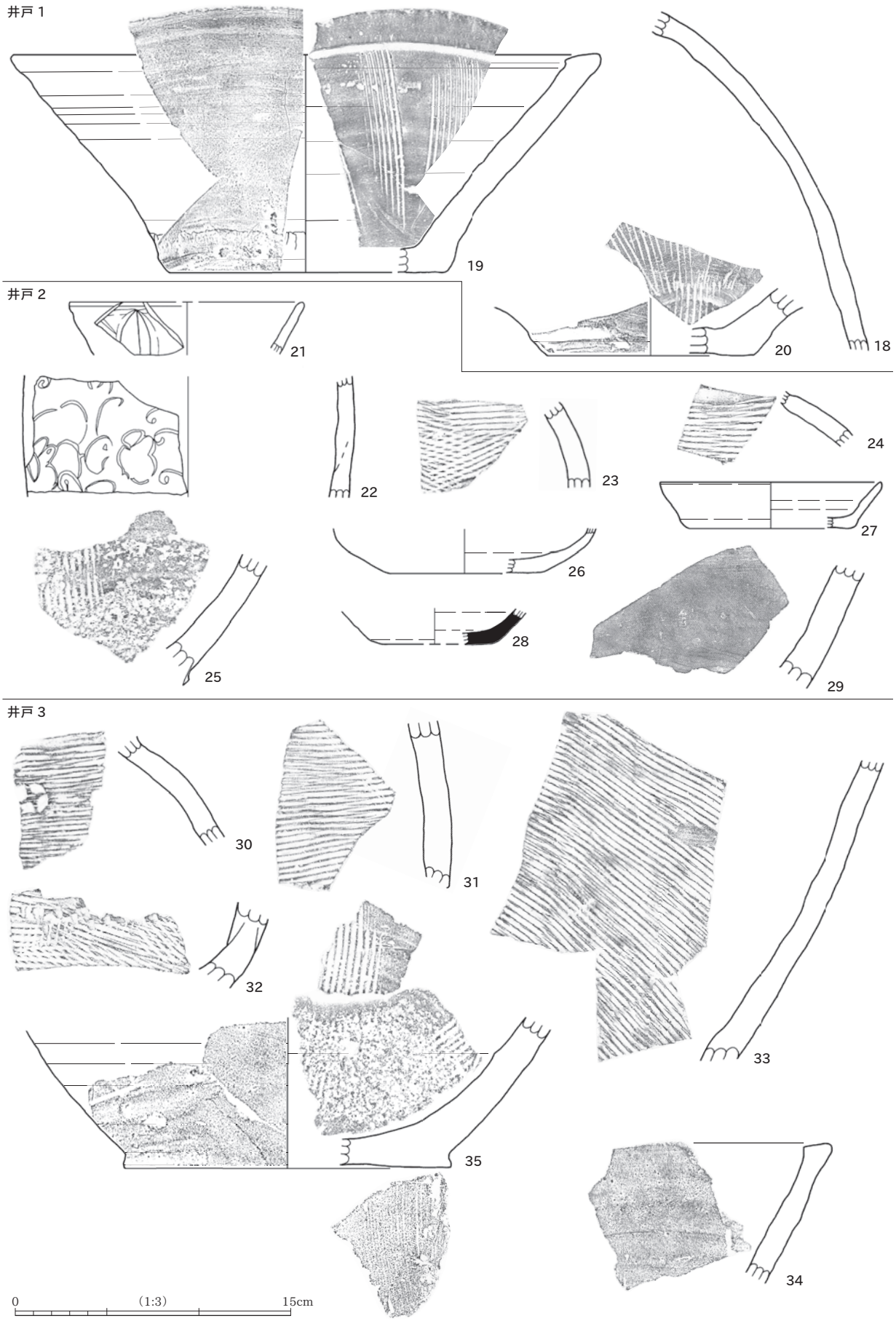
竪穴建物 1（第 34 図 , 表 11）

36 は瀬戸美濃焼丸皿の底部である。内外面に灰釉が施され , 高台内に輪トチンが付着する。大窯第 1 段階に比定される。

37 は越前焼甕の肩部である。外面にヘラ描きの窯印「大」が認められる。16 世紀前半に比定される。

土坑 12（第 35 図 , 表 12）

47a･b は珠洲焼大甕で , 接合しないが胎土から同一個体である。47a は口縁部で , 口縁を外へ強く折り曲げる。



第 33 図　調査区③ 出土遺物

頸部の外面は平行叩き，内面には円形のあて具痕がある。47b は底部から体部下半で，体部上半は後世の撹乱を受けて大部分が欠失しており，器形全体は把握できない。出土状況から，土坑内の南西側の底面直上に正位で置かれたようである。実測図左側面の下部は，焼き歪みにより変形している部分にあたる。体部外面上部は右下がりの叩き，下半は平行叩きである。底部近くも右下がりの叩き目が残る。体部内面には押圧痕はみられず，ナナメまたはヨコナデによって消され，あて具痕が明らかに残っているのは上部だけである。底部内面もナデられる。大型の甕のため，桶作りをせずに叩き成形としたのであろう。底部から約 25㎝上がった所には，直径約 22㎝の円形の割れが対角線上の位置に一対ある。放射状のヒビ割れと，幅約 3cm の同心円状の割れがあり，内側からの加撃によるものと考えられる。土中に埋め置かれた状態で，内側からの打撃の力が一気に外へ抜けなかった現象と思われ，二重ガラスの破損状態と似ている。埋甕の破損資料の増加を待ちたい。珠洲Ⅲ期で 13 世紀後半となろう。

土坑 14（第 34 図，表 12）

48･49 は土師質の蓋付骨蔵器で，ロクロ成形である。48 は蓋で，天井部から体部下半の外面は回転ヘラ削りで，砂粒の動きから回転方向は右回転である。摘みは欠損している。49 は，体部外面は左回転のヘラケズリで，器壁が薄く仕上げられている。また底面には墨書が残るものの判読できない。蓋と同じ精製された胎土で焼成もよい。近世後期～近代初頭に比定される。

土坑 17（第 34 図，表 12）

38 は瓦質の香炉である。手づくねにより成形される。外面は縦位のヘラミガキが丁寧に施され光沢がある。体部外面の上端には 1 条の沈線が巡る。

土坑 21・26（第 34 図，表 12）

39a・b は越前焼の擂鉢で，接合はしないが同一個体である。焼成は極めて堅緻である。口縁上端面の内傾角度が急で，端部が尖る。口縁直下内面を巡る沈線は浅い。体部と底部の境目は屈折せず，緩やかに立ち上がる。幅 2.0 ㎝で 8 条を一単位とする卸し目が密に施される。越前Ⅴ-3 期に比定され，中でもより後出的と考えられる。

土坑 26（第 34 図，表 12）

40･41 は青花碗である。40 は外面に不明な文様が描かれ，見込みには界線が巡る。16 世紀末から 17 世紀初頭に比定される。41 は底部で，縁辺全周を外面から内面へ細かく打ち欠かれている。見込みに二重界線を巡らせ，その中に団華文が描かれる。高台外面には二重平行線が巡り，高台内面には二重界線の中に吉祥を意味する「長命冨貴」の字款が描かれる。16 世紀に比定される。

42 は瀬戸美濃焼丸皿である。全面に灰釉が施され，底部内面と高台脇の釉溜りは厚く濃緑になる。高台内に輪トチンが付着する。大窯第 2 段階に比定される。

43 ～ 45 は珠洲焼である。43・44 は甕の体部で平行叩きで成形される。44 は外面に粘土のカブリが残る。いずれも珠洲Ⅳ～Ⅴ期に比定される。45 は片口鉢の口縁部である。口縁端面が外傾し，内面は凹線状のロクロ目が強く残る。珠洲Ⅲ～Ⅳ期で 13 世紀後半～ 14 世紀となろう。

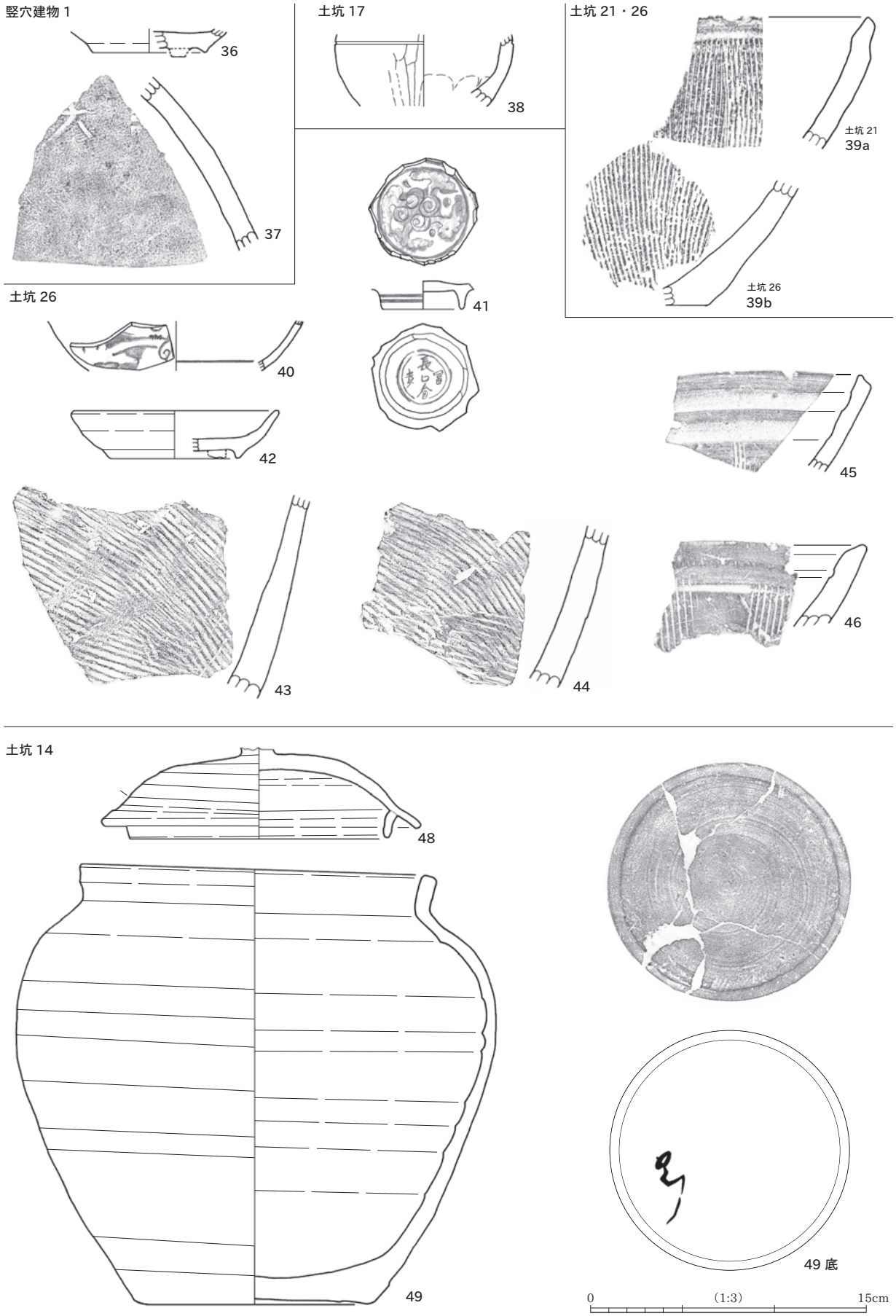
46 は越前焼擂鉢の口縁部である。

井戸 4（第 36 図，表 12）

50 は白磁端反皿の口縁部で，白磁ⅢＥ群で 15 世紀後半から 16 世紀に比定される。

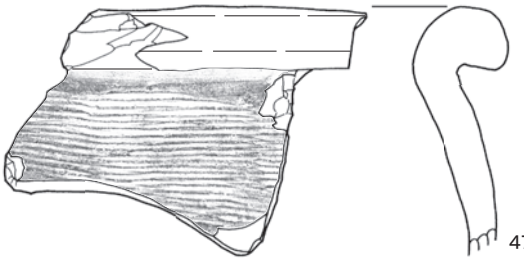
51 は青花碗の底部で，縁辺全周を細かく打ち欠いている。見込みに二重界線を巡らせ，その中に濃い呉須で牡丹文が描かれる。高台内には二重界線を巡らせ，その中に「大明年造」の銘がある。青花碗Ｅ群で 16 世紀後半に比定される。

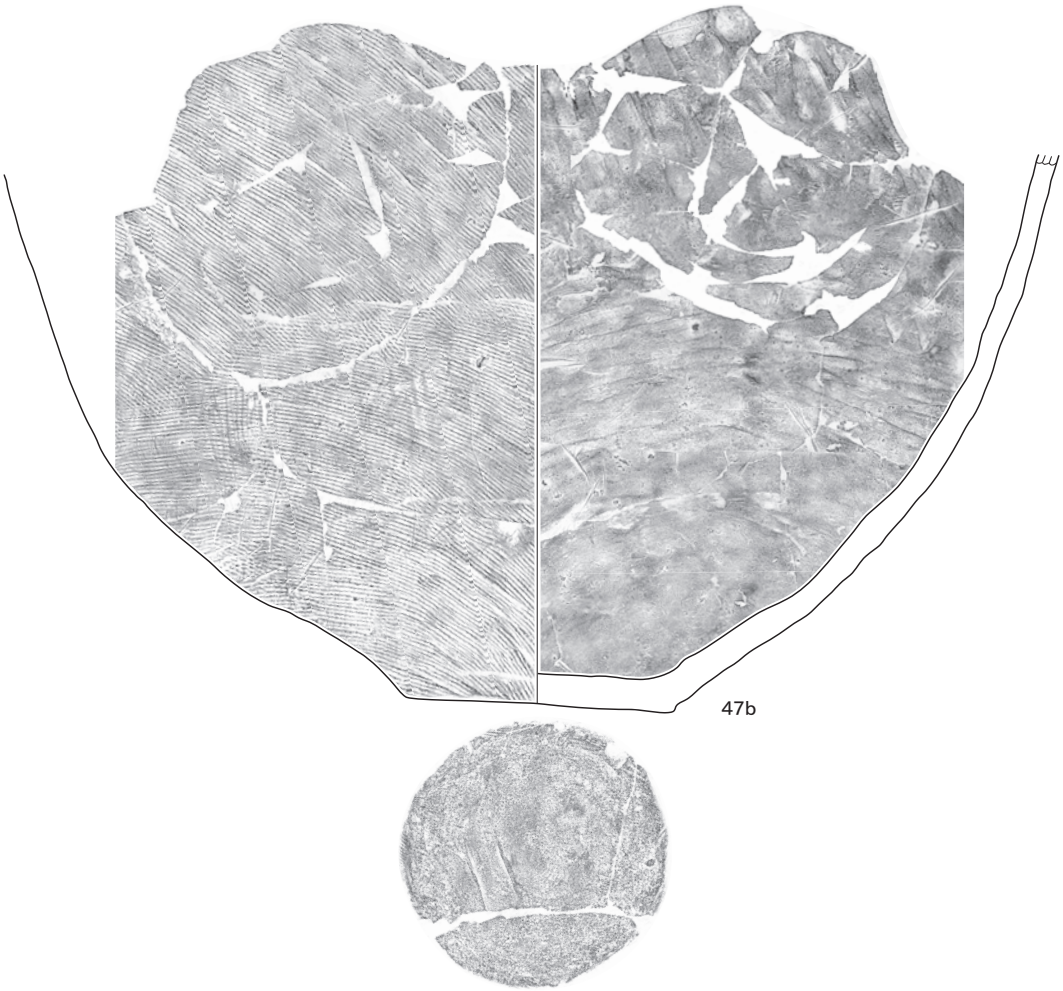
52 は瀬戸美濃焼丸皿で，全面に淡緑色の灰釉が施される。体部内面に丸ノミ状工具による細かな刻文（ソギ）が入っている。大窯第 2 段階前半に比定される。



第 34 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（1）

土坑 12



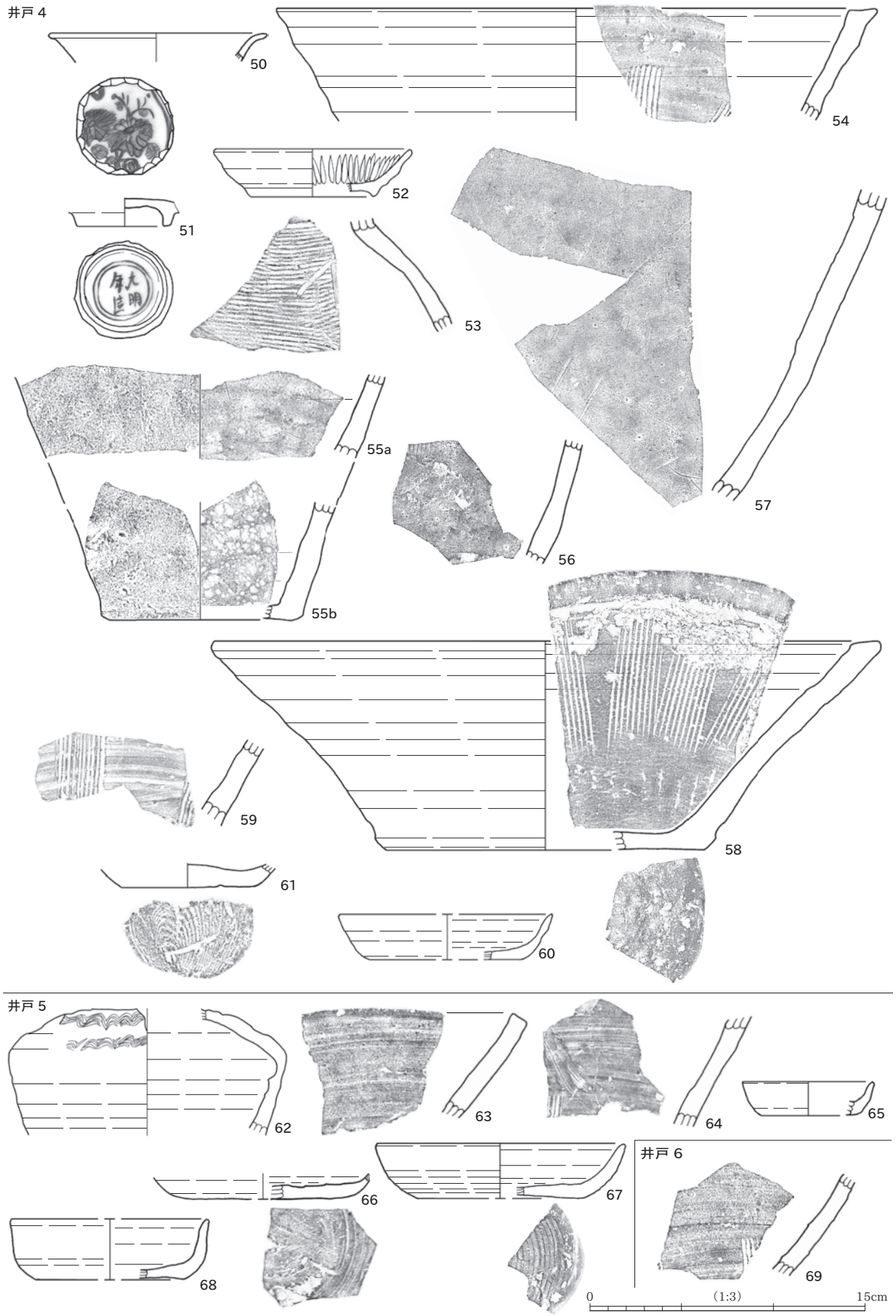


(48a) 0 (1:3) 15cm
(48b) 0 (1:5) 25cm

第 35 図　調査区⑨ 出土遺物

53・54 は珠洲焼である。53 は珠洲焼壺 T 種の肩部で，外面は平行叩き，内面に円形のあて具痕が認められる。部分的な残存だが，ヘラ描きの窯印が刻まれる。54 は片口鉢の口縁部である。卸し目の左端は浅く，単位は不明である。酸化焔焼成となって，にぶい黄橙色を呈す。珠洲Ⅳ期に比定される。

55 ～ 59 は越前焼である。55 は壺の体部～底部である。55a は体部，55b は底部で，接合しないが，同一個体である。被熱し，全体が黒ずみ，煤が付着している。底部内面は火ばねによりアバタ状に細かく剝落する。内面には指頭痕が認められる。56・57 は甕である。56 は体部上半で，スダレ状の叩き目が上端にわずかに見られる。57 は体部下



第 36 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（2）

半で，内面に濃竹色の自然釉と米粒ほどの降りものが付着する。58･59 は擂鉢である。58 は体部に幅 2.5㎝で 9 条一単位の卸し目が，底部に単位不明の卸し目が施される。底部外面下端に指おさえの指抜き痕がみられる。口縁端面と内面下半の摩耗が著しく，平滑である。被熱して内外面の一部に煤が付着し，口縁から体部上半の内面は火バネで大きく剝落する。59 は幅 2.6㎝で 11 条を一単位とする卸し目が間隔をおいて施される。いずれも 16 世紀後半に比定される。

60 はロクロ成形の土師質土器皿である。内外面に煤が付着する。底部の切り離しは左回転と思われるヘラ切りである。

61 は古代の土師器小甕の底部である。右回転の糸切りで切り離される。

井戸 5（第 36 図，表 12）

62 ～ 64 は珠洲焼である。62 は瓶子である。ロクロ成形され，肩部に 2 段の櫛描波状文が施される。堅く締まった焼成である。63･64 は片口鉢である。63 は口縁部で端面が外傾する。内面の卸し目は確認できない。珠洲Ⅱ期で 13 世紀前半に比定される。64 は口縁部だが，口端部のほとんどが欠損する。単位不明の卸し目がみられる。珠洲Ⅱ～Ⅲ期となろう。

65 ～ 68 はロクロ成形の土師質土器である。65 は小皿で，回転糸切りで切り離される。66 は皿で、底部外面はヘラ切りで切り離した後になでられる。14 ～ 15 世紀前半であろう。内面には煤が付着する。67･68 は深目の皿で、底部外面は回転糸切りで切り離した後に縁をなでている。67 は下半に幅狭くシャープなロクロ目が文様として付けられ、底面との境はなでられ稜がない。内面に煤が付着する。68 は口縁部が直立気味で端部が丸く、壁は厚い。全面ナデ整形で、67 よりも後出と考えられる。67・68 は 13 世紀となろう。

井戸 6（第 36 図，表 12）

69 は珠洲焼片口鉢の体部である。単位不明の卸し目が見られる。珠洲Ⅱ期で 13 世紀前半に比定される。

溝 2（第 37 図，表 12）

70 ～ 72 は青花である。70・71 は碗 C 群で，外面に不明の文様が描かれる。文様を見やすくするため，図の角度を変えている。16 世紀中頃に比定される。72 は皿 E 群である。見込みに巡る界線の中に題材不明の文様が描かれ，高台内の文字は不詳であるが，外枠の四角の一部が残る。16 世紀後半に比定される。

73 は白磁端反皿である。体部下半は露胎となる。皿 E 群で，15 世紀後半から 16 世紀に比定される。

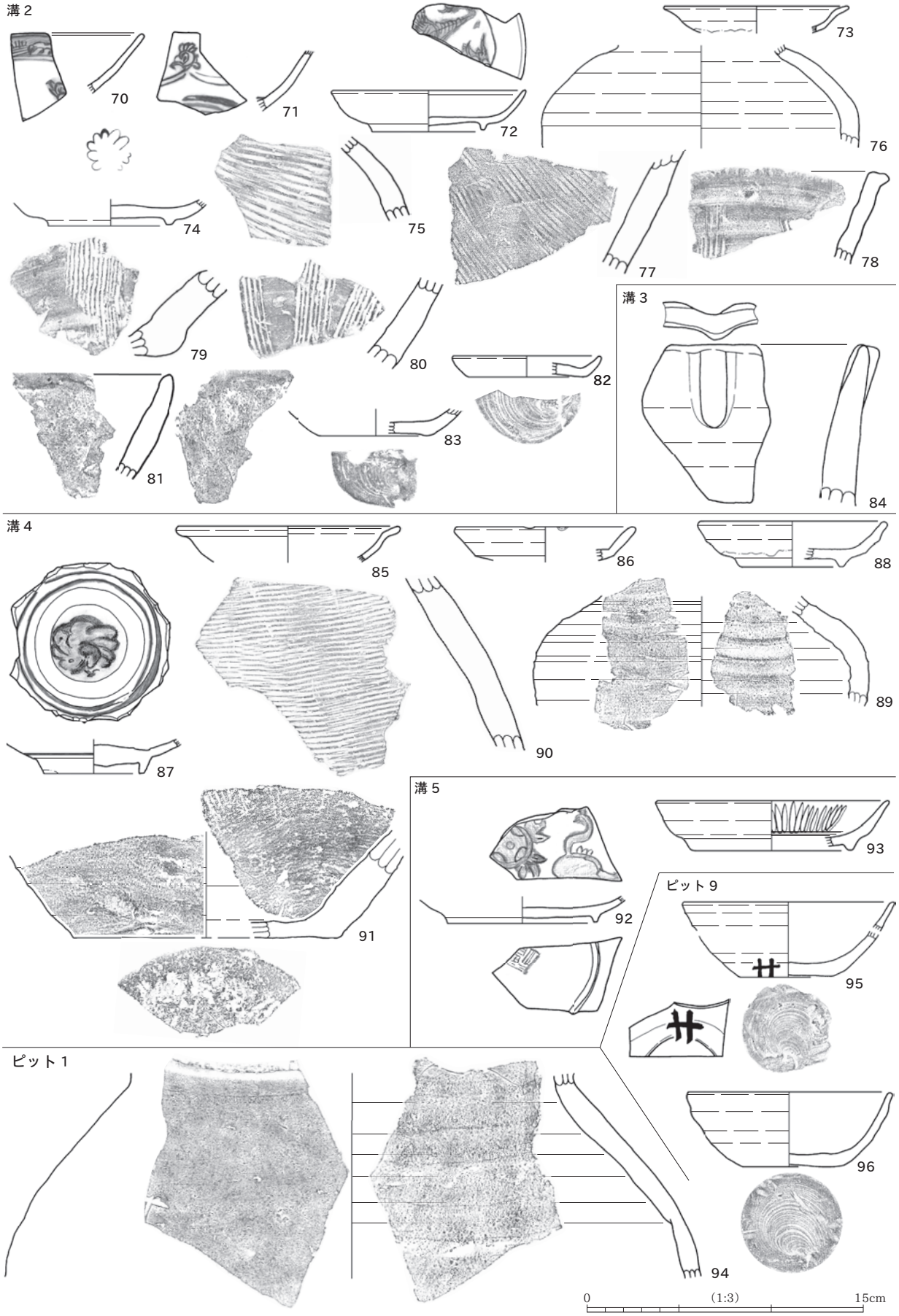
74 は瀬戸美濃焼丸皿 Ab の底部である。全面に灰釉が施され，内面に菊花印文が描かれる。高台内の釉は薄く，輪トチンの跡が残る。大窯第 2 段階に比定される。

75 ～ 79 は珠洲焼である。75 は壺 T 種の肩部で，外面は平行叩きで成形され，内面には円形のあて具痕が見られる。76 は壺 R 種の肩部で，内面はロクロ目が明瞭に残る。77 は甕の体部で，外面は平行叩きで成形され，内面には浅い指押さえの跡が残る。78・79 は片口鉢である。78 は口縁部で，端部は外へつまみ出される。内面にはロクロ目が明瞭に残る。79 は底部で，内面に幅 2.7㎝で 13 条を一単位とする卸し目が施される。体部下半はなでられ，指抜き痕だろうか，指頭痕が 1 か所見られやや窪む。いずれも珠洲Ⅳ期で 14 世紀に比定される。

80 は越前焼擂鉢で，内面に幅 2㎝で 8 条を一単位とする卸し目が施される。

81 は笹神窯産と考えられ，回転台で輪積み成形された桶状の鉢となろう。文様はなく，内外面に自然釉が薄く掛かる。口縁端部は丸味を帯び，黄緑色の自然釉が厚く掛かり，内面にも点々とゴマ状にかかる。胎土に小さめの石英･長石を多く含み，これが表面に浮き出る。胎土は堅く焼き締まり，割れ口は荒い。

82･83 は土師質土器である。82 は小皿。 83 は皿の底部で，やや磨滅している。いずれも右回転の糸切りで切り離される。



第 37 図　調査区⑥・⑨ 出土遺物（3）

溝 3（第 37 図 , 表 12）

84 は瓦器の奈良火鉢で , 方形ないし長方形となろう。棒状工具で内面から押し出された胎土が , 外面にヒダ状の文様を形づくる。14 世紀に比定される。

溝 4（第 37 図 , 表 12）

85 は白磁端反皿の口縁部である。皿 E 群で 15 世紀後半～ 16 世紀に比定される。

86 は青磁平底皿である。口縁部は緩く外反し , 体部との境で屈折する。底部内面には、細い平行櫛描文が描かれる。厚めで透明感のある青磁釉が掛けられる。口縁端部の内面に五弁花の簡略と考えられる切込みが確認できる。外反器形で龍泉窯系の 13 世紀末頃のものであろう。

87 は漳州窯青花碗の底部で , 縁辺部を全周打ち欠いている。高台は削り出しである。光沢の淡い白色釉が薄く掛けられるが , 高台内は無釉である。内面には幅 8㎜の蛇ノ目状釉剝ぎが施され , その外側には二重界線を巡らせ , 中には菊花文が描かれる。16 世紀末に比定される。

88 は瀬戸美濃焼丸皿 A である。外面の体部上半及び内面に緑黄色の灰釉が施される。体部外面下半と高台内の釉は薄く , 外面の釉端には釉溜りがみられる。大窯第 2 ～第 3 段階と考えられ , 16 世紀中頃に比定される。

89・90 は珠洲焼である。89 は壺 R 種の肩部で , 内面に回転痕が明瞭に残る。珠洲Ⅳ期頃に比定される。90 は甕の体部で , 外面は平行叩きで成形され , 内面には円形のあて具痕が浅くみられる。

91 は越前焼擂鉢の底部である。底部外面はなでられ , 体部下端に指抜き痕がみられる。内面は磨滅が著しく卸し目がわずかに確認できる。15 世紀後半から 16 世紀に比定される。

溝 5（第 37 図 , 表 12）

92 は青花皿である。内面には花のような文様が描かれる。高台内には放射状の削り調整痕が見え ,「福」の吉祥の銘が描かれる。畳付きに砂が付着する。B2 群または F 群と考えられる。

93 は瀬戸美濃焼丸皿 Aa である。全面に灰釉が施される。体部内面には丸ノミ状工具による細かな刻文（ソギ）が密に入り , その下に二重界線が刻まれる。大窯第 2 段階前半に比定される。

ピット 1（第 37 図 , 表 12）

94 は越前焼甕の肩部で , 左下にヘラ描きの窯印が残るが全形は不詳である。15 世紀後半に比定される。

ピット 9（第 37 図 , 表 12）

95･96 は古代の土師器椀で , 右回転の糸切りで切り離される。95 には外面の体部下端に「廿（にじゅう）」が墨書される。9 世紀末から 10 世紀初頭に比定される。

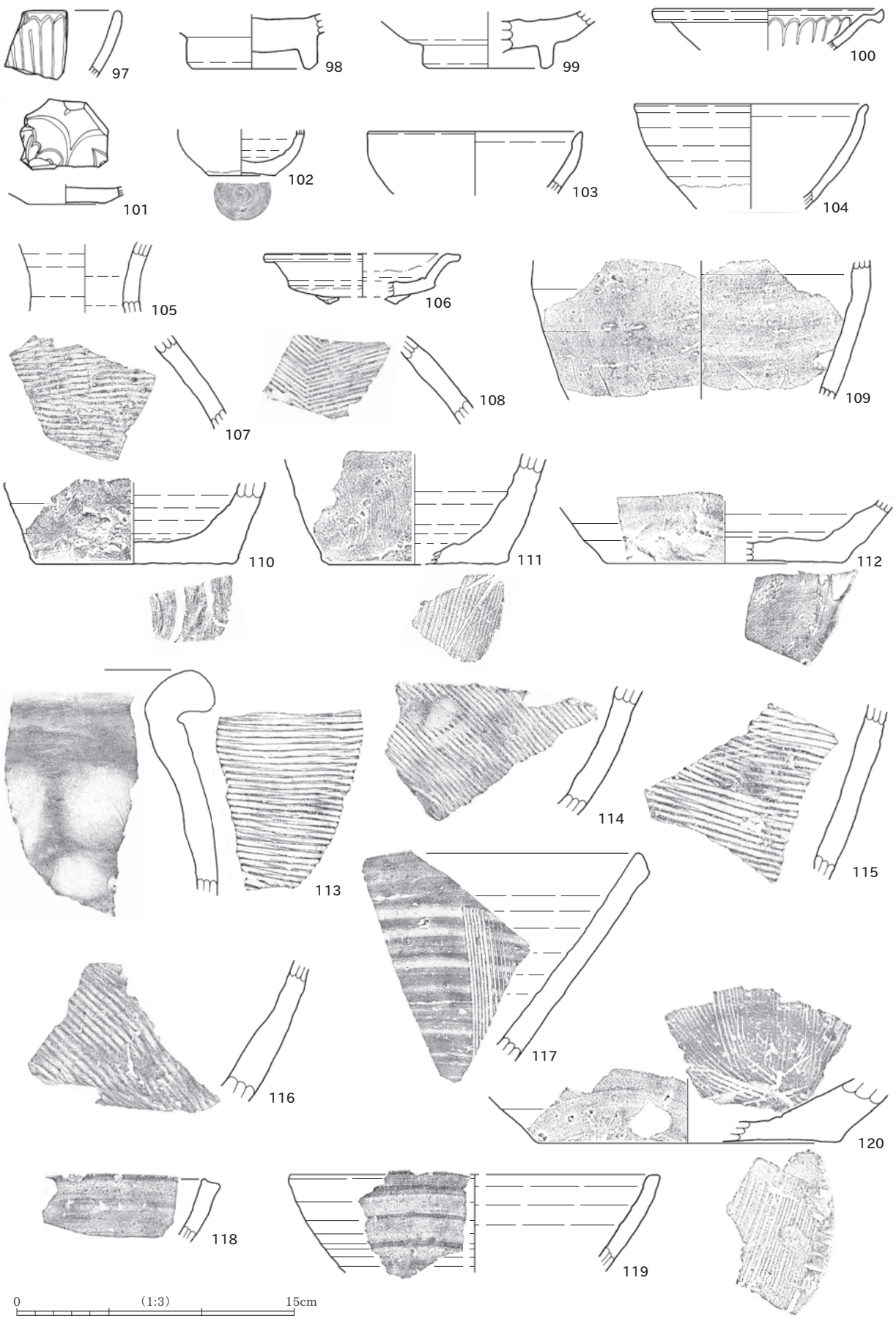
遺構外出土（第 38 ～ 40 図 , 表 13）

97 ～ 100 は青磁で , 97 ～ 99 は碗である。97 は口縁部で , 外面には線描の細蓮弁文が施される。15 世紀に比定される。98・99 は底部で , 高台内は釉剝ぎされ , いずれにも煤が付着する。99 は釉と露胎部との境及び畳付きは赤橙色となる。15 世紀に比定される。100 は折縁皿の口縁部で , 釉は厚く , 体部内面に蓮弁文が施される。13 世紀末～ 14 世紀前半に比定される。

101・102 は白磁である。101 は皿の底部で , 縁辺部は打ち欠かれている。底部外面は無釉で回転ヘラケズリが施され , 見込みに劃花文が刻まれる。12 ～ 13 世紀に比定されると考えられる。102 は合子の身で , 内面はロクロ目が明瞭である。淡い緑黄色の釉が施されるが外面は濃淡で斑状となり , 底面は露胎で回転ヘラケズリが施される。13 世紀頃に比定される。

103 は中国製の天目碗の口縁部である。黒色釉が施されるが口縁部は釉が薄く掛かるため暗茶色となっている。

104 は瀬戸美濃焼の天目茶碗 E 群で , 黒釉が施され , 体部外面下端は露胎となる。断面には漆継ぎが見られる。大窯第 1 段階に比定される。



第 38 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（1）

105・106 は古瀬戸である。105 は花瓶Ⅱ類の頸部で，黄緑色の灰釉が施される。古瀬戸後期様式である。106 は香炉で，体部屈折部まで内外面に黒褐色の鉄釉が施される。底部は露胎で，小粘土塊の脚が貼り付けられる。

107 ～ 120 は珠洲焼である。107・108 は壺 T 種の肩部である。107 は平行叩き，108 は綾杉叩きで成形され，内面に円形のあて具痕が見られる。珠洲Ⅲ～Ⅳ期に比定される。109 ～ 111 は壺 R 種である。109 は体部で，黒色粒を多量に含み，砂粒の動きからロクロの回転方向は右回転である。珠洲Ⅱ～Ⅳ期に比定される。110・111 は底部で，いずれも静止糸切りで切り離される。110 の内面と底部外面は煤が付着する。111 の体部外面は，縦位のヘラナデで調整され，タール状の付着物がみられる。112 は壺 T 種か K 種の底部と考えられ，内面にはロクロ目が残る。底面は，静止糸切り後にヘラナデされている。珠洲Ⅲ～Ⅳ期に比定される。113 ～ 116 は甕で，いずれも外面は平行叩き，内面には円形のあて具痕が見られる。113 は口縁部で，内面に煤が付着する。114 は叩き目が細かい。117 ～ 120 は片口鉢である。117 の卸し目は細い工具で幅 2.9cm に 15 条を一単位とし，条の間隔は狭い。酸化焔焼成となって堅い。珠洲Ⅲ期に比定される。118･119 は口縁部で，卸し目は確認できない。118 は口端面が平らで角張る。119 はなでられ，口縁部内面はやや丸みを帯びる。120 は摩滅のため卸し目の単位は不明であるが，密に施され，平滑である。底部の切り離しは静止糸切りで，指抜き痕だろうか指頭痕が 2 か所にあり，内外面にはタール状の付着物がみられる。Ⅳ～Ⅴ期であろう。

121 ～ 132 は越前焼である。121 ～ 126 は甕で，121 は大甕で図上復元した。口縁部～肩部で，口端部から内面と肩部外面に濃緑色の自然釉が掛り，降りものが付着する。16 世紀前半に比定される。122・123 は口縁部で，122 は N 字状で 14 世紀前半に比定される。123 は，口端部から外面に厚い自然釉が掛かり，降りものが付着する。16 世紀後半に比定される。124 は体部下半である。外面は板状工具の木口で縦方向に削られ，内面上半を板状工具の小口で横方向に削り、下半はヨコナデで調整している。外面には厚く釉が掛かる。125・126 は底部で，125 の内面には自然釉が掛かり，降りものが厚く付着する。底部は静止糸切りで，こげ茶色の鉄釉がかかる。126 は内面下部～底部に自然釉が掛かり，降りものが付着する，底部の切り離しは静止糸切りである。127 は鉢で，口縁がわずかになでられ，端面を作る。内外面ともに擂鉢と同じ錆釉が施され，内面には細かな火バネがみられる。128 ～ 132 は擂鉢で，いずれも口縁端面が内傾し，その下に幅 4 ～ 8㎜の凹線が巡る。卸し目は，128 が 2.9㎝幅で 9 条，129 が 2.8㎝幅で 11 条，130 が 3.0㎝で 11 条，131 が 2.9㎝幅で 11 条が施され，132 は卸し目の単位は不明である。128・129・131・132 は茶褐色で，内面は著しく摩耗している。130 は少し異質で，砂粒を多量に含む胎土で堅く焼き締まり，器壁も 1.4㎝と他の 1.1 ～ 1.2㎝に比べて厚い。128 ～ 130 は被熱し，煤の付着が著しい。

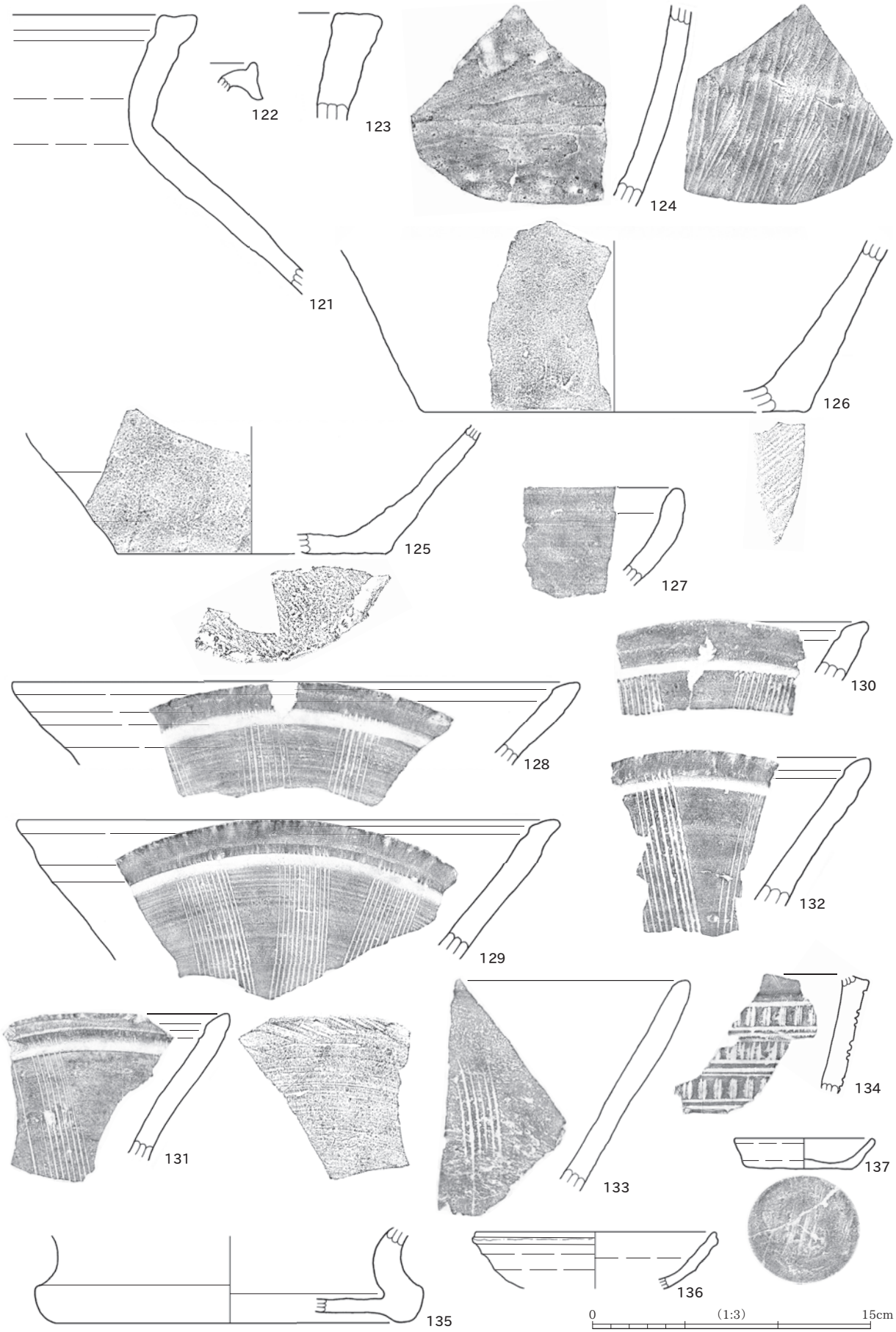
133 ～ 135 は瓦器で，燻されて黒色を呈している。133 は擂鉢の口縁～体部で，外面は被熱による火バネが見られる。幅 2.0㎝で 6 条を一単位とする卸し目がやや弧を描いて施される。134 は火鉢の口縁～体部である。平行沈線が巡り，その間に縦位の刻み目を施す文様が三段みられる。135 は風炉の底部である。外面は横位のヘラミガキで光沢をもつ。

136 ～ 138 はロクロ成形の土師質土器である。136 は皿で，器面の摩耗が著しいが，外面に煤が付着する。137・138 は小皿である。137 は完形で，乾燥段階で歪んでいる。底面はヘラ切り後にヘラナデされる。14 ～ 15 世紀前半に比定される。138 の切り離しは回転糸切りで，回転方向は右である。

139 は土師器小甕の底部で、切り離しは回転糸切りである。

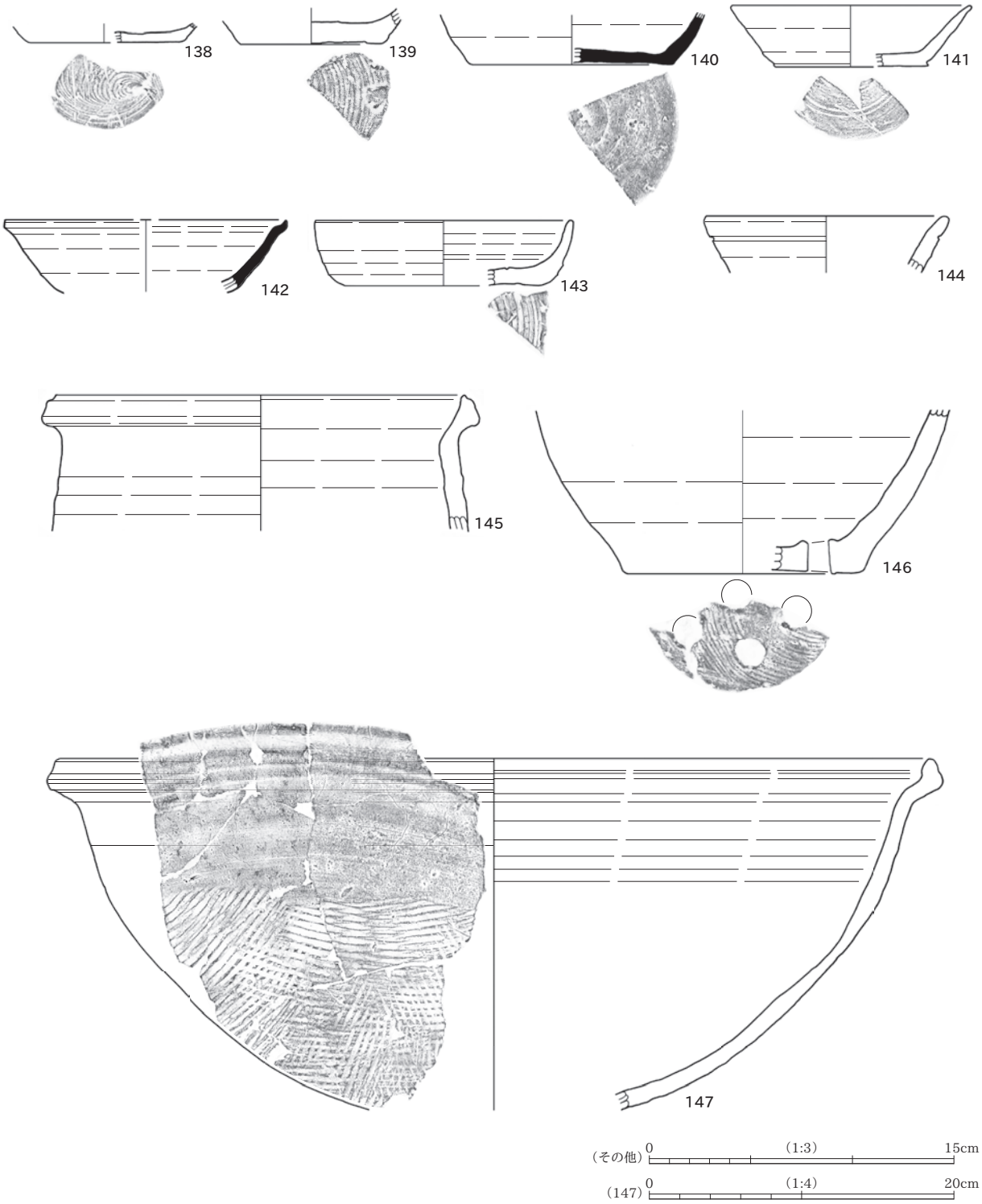
141・143 は土師質土器の皿である。143 は腰が丸味を持ち，厚い。全面ナデ整形される。底部の切り離しは回転糸切りである。141 は 14 ～ 15 世紀前半，143 は 13 世紀に比定される。144 は土師質土器の壺の口縁部と考えられる。外反気味に立ち上がり，口縁部の下位に沈線が 1 条巡る。

140・142 は古代の須恵器である。140 は無台杯で，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。142 は折縁杯で堅い焼成である。



第 39 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（2）

145 ～ 147 は古代の土師器である。145 は長胴甕で，口縁部はなでられる。口縁端部は摘み上げられ，外面は凹線状に浅く窪む。146 は甑の底部で，外面から内面に向かって穿たれた直径 0.9㎝から 1.4㎝の円形の孔が 4 箇所遺存する。焼成前に穿孔されたもので，内面の孔の縁は粘土が盛り上がる。底部は回転糸切りにより切り離される。147 は鍋で底部を欠く。外面下半は平行叩き，外面上半と内面はロクロナデで整えられる。



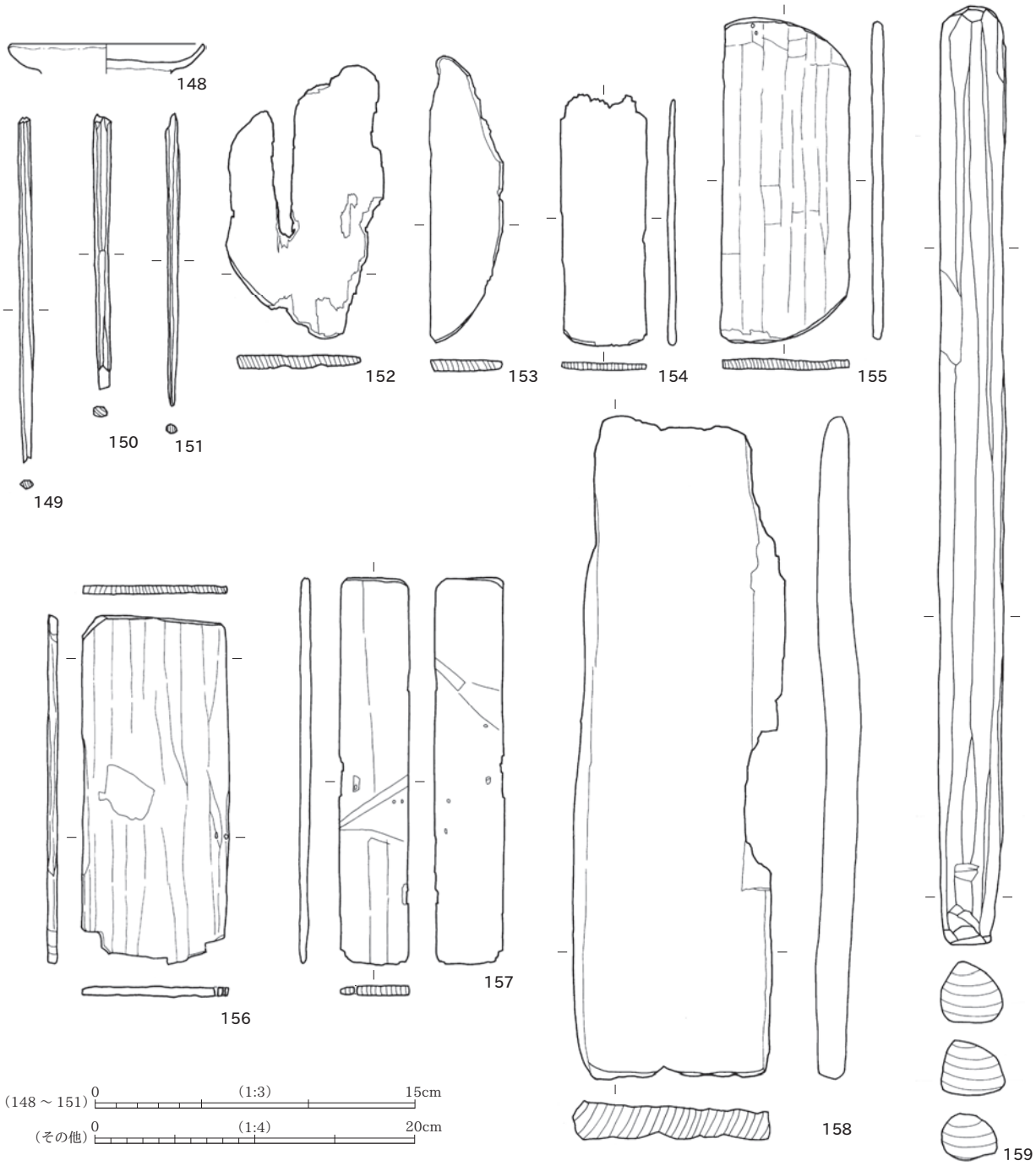
第 40 図　調査区⑥・⑨ 遺構外出土遺物（3）

3　木　製　品（第 41 図 , 図版 26）

木製品は井戸 3 ～ 6 の底部付近から漆器・箸・曲物・折敷・板状木製品・井戸側材に転用された桶材・棒状木製品などが出土している。その内 , 約 3 分の 2 が井戸 6 からの出土である。遺存状態が悪いものが多いが , その中で比較的状態が良い 12 点を掲載した。遺物観察表は 72・73 頁である。

148 は漆器の小皿で , 低い高台が削り出される。全面黒色漆が施されるが , 高台内面は漆が剝落している。井戸に遺棄された際には , 既に漆は剝落していたとも考えられる。漆器はこれ 1 点のみである。13 ～ 14 世紀のものと思われる（水澤 2007）。

149 ～ 151 は箸である。箸は井戸 6 の埋土 3 層から 5 点出土している。縦全面に細かい加工が施され , 断面が多



第 41 図　木製品

角形になる。149・150 は両端を , 151 は片端を欠損する。

152 ～ 155 は曲物底板である。152･153･155 は , 推定直径が 25cm 前後 , 厚みが 0.7mm 前後になり , 同一規格のものと思われる。155 には加工痕が切断面及び表裏面に認められる。木取りはすべて柾目である。針葉樹材は , 早材と晩材とで細胞壁の厚さに多少の違いはあるが , 板目材は細胞の密度が高い晩材部が層状に配置される。一方 , 柾目材は密度が低いため保水性も低い。こうした特徴は , 容器や転用材としての用途の違いを示しているのではないだろうか。

156 は折敷の底板である。長方形の板材で角が一箇所 , いわゆる隅切りのようにカットされている。両面に幅 0.7 ～ 1.7cm の加工痕が認められ , 2 か所に木釘が残る。木取りは柾目である。

157･158 は用途不明の長方形の板状木製品である。157 は板の下端に向かって薄くなるよう表裏面を加工している。両面に斜めの擦痕が認められる。木取りは柾目で , 未貫通の木釘痕が 4 か所 , 釘穴が 1 か所残る。158 は両面がやや腐食しており加工痕は確認できないが , 下端部はノコギリによる切断面が一部確認される。外からの圧力により縦方向に湾曲し , 歪んでいる。上端が欠けているが , 厚さがあり井戸の側板の可能性がある。木取りは柾目である。

159 は用途不明の棒状木製品である。芯去りミカン割材を利用し , 樹皮が一部残る。上方の先端は丸味を帯び , 細かく削られて断面は楕円形になる。

4　金 属 製 品

金属製品は土坑 7･12･19･26･27, 井戸 1 ～ 4, 溝 4･7, 遺構外から鉄製品 70 点 , 銅製品 3 点 , 銭貨 12 点が出土した。実測可能な鉄製品 25 点 , 銅製品 3 点を図化し , 銭貨 5 点の拓本を掲載した。遺物観察表は 73・74 頁である。

a 鉄製品（第 42 図 , 図版 27）

160･161 は平棟造りの刀子である。茎は不明瞭で身も欠損している。身と茎の境は錆が著しいため関の形態は不明瞭である。

162 は平棟造りの刀である。身の大半および茎は欠損している。

163 は雁股鏃である。逆刺の開きは緩やかで , 逆刺は両方とも先端が欠損している。断面は外側が厚く内側が薄くなる。身と茎の境に篦被と呼称されている突起があり , 茎の断面は方形である。雁股鏃は , 県内では上越市樋田遺跡（室岡ほか 1990）, 新潟市木場集落（青木 1964）, 阿賀野市境塚遺跡（新潟県教委 2016）などからも出土している。雁股鏃は狩猟用に用いられる。

164 は柳葉系鉄鏃と考えられる。身の断面が偏平な四辺形で , 茎の断面は方形である。両端は欠損し , 全体的に錆が著しいため形状は不明瞭である。柳葉系の鏃は軍事用に用いられた。

165 ～ 173 は和釘で , 長さが 5cm 未満で小型の 165・166, 5cm 以上 10cm 未満で中型の 167 ～ 171, 10cm 以上の 172・173 に大別される。小型と中型の横断面はすべて方形で , 大型は長方形という特徴を示す。165 はほぼ完形で , 先端が鉤状に曲がる。166 は先が欠損し , 頭部は鉤状に鋭く曲がる。167 は先端がわずかに欠損するがほぼ完形。168 は完形で , 頭部が平らに曲げられる。169 は頭部が欠損する。170・171 は , 頭部と先端が欠損する。172･173 は大型で , 頭端部と先端が欠損する。体部が歪んでいる。

174 は鍋で , 湯口が欠損している。口縁内面に一段の稜を持ち , 口縁端部は肥厚し , 平坦な面をもつ。鋳物のため , 出土してから急激に劣化が進み , すぐに検出当初の形を成さないものになった。実測図は破片になる前に急いで作成したものである。推定口径 30.0cm。鍋の形態からみて脚は最初から付いてなかったとも考えられる。内耳は全

ての破片を点検したが確認できなかった。口縁と体部との境の屈折部の形態から内耳は付いていた可能性もあるので，五十川氏の分類（五十川 1992）では鍋 C 類になろう。内耳鍋は県内では上越市子安遺跡（上越市教委 2009）・寺町遺跡（吉川町教委 1995）・新潟市小坂居付遺跡（佐藤ほか 2012）・糸魚川市岩倉遺跡（県教委 2003）などから出土している。

175 は鍋の丸型湯口と考えられる。

176 は蝶番である。

177 は鎹である。断面は長方形で，片方の脚部が欠損している。

178 は止金具で，ほぼ完形であると考えられる。断面は直方形で，片方の先が直角に曲がる。

179 は引手金具と考えられ，片側半分が欠損している。

180 は鏨の頭部と考えられ，断面は五角形である。

181･182 は用途不明の板状鉄製品である。大型の和釘の可能性があり，断面は長方形である。

183･184 は直径約 2㎝の真球になる丸玉で，火縄銃の玉に比して大きい。鉄砲の弾丸とも考えられるが，ひしゃげておらず径も大きい。

b 銅製品（第 42 図，図版 27）

185 は花瓶の底部である。体部と底部の境は「く」の字に曲られ，稜線が巡っている。高台端部は内側に屈折する。底部の円板は高台内側に差し込んで取り付けられている。

186 は銅製仏具の二器（濾過器ないしは塗香器の容器）の蓋である。宝珠形の摘みが付き体部と同時に鋳造されている。

187 は青銅製の観音立像である。調査区⑨の Cd3-2 撹乱から出土している。総高 74.6㎜，像高 68.3㎜，台座幅 18.4㎜，重量 57.64g である。顔立ちは明瞭ではない。「第Ⅵ章まとめ」で詳細を記す。

c 銭貨（第 42 図，図版 27）

銭貨は全部で 19 点出土している。表 8 に一覧表を掲げ，うち遺構出土（188 ～ 191）を主に 5 点を図示する。

188･189 は篆書の元豊通寶で，190 は篆書の皇宋通寶である。191 は篆書の元符通寶である。

遺構外は全て表土からの出土で，9 点が Fi 区に集中する。192 は真書の永楽通寶である。密着状態での出土例が 3 組あり，皇宋通寶 + 紹聖元寶，皇宋通寶 + 元豊通寶 + 永楽通寶，皇宋通寶 + 永楽通寶 + 永楽通寶である。

表 8　出土銭貨一覧

銭　名	国　名	初鋳年（西暦）	篆書	真書	行書	計
天聖元寶	北宋	1023		1		1
皇宋通寶	北宋	1039	3		1	4
熙寧元寶	北宋	1068		1		1
元豊通寶	北宋	1078	2		2	4
元祐通寶	北宋	1086	1			1
紹聖元寶	北宋	1094			1	1
元符通寶	北宋	1098	1			1
永楽通寶	明	1408		4		4
判読不能						2

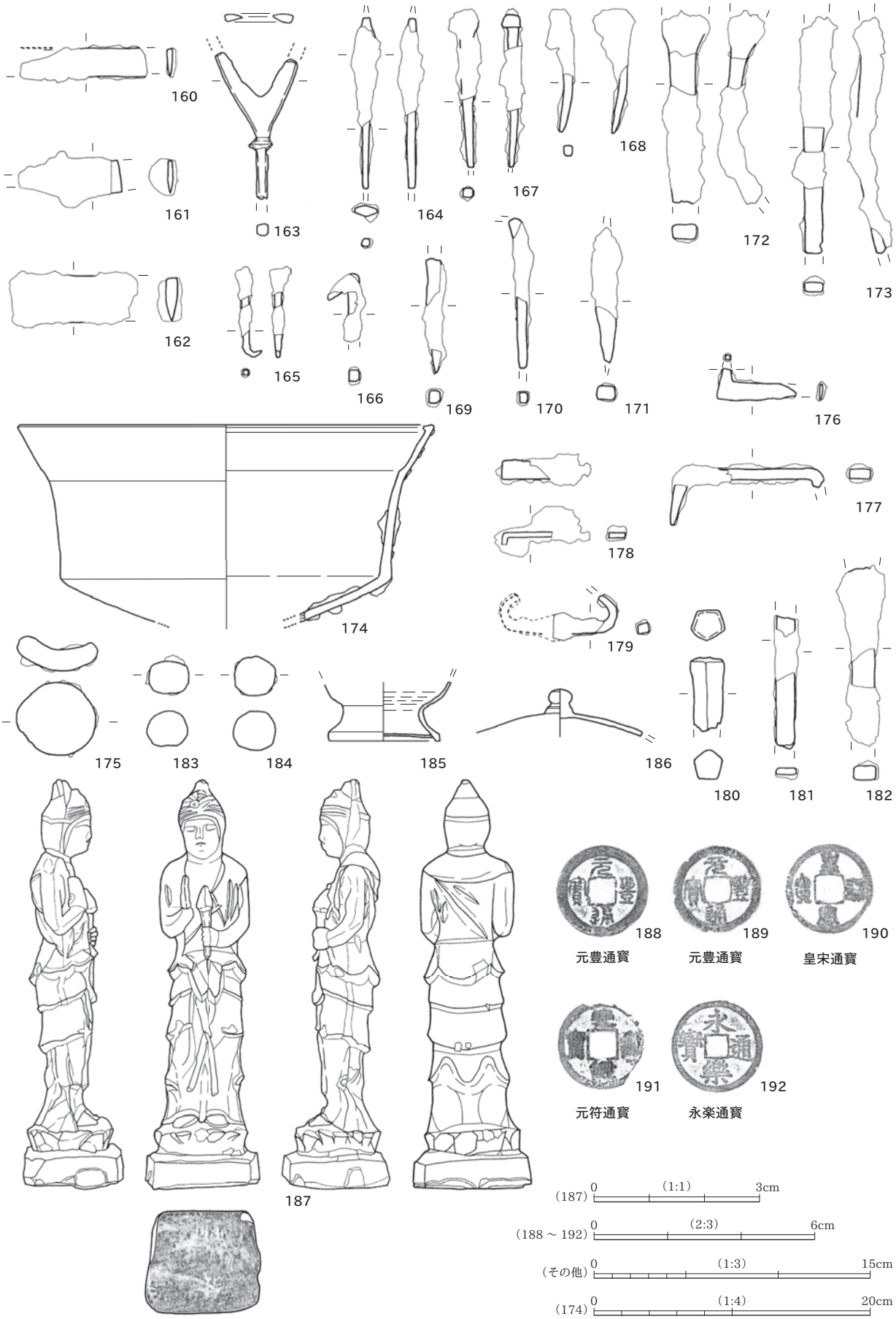
5　鍛冶関連遺物等（第 43 図，図版 27）

鍛冶関連遺物は井戸 2･3, 溝 2, 遺構外から椀形滓 2 点，鉄滓 10 点，羽口 2 点が出土している。実測可能な 6 点を図示した。観察表は 74 頁である。

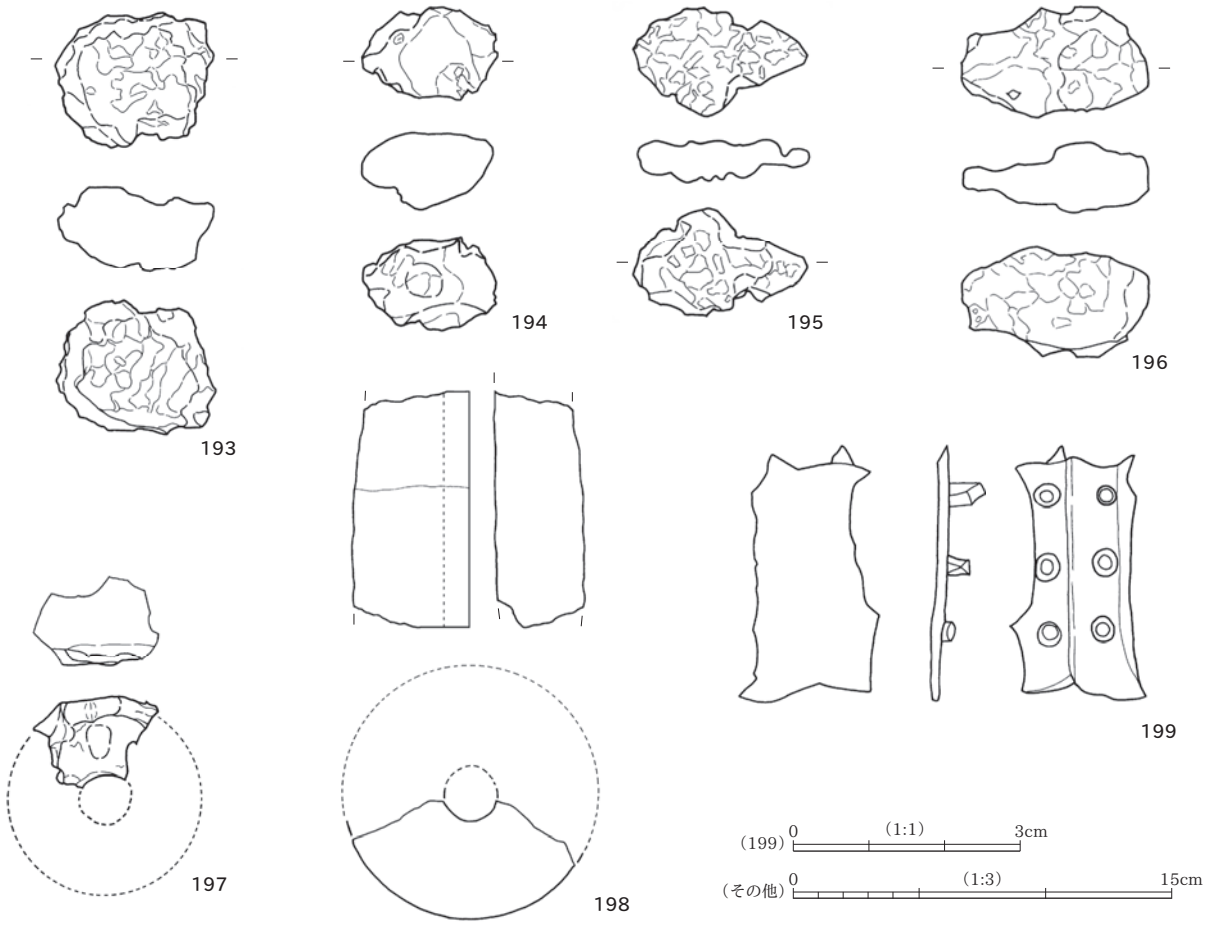
193･194 は椀形滓である。193 の重さは 111.69g を量る。194 は表面に気泡を有し，重さは，69.74g を量る。

195･196 は鉄滓である。195 は 43.22g を量る。196 は 133.29g を量る重いもので，鉄塊の可能性も考えられる。

197･198 は羽口である。197 は先端部にタールが付着し，通風孔の径は 2㎝を測る。198 は先端近くの破片と考


160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
元豐通寶
189
元豐通寶
190
皇宋通寶
191
元符通寶
192
永楽通寶
(187) 0 (1:1) 3cm
(188 ～ 192) 0 (2:3) 6cm
(その他) 0 (1:3) 15cm
(174) 0 (1:4) 20cm

第 42 図　金属製品



第 43 図　鍛冶関連遺物等

えられる。197 に比して直径も太く，先に行くに従って細くなる。通風孔の直径は 2.0 ～ 2.2㎝を測る。胎土に長石を多量に含む。

199 は鉄製小札の上面に塗布した黒色漆片である。表面は円滑で黒色漆は各孔の中までしっかり入り込み，塗り固められている。小片のため，分類形態は不明である。

6　石　製　品

井戸 4, 溝 2, 溝 4, 遺構外からは石臼が，井戸 2, 井戸 4, 土坑 11, 遺構外からは砥石が，遺構外から，硯及び転用砥石が出土している。実測図は石臼（第 44・45 図），硯・砥石（第 46・47 図）にそれぞれ分けて掲載した。観察表は 75 頁である。

a 石 臼（第 44・45 図，図版 28）

石臼が最も多く出土した遺構は井戸 4 であり，上臼 5 個体，下臼 2 個体を含む計 11 点が出土した。その中で遺存状態の良い 4 点を図示した(200 ～ 203)。いずれも石材は花崗岩で，芯棒･支持木は確認できない。特筆すべきは，ほぼ全ての石臼の表裏面や側面には，被熱による変色や炭化物の付着，剥落といった痕跡がある。使用時に受けたものではなく，廃棄後に何らかの理由で焼けたものと考えられる。

上臼は，径・摺り目のパターンから，①反時計回りで使用された手挽き臼であること，② 溝の分画が六分画と考えられること，③供給口反対側の側面に挽手を打ち込む穴があけられていること，④上臼下面には供給口の先にものくばりがあるといった共通点が認められる。なお 202･206･208 にものくばりは遺存していないが，上面（窪み）

が平坦であることから，ものくばりがあったものと考えられる。下臼には，芯棒の取り付け孔は抉りがほとんどなく上方へ貫通する点が共通する。芯受は，断面が 200 のように先が尖るものと 201 のように台形のものとがある。200 ～ 202 は上臼である。200 には挽手穴が新旧 2 個あり，上段のものが欠損した後に新たな挽手穴が穿たれている。また，側面には持手用の凹みが 1 箇所ある。203･204 は下臼である。203 は被熱による摺り面の剥落が著しく，溝の分画数等を確認することができない。剥落が著しいため，被熱痕が確認できるのは摺り目が遺存する部分だけである。したがって，被熱範囲の図示はしていない。204 は溝の分画は六分画と考えられる。205 は上臼で，作業効率を上げるために工具をやや傾けて抉ったのであろう，供給口が垂直ではなく，外側に傾斜しており，ノミと思われる工具痕が放射状に残る。溝の分画は八分画と考えられる。側面は被熱による剥落が著しい。

206 ～ 208 は遺構外から出土したもので，いずれも上臼である。径，反時計回りでの使用，溝の六分画，挽手の打ち込み穴の位置は，200 ～ 202 とほぼ共通する。

b 硯（第 46 図，図版 29）

209 は粘板岩製の長方形硯で，海と陸との間は集中的に磨面が凹んでいるが墨痕等は見られない。陸は縁から 1 ㎜弱，海は 4㎜強の深さがある。陸は，底に穴が穿くほど使用による磨滅が著しい。

c 砥 石（第 46・47, 図版 29）

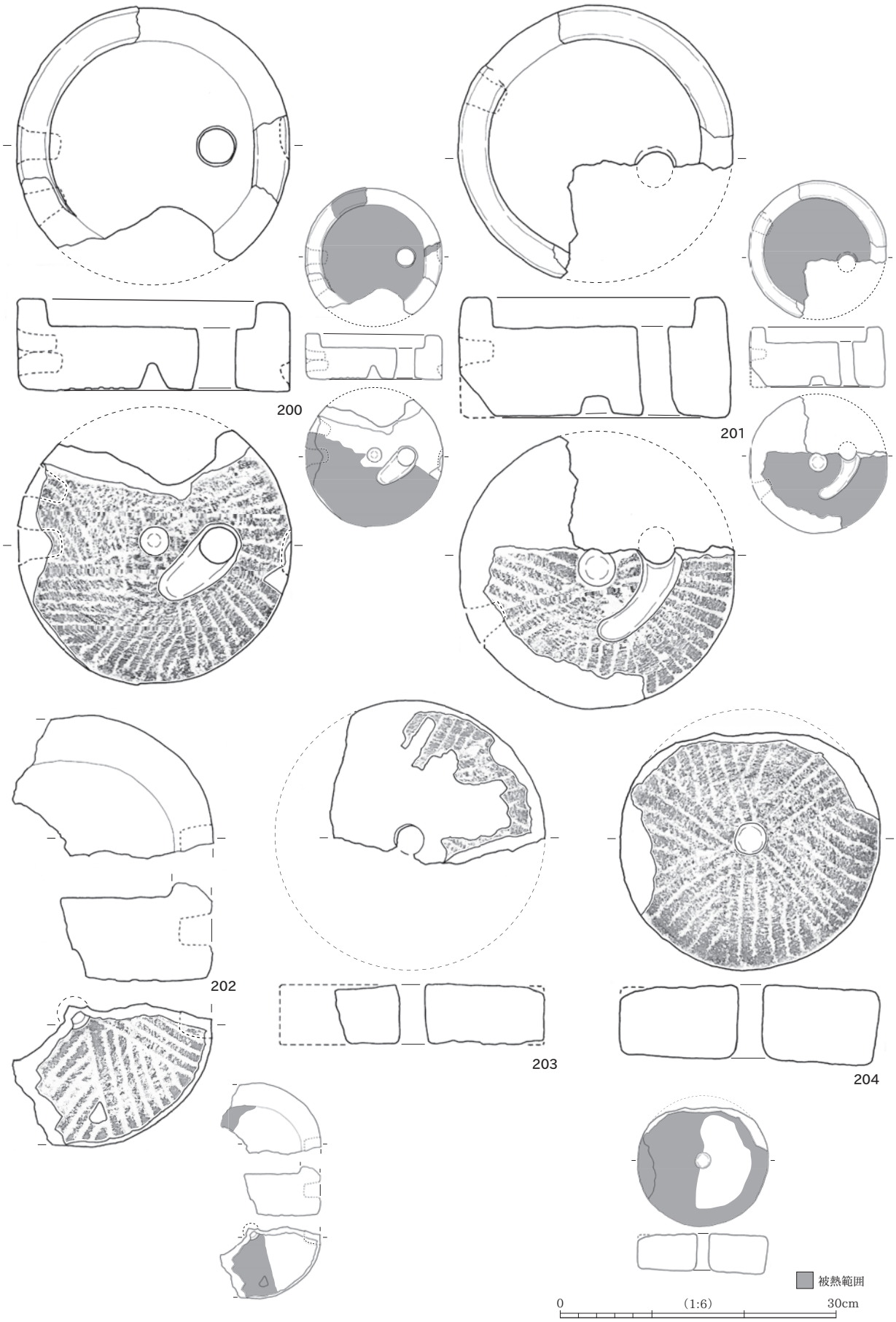
210 は仕上げ砥石である。石材は頁岩で，京都鳴滝産と考えられる。表裏面が摩耗し，3 側面にはツル鋸の痕が残る。また，上半部にススの付着が見られる。211・212 は中砥石で，211 は在地産の凝灰岩，212 は流紋岩と考えられる。211 は上・下両端は欠損しているが，表裏・両側面は砥面として利用されている。212 は表・両側面が摩耗し，上端には層状の石目が見える。下面は被熱し，橙色化している。213 は安山岩の中砥石で，被熱による炭化・剥落・割れがみられる。214 ～ 218 は，流紋岩製の中砥石で，この石は加治川上流に広く分布している。214 は下端が欠損，表裏および左側面下半は摩耗しており，右側面および左側面上半は自然面を残す。正面と両側面には，細く鋭い線条痕が多数見られる。215 は表・両側面が摩耗している。特に両側面はよく使われて平滑しており，正面には線条痕が見える。216 は表裏・両側面が摩耗しているが，特に右側面を除く 3 面の使用が顕著である。上下両端は自然面を残す。217 は表裏・両側面が摩耗しているが，全体は素材である自然礫の形状を残す。裏面は被熱による剥落が著しい。218 は，正面および両側面の 3 面が使用によって緩やかに湾曲する。下面は，素材の分割面で，飛び出ている稜状の部分のみが磨滅している。被熱による炭化がみられるが，裏面にその痕跡が認められないこと，側面の磨滅面の残存状態から，全体のほぼ半分が欠失していると考えられる。

d 転用砥（第 47 図，図版 29）

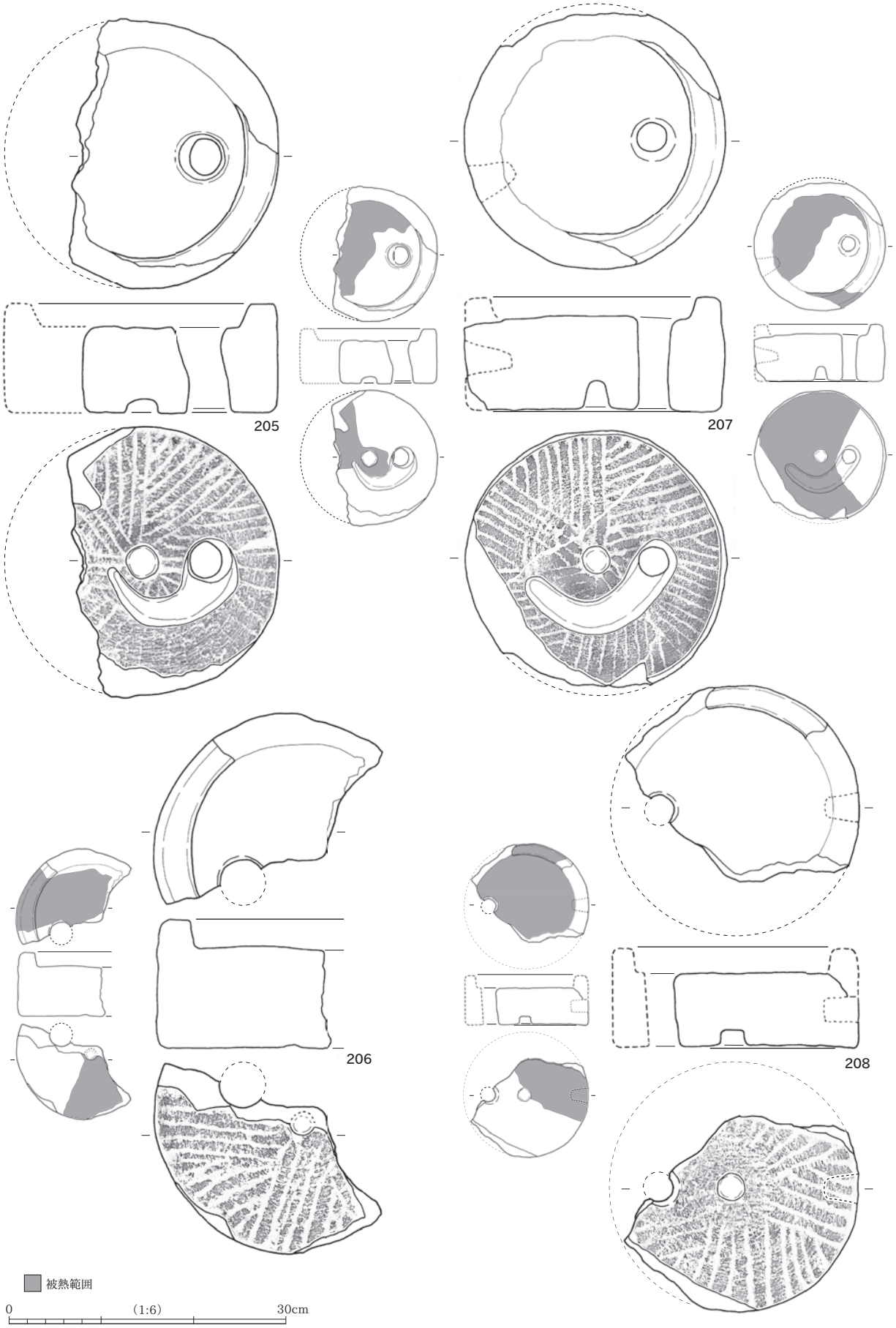
219 は珠洲焼甕の体部片で，土器片を研削具として転用した転用砥と考えられる。手の平サイズで，割れ口全周を砥面としている。側面の直線部分よりも角の摩耗が著しく，細かな部位の研磨に用いられたのであろう。

e 器種不明石製品（第 47 図，図版 29）

220 は横断面が 7 ～ 8 面で多角形を成しており，先端は意識的に尖らせようとする意図が認められる。斜格子や斜線あるいはアバタ状に整形してから研磨されており，窪んではいないものの砥石として利用された可能性もあるが，何らかの石造物を意図した整形過程と考えられる。閃緑岩製で，他の砥石に一般的な石材ではない。



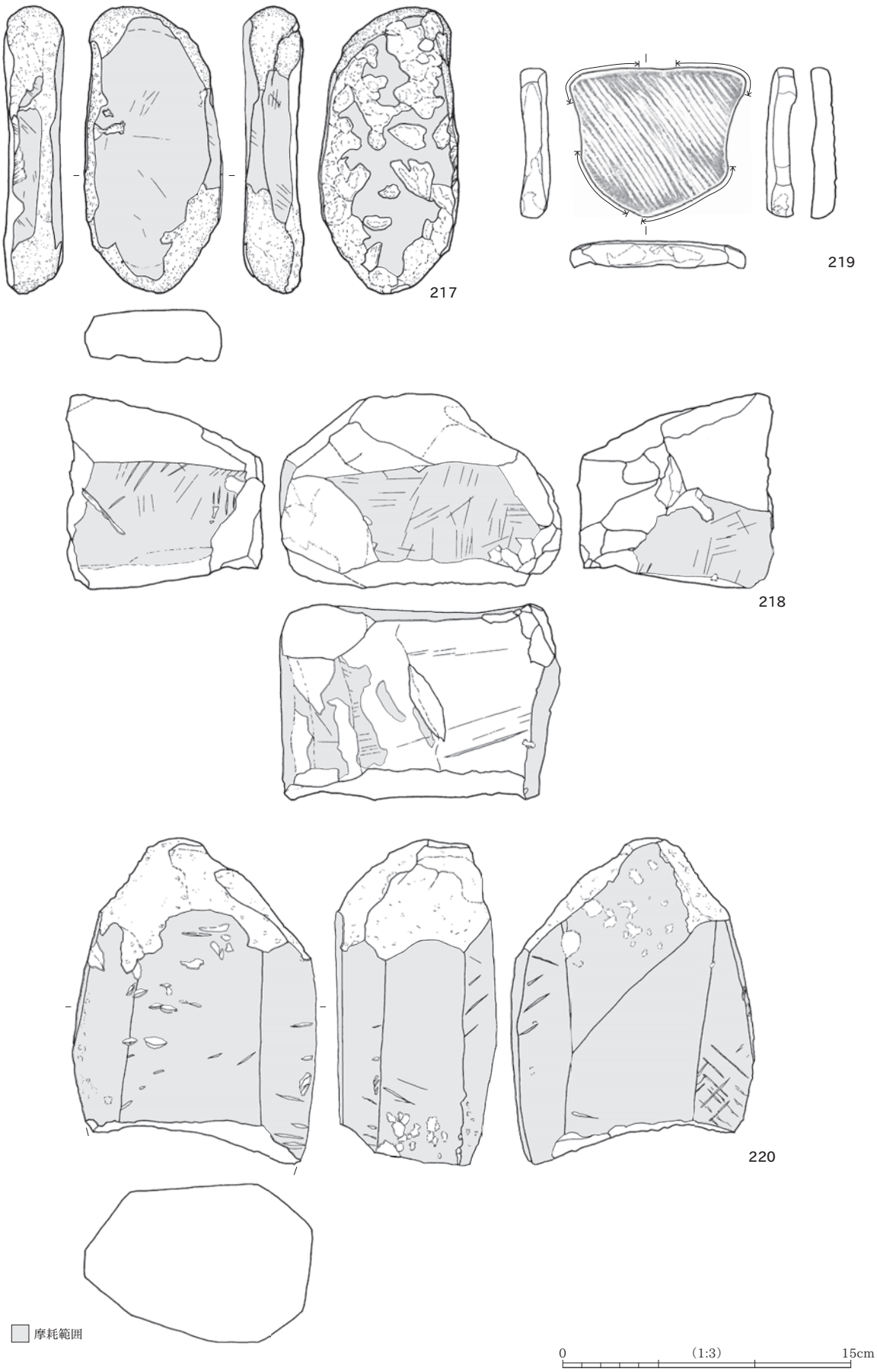
第 44 図　石製品（1）



第 45 図　石製品（2）

209
210
211
212
213
214
215
216
摩耗範囲
(209・210) 0 (1:2) 10cm
(その他) 0 (1:3) 15cm

第46図　石製品（3）



第 47 図　石製品（4）

表 9　遺物観察表（1）　確認調査 出土土器・陶磁器

報告No.	取上No.	トレンチ	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	調整・文様等	色　調	時　期	備　考	被熱	挿図	写真図版
						口径	器高	底径								
1	-	⑭トレ		白磁	皿	10	3.1	4.3	口縁～底 1/6	全面白磁釉，畳付：無釉	釉：10YR8/1 灰白	15 世紀後半～16 世紀前半		-	3	17
2	-	⑫トレ		白磁	皿	-	-	7	腰～底 2/9	白磁釉，畳付～内：無釉	釉：N8/ 灰，胎：10YR7/4 にぶい黄橙	15 世紀後半～16 世紀前半		-		
3	-	④トレ		白磁	碗	-	-	5	底部 1/2	外：白磁釉，見込み：釉ハギ，高台内：無釉，削り出し高台	釉：10YR7/2 灰白，胎：:2.5Y7/1 灰白	15 世紀？		-		
4	-	⑫トレ		越前	大甕	-	-	-	破片	内 :3 本単位タテ指圧痕	外 :7.5YR3/3 暗褐，内 :7.5YR5/3 にぶい褐	越前Ⅳ - 3 期（15 世紀後半）	外：自然釉	-		-
5	-	⑫トレ		越前	大甕	44.9	-	-	口縁～肩 1/9	内 :3 本単位タテ指圧痕	外：口縁 7.5YR3/2 黒褐，肩 7.5Y4/2 灰褐，内：口縁 5Y4/2 灰オリーブ，肩 7.5YR4/4 褐	越前Ⅳ - 3 期（15 世紀後半）	外：自然釉・降りもの付着 内：付着物	-		22
6	-	⑪トレ		土師質土器	皿	11	2.8	8	口縁～底 1/11	ロクロ成形 ヘラ切り後ナデ	10YR8/2 灰白	15 世紀前半		-		24
7	-	⑪トレ		土師質土器	皿	-	-	-	口縁～底 2/5	ロクロ成形 ヘラ切り	10YR8/2 灰白	15 世紀前半		-		24
8	-	①トレ		土師質土器	小皿	-	-	7.2	底 1/6	ロクロ成形 ヘラ切り	外 :2.5Y7/2 灰黄，内 :10YR6/2 灰黄	13 ～ 14 世紀		-		-
9	-	④トレ		土師器	杯	-	-	-	破片		10YR8/2 灰白	古代		-		25

表 10　遺物観察表（2）　調査区② 遺構外出土土器・陶磁器

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	調整・文様等	色　調	時　期	備　考	被熱	挿図	写真図版
							口径	器高	底径								
10	11	遺構外	② Gd	整地	珠洲	壺	-	-	-	破片	外：平行叩き 海綿骨針	N8/ 灰	珠洲Ⅴ期		-	32	18
11	1	遺構外	② Hd	整地	珠洲	壺	-	-	-	破片	外：綾杉叩き 海綿骨針	10YR6/3 にぶい黄橙			有		
12	5	遺構外	② Gd	整地	珠洲	甕	-	-	-	破片	外：平行叩き 海綿骨針	N5/ 灰			-		20
13	9	遺構外	② Gd	整地	珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	内：卸目 海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅳ期（14 世紀）		-		21
14	10	遺構外	② Hd	整地	珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	口端：櫛描波状文	7.5Y5/1 灰	珠洲Ⅴ期（14 世紀後半～15 世紀前半）		-		
15	8	遺構外	② Hd	整地	珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	内：幅 3.5㎝ 11 条一単位の卸目，海綿骨針	2.5Y6/1 黄灰			-		
16	4	遺構外	② Gd	整地	笹神	甕	-	-	-	破片		10YR3/2 黒褐	13 世紀後半	内：ゴマ状の自然釉	-		24
17	3	遺構外	② Gd	整地	越前	大甕	-	-	-	口縁 1/12		5YR4/3 にぶい赤褐	越前Ⅴ - 1 期（16 世紀前半）	口端～口内：自然釉 口端：降りもの付着 断面：煤付着 同一個体 6 点出土	有		22

表 11　遺物観察表（3）　調査区③ 遺構出土土器・陶磁器

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	調整・文様等	色　調	時　期	備　考	被熱	挿図	写真図版
							口径	器高	底径								
18	3	井戸 1	③ Gh2 - 2	3 層	越前	壺	-	-	-	破片	内：無文あて具体，指頭痕	5YR4/3 にぶい赤褐色	越前Ⅳ - 3 ～Ⅴ期（15 世紀後半～ 16 世紀）	外：ゴマ状自然釉	-	33	22
19	4・6	井戸 1	③ Gh2 - 3	3 層	越前	擂鉢	31.4	11.8	14.8	口縁～体 1/8	内：幅 2.6㎝ 9 条一単位の卸目，底外：ナデ	2.5Y8/4 淡黄	越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後半）	体外～体内・底内：煤付着	有		23
20	7	井戸 1	③ Gh		越前	擂鉢	-	-	11.2	底 1/6	内：幅 2.5㎝ 8 条一単位の卸目		越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後半）	内：スレ	-		
21	30	井戸 2	③ Gg2 - 5	9 層	青磁	碗	12.6	-	-	口縁～体上半 1/20	外面：鎬蓮弁文	釉 :2.5GY7/1 明オリーブ	14 ～ 15 世紀	井戸掘方埋土	-		17
22	29	井戸 2	③ Gh2 - 1	3 層	古瀬戸	瓶子	-	-	-	破片	外：灰釉（濃緑）・画花文 内：ロクロナデ	外 :7.5Y6/3 オリーブ黄 内 :2.5Y7/2 灰黄	Ⅱ類，古瀬戸中期～後Ⅰ期（14 紀世）		-		
23	28	井戸 2	③ Gg2 - 5	7 層	珠洲	壺Ｔ種	-	-	-	破片	外：綾杉叩き 内：無文あて具 海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅳ期頃（14 世紀頃）	井戸掘方埋土 内・断面：煤付着	-		18
24	18	井戸 2	③ Gg2 - 5	2 層	珠洲	壺Ｔ種	-	-	-	破片	外：平行叩き 海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅳ期頃（14 世紀頃）		-		-
25	23	井戸 2	③ Gh2 - 1	6 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	体～底 1/6	外：体下端ナデツケ 静止糸切り 海綿骨針	5Y6/1 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	井戸掘方埋土 底内：摩耗 井戸 3-35 と同一個体	-		21
26	33	井戸 2	③ Gg2 - 5	9 層	土師質土器	皿	-	-	8	体～底 1/6	手づくね成形 糸切り	10YR8/1 灰白	中世	井戸掘方埋土	-		24
27	37	井戸 2	③ Gg2 - 5	9 層	土師質土器	皿	12	2.5	9	口～底 1/6	ロクロ成形	10YR7/4 にぶい黄橙	中世	井戸掘方埋土	-		
28	27	井戸 2	③ Gh2 - 1	7 層	須恵器	無台杯	-	-	6	体～底 1/6	ヘラ切り	2.5Y7/3 浅黄	古代	井戸掘方埋土	-		25
29	4	井戸 2	③ Gh1 - 1		瓦器	風炉	-	-	-	破片	外：横位ヘラミガキ	外 :7.5YR7/2 明褐灰 内 :2.5Y6/2 灰黄		井戸掘方埋土 外：煤付着	有		24
30	22	井戸 3	③ Gh1 - 5	4 層	珠洲	壺Ｔ種	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：無文あて具 肩外：印花文 海綿骨針	外 :7.5Y5/1 灰 内 :N5/ 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）		-		18
31	16	井戸 3	③ Gh1 - 4	2 層	珠洲	甕	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：無文あて具 海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	漆接合痕	-		20
32	1	井戸 3	③ Gh1 - 4	2 層	珠洲	甕	-	-	-	破片	外：叩き，内：横ヘラナデ 海綿骨針	5Y6/1 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	内外：上方からの胎土カブリ	-		
33	17 20	井戸 3	③ Gh1 - 4	4 層	珠洲	甕	-	-	-	破片	外：斜め（右下り）叩き 内：無文あて具 海綿骨針	外 :5Y5/1 灰 内 :7.5Y5/1 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）		-		
34	2	井戸 3	③ Gh1 - 4	1 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	卸目	7.5Y5/1 灰	珠洲Ⅳ期（14 世紀）		-		21
35	24 25	井戸 3	③ Gh1 - 4		珠洲	片口鉢	-	-	17.5	体～底 1/6	外：体下端ナデツケ， 内：卸目 静止糸切り，海綿骨針	5Y6/1 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	井戸掘方埋土 底内：一部摩耗 井戸 2-25 と同一個体	-		
36	2	竪穴建物 1	⑥ Df	1 層	瀬戸美濃	丸皿	-	-	6	底 1/3	内外：灰釉		大窯第 1 段階（1480 ～ 1530 年頃）	高台内：輪トチン付着	-	34	17
37	1	竪穴建物 1	⑥ Ef1 - 2	1 層	越前	甕	-	-	-	破片	内：ナデ 肩外：ヘラ描き窯印「大」	外 :5YR2/4 極暗赤褐 内 :2.5YR3/3 暗赤褐	越前Ⅴ - 1 期（16 世紀前半）		-		22

表 12　遺物観察表（4）　調査区⑥・⑨ 遺構出土土器・陶磁器

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）口径	器高	底径	遺存度	調整・文様等	色調	時期	備考	被熱	挿図	写真図版
38	1	土坑17	⑨ Ce4 - 3	1 層	瓦質土器	香炉	最大径9.6	3.8	0.3	体下半1/6	手づくね成形 外：縦ヘラミガキ・光沢	外 :7.5Y2/2 オリーブ黒 内 :10YR6/2 灰黄褐		体外 :1 条の沈線	-	34	24
39a 39b	1・4	土坑21・26	⑨ Cf・Cg	1・4層	越前	擂鉢	-	-	-	口縁～底	内：幅 2.0cm8 条一単位の卸目	5Y2/1 黒	越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後葉）	底内：摩滅著しい	-		23
40	3	土坑26	⑨ Cg3 - 3	11 層	青花	碗	-	-	-	体1/10より小さい	外：不明文様 見込み：界線	胎 :7.5GY8/1 明緑灰	16 世紀末～ 17 世紀初頭		-		17
41	6	土坑26	⑨ Cg2 - 3		青花	碗	-	-	4.4	底 3/4	見込み：二重界線，団華文，高台外：二重平行線，高台内：二重界線，「長命冨貴」	胎 :5B7/ 明青灰	16 世紀	縁辺全周打欠き	-		
42	12	土坑26	⑨ Cg3 - 3	7 層	瀬戸美濃	丸皿	11	2.6	6.8	1/4	内外：灰釉	胎 :7.5Y7/2 灰白	大窯第 2 段階（1530 ～ 1560 年頃）	底外：直径 4cm幅 0.9cm の輪トチン付着	-		
43	8	土坑26	⑨ Cg		珠洲	甕	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：無文あて具 海綿骨針	外 :7.5Y6/1 灰 内 :N5/ 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	外：やや磨滅	-		20
44	11	土坑26	⑨ Cg4 - 3		珠洲	甕	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：無文あて具 海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～ 15 世紀前半）	外：胎土カブリ 内外：煤付着	有		
45	5	土坑26	⑨ Cg		珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁	卸目 海綿骨針	5Y6/1 灰	珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13 世紀後半～ 14 世紀）		-		21
46	10	土坑26	⑨ Cg3 - 3	7 層	越前	擂鉢	-	-	-	口縁		外 :2.5Y6/2 灰黄 内 :5Y7/1 灰白			-		23
47	1	土坑12	⑨ Cf2 - 1	1 層	珠洲	大甕	-	-	18	3/4	外：平行叩き，内：無文あて具後斜めナデ・横ナデ，切り離し後ナデ	外 :4/ 灰 内 :6/ 灰	珠洲Ⅲ期（13 世紀後半）	埋設	-	35	18 19 20
48	2	土坑14	⑨ Bb4 - 4		土師質土器	蓋	14	4.5	最大径17.3	4/5	ロクロ成形，体外：右回転ヘラケズリ，口縁内外：ロクロナデ，摘み：ケズリダシ	10YR8/3 浅黄橙	近世後期～近代初頭	骨蔵器蓋，摘み欠損	-	34	25
49	1	土坑14	⑨ Bb4-4		土師質土器	壺	最大径19.0	23.5	12	3/4	ロクロ成形，体外：左回転ヘラケズリ	7.5YR8/4 浅黄橙	近世後期～近代初頭	骨蔵器壺，器壁をケズリ薄く仕上げる 底外：不明墨書	-		
50	12	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	1 層	白磁	端反Ⅲ	11.7	-	-	口縁1/7		N8/ 灰白	Ⅲ E 群（15 世紀後半～ 16 世紀）	井戸掘方埋土	-	36	17
51	23	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	2 層	青花	碗	-	-	4.9	高台	見込み：二重界線，濃い呉須の牡丹文，高台内：二重界線・銘「大明年造」	N8/ 灰白	碗 E 群（16 世紀後半）	縁辺全周打欠き	-		
52	20	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	1 層	瀬戸美濃	丸皿 Aa	10.5	2.5	6.4	口縁～底 1/6	内外：灰釉，内：刻文	10Y7/2 灰白	大窯第 2 段階前半（1530 ～ 1550 年頃）	貼付高台	-		
53	30	井戸 4	⑨ Cg		珠洲	壺 T 種	-	-	-	破片	外：平行叩き，内：無文あて具	2.5Y6/1 黄灰		肩にヘラ描き窯印	-		18
54	25	井戸 4	⑨ Cg4 - 1	2 層	珠洲	片口鉢	32.5	-	-	口縁～体1/12	卸目 海綿骨針	10YR7/4 にぶい黄橙	珠洲Ⅳ期（14 世紀）	井戸掘方埋土 内外：煤付着	有		21
55a 55b	27・28	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	3 層	越前	壺	-	-	10	底 1/6	内：指頭痕，底内：剥落	外：上半 N1.5/ 黒，下半 N4/ 灰白 内 :5YR4/2 灰褐色		被熱，煤付着	有		22
56	36	井戸 4	⑨ Cg		越前	甕	-	-	-	破片	外：スダレ状叩き	外 :7.5YR6/3 にぶい褐色 内 :10YR6/3 にぶい黄橙			-		
57	10 1	井戸 4 井戸 5	⑨ Cg5 - 1		越前	甕	-	-	-	破片		外 :5YR2/4 極暗赤褐色 内 :5Y4/4 暗オリーブ色		内：自然釉・降りもの付着，土坑 13・19 と溝 3 に同一個体	-		
58	18	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	1 層	越前	擂鉢	35.8	11.2	17.2	口縁～底 1/5	外下端：ナデツケ，内：幅 2.5cm 9 条一単位の卸目	2.5Y8/1 灰白	越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後半）	煤付着，体内上半：一部剥落	有		23
59	31	井戸 4	⑨ Cg		越前	擂鉢	-	-	-	破片	内：幅 2.6cm 11 条一単位の卸目	10YR7/2 にぶい黄橙	越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後半）		-		
60	32	井戸 4	⑨ Cg		土師質土器	Ⅲ	11.3	-	-	口縁～底 1/6	ロクロ成形 左回転ヘラ切り	10YR8/2 灰白	古代	内外：煤付着	有		24
61	34	井戸 4	⑨ Cg		土師器	小甕	-	-	7	底 3/5	右回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙	中世		-		25
62	19 20	井戸 5	⑨ Cf		珠洲	瓶子	-	-	-	体 1/9	ロクロ成形 肩外 :2 段の櫛描波状文	外 :N3/ 暗灰 内 :5YR4/3 にぶい赤褐		内：不明付着物	-		18
63	4	井戸 5	⑨ Cf4 - 5	10 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁	海綿骨針	N5/ 灰	珠洲Ⅱ期（13 世紀前半）	井戸掘方埋土	-		21
64	23	井戸 5	⑨ Cf		珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	卸目 海綿骨針	10YR7/1 灰白	珠洲Ⅱ～Ⅲ期（13 世紀）	内：煤付着	有		
65	7	井戸 5	⑨ Cf3 - 5	7 層	土師質土器	小Ⅲ	7	1.8	5	口縁～体 1/4	ロクロ成形，回転糸切り	5YR7/6 橙	13 ～ 14 世紀		-		24
66	21	井戸 5	⑨ Cf	1 層	土師質土器	Ⅲ	-	-	8.2	底 1/5	ロクロ成形，ヘラ切り後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	14 ～ 15 世紀前半	内：煤付着	有		
67	3	井戸 5	⑨ Cf4 - 5	8 層	土師質土器	Ⅲ	12	3	8	口縁3/8	ロクロ成形 幅狭くシャープなロクロ目，回転糸切り後ナデ	7.5YR7/6 橙	13 世紀	井戸掘方埋土 内：煤付着	有		24
68	24	井戸 5	⑨ Cf3 - 5	7 層	土師質土器	Ⅲ	11	3.2	8.2	口縁～底 1/5	ロクロ成形 回転糸切り	外 :7.5YR7/4 にぶい橙 内 :5YR6/6 橙	13 世紀		-		
69	1	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	卸目 海綿骨針	N6/ 灰	珠洲Ⅱ期（13 世紀前半）		-		21
70	14	溝 2	⑨ Df		青花	碗	-	-	-	破片	外：不明文様	10BG7/1 明青灰	碗 C 群（16 世紀中頃）		-	37	17
71	9	溝 2	⑨ Df1 - 3		青花	碗	-	-	-	破片	外：不明文様	10BG7/1 明青灰	碗 C 群（16 世紀中頃）		-		
72	1	溝 2	⑨ Df2 - 3		青花	Ⅲ	10.3	2.2	6	1/8	見込：界線，不明文様	5G7/1 明緑灰	Ⅲ E 群（16 世紀後半）	高台内：四角？枠取り	-		
73	23	溝 2	⑨ Cf		白磁	端反Ⅲ	9.9	-	-	口縁～体 1/9		N8/ 灰	Ⅲ E 群（15 世紀後半～ 16 世紀）		-		
74	7 12	溝 2	⑨ Df1 - 3		瀬戸美濃	丸皿 Ab	-	-	6.6	底 4/5	内外：灰釉 底内：菊花印文	5Y7/4 浅黄	大窯第 2 段階後半（1540 ～ 1560 年頃）	高台内：輪トチン痕	-		
75	24	溝 2	⑨ Df		珠洲	壺 T 種	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：無文あて具後 海綿骨針	外 :N6/ 灰 内 :N4/ 灰			-		18
76	17	溝 2	⑨ Cf		珠洲	壺 R 種	-	-	-	口頸～肩 1/8		N5/ 灰			-		
77	6	溝 2	⑨ Df2 - 3		珠洲	甕	-	-	-	破片	外：平行叩き 内：指おさえ	5Y6/1 灰			-		20

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	調整・文様等	色　調	時　期	備　考	被熱	挿図	写真図版
							口径	器高	底径								
78	3	溝 2	⑨ Cf3 - 3	3 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁	卸目 海綿骨針	2.5Y6/1 黄灰	珠洲Ⅳ期（14 世紀）		-	37	21
79	13	溝 2	⑨ Cf4 - 3		珠洲	片口鉢	-	-	-	破片	体下半 : ナデ・指頭痕 内 : 幅 2.7cm 13 条一単位の卸目	2.5Y6/1 黄灰	珠洲Ⅳ期（14 世紀）		-		
80	10	溝 2	⑨ Cf4 - 3		越前	擂鉢	-	-	-	破片	内 : 幅 2cm 8 条一単位の卸目	10YR7/4 にぶい黄橙		内 : 煤付着	有		23
81	19	溝 2	⑨ Cf		笹神	鉢	-	-	-	口縁	手づくね	5YR4/2		口端～口内外 : 自然釉 , 口内 : ゴマ状の降りもの付着	-		24
82	21	溝 2	⑨ Df		土師質土器	小皿	8	1.1	6.3	1/6	右回転糸切り	5YR7/6 橙	14 ～ 15 世紀前半		-		
83	25	溝 2	⑨ Df		土師質土器	皿	-	-	6.1	底 1/3	右回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙	中世		-		
84	2	溝 3	⑨ Cg		瓦器	火鉢	-	-	-	口縁		10YR7/2 にぶい黄橙	14 世紀	奈良火鉢 , 磨滅著しい	-		
85	11	溝 4	⑨ Cc		白磁	端反皿	11.8	-	-	口縁 1/9		10Y8/1 灰白	皿 E 群（15 世紀後半 ～ 16 世紀）		-		17
86	2	溝 4	⑨ Cc1 - 5	3 層	青磁	皿 I1b	9.5	-	-	口縁 1/6	口縁端部 : 五弁花の一部の切込み ? 底内 : 平行櫛描文	10Y6/2 オリーブ灰	13 世紀末頃		-		
87	1	溝 4	⑨ Bc5 - 5	1 層	青花	碗	-	-	5.4	底 1/3	白色釉 , 畳付～高台内 : 無釉 , 見込み : 蛇ノ目剝ぎ・二重界線・菊花文 , 体部外面下端 : 二重線	5Y8/1 灰 胎土 :10YR8/4 浅黄	漳州窯 16 世紀末	削り出し高台	-		
88	9	溝 4	⑨ Cc4 - 5	1 層	瀬戸美濃	丸皿 A	10	2.4	5.7	口縁～底 1/4	口縁～底・見込み : 貫入 体外 : 釉溜り 回転ヘラケズリ	半 :7.5Y6/2 オリーブ灰 外下半 :2.5Y7/3 浅黄	大窯第 2 ～ 3 段階（1530 ～ 1590 年頃）		-		
89	8	溝 4	⑨ Cc5 - 4	2 層	珠洲	壺 R 種	-	-	-	肩 1/8		外 :5Y5/2 灰オリーブ 内 :5Y7/1 灰白	珠洲Ⅳ期頃（14 世紀頃）	外 : 自然釉	-		18
90	3	溝 4	⑨ Cc5 - 4	1 層	珠洲	甕	-	-	-	破片	外 : 平行叩き , 内 : 無文あて具 海綿骨針	2.5Y6/1 黄灰			-		20
91	7	溝 4	⑨ Cc1 - 5	2 層	越前	擂鉢	-	-	14.8	体～底 1/4	体外 : 指頭痕 , 内 : 卸目 , 底外 : ナデ	外 :5Y6/2 灰オリーブ 内 :2.5Y7/3 浅黄	越前Ⅳ - 3 期（15 世紀後半～ 16 世紀）	内 : 磨滅著しい , 煤付着	有		23
92	1	溝 5	⑨ Dc1 - 5		青花	皿	-	-	8	底 1/6	畳付 : 無釉・砂付着 , 見込み : 花文 ? 呉須 , 高台内 : 銘「福」呉須	5BG7/1 明青灰	B2 群又は F 群 ?		-		17
93	2	溝 5	⑨ Dc1 - 5		瀬戸美濃	丸皿 Aa	12.4	2.7	8.5	口縁～底 1/8	畳付 : 無釉 , 口縁～底 : 貫入 , 内 : 刻文・二重界線	5Y8/2 灰白	大窯第 2 段階前半（1530 ～ 1550 年頃）		-		
94	1	ピット 1	⑥ De5 - 5	1 層	越前	甕	-	-	-	体上 1/9	ロクロ成形	外 :2.5Y6/2 灰黄 内 :7.5YR6/3 にぶい褐	越前Ⅳ - 3 期（15 世紀後半）	肩外 : ヘラ描き窯印	-		22
95	2	ピット 9	⑨ Ce4 - 5		土師器	椀	11.9	4.5	5.1	口縁～底 2/3	右回転糸切り	5YR6/8 橙	9 紀世末～ 10 紀世初	体外 : 墨書「廾」	-		25
96	1	ピット 9	⑨ Ce4 - 5		土師器	椀	11	4	5.5	口縁～底 3/4	右回転糸切り	7.5YR6/8 橙	9 紀世末～ 10 紀世初		-		

表 13　遺物観察表（5）　調査区⑥・⑨ 遺構外出土土器・陶磁器

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	調整・文様等	色　調	時　期	備　考	被熱	挿図	写真図版
							口径	器高	底径								
97	117	遺構外	⑨ Cj		青磁	碗	-	-	-	口縁	外 : 蓮弁文	10Y6/2 オリーブ灰	碗 B - 4 類（15 世紀）		-	38	17
98	15	遺構外	⑨ Cj4 - 2		青磁	碗	-	-	6.2	底 3/4	高台内 : 釉剝ぎ	N8 灰白 高台内 :10YR7/4 にぶい黄橙	15 世紀	煤付着	-		
99	132	遺構外	③ Fh		青磁	碗	-	-	6.5	底 2/7	高台内 : 釉剝ぎ	10Y6/2 オリーブ灰	15 世紀	断面 : 煤付着	有		
100	133	遺構外	⑨ Cd		青磁	折縁皿	12.3	-	-	口縁	内 : 蓮花文	5GY7/1 明オリーブ灰	13 世紀末～ 14 世紀前半		-		
101	14	遺構外	⑨ Cj5 - 3		白磁	皿	-	-	4	底 2/5	底外 : 無釉・回転ヘラケズリ 見込み : 劃花文	外 :10Y7/1 灰白 底 :2.5Y7/1 灰白	12 ～ 13 世紀		-		
102	8	遺構外	⑨ Cd		白磁	合子身	-	-	3.5	底 3/5	底外 : 無釉・回転ヘラケズリ	10YR8/1 灰白	13 世紀頃		-		
103	115	遺構外	⑨ Cj		中国	天目碗	11.5	-	-	口縁 1/6		10YR1.7/1 黒			-		
104	104	遺構外	⑨ Bj4 - 1	7b	瀬戸美濃	天目茶碗	12.5	-	-	口縁～体 1/12	外下端 : 露胎	10YR1.7/1 黒	E 群大窯第 1 段階（1480 ～ 1530 年頃）	漆継ぎ	-		
105	71	遺構外	⑨ Cj2 - 2		古瀬戸	花瓶Ⅱ	-	-	7	頸下 2/9	ロクロナデ 外 : 灰釉	外 :7.5Y6/3 オリーブ黄 内 :2.5Y7/1 灰白	古瀬戸後期		-		
106	134	遺構外	⑥ Dg		古瀬戸	香炉	10.4	2.6	7.8	口縁～底 1/11	口～体 : 鉄釉 底 : 露胎	口縁 :5Y2/2 オリーブ黒 体 :2.5Y8/2 灰白	古瀬戸後期	貼り付け高台	-		
107	7	遺構外	⑨ Cd		珠洲	壺 T 種	-	-	-	破片	外 : 平行叩き 内 : ヨコナデ	N6/ 灰	珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13 世紀後半～ 14 世紀）		-		18
108	119	遺構外	⑨ Cj		珠洲	壺 T 種	-	-	-	破片	外 : 綾杉叩き 内 : 無文あて具	外 :N5/ 灰 内 :N6/ 灰	珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13 世紀後半～ 14 世紀）		-		
109	6	遺構外	⑨ Cd		珠洲	壺 R 種	-	-	-	破片		N7/ 灰白	珠洲Ⅱ～Ⅳ期（13 世紀～ 14 世紀）		-		
110	10	遺構外	⑨ Ci4 - 1		珠洲	壺 R 種	-	-	10.6	底 3/8	外 : ナデ , 静止糸切り	N5/ 灰	珠洲Ⅴ期（15 世紀前半）	内・底外 : 煤付着	有		
111	14	遺構外	⑨ Bh		珠洲	壺 R 種	-	-	9.3	底 1/5	外 : 縦ヘラナデ 静止糸切り	外 :N6/ 灰 内 :N4/ 灰		体外 : タール状の付着物	-		
112	3	遺構外	⑨ Cd3 - 2	1 層	珠洲	壺 K 種 ?	-	-	12.7	底 1/6	静止糸切り後ヘラナデ 海綿骨針	5Y6/1 灰	珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13 世紀後半～ 14 世紀）	内 : 煤付着	有		
113	135	遺構外	⑨ Bh		珠洲	甕	-	-	-	口縁	外 : 平行叩き 内 : 無文あて具	5Y6/1 灰		内 : 煤付着	-		20
114	137	遺構外	⑨ Bi		珠洲	甕	-	-	-	破片	外 : 平行叩き 内 : 無文あて具 海綿骨針	10Y5/1 灰			-		
115	138	遺構外	⑨ Df		珠洲	甕	-	-	-	破片	外 : 平行叩き 内 : 無文あて具 海綿骨針	N6/ 灰			-		
116	140	遺構外	⑨ Cc		珠洲	甕	-	-	-	破片	外 : 平行叩き 内 : 無文あて具 海綿骨針	N5/ 灰			-		

報告No.	取上No.	遺構	調査区グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）口径	器高	底径	遺存度	調整・文様等	色調	時期	備考	被熱	挿図	写真図版
117	4	遺構外	⑨ Cd3 - 2	1 層	珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁	内 : 卸目 海綿骨針	外 :5Y6/2 灰オリーブ 内 :10YR6/4 にぶい黄褐	珠洲Ⅲ期（13 世紀後半）		-	38	21
118	143	遺構外	⑨ Ch		珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁		N6/ 灰			-		
119	141	遺構外	⑨ Bi		珠洲	片口鉢	20	-	-	口縁 ～体 1/10		外 :N5/ 灰 内 :N6/ 灰			-		
120	25	遺構外	⑨ Cj5 - 2		珠洲	片口鉢	-	-	16	底 1/6	内 : 卸目 外 : 深い指頭痕 2 ヵ所 静止糸切り	5Y6/1 灰	珠洲Ⅳ～Ⅴ期（14 ～ 15 世紀前半）	内外 : タール状の付着物 , 内 : スレ	-		
121	12 82	遺構外	⑨ Cj4 - 2		越前	大甕	-	-	-	口縁 ～肩 1/10		外 :2.5YR3/1 暗赤灰 内上半 :5Y3/2 オリーブ黒 内下半 :2.5YR3/1 暗赤灰	越前Ⅴ - 1 期（16 世紀前半）	口端～口内・肩 外 : ゴマ状自然釉・降りもの付着	-	39	22
122	146	遺構外	⑨ Ch		越前	甕	-	-	-	口縁	ロクロナデ	" 口縁 :2.5YR3/3 暗赤褐 外 :2.5YR3/4 暗赤褐 内 :2.5YR4/3 にぶい赤褐	越前Ⅲ - 2 期（14 世紀前半）	N 字状口縁	有		
123	54	遺構外	⑨ Cj2 - 2		越前	甕	-	-	-	口縁		外 :5Y4/4 暗オリーブ 内 :5YR3/4 暗赤	越前Ⅴ - 3 期（16 世紀後半）	口端～外 : 自然釉・降りもの付着	-		
124	90 98	遺構外	⑨ Cj2 - 2		越前	甕	-	-	-	破片	外 : 板状工具の縦削り 内 : 横ナデ	外 :5YR3/2 暗赤褐 内 :5YR3/3 暗赤褐	越前Ⅳ - 3 ～Ⅴ期（15 世紀後半～ 16 世紀）		-		
125	50 107	遺構外	⑨ Cj1 - 2		越前	甕	-	-	14.5	腰～底 1/6	静止糸切り	外 :10YR3/4 暗褐 外上～内 :7.5Y4/3 暗オリーブ		内～底 : 自然釉・降りもの付着	有		
126	16	遺構外	⑨ Cj5 - 3		越前	甕	-	-	20.6	腰～底 1/16	内 : 自然釉 静止糸切り	外 :N7/ 灰白 内上半 :2.5YR4/3 にぶい赤褐 内下半 :N7/ 灰白	越前Ⅳ - 3 ～Ⅴ期（15 世紀後半～ 16 世紀）		-		
127	147	遺構外	⑨ Cc	表土	越前	鉢	-	-	-	口縁	口 : ナデ 内 : 火バネ	外 :5YR5/4 にぶい赤褐 内 :7.5YR5/3 にぶい褐			有		23
128	74 93	遺構外	⑨ Cj1 - 2		越前	擂鉢	30.4	-	-	口縁 1/5	口 : ナデ , 内 : 幅 2.9㎝ 9 条一単位の卸目	5YR6/6 橙	越前Ⅴ期（16 世紀）	内外 : 煤付着 口縁内 : 摩滅	有		
129	110	遺構外	⑨ Cj	7a	越前	擂鉢	29	-	-	口縁 1/6	内 : 幅 2.8㎝ 11 条一単位の卸目	2.5YR6/6 橙	越前Ⅴ期（16 世紀）	8 ﾄﾚﾝﾁ（斜面） 内外 : 煤付着 口縁内 : 摩滅	有		
130	11	遺構外	⑨ Cj4 - 2		越前	擂鉢	33.2	-	-	口縁 1/10	内 : 幅 3.1㎝ 11 条一単位の卸目	外上 :5Y6/1 灰 外下 :5YR3/1 黒褐 内 :5Y5/1 灰	越前Ⅴ期（16 世紀）	体外 : 自然釉 口縁内 : 摩滅	有		
131	26	遺構外	⑨ Cj3 - 1		越前	擂鉢	-	-	-	口縁	内 : 幅 2.9㎝ 11 条一単位の卸目	外下 :7.5YR5/3 にぶい褐 外上～内 :2.5Y 灰黄	越前Ⅴ期（16 世紀）	口縁内 : 摩滅	-		
132	148	遺構外	⑨ Cf		越前	擂鉢	-	-	-	口縁	卸目	外上 :7.5YR5/4 にぶい褐 外下 :5YR5/4 にぶい赤褐 内 :7.5YR5/3 にぶい褐		口縁内 : 摩滅	-		
133	149	遺構外	⑨ Ce		瓦器	擂鉢	-	-	-	口縁	内 : 幅 2㎝ 6 条一単位の卸目	外上 :7.5Y6/1 黄灰 外下 :5Y6/1 灰 内 :2.5Y5/1 黄灰		外 : 被熱による火バネ	有		24
134	150	遺構外	⑥		瓦器	火鉢	-	-	-	破片	横位平行沈線間に縦位の刻文様 3 段	外 :N4/ 灰			-		
135	150	遺構外	⑥		瓦器	風炉	-	-	19.2	底 1/10	外 : 横位ヘラミガキ・黒光沢 底 : ミガキ	外 :N4/ 灰 内 :N7/ 灰 底外 :10YR7/1 灰 底内 :N6/ 灰			-		
136	124	遺構外	⑨ Ci		土師質土器	皿	12.8	-	-	口縁～ 体 1/8	ロクロ成形	10YR8/2 灰白	中世	外 : 煤付着	有		
137	2	遺構外	⑨ Cd4 - 2		土師質土器	小皿	7.4	1.6	5.4	完形	ロクロ成形 ヘラ切り後ナデ	5YR6/8 橙	14 ～ 15 世紀前半	全体に歪む	-		
138	13	遺構外	⑨ Cd		土師質土器	小皿	-	-	7.5	底 1/5	ロクロ成形 右回転糸切り	10YR7/6 明黄褐	中世		-	40	
139	14	遺構外	⑨ Cd		土師器	小甕	-	-	7	底 1/7	ロクロ成形 回転糸切り	10YR7/4 にぶい黄橙	古代		-		
140	128	遺構外	⑨ Cc		須恵器	無台杯	-	-	9.8	底 2/9	ヘラ切り	5Y7/2 灰白	8 世紀末～ 9 世紀前半		-		25
141	123	遺構外	⑨ Bh		土師質土器	皿	11.6	3	7.4	口縁 ～体 1/10 底 1/5	ロクロ成形 ヘラ切り	外 :10YR8/2 灰白 内 :10YR8/3 浅黄橙	14 ～ 15 世紀前半		-		24
142	125	遺構外	⑨ Bh ﾄﾚﾝﾁ 10		須恵器	折縁杯	11.8	-	-	口縁～ 体 1/8		5Y6/1 灰	9 世紀前半		-		25
143	11	遺構外	⑨ Cd		土師質土器	皿	12.5	3.2	9.6	口縁～ 底	シャープなロクロ目 回転糸切り	5YR6/6 橙	13 世紀	口 : 煤付着	-		24
144	9	遺構外	⑨ Cd		土師質土器	壺	11.7	-	-	口縁 1/5		5YR6/6 橙	中世		-		
145	129	遺構外	⑨ Bh ﾄﾚﾝﾁ 10		土師器	長胴甕	20	-	-	口縁 ～体 1/10	横ナデ，口縁端 : ツマミアゲ	外 :5YR6/4 にぶい橙 内 :10YR7/3 にぶい黄橙	古代	ロクロの痕顕著	-		25
146	131	遺構外	⑨ Ci		土師器	甑	-	-	11.4	体～底 1/3	ヘラナデ，回転糸切り，孔 4 箇所	5YR7/6 橙	古代		-		
147	126	遺構外	⑨ Cf		土師器	鍋	42.8	-	-	口縁～ 体	ロクロナデ 体外 : 平行叩き	7.5YR7/6 橙	古代		-		

表 14　遺物観察表（6）　木製品（1）

掲載N0.	取上No.	遺　構	調査区グリッド	層位	種別	器 種	計測値 口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	遺存度	木取り	時 期	備　考	挿図	写真図版
148	28	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	容器	漆器小皿	9.0	1.3	6.0	1/2	横地柾目	13 ～ 14 世紀	内外 : 黒色漆	41	26

表 15　遺物観察表（7）　木製品（2）

掲載N0.	取上No.	遺　構	調査区グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	径（cm）	遺存度	木取り	時 期	備　考	挿図	写真図版
149	11	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	食事具	箸	16.6	0.5	0.4	3/4 以上	柾目	中世	両端欠損	41	26
150	30	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	食事具	箸	12.9	0.6	0.6	2/3 以上	柾目	中世	両端欠		
151	18	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	食事具	箸	13.6	0.5	0.4	2/3 以上	柾目	中世	先端アリ		

表 16　遺物観察表（8）　木製品（3）

掲載 N0.	取上 No.	遺　構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm）	計測値 厚さ（cm）	遺存度	木取り	時 期	備　　考	挿図	写真 図版
152	14	井戸 5	⑨ Cf3 - 5	7 層	容器	曲物底板	推定直径 24.3	-	0.8	1/4	柾目	中世	腐食著しい	41	26
153	14	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	容器	曲物底板	推定直径 26.0	-	0.8	1/6	柾目	中世			
154	26	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	容器	曲物底板	15.4	-	0.5	1/5	柾目	中世			
155	15	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	容器	曲物底板	推定直径 24.0	-	0.6	1/3	柾目	中世	加工痕		
156	16	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	食事具	折敷底板	21.6	9.0	0.5		柾目	中世	加工痕 2 か所に木釘残		
157	23	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	加工材	板状木製品	24.1	4.3	0.6		柾目	中世	釘穴 1 か所，未貫通の木釘痕 4 か所，桶側材？再利用		
158	6	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	施設材	板状木製品	41.5	12.3	2.4	4/5	柾目	中世	加工痕確認できず 井戸側材？		
159	8	井戸 6	⑨ Cg5 - 2	3 層	加工材	棒状木製品	58.6	4.1	3.8	完形		中世	芯去りミカン割材 一部樹皮残		

表 17　遺物観察表（9）　金属製品（1）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm）	計測値 厚さ（cm）	計測値 重量（g）	備　　考	挿図	写真 図版
160	-	土坑 26	⑨ Cg		鉄製品	刀子	(6.8)	1.5	0.4	11.7		42	27
161	8	井戸 3	③ Gh1 - 4	8 層	鉄製品	刀子	(5.6)	1.8	0.3	17.13	茎両端欠損		
162	120	遺構外	⑨ Cj		鉄製品	刀	(6.4)	2.6	0.8	61.73			

表 18　遺物観察表（10）　金属製品（2）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm） 身	計測値 幅（cm） 茎	計測値 厚さ（cm） 身	計測値 厚さ（cm） 茎	計測値 重量（g）	備　　考	挿図	写真 図版
163	14	井戸 2	③ Gh2 - 1	2 層	鉄製品	雁股鏃	(7.8)	10.1	0.5	10.5	0.7	15.27		42	27
164	-	遺構外	③ Gh		鉄製品	鉄鏃	(9.1)	1.5	0.5	1.2	0.5	7.42	柳葉系，両端欠損		

表 19　遺物観察表（11）　金属製品（3）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm） 身	計測値 幅（cm） 頭部	計測値 厚さ（cm） 身	計測値 厚さ（cm） 頭部	計測値 重量（g）	備　　考	挿図	写真 図版
165	-	遺構外	⑨ Cf		鉄製品	和釘	4.9	0.4	0.9	0.3	1.1	3.63	完形	42	27
166	17	井戸 2	③ Gg2 - 5	2 層	鉄製品	和釘	(3.6)	0.6	0.3	0.6		6.14	先折損		
167	-	遺構外	⑨ Bb		鉄製品	和釘	8.5	0.6	1.5	0.6		12.72	完形		
168	-	土坑 12	⑨ Cf	1 層	鉄製品	和釘	6.6	0.5	1.1	0.5		10.81	完形，頭部状態錆著しい		
169	-	土坑 19	⑨ Cg		鉄製品	和釘	(6.2)	0.7	0.7			7.12	頭欠損		
170	9	井戸 3	③ Gh1 - 4	8 層	鉄製品	和釘	(8.1)	0.5	0.7	0.5		5.6	頭・先端欠損		
171	78	遺構外	⑨ Bj5 - 2		鉄製品	和釘	(7.3)	1.0	1.1	1.0		10.56	頭・先端欠損		
172	-	遺構外	⑨ Cj		鉄製品	和釘	(10.4)	1.4	2.0	1.4		42.86	頭・先端欠損		
173	76	遺構外	⑨ Cj1 - 2		鉄製品	和釘	(12.7)	1.0	1.7	1.0		31.76	頭・先端欠損		

表 20　遺物観察表（12）　金属製品（4）

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 口径（cm）	計測値 底径（cm）	計測値 高さ（cm）	計測値 重量（g）	備　　考	挿図	写真 図版
174	15	井戸 2	③ Gh2 - 1	2 層	鉄製品	鍋	推定 30.0			(749.73)	鋳造品（崩壊）	42	27
175	13	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	2 層	鉄製品	鍋	長径 4.4	短径 4.1	厚さ 1.3	34.83	湯口		

表 21　遺物観察表（13）　金属製品（5）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 長さ (cm)	計測値 幅 (cm)	計測値 厚さ (cm)	計測値 重量 (g)	備　　考	挿図	写真 図版
176	-	土坑 19	⑨ Cg		鉄製品	蝶番	(4.2)	1.1	0.2	3.79		42	27
177	27	井戸 3	③ Gh1 - 4	11 層	鉄製品	鎹	(8.2)	1.2	0.6	31.73	片脚欠損		
178	34	井戸 2	③ Gh2 - 1	9 層	鉄製品	止金具	(2.7)	1.0	0.3	14.83			
179	-	溝 7	⑨ Ce・Cf	1 層	鉄製品	引手金具	(3.2)	0.6	0.7	7.68	半分欠損		
180	-	溝 4･5	⑨ Cc		鉄製品	鏨	(3.9)	1.5 頭 1.8	1.5 頭 1.9	27.13			
181	-	溝 3	⑨ Cg		鉄製品	板状鉄製品	(6.9)	1.1	0.4	10.19			
182	-	溝 3	⑨ Cg		鉄製品	板状鉄製品	(9.5)	1.2	0.7	54.42			
183	-	遺構外	⑨ Cj		鉄製品	用途不明丸球	径 2.2	短径 1.8	1.9	10.22			
184	-	遺構外	⑨ Dj		鉄製品	用途不明丸球	径 2.2	短径 2.1	2.2	10.56			

表 22　遺物観察表（14）　金属製品（6）

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 口径 (cm)	計測値 底径 (cm)	計測値 高さ (cm)	計測値 重量 (g)	備　　考	挿図	写真 図版
185	40	遺構外	⑨ Cj3 - 2		青銅製品	花瓶	(6.4)	6.0	(3.0)	60.24		42	27
186	1	遺構外	⑨ Bc5 - 4		青銅製品	蓋			(2.5)	36.57	摘み付二器		

表 23　遺物観察表（15）　金属製品（7）

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	器 種	計測値 高さ (mm)	計測値 幅 (mm)	計測値 奥行 (mm)	計測値 重量 (g)	備　　考	挿図	写真 図版
187	1	遺構外	⑨ Cd3 - 2		青銅製品	観音立像	総高 74.58 像高 68.25	18.36	18.02	57.64		42	巻頭

表 24　遺物観察表（16）　銭貨

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	銭種	初鋳年	計測値 外径（cm）	計測値 穿径（cm）	計測値 厚さ（cm）	計測値 重量（g）	書体	備考	挿図	写真 図版
188	2	井戸 5	⑨ Cf4 - 5	2 層	銭貨	元豊通寳	1078 年（北宋）	2.5	0.64	0.13	3.05	篆書体		42	27
189	1	土坑 7	③ Fh5 - 1	1 層	銭貨	元豊通寳	1078 年（北宋）	2.4	0.60	0.13	2.32	篆書体			
190	2	土坑 7	③ Fh5 - 1	1 層	銭貨	皇宋通寳	1039 年（北宋）	2.4	0.75	0.13	2.32	篆書体			
191	1	土坑 19	⑨ Cg		銭貨	元符通寳	1098 年（北宋）	2.4	0.70	0.13	2.14	篆書体			
192	-	遺構外	⑨ Dj		銭貨	永楽通寳	1408 年（明）	2.5	0.60	0.13	3.38	真書体			

表 25　遺物観察表（17）　鍛冶関連遺物（1）

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm）	計測値 厚さ（cm）	計測値 重量（g）	備考	挿図	写真 図版
193	8	井戸 2	③ Gg1 - 5	3 層	椀形滓	6.3	5.1	3.1	111.69		43	27
194	10	井戸 3	③ Gg1 - 4	8 層	椀形滓	5.3	3.5	3.0	69.74			
195	-	溝 2	⑨ Df		鉄滓	6.9	4.3	1.6	43.22			
196	36	井戸 2	③ Gh2 - 1	4 層	鉄滓	7.4	4.4	2.7	133.29	鉄塊？		

表 26　遺物観察表（18）　鍛冶関連遺物（2）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	器種	計測値 長さ（cm）	計測値 最大幅（cm）	計測値 通風孔径（cm）	備考	挿図	写真 図版
197	-	遺構外	⑨ Cd		羽口	(3.5)	7.6	2.0	先端タール付着	43	27
198	12	遺構外	⑨ Df		羽口	(8.2)	10.0	2.0 ～ 2.2	先端タール付着		

表 27　遺物観察表（19）　その他の出土遺物

掲載 N0.	取上 No.	遺構	調査区 グリッド	層位	種別	計測値 長さ（cm）	計測値 幅（cm）	備考	挿図	写真 図版
199	106	遺構外	⑨ Cj2 - 2		小札	2.8	1.6	黒色漆 , 小片 2 点	43	27

表 28　遺物観察表（20）　石製品（1）

掲載 N0.	取上 No.	遺　構	調査区 グリッド	上・下	計測値			回転方向	分画数	石 材	備　考	被熱	挿図	図版
					径 (cm)	高さ (cm)	重量 (kg)							
200	14・15 -	井戸 4 溝 2	⑨ Cg5 - 1 ⑨ Cf･Df	上臼	30.0	9.2	8.16	反時計回り	6 ?	花崗岩		有	44	28
201	1・2・3・7・9	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	上臼	30.0	13.2	9.25	反時計回り	6 ?	花崗岩		有		
202	17	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	上臼	29.2	10.3	4.64	反時計回り	?	花崗岩		有		
203	26	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	下臼	31.4	6.7	3.54	-	?	花崗岩		有		
204	4	溝 4	⑨ Cc1 - 5	下臼	28.6	8.2	9.50	-	6	花崗岩		有		
205	5・6	溝 4	⑨ Cc1 - 5	上臼	30.0	12.0	9.70	反時計回り	8 ?	花崗岩		有	45	
206	62	遺構外	⑨ Cj3 - 2	上臼	(30)	14.2	6.98	反時計回り	?	花崗岩		有		
207	61・73・89	遺構外	⑨ Cj2 - 2	上臼	28.2	12.6	12.92	反時計回り	6	花崗岩		有		
208	63	遺構外	⑨ Cj2 - 2	上臼	27.0	11.0	6.06	反時計回り	6 ?	花崗岩		有		

表 29　遺物観察表（21）　石製品（2）

（　）残存値

掲載 N0.	取上 No.	遺　構	調査区 グリッド	器 種	計測値				石　材	備　　考	被熱	挿図	図版
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
209	108	遺構外	⑨ Cj4 - 3	硯	(6.6)	3.7	0.9	16.6	粘板岩		-	46	29
210	20	井戸 2	③ Gg2 - 5	砥石	(4.0)	3.3	0.6	10.1	頁岩	仕上げ砥石 京都鳴滝産？	有		
211	86	遺構外	⑨ Cj1 - 2	砥石	(4.9)	5.0	2.5	82.9	凝灰岩	在地産。中砥石	-		
212	9	遺構外	⑨ Ci2 - 5	砥石	11.3	5.5	3.8	317.5	流紋岩	中砥石	有		
213	37	井戸 4	⑨ Cg5 - 1	砥石	(8.7)	3.8	3.0	101.8	安山岩	中砥石	有		
214	5	井戸 2	③ Gh2 - 1	砥石	(11.9)	4.7	4.8	348.5	流紋岩	中砥石	有		
215	1	遺構外	⑨ Ce4 - 4	砥石	(12.1)	5.6	5.5	441.0	流紋岩	中砥石	-		
216	26	井戸 2	③ Gh2 - 1	砥石	16.3	7.0	6.2	1008.0	流紋岩	中砥石	-		
217	1	土坑 11	③ Fh1 - 5	砥石	14.8	7.1	3.1	451.5	流紋岩	中砥石	有	47	
218	112	遺構外	⑨ Cj	砥石	(14.5)	10.0	10.1	1762.0	流紋岩	中砥石	有		
219	21	遺構外	⑨ Cj5 - 2	転用砥石	9.0	8.0	1.2	110.0	-	珠洲焼体部片を研削具として転用	-		
220	44	遺構外	⑨ Cj3 - 2	用途不明	16.8	12.5	8.3	236.0	閃緑岩		-		

第V章　自然科学分析

1　新潟県新発田市五十公野館跡出土人骨の人類学的報告

新潟医療福祉大学
奈良貴史・佐伯史子

はじめに

平成 27 年の新発田市教育委員会による五十公野館跡の発掘調査において，土坑 14 の骨蔵器から人骨が検出された。本項はこれらの人類学的調査研究報告である。

所　見

細片化が著しい頭蓋骨・四肢骨片が多数遺存する（写真 1・2）。総重量 550g である。灰白色から白色の色調を呈する破片と黒色を呈する破片が混在する。全て焼成されている人骨と思われる。四肢長骨片の随所に輪状に走る亀裂がみられる。部位が確認できた頭骨は，左側頭骨内耳孔部，左頬骨片，後頭骨内後頭隆起部片などである。体幹・四肢骨は，椎骨，肋骨，四肢長骨，手足の骨など全身の部位が確認できるが，細片化が著しいうえ，多くの破片が変形しているので，正確に部位が同定できたのは，右肩甲骨肩甲棘部片，上腕骨遠位部片，左寛骨坐骨結節部片，右大腿骨骨頭部片，左右膝蓋骨などである。確認された範囲では重複する部位が認められないので，一個体の可能性が高い。成人男性の一個体の焼骨平均重量が約 2000g であることを考えると，この個体が男性ならば 1/4 程度しか遺存していないことになる。頭骨片の重量は 104g で，出土骨総重量に対する割合は 18.9％である。成人の場合，骨総重量に対する頭骨の重量は約 20％であるので，頭骨の量が著しく少ないわけではない。

年齢に関しては，判断の基準となる部位が少ない。上腕骨の遠位部の骨端の化骨が終了していることから成人段階に達していた。観察できる頭骨片の縫合において，内板・外板は閉鎖していないことから老年期の可能性は低いものと思われる。したがって，この個体の年齢は壮年～熟年（20 ～ 60 才）程度と思われる。

性別に関しては，焼骨は，通常被熱により変形・縮小していることから，性別の推定困難な場合が多い。本遺跡の焼骨は，性別を推定するのに有効な形態学的特徴を有する寛骨は破損しており，また，乳様突起などの頭骨で性差が顕著な部位も検出されていない。したがって形態学的特徴によって性別を推定することは困難である。そこで，骨の計測データを用いて，男女の骨の大きさの違いをもとに性別推定を試みた。今回計測可能な部位は膝蓋骨のみであったので，膝蓋骨の幅を用いた（写真 2）。焼骨は，一般的に収縮するとされている。個々の骨の縮小率は一定でなく，収縮率は報告者によりまちまちであり，大きさから性別推定には注意を要する。池田は，焼成実験による収縮率の検討結果を参考に，太安萬侶墓出土の焼骨の性別を推定する際に，収縮率を 3％，10％と仮定して検討を加えている（池田 1981）。左膝蓋骨の最大幅の推定値は 38mm 程度であり，関東地方現代人女性の平均値よりも小さい（成人男性 45.0mm, 成人女性 40.0mm）が，仮に 10％縮小していたとしたら，もとの値は 40mm を超え，男女の平均値の中間になる。したがって，この値から性別を推定するのは危険であるが，男性だったとしたら体格が大きく，女性ならば比較的大柄な個体だったと思われるが，性別の断定はできない。

考　察

茶毘　焼成による骨の色調変化は，低い焼成温度では暗赤色・褐色であるが，高温になるにつれて黒色となり，最後には白色を帯びるとされている。また，焼成温度が 600℃までは骨自体に変化を及ぼさないが，800℃前

後で著しく捻転，収縮等の変化が生じるとされている。骨が白色を帯びる焼成温度は，Shipman らは 650℃以上，Nicholson は 700 ～ 800℃以上（Nicholson1993），平野は 800 から 1000℃と報告しており（平野 1935），報告者によってかなりの幅がある。これらの違いは，焼成時間の長短などの様々な条件に影響されていると思われる。本遺跡の焼骨は，生焼け状態のものが観察されないが，白色・黒色・青色等が混在しており，色調にむらが認められるので，部位によって焼成温度が違っていたと思われる。また，軟部の付着した状態で骨が焼かれると，激しく変形し細かい亀裂が多数生じるが，晒した骨は焼かれてもほとんど変形せず，大きく割れるだけであるという（馬場 1986）。観察した焼骨には輪状に走る亀裂が多数の骨片に観察でき，変形している破片が多く見受けられる。以上のことから，本遺構から出土した焼骨は，死後，軟部組織がまだ骨を覆っている状態で，焼かれたものと推定される。また，焼骨に重複する部位は確認できなかったことから 1 個体の可能性が高いが，意図的に荼毘されたものか，火災等で焼死したものかは確認できない。

拾骨　成人男性の焼骨重量は約 2kg，成人女性は約 1.3kg とされるが（山口 1983），焼骨の重量は大幅にこれらを下回る。一般に焼成した骨はもろくなるが，遺跡から出土する焼骨は強固な状態であることが多い。この現象は高温により融解した無機質が再結晶化する際に水と反応してより強固な構造に変化し，有機物を含有しないため微生物によって腐食されないと説明がなされている（May 1998）。

本遺構の焼骨は，色調にはむらがあるもののいずれも生焼けでないことから，埋葬後に消失したと考えるよりも，埋められたか当初から現在ある量しかなかったと推定するほうが蓋然性が高い。骨蔵器に焼骨を納める際，すべてを収骨したのではないと思われる。

収骨に際して，頭骨を選択的に選ぶ場合が知られているが，頭骨の割合が極めて高いわけではなく，収骨に際して意図的に頭骨を収骨した傾向は認められなかった。また，拾骨にさいして第 2 頚椎の軸椎を喉仏として特別に取り扱ったと解釈されている例が山口県吉母浜遺跡中世墓（田中 1985），第 2 頚椎の軸椎と歯を意識的に取り分けた東京都増上寺近世墓（奈良 1988），歯を選択的に拾骨した可能性が想定される宮城県松本遺跡中世墓（高橋・佐々木 1986）などが知られるが，本遺構の焼骨には軸椎の歯突起が確認されてはいない。収骨の際に仏を連想させる軸椎の歯突起を意識して収骨する習俗は確認できなかった。

まとめ

新発田市教育委員会による五十公野館跡の発掘調査において出土した人骨の人類学的調査研究結果の要約は以下である。

① 出土した人骨の焼骨に重複する部位は確認できなかった。1 個体の可能性が高いと思われる

② 年齢・性別構成は壮年～熟年（20 ～ 60 才）段階の成人，性別不明。

③ 焼骨は軟部組織が付着した状態で焼成されたものと思われ，焼むらがある。

④ 焼骨の重量は成人 1 体分の重量を大幅に下回り，拾骨の際，取り残された焼骨が遺存した可能性が高いと思われる。

文　献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨．霊山根古屋遺跡の研究，霊山根古屋遺跡調査団，pp. 93-113.

平野賢二 1935 歯牙の熱処理に対する研究（第一編）人類歯牙の熱処理について．口腔病学会雑誌，9:375-393.

池田次郎 1981 出土火葬骨について．太安萬侶墓，奈良県立橿原考古学研究所編，pp.79-88.

Mays, S. 1998 Cremated bone. The Archaeology of Human Bones, Routledge, London, pp.207-224.

奈良貴史 1988 墓制について . 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡 , 東京都港区教育委員会 , pp. 504-517.
Nicholson, R. A. 1993 A morphological investigation of burnt animal bone and an evaluation of its utility in archaeology. J. Archaeol. Sci., 20: 411-428.
Shipman, P., Foster, G. and Schoeninger, M. 1984 Burnt bones and teeth: an experimental study of color, morphology, crystal structure and shrinkage. J. Archaeol. Sci., 11: 307-325.
高橋理・佐々木務　1986　柳生・松木遺跡出土動物遺存体・人骨 .　柳生 ,　仙台市教育委員会 , pp. 31-100.
田中良之 1985 中世の遺構 . 吉母浜遺跡 , 下関市教育委員会 , pp. 31-100.
山口　敏 1983 出土人骨についての分析 . 竜ヶ池観音堂塚群発掘調査報告書Ⅱ , 小千谷市 教育委員会 , pp.41-43.

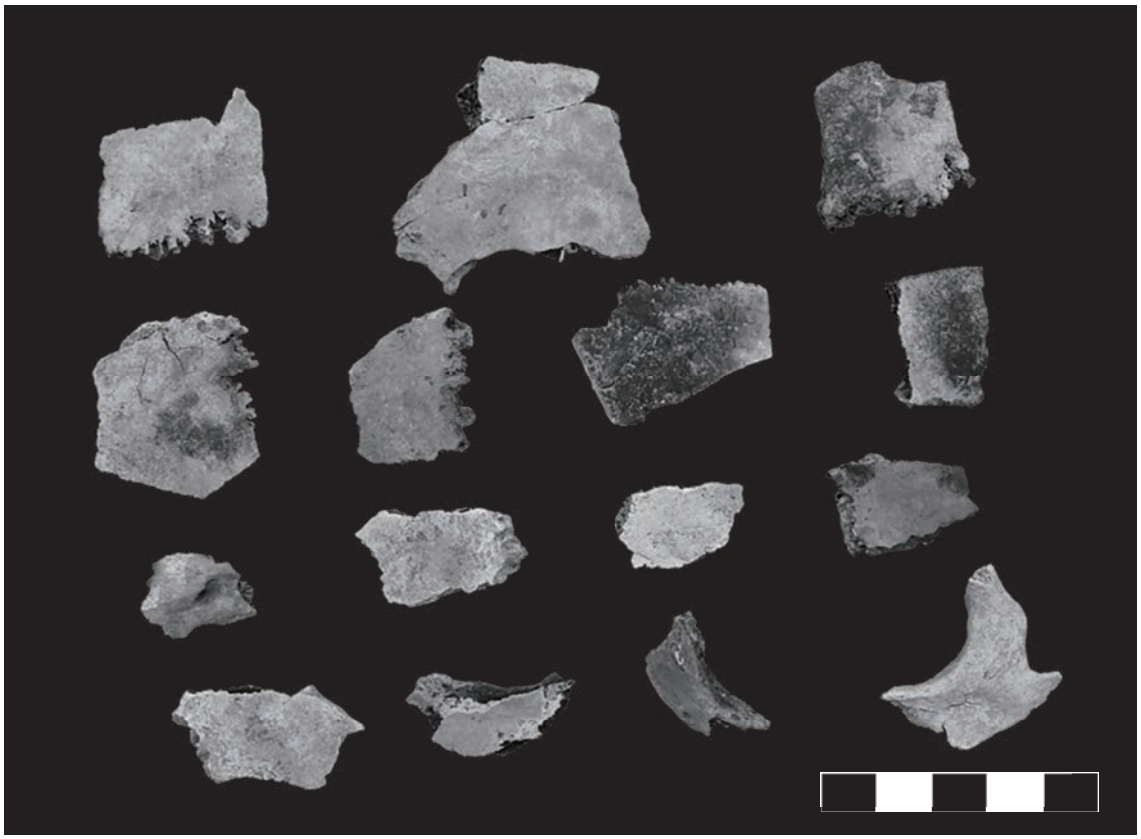


写真 1　頭蓋骨

写真 2　四肢骨

2　新潟県新発田市五十公野館跡出土観音立像の化学分析

株式会社第四紀地質研究所　井上　巖

1　実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置で行なった。

この分析装置は，標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による自動定量計算システムが採用されており，6C~92U までの元素分析ができ，ハイパワー X 線源（最大 30kV, 4mA）の採用で微量試料～最大 290mm φ× 80mmH までの大型試料の測定が可能である。小型試料では 16 試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルク FP 法で行った。FP 法とは試料を構成する全元素の種類と濃度，X 線源のスペクトル分布，装置の光学系，各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて，試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。分析にあたっては標準サンプルを分析し，キャリブレーションを行い，装置の正常さを保って行った。

実験条件はバルク FP 法（スタンダードレス方式），分析雰囲気 = 真空，X 線管ターゲット素材 =Rh, 加速電圧 =30kV, 管電流 = 自動制御，分析時間 =200 秒（有効分析時間）である。

分析対象元素は Mg.Al.Si.P.Ca.Fe.Cu.Zn.As.Sn.Os.Ir.Pb の 13 元素。分析値は試料の含水量 =0 と仮定し，元素の重量％を 100％にノーマライズして表示した。分析対象元素は自動定性で行った。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下 2 桁で表示することになっているがここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下 4 桁を用いて化学分析結果を表示した。

仏像と銅銭の主要 3 元素（Cu 銅，Sn 錫，Pb 鉛）の濃度（重量％）の相対的な割合で，三角ダイアグラム第 3 図 Cu-Sn-Pb 図を作成し，組成領域の比較を行った。

2　分析試料

分析に供した試料は，第 1·2 表の化学分析表で示すように，五十公野館跡出土観音立像と阿賀野市華報寺墓跡出土観音立像である。参考資料として山口県岩国市の中津居館跡から出土した中世渡来銭（銅銭）の化学分析試料（櫻木 2016）を第 4 表に掲載した。

五十公野館跡出土観音立像は全体に緑青が均一的に発生しているが，華報寺墓跡出土観音立像の表面は全体に暗黒色の金属表面を呈し，見た目で異なる色調である。両者の分析位置は，前面，背面の各々頭部と台座，腹部の 5 か所で，写真で示すように概ね両者の同じ位置とした。

分析値に幾分ばらつきが出るのは，頭部と腹部の表面外形が平らでないために X 線の反射角度が異なることで起こったもので，台座部分は表面が平坦で表面形状による分析の影響が少ないことから，本来の組成を示すものと考えられる。

銅銭は，初鋳年が 11 ～ 12 世紀初頭の皇宋通寶・元豊通寶・聖宋元寶・政和通寶の 4 枚を分析されたもので，各銅銭については a・b の 2 点で測定されている。上段が分析値で，下段は Cu, Sn, Pb の 3 元素を分析対象元素とし 100％になるように計算したもので，第 1・2 表の数値とは指定元素数の違いで性質が異なる。第 3 図 Cu-Sn-Pb 図には，五十公野館跡・華報寺墓跡出土両観音立像の分析値を 3 元素に計算し直した値で記載してあり，銅銭の値と同じ扱いに近いものとなる。

なお，酸化物濃度ではなく，主要元素の濃度（重量％）で分析するため，銅の酸化によって生成される緑青の分析値への影響は少ない。

3　分析結果

仏像の分析結果は，第 1・2 表のとおり Cu（銅）・Sn（錫）・Pb（鉛）の合金である。

五十公野館跡観音立像の分析値（第１表）は，Cu 22 ～ 36％，Sn 21 ～ 33％，Pb 32 ～ 42％である。本来の組成を示すと考えられる台座部分の SI-2 と SI-5 では，Cu が 23 ～ 27％，Sn 23％，Pb 42 ～ 46％であり，それぞれの割合は，ほぼ 1:1:2 となっている。青銅とは，Cu を主成分とし Sn を含む合金のことを指すが，本試料の場合 Cu の含有量が少なく，Pb の割合が高いという特徴があり，Zn は検出されていない。Pb を多く含む合金は融点が低くなり鋳型へ流し込み易い。

華報寺墓跡観音立像の分析値（第２表）は，Cu 47 ～ 56％，Sn 1 ～ 8％，Pb 23 ～ 37％で，Cu がほぼ半分を占め，Sn はごく少ない。Cu の含有量が多いほど金銅色に輝くが，Sn・Pb の含有量が少ないと合金としての融点がさほど下がらず鋳型へ流し込みにくい。

第３図 Cu-Sn-Pb 図で示したように，五十公野館跡出土観音立像と華報寺墓跡出土観音立像の分析値は，図中では異なる領域に集中していることから，両者は同じ形をしていても製作に使われた金属組成は異なっていることが分かる。なお，銅銭の化学分析値の領域は，華報寺墓跡出土観音立像の領域に近く，組成的に類似領域にある。

＜参考文献＞

櫻木晋一 2016『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社

第１表　五十公野館跡観音立像・化学分析表

ｗｔ％

試料名	Mg	Al	Si	P	Ca	Fe	Cu	Zn	As	Sn	Os	Ir	Pb	Total	備　考
SI-1	0.7203	0.3878	2.3985	0.8550	0.0000	0.2126	22.4430	0.0000	0.6181	30.6217	0.3124	0.0000	41.4304	99.9998	背面・頭部
SI-2	0.3133	1.1007	3.3557	0.4858	0.2798	0.9918	23.3585	0.0000	0.7155	23.0068	0.0000	0.2754	46.1167	100.0000	背面・台座
SI-3	0.0551	1.0392	4.7699	0.5373	0.4946	0.7738	36.0689	0.0000	1.3096	21.6139	0.4470	0.2111	32.6796	100.0000	前面・顔
SI-4	0.5798	0.7583	2.9355	0.8978	0.3225	0.4906	25.2345	0.0000	1.2312	32.8290	0.4018	0.1155	34.2036	100.0001	前面・腹部
SI-5	0.2555	0.8842	4.0486	0.5321	0.3333	1.0082	27.0528	0.0000	0.7686	22.9245	0.2489	0.0054	41.9379	100.0000	前面・台座

第２表　華報寺墓跡観音立像・化学分析表

ｗｔ％

試料名	Mg	Al	Si	P	Ca	Fe	Cu	Zn	As	Sn	Os	Ir	Pb	Total	備　考
K-1	0.1196	1.4873	4.6690	0.8565	1.6093	0.3628	55.7439	0.0000	2.6844	8.2946	1.6292	0.0319	22.5116	100.0001	背面・頭部
K-2	0.0000	0.1421	1.4907	0.0000	0.4317	0.3486	48.6015	0.0000	4.7877	0.8527	3.4030	3.2121	36.7299	100.0000	背面・台座
K-3	0.9627	1.0210	3.0964	0.9583	2.8823	0.4075	55.0854	0.0000	2.7804	6.6899	1.5124	0.5323	24.0714	100.0000	前面・顔
K-4	1.0202	2.4930	3.2660	1.3202	2.8024	0.4447	51.4246	0.0000	2.6399	5.5234	1.7432	0.2877	27.0349	100.0002	前面・腹部
K-5	1.0761	1.2568	3.2618	1.0016	2.1891	0.3538	47.1934	0.0000	2.4966	8.2431	2.2430	0.5229	30.1616	99.9998	前面・台座

第３表　元素の融点

元素名	原子番号	原子量	融点 ℃
銅	29-Cu	63.5460	1083.000
亜鉛	30-Zn	65.3900	419.580
錫	50-Sn	118.7100	227.968
鉛	82-Pb	207.2000	327.500

第４表　中世渡来銭・化学分析表（中津居館跡）

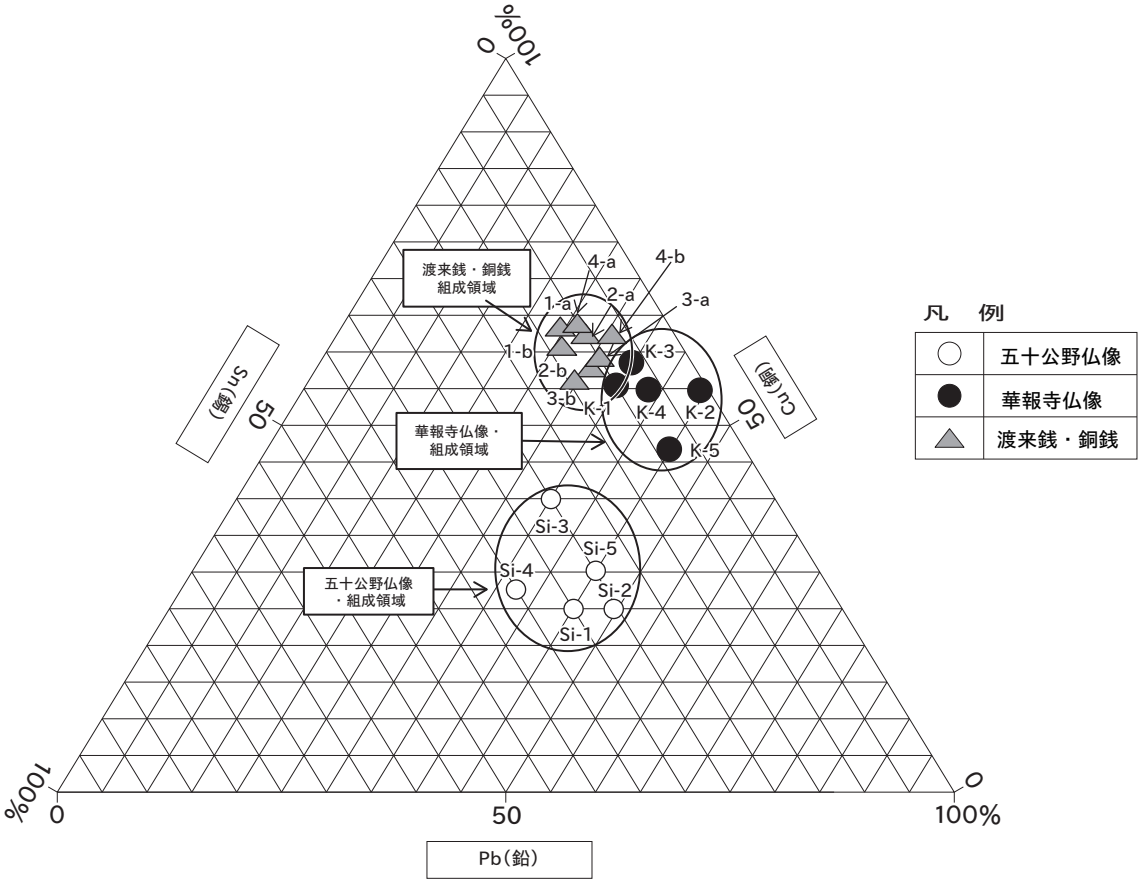
蛍光Ｘ線 ｗｔ％

試料名		銅　Cu	錫　Sn	鉛　Pb	鉄　Fe	砒素 As	Total	備　考
皇宋通寶	１ａ	76.16	12.30	11.07	0.15	0.00	99.68	
		76.52	12.36	11.12			100.00	
	１ｂ	68.44	14.12	17.03	0.14	0.00	99.73	
		68.72	14.18	17.10			100.00	
元豊通寶	２ａ	72.90	10.87	15.82	0.20	0.00	99.79	
		73.20	10.91	15.89			100.00	
	２ｂ	69.06	12.20	18.34	0.11	0.00	99.71	
		69.34	12.25	18.41			100.00	
聖宋通寶	３ａ	69.14	11.49	18.86	0.14	0.07	99.70	
		69.49	11.55	18.96			100.00	
	３ｂ	68.39	11.52	19.59	0.20	0.02	99.72	
		68.73	11.58	19.69			100.00	
政和通寶	４ａ	74.74	10.50	12.51	1.51	0.38	99.64	
		76.46	10.74	12.80			100.00	
	４ｂ	73.21	9.90	14.34	1.54	0.64	99.63	
		75.13	10.16	14.72			100.00	

櫻木晋一 2016「表 11 中世渡来銭の金属組成Ｉ」『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社

第 1 図　五十公野館跡出土観音立像の分析位置

第 2 図　華報寺墓跡出土観音立像の分析位置


100%
0
Sn(錫)
50
Cu(銅)
50
100%
0
0
50
100%
Pb(鉛)
渡来銭・銅銭
組成領域
華報寺仏像・
組成領域
五十公野仏像
・組成領域
1-a
1-b
2-a
2-b
3-a
3-b
4-a
4-b
K-1
K-2
K-3
K-4
K-5
Si-1
Si-2
Si-3
Si-4
Si-5
凡　例
五十公野仏像
華報寺仏像
渡来銭・銅銭

第 3 図　Cu-Sn-Pb 図

第Ⅵ章　ま　と　め

1　遺跡の範囲について

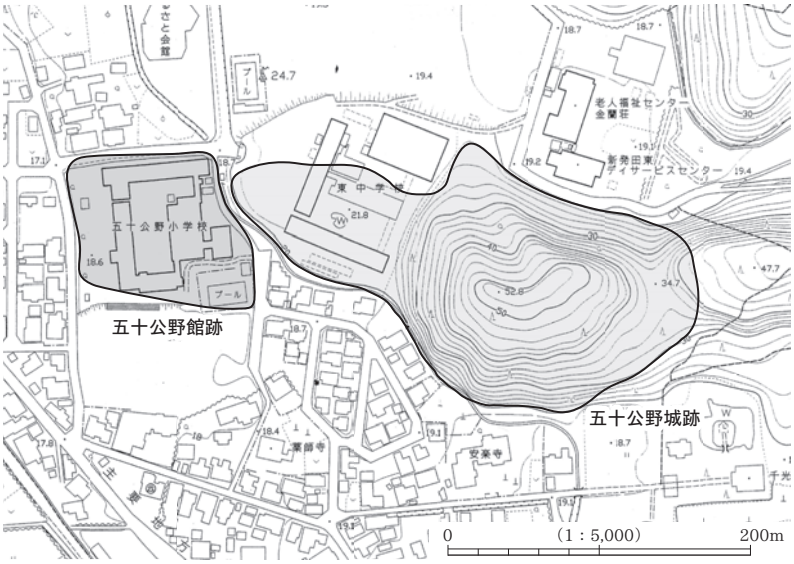
中世居館の多くは，河川や潟湖・低湿地に接する自然堤防・山麓台地・河岸段丘・扇状地などの地形に立地し（伊藤 1963a），周囲を堀と土塁で囲まれた方形区画の構造をとる例が多い。本館跡も，周辺より一段高い舌状の山麓台地に立地しており，その東側の五十公野丘陵の尾根先端には五十公野城が築かれている。両者が隣接していることから，本館跡は単独の居館ではなく，城と館が一体になったいわゆる根小屋城型式の館跡と考えられている（伊藤 1963b）。今回の発掘調査範囲では，堀や土塁の痕跡を確認できなかったが，三方を崖に囲まれた台地では，堀を掘って土塁を盛る必要はない。西側の崖は，宅地造成によって埋め立てられる以前の水田と２m 以上の比高差があった。上杉景勝軍の五十公野城攻めの記録によれば，「諸木を切て深田へしきて寄場を拵へ（越後古実図書）」「首共多しは田堀のきハニかけ（景勝一代略記）」（高橋ほか 2016）とあり，城の周辺に「深田・田堀」と記された湿田が存在していたことがわかる。水田を臨むこの館跡部分も，上杉方は城の一部と認識していたのであろう。

昭和 10 年 12 月に竣工した２代目校舎配置図（第１図）にみられる南側の崖線は，第８図の調査区⑨・⑩南端の斜面と方角が一致する。これ以前に地形を改変する土木工事があったとしても記録がないことから，この南側の崖と北・西側の崖で囲まれた部分を「五十公野館跡」の範囲と考える。東側は未調査のため堀の存在など不詳であるが，おおむね東西 100 ～ 115m, 南北 80 ～ 105m, 面積は約 10,300㎡と想定した。

2　遺構について

今回の調査で検出した遺構は竪穴建物２棟，土坑 27 基，井戸６基，ピット 17 基，ピット列２本，溝 10 条である。確認面の深さは，過去の学校建設での工事深度に大きく左右された。撹乱が広く及び調査対象範囲の遺構検出率は非常に悪い（第 11 図）。よって，ここでは竪穴建物，井戸，溝，火葬墓について概要を記して行くこととする。

a　竪穴建物　竪穴建物とは，人為的に地下空間を造り，その地下空間を利用する独立した建物であるといわれている。中世の竪穴建物は一辺２～６ m程度のものが多く，中には 10 mを超える報告もあるという（鈴木 2006）。本格的に中世の竪穴建物が知られるようになったのは都市鎌倉で，確実に中世と推定される報告がされたのは 1982 年代からである。その後，東日本を中心に検出例が増加し，近年は全国的に分布していることが明らかになってきている。構築法から土台建て（第１類）と柱穴建て（第２類）に大別され，都市鎌倉では土台建てが圧倒的に多いという。



第 48 図　五十公野館跡と城跡

検出された２棟を分類すれば，いずれも柱穴建てに属し，①平面形状は方形基調であること，②床面に上部構造

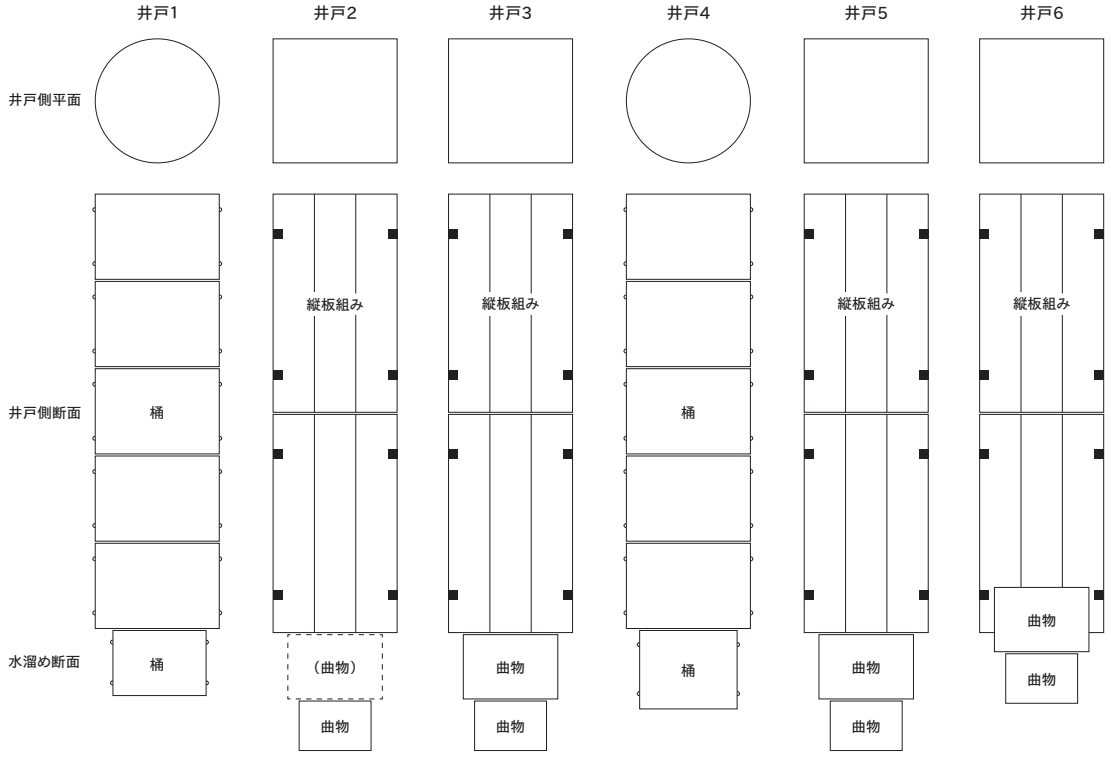
を推定する柱穴があること，③埋土および床面からは中世の遺物等が出土することなどの要件がある。竪穴建物1は出土遺物から年代的に中世後期に位置付けられるが，用途や機能について一般には物資収蔵のための「倉」と考えられている（河野 2004）。検出した遺構は，床面のつき固めや火床炉などもなく居住建物とは考えられない。屋敷地内の建物の中に組み込まれる倉なのが，屋外で単独に存在する蔵なのかによってその性格・機能が違う結果が導き出されるであろう。

b 井戸　井戸は，調査区南側の2ヵ所に偏在して検出された。調査区③で南北方向に隣接した3基（井戸1･2･3）と調査区⑨の3基（井戸4・5・6）である。いずれも掘方を有する井戸で，井戸本体が方形を呈するもの（井戸1・3・5・6）と，円形を呈するもの（井戸2・4）がある。円形のものは掘方上位の一部にテラス状の段を有する特徴がある。遺構の切り合い関係から方形のものが円形のものより古い傾向がみられる。井戸平坦部分が重複する井戸4と井戸6では，方形の井戸6の埋土を壊して円形の井戸4が堀り込まれていた。

井戸側についてみると，方形のものは縦板組，円形のものは桶を使用していたと考えられるが，部材の遺存状態は極めて悪い。底面付近の井戸側と水溜に使用されていた曲物もしくは桶のみが薄い皮状を呈するが，痕跡で確認される状態であった。水溜はいずれも円形を呈し，方形の4基は上下2段に曲物が埋置されている。

第47図は，今回の発掘調査で検出した井戸の構造を推定したもので，大きさや深さについては実数値を反映したものではない。この図が示すように，方形井戸はいずれも縦板組みの構造，円形井戸は桶組の構築である。遺構の切り合いからみた新旧関係は，井戸1が井戸2より新しく，井戸4は井戸6より新しいことから縦板組み井戸が桶組井戸より古いことが判明した。なお，井戸3の井戸側には隅柱と考えられる痕跡が確認できることから縦板組隅柱横桟留と考えたい。

次いで井戸内出土の礫について，その出土位置は埋土上位と下位（最下層）に多いもの（井戸1・2・4），上位と中位に多いもの（井戸3）がある。礫の大きさは，こぶし大～人頭大であるが，出土量の多い層は人頭大の礫が含まれる傾向にある。礫の出土状況から，井戸に関る呪術的儀礼の一つとして中世の上越市樋田遺跡（室岡ほか



第49図　井戸の模式図

1991）にその類例が見られる。

「石の出土位置は，井戸の底面，埋土の中層から上層，両者から出土するタイプがある。石の大きさもこぶし大から人頭大以上のものまで多様であり，個数も様々である（中略）。全体的には井戸底面から出土する石ほど火を受けている傾向があり，意識的に埋納された可能性もある」という（室岡ほか 1991）。本遺跡における井戸下位で出土した多量の礫は「井戸終い」が想起される。井戸出土の石臼（第 43 図 200 ～ 203）には被熱痕がみられる。なお，井戸 5・6 の礫の出土については，記載がない。

c 溝　明治 9 年～ 12 年に作成された『越後国五十公野村田畑宅地其他地引絵図』（新潟県立文書館蔵）によれば学校敷になる以前は東西に軸を持つ耕地が広がっていたものと推察される。今回の発掘調査では大形の溝が 4 条あり，溝はいずれも概ね平行で絵図の区画と合致する。溝の埋土中には炭化木片を含むが焼土等は含まないことが共通している。溝 2 と溝 4・5 との間隔は約 26m, 溝 2 と溝 3 が約 12m, 溝 3 と溝 6 が 14m を測る。遺構の深度が深いため中世の遺物を中心として残存している。しかし，土器等の破片は単発的に出土し，接合するものは非常に少ない。時代的には 15 世紀後半から 16 世紀にかけてのものであろう。溝 1 は他の溝とは底面が平坦で幅が 5 m 程あり，機能的に性格が異なるものかも知れない

d 火葬墓　近年，新潟県では近世墓の発掘調査がなされ，資料の蓄積がなされている。近世墓の中でも火葬墓の発掘調査の始まりは新潟市大墓遺跡（県教委 1973），燕市焼屋敷遺跡（県教委 1976），新潟市坊ヶ入墳墓（巻町教委 1985），五泉市榎表遺跡（五泉市教委 2005），新潟市沢海藩主溝口正勝墓（横越町 2000）などが主なものである。さらに近年は，近世における地主等の有力者層の墓地改葬に伴う骨蔵器についても報告されている（相羽 2013）。

近世の火葬墓と土葬墓の分布状況は，一般的に火葬墓が平野部に，土葬墓は新潟県の北東部および山間部に多い傾向があると古くから言われているが，その要因については今後さらに検討を要しよう。

新潟県の火葬墓に伴う骨蔵器は，材質及び陶磁器の産地・器形で示されている（相羽 2009）。ここに記述する骨蔵器は調査区⑨土坑 14 出土品である。陶器の骨蔵器で同質の蓋を伴う。火葬骨については，第Ⅵ章で詳記してあるが，所見によれば一個体の火葬骨が全てではなく，残存する量から見て 1/4 程度と考察されている。

相場氏の分類によれば本遺跡の資料は土師質土器の骨蔵器に属し，器形及び作成技術（作陶技術），胎土の差異により A 類・B 類に分けている。A・B 類はロクロ成形の後に内外面をナデ調整し，A 類の底面は回転糸切り，B 類が回転ヘラ切りとなる。さらに A・B 類は体部下半から底部底面にかけて回転ヘラ削りが行われる。年代は伴出した遺物などから A 類が 19 世紀前半，B 類が 18 世紀半～ 19 世紀前半と考えられている。また，A・B 類ともに一般の近世集落ではほとんど出土せず骨蔵専用の容器と考えられている（相羽 2009）。

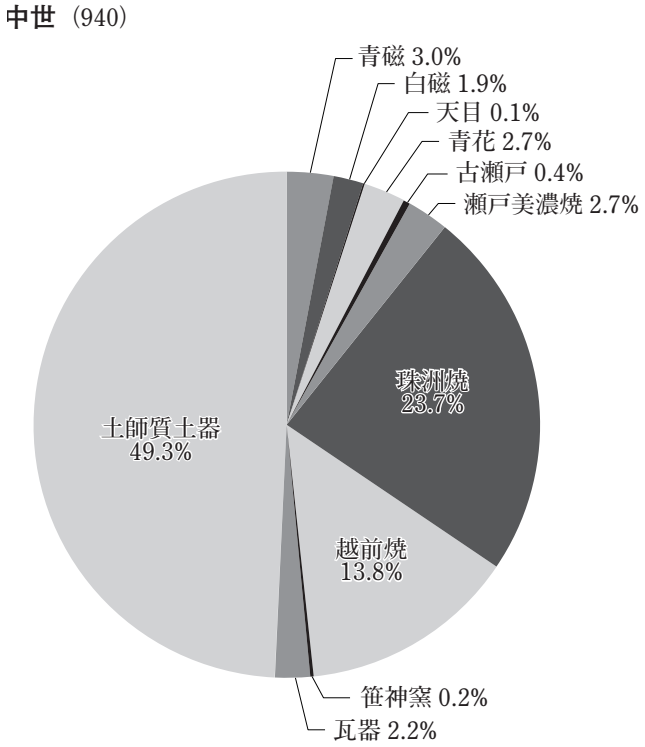
本遺跡出土の骨蔵器はロクロ成形で，器壁はロクロナデ調整の後に，体部外面上半から底部までヘラ削りされ器壁が薄く仕上げられている。内面にはロクロナデによる凹凸がある。底部の切り離しはヘラ切りで，底部外縁も丁寧に削られている。底部底面には判読のできない墨書がある。蓋は摘の一部を欠損しているが，外面は回転ヘラ削り，内面はロクロナデで「返」を持つ。蓋を伴う骨蔵器で胎土は緻密で焼き上がりもしっかりとしている。整形技法は B 類であるが，ヘラ削りの範囲が口頸部をのぞき体部全体に施されていることから B 類よりも新しい 19 世紀以降の年代が与えられよう。なお，副葬品として，寛永通寶等の銭貨及び煙管などの出土品はない。

3　土器・陶磁器について

出土遺物の主体は中世である。これらの遺物の出土状況は層位とはあまり関係なくまとまらずに出土しており，接合率は非常に低く，全体の形状を見られるものも非常に少ない。中世の土器・陶磁器類には舶載の中国製陶磁器と日本製陶磁器類がある。舶載陶磁器には青磁・白磁・青花・天目が，日本製土器・陶磁器としては珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼・古瀬戸・土師質土器・瓦器とそれに笹神窯がある。

中世の土器・陶磁器の総破片数は 940 片を数え，個体数ではない。破片数は実際の個体数に反映せず数値が高くなり，特に甕や壺の場合は実際の個体数よりかなり多数の数値となる。たとえば土坑 12 の珠洲焼の大甕が 102 片となる。数値が正確な比率を示していないことを前提とした上で，おおまかな傾向を比較するという意味合いで組成表を提示することにしたい（第 50 図・第 30 表）。

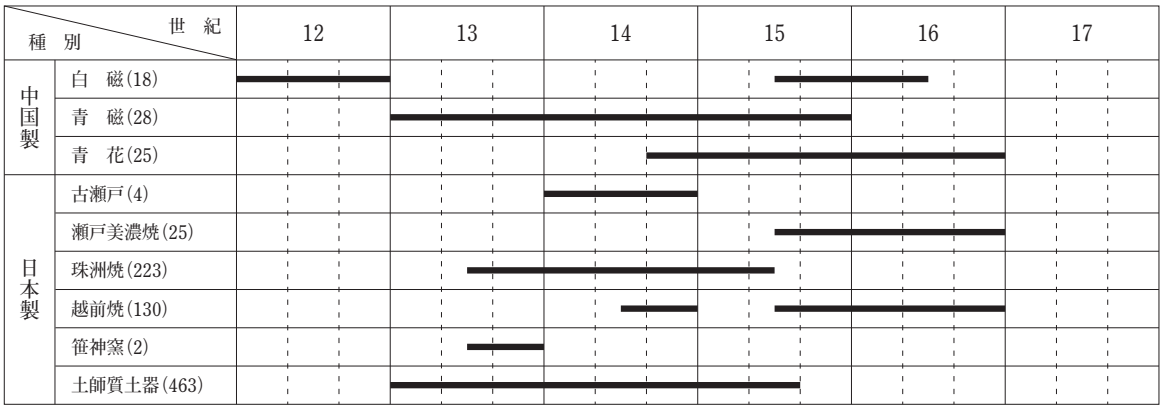
中世の土器・陶磁器は全体で 940 片で，全体の比率をみると土師質土器 49.3％，珠洲焼 23.7％，越前焼 13.8％と続き日本製土器・陶磁器が圧倒的に多い。舶載陶磁器は全体でも 7.7％を占めるにすぎない。これらの出土土器類は時期幅が大きく，継続年代を求めると第 51 図のようになる。14 世紀と 15 世紀を境にして前半（第 1 期）と後半（第 2 期）に分れる。大きくは珠洲焼から越前焼の変換で，新潟県を含む北陸地方に見られる様相である。珠洲焼は立地を利用した広範な流通経済圏を越前焼に先行して形成した。しかし，製品の粗雑化によって越前焼との競合に負け，戦国期を待たずして次第に衰退した。第 1 期の所属時期の明らかなものは，青磁では 13 世紀末～ 14 世紀前半，古瀬戸中期～後期の 14 世紀，珠洲焼Ⅱ-３期の 13 世紀後半，Ⅲ～Ⅳ期の 13 世紀後半～ 14 世紀，Ⅴ期の 14 世紀後半～ 15 世紀前半，笹神は 13 世紀後半となる。第 2 期は，青磁ではＢ-４類の 15 世紀，白磁ではⅢＥ群の 15 世紀



第 50 図　出土遺物破片数

表 30　出土遺物破片数

中世					940
中国製陶磁	1	青磁	碗	24	28
			皿	2	
			盤	1	
			折縁鉢	1	
	2	白磁	碗	1	18
			皿	15	
			合子	2	
	3	天目	碗	1	1
	4	青花	碗	21	25
			皿	4	
日本製陶磁	5	古瀬戸	皿	1	4
			瓶子	2	
			花瓶	1	
	6	瀬戸美濃焼	碗	2	25
			皿	5	
			丸皿	9	
			天目	6	
			小鉢	1	
			香炉	2	
	7	珠洲焼	壺Ｔ	10	223
			壺Ｒ	19	
			壺Ｋ	1	
			甕	40	
			大甕	102	
			片口鉢	51	
	8	越前焼	壺	7	130
			甕	97	
			擂鉢	26	
	9	笹神窯	甕	1	2
			鉢	1	
	10	瓦器	大鉢	5	21
			火鉢	1	
			風炉	14	
			香炉	1	
	11	土師質土器	皿	337	463
			甕	126	



第 51 図　出土遺物の継続年代

後半～ 16 世紀前半，青花では碗 C 群の 16 世紀中葉，碗 E 群の 16 世紀後半，漳州窯系の 16 世紀末，瀬戸美濃焼の大窯第 1 段階の 15 世紀後半～ 16 世紀前半，同大窯第 2 段階の 16 世紀前半～ 16 世紀後半，越前焼ではⅢ - 2 期の 14 世紀後半，Ⅳ - 3 期の 15 世紀後半，Ⅴ - 1 期の 16 世紀前半，Ⅴ - 3 期の 16 世紀後半となる。第 1 期は 13 世紀～ 14 世紀を中心とした青磁・白磁・古瀬戸・珠洲焼・笹神のグループ，第 2 期は 14 世紀後半～ 16 世紀を中心とし，青磁・白磁・青花・瀬戸美濃焼・越前焼のグループに分けられる。

第 1 期についての館の主については誰なのかは不詳であるが，第 2 期については文献に登場する五十公野氏が活躍した時代である。本遺跡からは，備前焼・越中瀬戸・肥前焼 I - 1 期（唐津焼）などの 16 世紀末葉からから 17 世紀末までの遺物は出土しておらず，遺物から見た遺跡の存続時期の上限は 16 世紀末と考えられる。これは，天正 15 年（1587）の上杉景勝の攻撃で五十公野城が廃城となったことからも，当該期の特徴を示しているといえよう。土師質土器皿は，手づくねの A 類，ロクロ成形糸切りの B 類，ロクロ成形ヘラ切りの C 類とに分けられる（坂井 1987）。 細片が多いため，図化個体は少ないが，B・C 類のロクロ成形が多数を占める。A 類を図化したものは 26 のみで，出土量も少ない。B 類の皿は，大きく二大別が可能である。67・68・143 は，器壁・口縁部とも厚く，腰部に丸味をもつ。また，67・143 の腰部にはシャープで幅狭いロクロ目が文様としてつけられ，底面との境はナデられて境目がない。これらは，12 世紀の土師器杯の成形技法に共通することから，伝統的技法の延長と思われ（B 類 a），13 世紀としたい。また，141 のように，壁が薄く直線的に開き，底面と体部の境が角をもつ器形（B 類 b）は後出で，14 ～ 15 世紀前半となろう。C 類のロクロ成形ヘラ切り離し技法は，阿賀北地域に分布の中心がある特徴的な技法で（坂井 1988･品田 1991･水澤 2007），66･137 などがあり，14 ～ 15 世紀前半に位置付けられよう（鶴巻 2004）。体部破片では B 類 b と区別できないため量比は求め難い。

4　金属製品について

今回出土した金属製品のうち，特に注目される観音立像，鍋等について観察を通して，その年代について考えて行くこととしたい。観音立像は撹乱（風倒木痕），鍋は井戸 2 の掘り方埋土からの出土である。

a 観音立像（第 41 図 187）　観音立像は調査区⑨ Cd3 - 2 グリッドを中心とする撹乱坑（風倒木痕）からの出土である（第 19 図）。撹乱坑は，東西 4.8m, 南北 5.2m の不整円形で，深さ 1.3m, 断面は逆三角形状で中央部が低い（図版 8）。埋土は，粗砂・小石を含む暗褐色土を主体とし，指で押すと簡単に窪むほど締まりが弱い。堆積もレンズ状や水平ではなく，一気に埋まった状態であり，風倒木痕と判断した。観音立像は，この穴のほぼ中央，遺構検出面から 45cm の深さで出土した。

左手にツボミを付けたハスの枝（未敷蓮華）を持ち，それに右手をかざすしぐさの立像で，その特徴から鎌倉時代に製作された聖観音像とみられる。（元京都国立博物館　企画室長　久保智康氏のご教授による）

総高 74.6mm, 像高 68.3mm, 重量 57.6g, 方框幅 18.4mm, 方框奥 18.2mm の鋳銅一鋳前後合わせ型で，湯口は框座裏と考えられる。框裏には浅い擦痕が見られるが，湯口を研磨整形した痕跡であろう。土中にあったため全身に縁青が湧出し，肌荒れしている。他の例から察して，もとは全面に鍍金が施されていた可能性もあるが，現物を見る限り鍍金痕はない。宝髻は高く結い，正面の地髪部は左右に細い線で表現される。その中央部には浅い円形の凹があるが，化仏を示すものであろうか。地髪は両側面の一部までに留どまり，後頭部には至っていない。顔容は目鼻立が浅く，不明瞭である。身の上半身は左肩から右脇腹に至る条帛の上に天衣をまとい，下半身は裳（裙）と腰布をつけ，腹部正面からはX字状に垂下する腰布を留める帯がある。肩から伸下する左手は肘をまげて持物（未敷蓮華）を持ち，右手は肘をまげて胸前で掌を左に向けて立て，五指を上方に伸ばしている。両足はそろえて蓮肉上に直立する。台座は，蓮肉蓮弁の円形蓮華座と方框からなる。上半身を飾る胸飾・腕釧などは見られない。

表 31　観音立像比較　※像高は蓮台座も含む

	五十公野館（新発田）	目洗沢中世墓跡（阿賀野）
総　高	74.6mm	75.0mm
像　高	68.3mm	69.8mm
重　量	57.6g	67.6g

この観音立像と大きさ・様姿が極めて似ている資料が阿賀野市出湯華報寺墓跡（目洗沢中世墓跡）出土の観音立像である。徳治 3 年（1308）銘の青銅製の骨蔵器に納められた資料で，明治 38 年に旧普賢堂跡と呼ばれた箇所で発見された。昭和 33 年に中川成夫らにより発掘調査され，方四間の石敷で正面に二間の張出部を持ち，中央部に石組による土壇を持つ遺構が検出された。この遺構の中心部に青銅製骨蔵器が石櫃に納められていたと考えられ伝高阿廟といわれている（中川・岡本 1959）。出土は昭和 27 年および昭和 34 年に「華報寺墓跡出土品」として観音立像をも含めて新潟県指定文化財（工芸品）として指定されている。

華報寺墓跡出土 (目洗沢中世墳墓出土) の観音立像は，総高 75.0mm, 像高 69.8mm, 重量 67.6g で，表面は全体に暗黒色を呈する。観音立像は骨蔵器の中に入れられたことから徳治 3 年以前に製作された可能性が強い。科学分析の結果（第Ⅵ章）から同じ鋳型でも製作に使われた金属組成が異なっていることがわかった。この差は重量に反映している（表 31）。共に青銅製であるが，五十公野館出土品は銅と錫に比べて鉛の割合いが高いため，融点が低く鋳注が容易な反面，表面が風化しやすいという特徴がある。

土中から出土する金属製の仏像を ” 出土金銅仏 ” と呼んでいるが，近年は発掘調査でも発見されるケースも多いが，農作業・農地造成・道路開削事業等で偶然発見されて，個人が所蔵するものも少なくないと思われる。表 32 は県内の現存金銅仏であるが，その数は極めて少ない。寺院に関係する経塚・墳墓・寺院そのものからの出土が主なものである。像名についても多種あり，一定していない。何らかの仏教作善のために意図を持って土中に埋納されるケースと火災などによる不慮の災禍や歴史の変動のなかで煙滅・転倒した寺院と運命を共にしたものが土中から出土するケースがある。

五十公野館跡出土の観音立像と目洗沢中世墓跡の観音立像は一つの原型から前後に外型を取り，それを合わせた空間に溶銅を流し込む技法は簡便で効率のよい技法で，複数製作が可能な鋳造技法といえよう。

県内の出土金銅仏（現存）以外に明治 7 年から昭和 17 年まで現在の東京国立博物が事務処理が終わった埋蔵物をめぐる書類の綴りがある。埋蔵物録と呼ばれ，全 119 冊で構成され東京国立博物に所蔵されている史料である。これには全国各地から出土した古銭・仏像・土器などについて出土地・土地所有者・物品名・形状等を記したものである。東京国立博物館紀要に届け出記録がまとめられている（時枝 2001）。

これに基づいて，県内の仏像出土地を列挙すれば下記のようになり，その出土地を新聞記事及び旧市町村史記事を入れると合計 16 所となる。分布の集中は上越市域に集中している一方，阿賀北地方といわれている新潟県の北部域に集中していると言える。埋蔵物録に記載されている仏像自体はおそらく鋳銅製と思われ，懸仏も含まれているかも知れないが，現存しているか否についても不明である。なお，仏像出土の届出者の意識の差によって分布の差が出てくるのであろうか。本県の仏像に関しては明治 32 年の埋蔵物録（館史 709）を最後とする。

明治 15 年埋蔵物録（館史 693）

13 号新潟県古志郡堀金村近藤喜平太所有地に於テ発掘ノ観音像差出ニ及バザル旨同県へ指令の件（7 月）

22 号新潟県刈羽郡藤井村大矢孫四郎所有地ニ於テ発掘ノ仏像差出ニ及バザル旨同県へ指令の件（9 月）

第 52 図　県内出土金銅仏の分布

表 32　県内の出土金銅仏一覧

	遺　跡　名	所　在　地	像　名	総　高	備　　考	文　　献
1	不動院小栗山経像	見附市小栗山	阿弥陀如来座像	7.1cm	12 世紀後半の珠洲 I 期の甕の中に納められる , 県指定	小出 1978
2	※目洗沢中世墓跡	阿賀野市出湯	観音立像	7.5cm	徳治 3 年銘の骨蔵器中に納められる。念持仏 , 県指定	中川 1959
3	漲泉窟湯釜	阿賀野市出湯	観世音菩薩座像	4.5cm	明治 14 年出土。鎌倉	笹神村 2003
4	釈迦堂	新潟市板井	釈迦誕生仏	12.3cm	文政年間開墾中に発見 , 市指定	佐々木 1967
5	沖布寺院跡	阿賀野市女堂字沖布	観音立像	5.5cm	畑地より出土。中世末～近世	笹神村 2003
6	本郷	胎内市本郷 206	阿弥陀如来立像	5.3cm	昭和 43 年江上館隣接の畑地より出土	中条町 1993
7	※五十公野館跡	新発田市五十公野	観音立像	7.46cm	平成 26 年発掘	
8	法定寺	上越市法寺字万年	金銅仏手（部分）			浦川原村 1984

明治 16 年埋蔵物録（館史 694）

1 号新潟県中頸城郡下稲田村杉本幸平所有地ニ於テ発掘ノ仏像差出ニ及バザル旨同県へ指令の件（1 月）

12 号新潟県中頸城郡向橋村高橋秀吉所有地ニ於テ発掘ノ仏像ハ差出ニ及バザル旨同県へ指令の件（6 月）

30 号新潟県中頸城郡高田新四ノ辻道路に於テ発掘，青銅製毘沙門像受納の件（10 月）

明治 32 年埋蔵物録（館史 709）

第 5 号新潟県中頸城郡下黒川村稲荷神社境内に於テ発掘ノ仏像差出ニ及バザル旨同県へ指令の件（2 月）

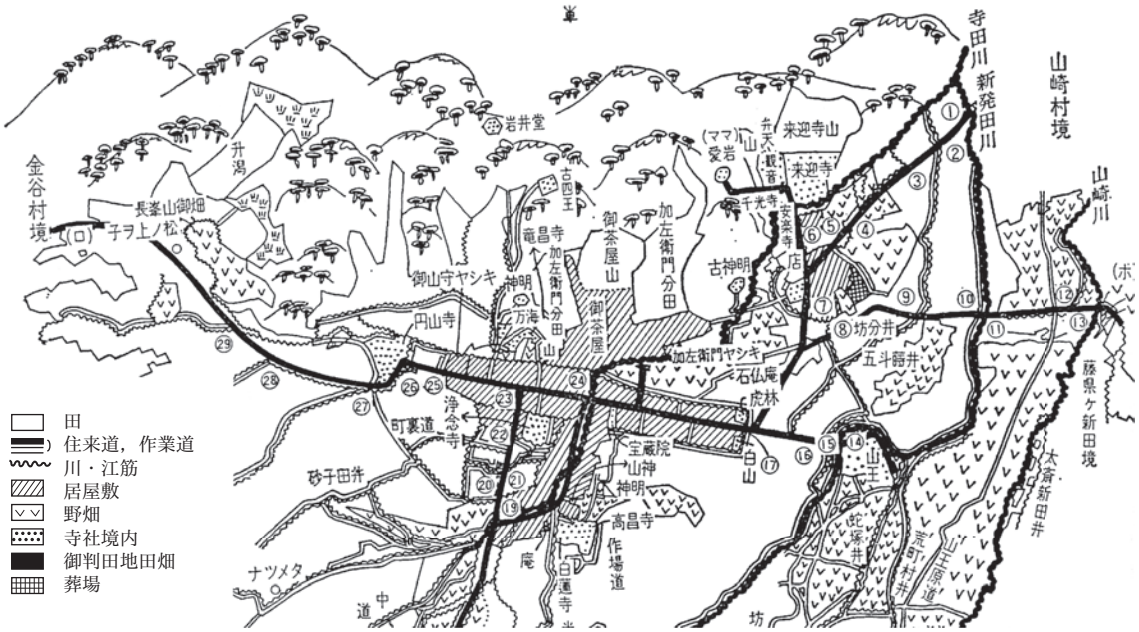
大正１５年 10 月に刊行された『新潟県中頚城郡三郷村村誌』には「本長者原地内笛吹観音境内隣接地の畑地から地主である田村佐治郎が明治 18 年６月１日　御丈１寸４分の金仏を１体発見し，同家に祀られている」とある。そして，その写真が巻頭写真として掲載されている（三郷村教育会編纂 1926）

昭和 4 年白銀賢瑞が高田新聞に連載した昭和 4 年 11 月 29 日付の『頸城巡礼』（68）里五十公野村（九）「国分尼寺の跡は何處」に「法花寺実踏査　左の如き資料を得る。遺物イ仏像，丈二三寸位の金銅物（金銅仏か）二三体出土。磨滅の度が強いため時代を見ることができず・・・」とある（関 1999）。

ｂ 鍋　（第 41 図）　古代・中世の鋳鉄鋳物については五十川伸矢氏の研究（五十川 1992）に負う所が多い。全国の古代・中世の羽釜・鍋・鉄鉢等を集成し地域性や年代を考える先駆的なものとなった。新潟県内でも近年の発掘調査で鉄鍋が発掘され，新潟市内野遺跡の発掘調査報告書（立木 2002）で集成され，その後北陸地方の鉄鍋について分布・編年的位置づけがなされている（水澤 2016）。五十川氏の分類に基いて A 類（内耳なし），B 類（吊手耳あり），C 類（内耳あり）に分類し，新潟県内には B 類・C 類の 2 者があるという。本遺跡出土のものは，発掘後の状態は図版 27 の展開写真の通りで，口縁の一部を残し，体部下半に至るもので全体の 1 割程度しか残っていない。その後，早急に実測を行った結果，口縁の径は約 30cm, 高さ 14cm 程度となる。口縁は外側へ屈曲し，口唇は内側へ折り曲げられている。体部から底部への屈曲は強い。全体的型態は子安遺跡出土の C 類に近似している。しかし，現在の状況は酸化して破片そのものが薄く剥離して形状を保っていない。全体の 1 割程度しか残っていないため内耳が付くのか 3 脚が付くのかも判断しがたい。破片等を詳細に観察しても内耳の部分は存在しない。3 脚の部分については，本資料は底部の変化点より底面が内側に入っているため，他の出土資料を見る限り 3 脚はないかも知れない。底面の湯口は欠損し，存在しない。年代的には 14 世紀頃に位置づけされよう。他に丸型の湯口が 1 点出土していることも注目される。

5　2 枚の絵図から

発掘地点については新発田市五十公野字櫓下であることは前述した所でもある。2 校の絵図（第 49・50 図）等を参考に土地の履歴と景観について略述して行くこととする。天明年間（1781 ～ 1789）の五十公野耕地絵図（伊藤・斎藤 1986）は「天明度調写五十公野五ヵ村耕地絵図」を写して作成したものである。図示した範囲は図の東側を拡大した部分である。御茶屋と五十公野の町並みの南東側に挟まれた野畑が本遺跡にあたるものであろう。そこには“加左衛門ヤシキ”と記され，その南東側には安楽寺・来迎寺などの寺院が所在している。加左衛門という人物は，“御茶屋”（現 五十公野御茶屋庭園）の東側にある“御茶屋山”を挟んだ北側と南側に“加左衛門分田”と記されていることから，この近くでは相当の土地を所有していた人物であろう。御茶屋も現在の五十公野御茶屋庭園に比して広大な面積を占めている。貞享 3（1686）年の『五十公野組之内外城村田畠御検地帳』に「小字名いやしき，名請人大賀り，加左エ門」と記されている（市編纂委員会 1961）。加左衛門と加左エ門が直接関係するか否か不明である。また“加左衛門ヤシキ”の一角に“石仏庵”と記されている。石仏庵は初代新発田藩主溝口秀勝に関係の深い庵名である。慶長７年（1602），溝口秀勝は五十公野地内に居を構えて新発田城の築城を開始した。現在，その所在地は明らかではない。慶長 15 年（1610）に 63 歳で逝去し，五十公野栃山で火葬されたといわれている。“栃



第 53 図　五十公野耕地絵図（部分）

第 54 図　五十公野村田畑宅地其他地引絵図

山”という地名は現存しないが，その地に灰を集めて塚を造り，石仏を建立し御灰塚と呼称した。さらに一宇の堂を結び石仏庵（江戸吉祥寺の末寺）と称したという。この庵は延享年間（1744 ～ 1748）には大麟庵と改称したが，一般には石仏庵と呼ばれていたという（相馬 1952）。さらに石仏庵の近くには“虎林”の記載があり，4 代藩主溝口重雄が延寶年間（1673 ～ 1681）に建立した“虎林庵”という寺院で，明治 41 年廃寺となっている。

五十公野小学校の初代校舎も明治 9 年（1876）“栃山”に落成したと記されている（相馬 1952）。このことから小学校敷および近接地が“栃山”と呼ばれていたらしい。その所在は現在の櫓下 4862 番地に該当しよう。

明治 9 年から 12 年に作成された「越後国蒲原郡五十公野村田畑宅地其他地引絵図」（第 50 図　新潟県立文書館所蔵）には五十公野小学校の地番である櫓下 4862 と明示されており，その敷地は台地に沿って南北に通る道路に面し，区画は南北に長い長方形を呈している。学校敷の区画の東側の区画が東西方向を示し，学校敷も以前は東西方向の区画に入っていた可能性が極めて高い。今回発掘された大形溝も東西方向の区画方向にほぼ一致する。

学校敷の北側には，原本によれば境内が黄色，墓地が暗灰色に彩色された寺院が描かれている。ここが後に大麟庵と改称された石仏庵であると思われる。近辺の安楽寺や薬師寺についても同様の色彩で彩色されている。

明治 44 年，初代校舎の増築に伴い，石仏庵内の堂宇を取り壊し，石仏は台座と共に小学校敷の北西隅に移したという（相馬 1952）。2 代目校舎の配置図（第 1 図）によれば学校敷の南限は櫓下 4860 番地で，校舎敷は台地の縁辺を通る西側の道路とそれに直行する東西道路に囲まれた範囲である。第 1 図の学校敷周囲の台地上段及び下段には杭を連続的にめぐらし，その範囲を明確にしている。北東隅には御灰塚と呼ばれる祭壇を伴うエリアが描かれている。また，南西隅には神社記号が描かれているが，発掘調査でその基礎部分を検出し，確認した。学校敷を含む台地上は耕地として活用され，標高は北に向って順次低くなり，小字二番町の裏手まで続いている。

学校敷の外側，台地縁を通る道路の西方は小字名が櫓下でも水田区画の主軸が南北に長く，台地上の畑地とは主軸が異なり旧流路を示すものであろう。現在は住宅地となっているが，昭和 24 年頃の建設省地理調査所の航空写真では会津街道の南側も水田となっている。この流路は五十公野の町並み形成期以前のものであろう。

いずれにせよ学校敷が新たに加わったものの基本的には天明年間の絵図とほぼ同じ景観を示していると言えよう。

昭和 30 年，新発田市に五十公野村が合併し，市立五十公野小学校と改称した。昭和 39 年，3 代目校舎の建設に際して，北西隅にあった石仏庵の墓地を買収し，昭和 46 年市道拡幅に伴い学校敷の北西隅に祀っていた石仏（釈迦如来座像）を七軒町墓地へ転座した。その間，グランドの用地買収等で学校敷は広がったものの，過去 3 代に亘る校舎，建設される東小学校校舎もグランドを除く 同一地点（東西 110m, 南北 90m）で場所を移しながら存続する。

要　　約

本遺跡の調査成果の要点を以下に述べ，全体を概観する。

① 今回発掘調査した五十公野館跡は，天明年間作成の五十公野村耕地絵図の「加左衛門ヤシキ」にあたる。明治9年から現在まで，小学校敷地として利用されてきた。背後の五十公野城跡は，天正15年（1587）10月24日，上杉景勝に攻め落とされた五十公野氏終焉の地で，最後の城主は五十公野道如斎信宗である。

② 館跡は，舌状の山麓台地に立地した不整な台形状で，東側の範囲は不詳なものの，東西100～115m，南北80～105m，面積約10,300㎡と想定できる。また，五十公野城に隣接していることから，根小屋型式の居館，あるいはこの城の副郭の一部とも考えられよう。

③ 主たる遺構は，竪穴建物・土坑・井戸・溝である。ただし，過去の学校建築等で残存状態が悪く，調査面積の割に検出できた遺構は少ない。堀や土塁の痕跡は確認できなかった。土坑・溝の一部は，江戸時代に下る可能性がある。

④ 井戸は深さ3.0～3.5mの6基で，確認面での掘方の長径は3.12～5.90 mと極めて大きい。いずれも井戸側を埋め込む掘方を持ち，水溜は曲物と桶である。切り合い関係から，井戸側は縦板組みが古く桶組みが新しく，井戸本体は方形から円形への遷移が分かった。

⑤ 遺物の出土量は，撹乱の影響か調査面積の割に少ない。単独の破片が多く，一括で出土するケースは極めて少なく，接合率も非常に悪い。出土遺物の年代は，古代（8・9世紀），中世（13～16世紀），近世（18・19世紀）にわたり，主体は中世後期（15・16世紀）である。

⑥ 中世の土器・陶磁器には，中国製の青磁・白磁・天目・青花，国産の古瀬戸，瀬戸・美濃焼，珠洲焼，越前焼，五頭山麓窯址群笹神支群窯，瓦器，土師質土器がある。見込み周辺を丸く打ち欠いた青花碗3点が注目される。

⑦ 土坑12に据え置かれた状態で出土した珠洲焼大甕は，体部のちょうど対になる位置2箇所に直径20～25㎝の同心円状と放射状の割れがある。内側からの加撃による人為的な破壊で，落城での作法の可能性も考慮し，このような特異な割れの類例を待ちたい。

⑧ 木製品には，漆器小皿，箸，曲物，折敷などがある。

⑨ 金属製品には，鉄製の刀･刀子･雁股鏃･鉄鏃･鉄鍋･金具･和釘など，青銅製の観音立像，銅製の花瓶･仏具の蓋･銭貨があり，鍛冶関連は羽口・椀形滓・鉄滓が出土している。

⑩ 特筆される遺物として，総高7.5 ㎝の青銅製観音立像がある。原形が同じと考えられる瓜二つの観音立像が，阿賀野市出湯の華報寺中世墓跡（目洗沢墳墓）から出土している。華報寺例は，徳治3年（1308）銘の青銅製骨蔵器の中に入っていたもので，新潟県指定文化財となっている。両者を成分分析した結果，銅・錫・鉛の割合に顕著な違いがあり，鋳造地と鋳造時期の探求が今後の課題となろう。

⑪ 石製品には，石臼・硯・砥石などがある。また，珠洲焼甕の破片を用いた転用砥石もある。

⑫ 中世後期の館跡で出土する遺物量に比べて青磁や天目茶碗が少なく，16世紀後葉の青花と越前焼，石臼・砥石の出土量は多い。

⑬ 石臼・砥石や珠洲焼・越前焼の多くに，炭化物の吸着や火ばね・剥落・赤橙色化といった被熱痕がみられ，遺構埋土にも炭化物が目立つことから，五十公野城の落城に関係する可能性がある。

⑭ 土師器の杯・椀（墨書）・甕・甑や土鍋，須恵器杯といった古代の遺物が少量ながら出土している。

⑮ 成人の火葬骨の入った土師質骨蔵器は，18世紀後半以降の江戸時代後半～明治時代初期に位置づけられる。

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会 編　2007 『愛知県史 窯業２別編　中世・近世 瀬戸系』 愛知県

相羽重徳　2009 「新潟県における近世骨蔵器の諸相」『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会

相羽重徳　2013 「近世火葬骨蔵器の使用に関する事例報告二題」『新潟考古』第 24 号　新潟県考古学会

青木　宏　1964 「木場城についての考察」『越後木場城』 新潟県黒埼村教育委員会

阿部洋輔ほか　1980 「鎌倉・室町期の新発田」『新発田市史』上巻　新発田市

荒川隆史ほか　2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第232集 境塚遺跡』 新潟県教育委員会･新潟県埋蔵文化財調査事業団

石村真一　1997 『桶・樽 Ⅲ』ものと人間の文化史 82 －Ⅲ　法政大学出版局

五十川伸矢　1992 「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集　国立歴史民俗博物館

伊藤啓雄　2006 「新潟県における中世土師器Ⅲと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品－中世後半～近世初頭の様相－」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』第 19 回北陸中世考古学研究会資料集　北陸中世考古学研究会

伊藤正一　1963a 「蒲原平野の館および城址」『越佐研究』第 19 集　新潟県人文研究会

伊藤正一　1963b 「新発田市の城館址（一）」『新発田郷土誌』第２号　新発田市史編纂委員会

伊藤正一　1964 「新発田市の城館址（二）」『新発田郷土誌』第３号　新発田市史編纂委員会

伊藤正一　1966 「新発田市の城館址（三）」『新発田郷土誌』第４号　新発田市史編纂委員会

伊藤正一　1980 「城と館」『新発田市史』上巻　新発田市

伊藤　充・斉藤寿一郎　1980 「農村の姿」『新発田市史』上巻　新発田市

上田秀夫　1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

宇野隆夫　1982 「井戸考」『史林』第 65 巻第５号　史学研究会

浦川原村史編纂室　1984 「神社と寺院」『浦川原村史』 新潟県浦川原村

江戸遺跡研究会 編　2001 『図説　江戸考古学研究事典』 柏書房

大沼倹爾　1980 『新発田の古城物語』（私家版）

大野　亨　2001 「竪穴建物とはなにか」『掘立と竪穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学叢書２　東北中世考古学会

大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館（佐賀県有田町）

大家　健　1997 「越後の佐々木氏」『図説 中世の越後 春日山城と上杉番城』 野島出版

荻野正博　1980 「加地荘・豊田荘の荘域」『新発田市史』上巻　新発田市

小野正敏　1982 「15 ～ 16 世紀の染付碗 , Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

小野正敏　2001 『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会

春日真実　1999 「第Ⅳ章 古代 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院

川上貞雄　2003 「中世寺院址と墳墓」『笹神村史　資料編１原始・古代・中世』 新潟県笹神村

川上貞雄　2010 『五頭山華報寺と出湯温泉－そして集落のすべて－』（私家版）

河野眞知郎　2004 「政権都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年」『中世都市研究 9 政権都市』 新人物往来社

桑原正史　1980 「律令時代の阿賀北地方」『新発田市史』上巻　新発田市

小出義治　1978 『小栗山不動院裏山経塚群』 見附市教育委員会

国土地理院　1993 『1：25,000 土地条件図　新発田』

後藤守一　1937 『日本歴史考古学』 四海書房

小山正忠・竹原秀雄　1967 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社

埼玉県立博物館 編　1993 『甦る光彩 関東の出土金銅仏』特別展図録　埼玉県立博物館

酒井和男　2000 「沢海藩二代藩主溝口政勝墓」『横越町史　資料編』 横越町史編さん委員会　新潟県横越町

坂井秀弥　1987 「第Ⅶ章 まとめ ２.中世」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 48 集 番場遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第１号　新潟考古学談話会

佐々木市治郎　1967 『板井風土記－葦のさゝやき－』（私家版）
佐藤友子ほか　2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第238集 小坂居付遺跡』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
三郷村教育委員会編纂　1926 「遺跡と遺物」『新潟県中頸城郡三郷村村誌』
新発田市教育委員会　1980 『新発田市史』上巻　新発田市
新発田市史編纂委員会 編　1966 『新発田市史資料編』第4巻近世庶民史料（上） 新発田市
新発田市立五十公野小学校 編　1973 『百年』 百周年記念事業準備委員会
上越市教育委員会　2009 『市内遺跡発掘調査概要報告書 子安遺跡』 上越市教育委員会
小学館『大辞泉』編集部　1995 『大辞泉』 小学館
鈴木弘太　2006 「中世「竪穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号　日本考古学協会
関　雅之　1999 「『高田新聞』からみた上越地方の考古学－明治・大正・昭和初期の動向から－」『新潟考古』第10号　新潟県考古学会
相馬恒二　1952 『五十公野史話』 五十公野村役場
高橋一樹ほか　2016 「北方文化博物館所蔵『越佐史料稿本』（天正十四・十五年）」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第17号　新潟県立歴史博物館
武部喜充　2015 『行屋崎遺跡』田上町埋蔵文化財調査報告書 第22集　田上町教育委員会
立石堅志　1995 「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　真陽社
田中耕作・鶴巻康志　1990 『三光館跡・宝積寺館跡』新発田市教育委員会
田中照久ほか　1989 『北陸における越前陶の諸問題』第２回北陸中世土器研究会資料 北陸中世土器研究会
田中照久・木村孝一郎　2005 「越前窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相 ～生産技術の展開と編年～』 資料集　全国シンポジウム実行委員会
立木宏明　2002 「内野遺跡出土の鉄鍋について」『内野遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
鶴巻康志ほか　1997 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』 新発田市教育委員会
鶴巻康志　2004 「土師器からみた中世の小地域圏－新潟県北部阿賀北地方を中心に－」『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』 日本中世土器研究会
鶴巻康志　2005 「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相 ～生産技術の展開と編年～』 資料集　全国シンポジウム実行委員会
時枝　務　2001 「近代国家と考古学－「埋蔵物録」の考古学史的研究」『東京国立博物館紀要』第36号　東京国立博物館
戸根与八郎ほか　1973 『新潟県埋蔵文化財緊急調査報告書 第１ 大墓遺跡・釈迦堂遺跡・半ノ木遺跡』 新潟県教育委員会
永井久美男　2002 『新版 中世出土銭の分類図版』 高志書院
中川成夫・岡本　勇　1959 『越後華報寺中世墓址群の調査』立教大学文学部史学科調査報告４　立教大学文学部史学研究室
中川成夫・岡本　勇　1965 「新潟県北蒲原郡出湯華報寺における中世墳墓の発掘」『MOUSEION』№11　立教大学学校・社会教育講座
奈良文化財研究所編　2008 『日本古代木簡字典』 八木書店
新潟県教育委員会　2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集 岩倉遺跡』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県教育委員会　2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第262集 境塚遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟の仏像展実行委員会 編　2006 『新潟の仏像展』中越大震災復興祈念特別展図録　新潟の仏像展実行委員会・新潟県立近代美術館
新潟県立歴史博物館　2006 『中世人の生活と信仰－越後・佐渡の神と仏－』展示図録　新潟県立歴史博物館
秦　繁治ほか　1995 『寺町遺跡第二次発掘調査報告書』 新潟県吉川町教育委員会
八王子市教育委員会　2002 『八王子城跡御主殿－八王子城跡ⅩⅢ八王子城跡御主殿発掘調査報告書－』 八王子市教育委員会

日色四郎　1967　『日本上代井の研究』　日色四郎先生遺稿出版会
平田天秋　2005　「珠洲・珠洲系」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相 ～生産技術の展開と編年～』 発表要旨集　全国シンポジウム実行委員会
平田天秋　2006　『珠洲焼窯跡群－珠洲古陶関係遺跡発掘調査等事業－』　珠洲市教育委員会
福田仁史　1999　「越後沢海藩主溝口政勝の墓」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院
藤木久志・伊藤正義 編　2001　『城破りの考古学』　吉川弘文館
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』　高志書院
北陸中世考古学研究会　1998　『北陸中世の金属器－生産と流通－』　北陸中世考古学研究会
本間信昭ほか　1976　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第８ 焼屋敷遺跡・杉之森遺跡』　新潟県教育委員会
前山精明ほか　1985　『城願寺跡 坊ヶ入墳墓』　新潟県巻町教育委員会
水澤幸一　1993　「中条町大字本郷 206 番地出土の小金銅仏について」『江上館跡Ⅰ』　中条町埋蔵文化財調査報告第２集・奥山荘城館遺跡調査報告第１集　新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2007　「中世越後の土器と陶磁器－ 11 ～ 14c 前半」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器･施釉陶器･瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
水澤幸一　2009　『日本海流通の考古学』　高志書院
水澤幸一　2016　「中世越後の鉄鍋について」『新潟考古』第 27 号　新潟県考古学会
三輪茂雄　1975　『石臼の謎－産業考古学への道－』　産業技術センター
室岡　博ほか　1990　『樋田遺跡第二次発掘調査概報』　新潟県吉川町教育委員会
室岡　博ほか　1991　『樋田遺跡第三次発掘調査概報』　新潟県吉川町教育委員会
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
矢部良明ほか　2012　『角川日本陶磁大辞典 普及版』　角川学芸出版・角川グループパブリッシング
山崎　天・長澤展生　2005　『能代川関係発掘調査報告書Ⅹ 榎表遺跡』五泉市文化財報告 17　五泉市教育委員会
山本　博　1970　『井戸の研究』　綜芸舎
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉川町教育委員会　1995　『寺町遺跡　第二次発掘調査報告書』　新潟県吉川町教育委員会

付 編　五十公野氏と新発田氏についての粗描

阿部洋輔

1　五十公野氏・新発田氏の登場

永正 3 年（1506），越後守護上杉房能に祝儀太刀が献上された（上越市史別編 上杉氏文書集 3542 号，以下，上越と略記し整理番号を記す）。守護代長尾為景の一族をはじめ各地に割拠する国衆たちが名を連ねている。加地庄域では加地弥太良(郎)・新発田備前守と並んで五十公野信濃守，それに竹俣久三良(郎)が記されていて，戦国初期にはこれら四氏が肩をならべる存在となっていたことがみてとれる。いずれも鎌倉初期に源頼朝から加地庄の地頭職を与えられた佐々木盛綱の子孫で，嫡家加地氏を宗家として佐々木加地氏と総称される。

庶家のうちいちはやく勢力を拡大したのは新発田氏であった。享徳 3 年（1454）に奥山庄の中条房資が記した記録（新潟県史資料編 4 所収 1316 号，以下，県史 整理番号を記す）には，応永 30 年（1423）から越後守護方と守護代方の間で数年にわたって戦われた応永の大乱の記事があり，そこに「加地・新発田」と記されている。ここから室町初期には佐々木加地一族のなかから新発田氏が台頭して宗家加地氏と比肩するようになったことがうかがわれる。五十公野氏と竹俣氏は新発田氏よりやや遅れて登場したことになる。

享禄 4 年(1531)正月，守護代長尾為景陣営の軍陣壁書に署名した国衆のなかに加地安芸守春綱・竹俣筑後守昌綱，五十公野弥三郎景家・新発田伯耆守綱貞の名がある（県史 269）。このうち筑後守昌綱は当主の三河守慶綱が幼少のため名代として竹俣氏を代表したという（越佐史料巻 6-223 ページ，以下，越史巻-ページ数を記す）。彼らは白河庄域の山浦氏・水原氏・安田氏，奥山庄域の中条氏・黒川氏，小泉庄域の本庄氏・色部氏・鮎川氏などとともに揚北衆（阿賀北衆）とよばれ，越後戦国期のさまざまな場面で大きな役割をはたしていく。

2　新発田氏の展開

2008 年，筑波大学教授（当時）山本隆志氏によって高野山清浄心院所蔵の「越後過去名簿」が発見され，全文が新潟県立歴史博物館研究紀要第 9 号に紹介された。これは越後に下った清浄心院の僧が高野山での供養を依頼した者を記した記録で，被供養者の戒名，供養依頼者の在所と年月日が書かれている。依頼者は守護や守護代から町や村落の住民まで各層におよび，たとえば定かでなかった長尾景虎の父為景の没年が判明するなど，越後戦国史にゆたかな情報を提供した。

この過去名簿に記された加地庄域は大きく加治・新発田・五十公野の三区域が読み取れる。新発田地域は供養者が約 80 名と最も多い。天文 4 年（1535）に供養を依頼した「シハタハウキトノ上」，同 16 年の「新発田防記守トノ立之」とあるのはともに伯耆守綱貞のことである。その後も「シハタトノ」「新発田トノ」は同 22 年・23 年，弘治 2 年（1556）と供養を依頼している。このうち 22 年のものは自身の逆修依頼だった（逆修は生前に死後の七七日の仏事を行って冥福を祈るもの）。

天文 17 年末，長尾景虎は兄晴景にかわって越後守護代となり，事実上越後の国主となった。その後関東管領上杉氏をつぎ，名を政虎，さらに輝虎とあらため，元亀元年（1570）からは謙信と称した（以下謙信と表記）。この謙信治世の初期，永禄 2 年（1559）10 月，謙信が上洛から帰国したさいも「侍衆」が祝儀太刀を献上した（上越 3542）。ここには「新発田尾張守　金覆輪」と書かれている。新発田氏は代替わりして当主が伯耆守綱貞から尾張守に代わっていた。元禄 9 年（1696）に米沢藩が完成した歴代年譜 謙信公（上杉家御年譜一として刊行 上杉年譜

と略記）はこの尾張守の実名を長敦としている。しかし，永禄末年の尾張守書状（上越 663.789 等）の署名は忠敦とあり，永禄年間の新発田尾張守は忠敦と名乗っていた。

永禄 4 年，謙信に同行して上野国の厩橋（前橋）にいた前関白近衛前久（前嗣）に近侍して謙信の意向を取り次いでいた者に「しはた」がいた（上越 277）。官途も受領名も記してないが新発田忠敦であるとみてよい。忠敦は翌 5 年（上越 313）。同 7 年（同 431）と謙信の留守をあずかって府内や春日山の警固をまかされていた。その後忠敦は同 11 年 8 月，武田信玄の策略によって村上の本庄繁長が謙信に対抗し，内外の危殆に瀕した謙信の命で信越国境を守る飯山城の助勢に派遣されている（同 613）。ほどなく信玄が信濃から進攻しないことがわかって飯山への加勢は取り止め，「新発田人数」は村上の本庄攻めに投入される（同 614）。謙信の本庄攻めははかばかしく進まず，年末から翌春にかけて会津の蘆名盛氏・米沢の伊達輝宗らの仲介がおこなわれ，これをうけて謙信は本庄繁長と和睦した。謙信が春日山に帰陣する直前，忠敦は謙信から証人，すなわち忠節の証しとして人質の提出を求められている（同 674）。忠敦だけが証人を出していないせいだった。

この後中条氏と黒川氏の紛争が謙信の裁定に持ち込まれた。中条氏は本庄繁長からともに対抗しようと誘われたさい，その書簡を封も切らずに謙信におくっており，有利な裁定を期待していたらしい。しかし理は黒川方にあったようで謙信としては明快な判定をくだせず中条方の説得につとめた。その衝にあたったのが尾張守忠敦であった（同 789 等）。忠敦は謙信の重臣，本庄宗緩・直江景綱や山吉豊守たちと緊密に連携して説得にあたった。

天正 3 年 2 月，謙信は一門・国衆・旗本たちの戦陣への動員数を記した軍役帳を作成した（上越 1246.47）。加地庄域では竹俣参河守（慶綱），新発田尾張守，五十公野右衛門尉，加地彦次郎が順に記載されている。

表 1　天正 3 年　軍役数

	竹俣 三河守	新発田 尾張守	五十公野 右衛門尉	加地 彦次郎
鑓	67	135	80	108
手明	10	20	15	15
鉄炮	5	10	10	10
大小旗	6	12	8	10
馬上	10	17	11	15
計	98	194	124	158

謙信は 6 月に善光寺街道の荒井（新井）町の問屋を定め，伝馬・宿送りの遵守を命じた。これを命じた証書には柴田（新発田）尾張守・竹俣参河守（慶綱）・斎藤下野守（朝信）の三者が署名しているが，尾張守の花押は高野山清浄心院あての尾張守長敦書状のものと同一である（同 3795）。忠敦は天正年間には長敦と名乗りと花押を変えていた。表でみるように新発田氏の軍役は佐々木加地一族では宗家の加地氏をしのいで最大であり，国内では本庄繁長，上野厩橋の北条高広・越中松倉の河田長親など有力者の記載がないとはいえ全体では第 10 位を占める。長敦は一族や家風・家頼といわれる家臣たちを率いて謙信への軍役をつとめ，平時でも春日山に出仕して政権の閣僚的な役割を担っていた。

なお，永禄末年の史料上に新発田源二郎が散見するが，彼は中条越前守の「御舎弟」である（同 624.674）。新発田一族の養子になったと考えられるが詳細はわからない。

3　五十公野氏と右衛門尉重家

越後過去名簿によると，五十公野地域でも天文 5 年の 6 月と 8 月に「五十公野トノ上サマ」が供養していて，6 月のものは自身の逆修であった。「上サマ」は他の用例から女性とみられるが母か姉かは判然としない。同 22 年に「五十公野殿」が供養を依頼しており，永禄 3 年には逆修供養をしている。これら五十公野殿はいずれも享禄 4 年の戦陣壁書の署名者弥三郎景家であり，永禄 3 年の逆修は景家が高齢を意識してのものであったかもしれない。同 2 年，謙信へ祝儀太刀を献上した五十公野備前守は上杉年譜がいうように景家であろうが，このあと五十公野氏の展開をあとづける史料は新発田氏よりさらに乏しくなる。

永禄 9 年 2 月，常陸国小田城を攻略した直後，謙信は下野国佐野城の守将に指令書に使う花押や印判の「やくそく」を通知した（上越 487）。その守将は五十公野玄蕃允・大貫左衛門尉・吉江中務少輔（忠景，のち佐渡守）であった。玄蕃允は世代的には弥三郎景家の次代とみられるが実名はわからない。翌 10 年 5 月，玄蕃允は小田原北条氏

の包囲が強まるなか，突然佐野城を「退散」してしまう（同 560）。つまり謙信の許可なく勝手に職務を放棄して佐野城から逃亡したのだが，包囲網を突破できず敵地で無体に抑留されてしまった。その後玄蕃允が越後に帰れたかどうかはわからない。

翌 11 年，前述のように五十公野氏は謙信によって武田信玄に備えるため新発田忠敦や吉江忠景とともに信濃国の飯山城支援を命じられた。上杉年譜はこのときの五十公野氏を右衛門大夫重家だったとしている。事実とすれば玄蕃允が不祥事によってか家督を失い，重家がそれを嗣いだということになる。右衛門大夫に注目すると，謙信の関東経営の拠点上野国の沼田を守っていた城衆のなかに新発田右衛門大夫がいる。右衛門大夫が沼田に派遣されたのは同 8 年 4 月で（同 456），一時春日山の留守にあたる予定もあったが（同 525），ひきつづき沼田在番をつとめ（同 535.554.591），すくなくも元亀元年（1570）10 月までは駐在した（同 946）。これが重家と同一人だとすると上杉年譜の記事とは合わなくなるが，重家の五十公野氏相続後の名称をさかのぼって使ったとすれば辻褄は合う。ただその相続の時期は明確でない。

天正 3 年に謙信が作成した軍役帳には五十公野右衛門尉と記される。さらに同 5 年末に謙信が記した配下の将士を書きあげた名字尽にも五十公野右衛門尉とある。六位相当である右衛門尉のうち五位のものを右衛門大夫というので大きな相違はなく，いずれも重家をさす。翌 4 年 2 月，能登国七尾の畠山氏の重臣たちが謙信に出馬を求めた書状のあて先は色部惣四郎・斎藤下野守・岩井民部少輔・小倉伊勢守，それに五十公野右衛門である（同 1281）。大名間の交渉では地位が同格の者が書簡を交わすので越後側も謙信の重臣格ということになり，重家はそうした地位にあった。

4　両氏の滅亡

天正 6 年 3 月，謙信が急死した。一門や国衆，旗本など武将たちは後継者をめぐって二派に分裂した。一派は謙信の姉と長尾政景の子で養子になっていた弾正少弼景勝を支持する陣営で，もう一方は越相同盟の証人として謙信のもとにおくられ養子となった北条氏康の子三郎景虎を支持する者たちのである。長敦と重家は景勝を支持した。景勝支持派はいちはやく春日山城を占拠して内外に謙信の後継者と主張し，春日山城を追われた三郎景虎方は御館を拠点として対抗した。3 年におよぶ両派の抗争は御館の乱とよばれる。

周辺の大名では，景虎の実家である小田原の北条氏は上越国境から景勝の根拠地である魚沼上田地方に進攻し，北条氏と同盟する甲斐国の武田勝頼は景虎支援のため信濃国から侵入した。景勝方にとっては眼前に迫った武田軍が最大の敵となった。この武田軍に対して和睦の交渉にあたったのが長敦・重家兄弟をふくむ謙信の閣僚的な立場にあった者たちで，加地庄域では竹俣慶綱・加地安芸守も加わっていた（上越 1527）。武田方とはひと月たらずで交渉が成功し同盟関係が成立した。勝頼は景勝方と景虎方を仲介，いったんは講和が成立したものの程なく破綻すると甲斐に帰国した。景勝方にとって最大の危機であった武田軍との衝突を回避しえたのは長敦・重家たちの尽力が大きかった。ただ，9 月になると「加治よりも五十公野・新発田へ手切」と景虎の書状にあるように，加地氏はなぜか景虎陣営に移っている（同 1655）。その景虎方は有力者が次々と討取られ，ついに翌 7 年 3 月に景虎も自刃に追い込まれ（同 1800），謙信の後継者は景勝と確定した。

このころ重家は因幡守を称するようになる。同年 2 月，能登国にいた鰺坂備中守に参陣を求めた書状は兄長敦・竹俣慶綱との連名だったが，重家ははじめて五十公野因幡守と称している（上越 1753）。

御館をめぐる戦闘はおわったものの越後国内の反景勝勢力はいぜん抵抗を続けていた。とくに中郡といわれた三条の神余親綱と栃尾の本庄清七郎が強力で，その制圧がつぎの課題となった。翌 8 年閏 3 月，景勝が中郡へ出陣するにあたり重家に参陣の用意を依頼した書状は「新発田因幡守」あてになっている（同 1939）。この一年の間に重家は新発田姓にもどっていた。兄長敦は 7 年 6 月を最後にその生存を確認できない。長敦は 7 年後半から翌年春

の間に死去し重家がその跡をついだことになる。ただ，同8年とみられる4月9日付の武田勝頼の書状は長敦・竹俣慶綱と五十公野因幡守あてになっている（同1944）。これは新発田氏で当主の交代が武田側に伝わっていなかったためと考えられる。

五十公野には重家の義兄弟である三条道如斎信宗がはいった。道如斎は能登長沢氏の出身と伝えられ（越史5-484），謙信がその才を見込んで家臣とし蒲原郡三条を与えたといい，同じく近江国出身で吉江氏の養子となった喜四郎資堅（信景）とともに側近として重用した。御館の乱ではともに景勝方に属した。

中郡の三条・栃尾制圧は天正8年7月までに完了し御館の乱は終息した。ところが景勝に大きな外圧がかかってくる。本庄繁長が伊達輝宗に「能登・加賀・越中，信長え一変」と伝えたように（上越2116），本願寺との石山戦争で勝利した織田信長は，家臣の柴田勝家を中心に北陸の一向一揆を制圧させ，隣接する越中国には佐々成政を入れて景勝を攻めさせた。そんななか翌9年の春，謙信以来越中経営の中心となってきた河田長親が病死し，景勝は新たな防衛策として魚津や松倉に竹俣慶綱や中条景泰らを派遣した（同2113）。

この間，重家は織田信長が「新発田因幡守事，此方忠節候」というように（上越2145），信長と連携して景勝政権から離脱した。4月初め重家が「逆心」したとの報に接しても景勝はこれを信じなかったが（同2322），翌月越中から帰陣した前後には事態を確認し，同盟者の武田勝頼にこれを報じた（同2126）。重家は景勝から春日山へ出仕を求められても応じず，勝頼は景勝に必要なら重家を説得するための使者を送ろうかと提案している（同2172･3）。重家が景勝から距離をおきはじめたのは前年からで，竹俣慶綱と新潟津の沖の口（入港税）をめぐって係争をおこし，景勝のもとでは慶綱の訴えがとおった。しかし重家は景勝の裁定を無視し，慶綱から再三引渡しを求められても実力支配を続けていた（同2134）。景勝は新潟に近い木場城に蓼沼友重を派遣，山吉景長とともに新潟の新発田勢に対応させた（同2148・19）。

翌天正10年になると信長軍は甲斐・信濃に進攻し，3月には景勝と同盟する勝頼を自刃に追込んで武田氏を滅ぼして信濃・上野両国からも越後に迫った。これに応じるように重家は配下に新潟・笹岡・水原などで景勝軍と戦わせたが（同2350等），逆に本庄繁長・色部長真軍から新発田領を攻撃されている（同2371）。6月3日には越中の魚津城が落城，竹俣慶綱や中条景泰など守将全員が戦死し，織田軍の越後乱入が旬日の間に迫った。ところがその前日，京都で本能寺の変がおこって信長が死去する。越中はもとより信濃・上野から織田軍が引きあげてゆき景勝は窮地を脱した（同2391）。重家にとっては眼前の勝利が消え去ってしまったことになる。

景勝は謙信も手にできなかった信濃の川中島四郡を制圧して仕置きを終えるとただちに新発田へ向かった。重家は8月下旬から景勝本軍の攻撃を受け，領内はもとより五十公野領の各地も焼き払われた（同2545）。しかし，景勝に同陣するはずの本庄繁長・色部長真の参陣が遅れ，隣接の中条氏も名代ともいえる築地資豊が家中をたばねかねて動けず，重家は景勝方との総力戦をまぬがれた。ひと月ほど在陣のあと景勝は10月初めに軍を引き上げる（同2577.8）。重家は退陣する景勝軍を追撃し，越後治乱記などの軍記物が伝える法正橋合戦で大きな戦果をあげた（越史6-356）。

翌11年5月，景勝はふたたび新発田に向け出陣した（同2771）。まず新潟に寄居を築いてこの地の新発田勢を牽制し，本庄繁長らの参陣を待った。重家は景勝方の拠点笹岡に伏兵を送って先制攻撃を加えたが（同2779），いったんは味方につけた水原が奪還されてしまい（同2783），池之端でも損害が出た（同2788）。しかし，景勝軍が赤谷に向かうと八幡付近でこれを撃退し，重家は致命的な打撃をうけないうちに景勝は8月下旬には春日山へ帰った（同2834）。このあとは重家と景勝方との戦闘がないまま2年が経過する。この間に中央では羽柴秀吉が信長の後継者の地位を固め，重家と結ぶ佐々成政は13年には秀吉に屈して越中から去ってしまった。

事態が大きく変わったのは天正14年である。景勝が上洛して関白となった秀吉に服従し（上越3092他），重家も秀吉の「天下静謐」に従うよう求められる。これを伝える秀吉の奉行衆からの書状は三条道如斎などにも届けら

れ，従前のように景勝に従うよう命じるものだった（同 3138.9）。重家にとって痛手だったのは，味方だった新潟・沼垂が景勝方についてしまったことである（同 3120 他）。両港からは様々な物資の補給を得ていたから，これで重家が頼れるのは会津蘆名氏からの支援だけとなった。

景勝は 8 月に出陣したが秀吉から奉行の木村清久が派遣され新発田攻撃の保留が命じられる。当時，秀吉には徳川家康の臣従が最大の問題となっており，万一の場合景勝の力が新発田に割かれるのを避けたかったのがその理由とみられる。清久が示した重家を赦免する条件は，まず重家が出頭すること，つぎに居城を明け渡すことで，これを受け入れれば重家の本領と同等の領地を替地として与えるというものだった（同 3146）。重家は清久に存分を一書に認めて渡したが（同 3154），秀吉からは景勝との和平が成立したら会津蘆名氏とともに「天下馳走」するよう伝えられ，重家はこれに同意している。重家には景勝の配下ではなく会津の一員として行動するみちを示して景勝との和平がはかられたのである。

しかし家康が上洛して形の上とはいえ臣従が実現すると，秀吉は姿勢を一変する。清久から重家は「物好」との報告をうけていた秀吉は赦免を取り消し，景勝に重家の「討果」を命じた（同 3160）。降雪の時期になったので景勝軍は引き上げ，本格的な攻撃は翌 15 年にもち越される。景勝はいったん春に出陣したものの 6 月に兵を引き，8 月から総攻勢にはいった。重家には会津から兵糧ばかりでなく鉄炮衆などが送り込まれ，蘆名氏の重臣たちが津川につめて支援を強化した。支援は赤谷を通じて行われたので景勝はまず小田切三河守が籠もる赤谷城を攻略する。これによって重家も道如斎も会津からの支援を断ち切られて孤立無援となり，10 月 24 日には五十公野が攻め崩されて三条道如斎以下が戦死，翌 25 日には重家自身が色部長真家臣の峯岸佐左衛門尉に討取られた（同 3193.3200 ～ 2）。五十公野では千人，新発田では重家とともに 3 千人が犠牲になった。制圧した新発田・五十公野領は景勝の家臣が在番して統治にあたった（文禄 3 年定納員数目録）。

重家の配下だった池之端掃部助や猿橋和泉守らは色部長真の同心となった（同上）。

重家の菩提は色部長真が弔い，戒名は一声道可大禅門であった（古案記録草案）。溝口藩政下では城下の福勝寺に墓がつくられ，墓塔には命日を新発田昔物語などに依拠したか天正 14 年 10 月 28 日とあり，同日に追善供養が行われている。庶民の間では木刀を供して拝めば瘧病に効能があるイナバサマとして信仰されるようになり，新井田村の全昌寺では因幡殿縁起を演説する回向・供養が行われていた（明和 5 年月番日記など）。

因みに，新発田では永く因幡守の実名を治長としていた。これは北越軍記などの軍記物の間違いが流布した結果だったが，天保 14 年（1843）に米沢藩の片桐忠敬から儒学者丹羽伯弘に因幡守は重家であることが伝えられてはじめて正しい実名を知る（随得随録）。これが一般に周知されるのは昭和時代になってからだった。

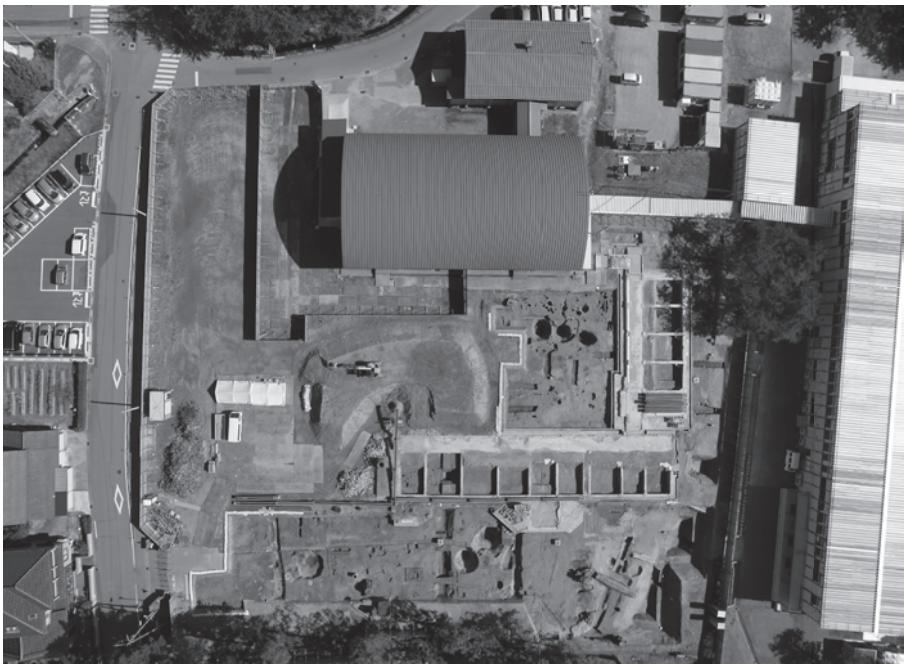
新発田氏の命脈は，重家の弟で早く景勝に従った駿河守盛喜が母方の姓である新保氏を名乗って色部氏に養われ，盛喜の子孫が景勝の子定勝の代に侍組に取立てられ米沢藩士として幕末にいたる。同家には重家の遺物として謙信下賜の刀（粟田口吉光），十文字の鎗（新発田右衛門大夫所持，永禄十一年と刻す），重家の守り本尊千手観音・毘沙門天，愛宕勝軍地蔵（逗子入り），黒塗り柄の采配が伝来していた（片桐忠敬 問答の答）。

新発田市内でも重家の幼児が石川村でかくまわれ，その子孫は石川氏を名乗って存続している。

三条道如斎は五十公野城山麓の安楽寺で弔われている。戒名は安証院正珊道寿大居士，命日は軍記物の記述によってか 10 月 23 日となっている。同寺には道如斎の妻のものと伝えられる小ぶりの鎧兜も保存されている（前住職佐藤榮征師のご教示による）。道如斎の遺児は家来とともに二王子嶽に隠れて生き延び，そのうち一人は姓を神田氏に変えて松浦村の名主になったという（大沼倹爾 新発田因幡守重家）。

五十公野館跡・五十公野城跡遠景　北西から

五十公野館跡遠景　北東から



調査区全景　西から

調査区①･⑧ 調査前近景　西から

調査区③～⑤ 調査前近景　南西から

調査区⑤～⑦調査前近景　北から

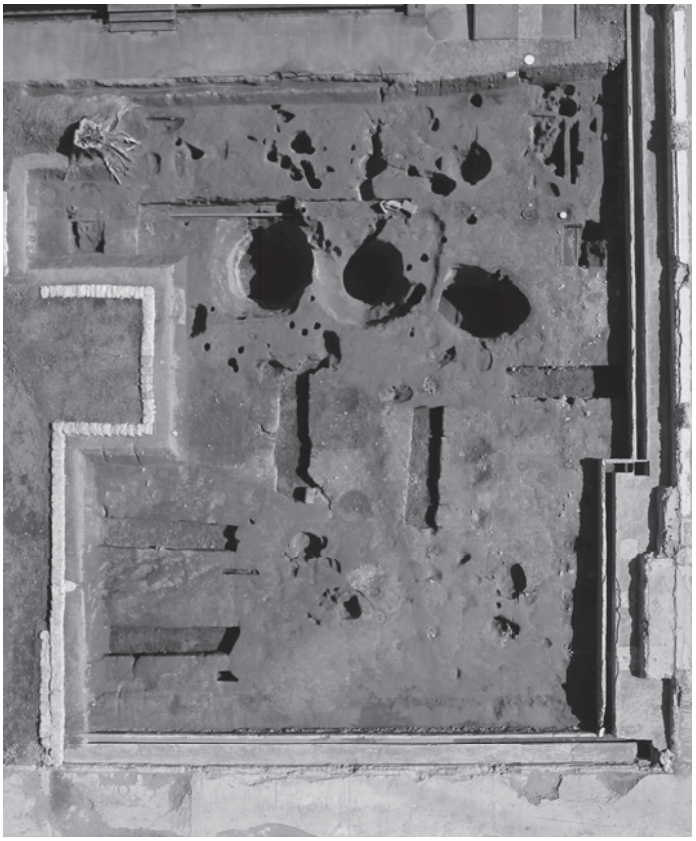
調査区② 溝1　西から

調査区② 溝1 土層断面 A-A’　西から

調査区② 溝1　東から

調査区② 溝1 土層断面 B-B’　西から

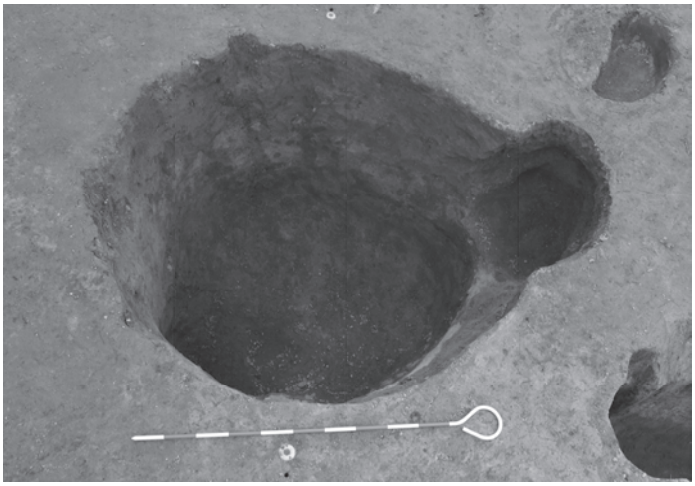
調査区③　北から



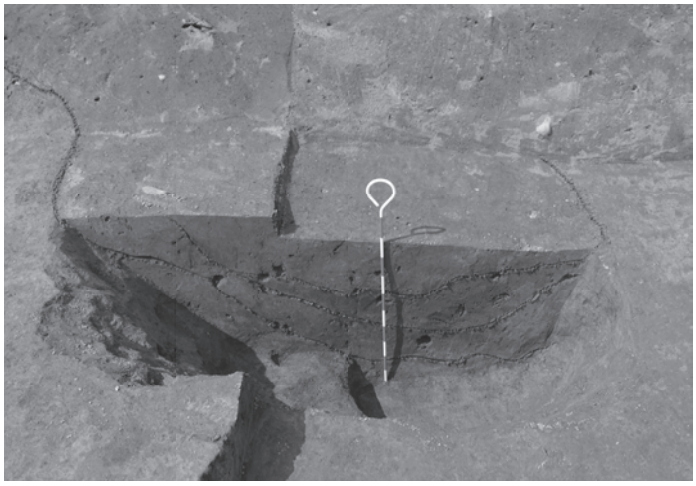
調査区③ 遺構全景　西から

調査区③ 井戸1～3　北西から

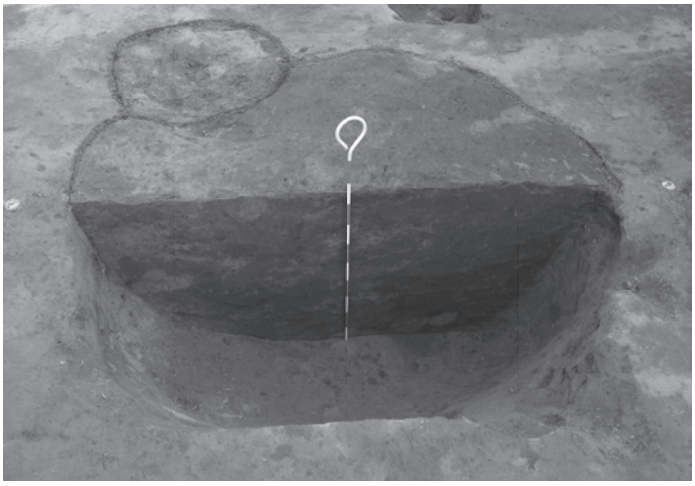
調査区③ 土坑3 土層断面　南から



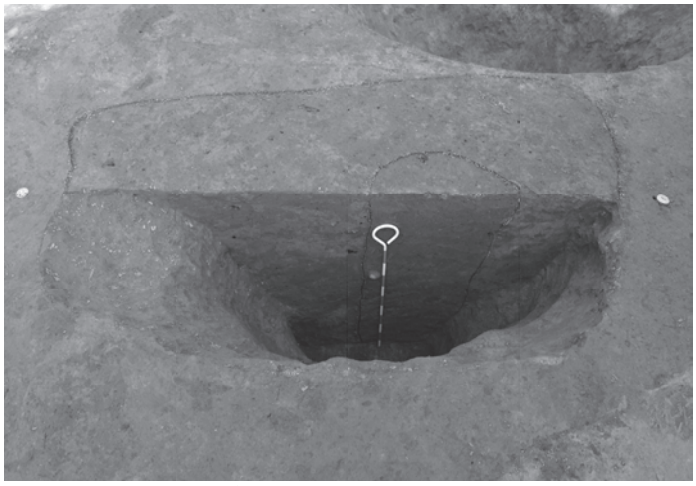
調査区③ 土坑4　北西から



調査区③ 土坑5 土層断面　南から

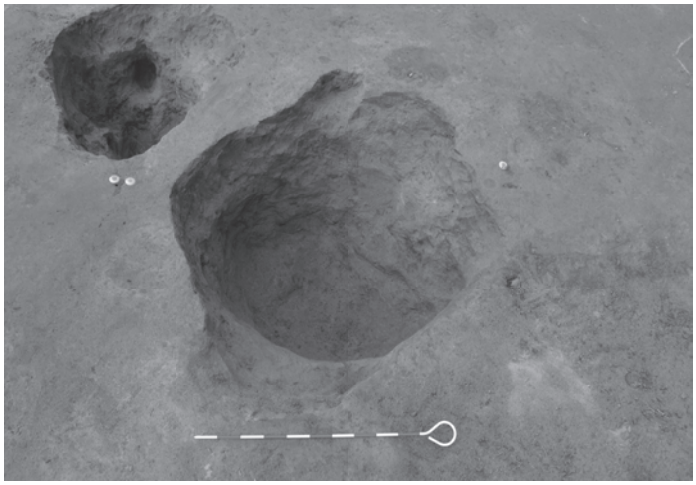


調査区③ 土坑6 土層断面　北から



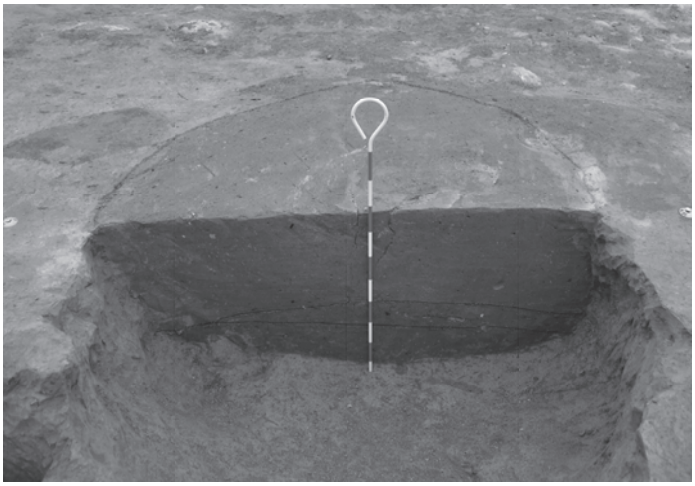
調査区③ 土坑8 土層断面　北西から

調査区③ 土坑8　北西から

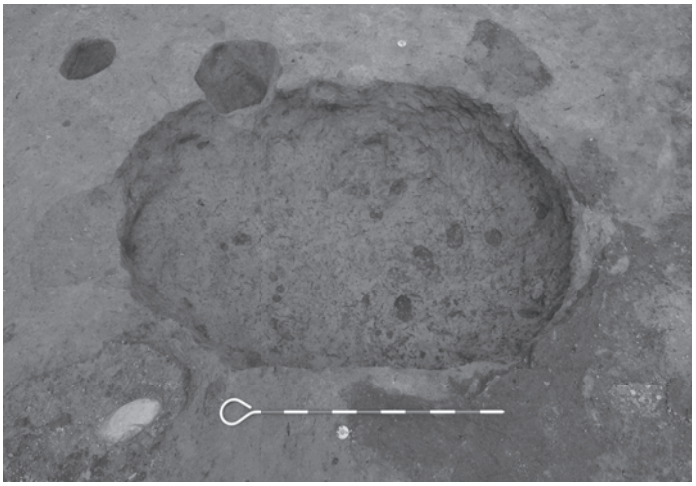


調査区③ 土坑9　南から

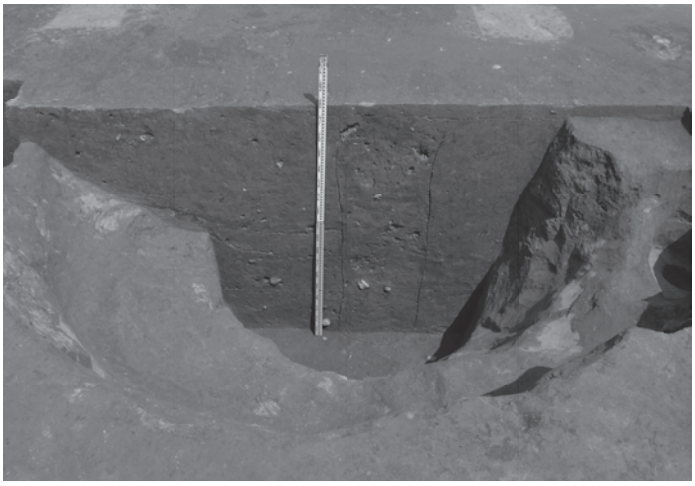
調査区③ 土坑10　東から



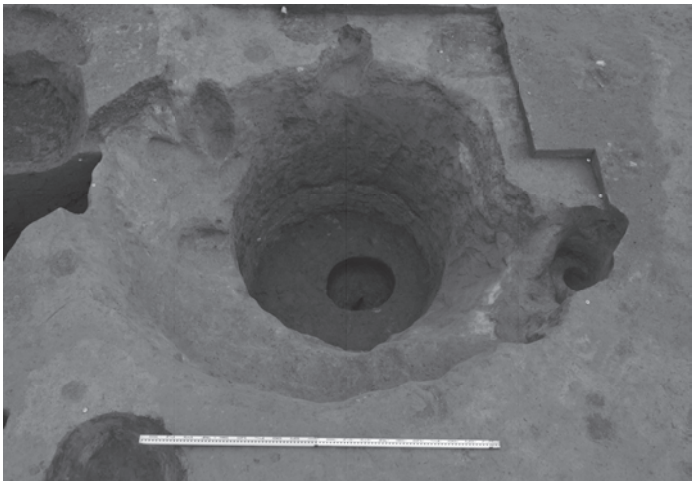
調査区③ 土坑11 土層断面　西から



調査区③ 土坑11　南から

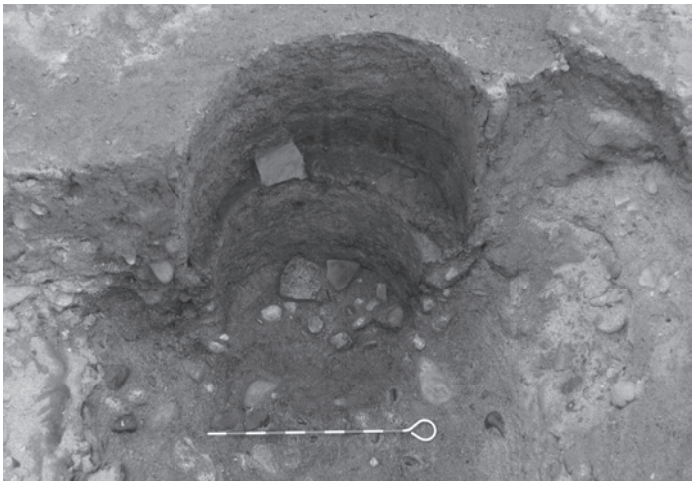


調査区③ 井戸1 上部土層断面　西から



調査区③ 井戸1 上部完掘　西から

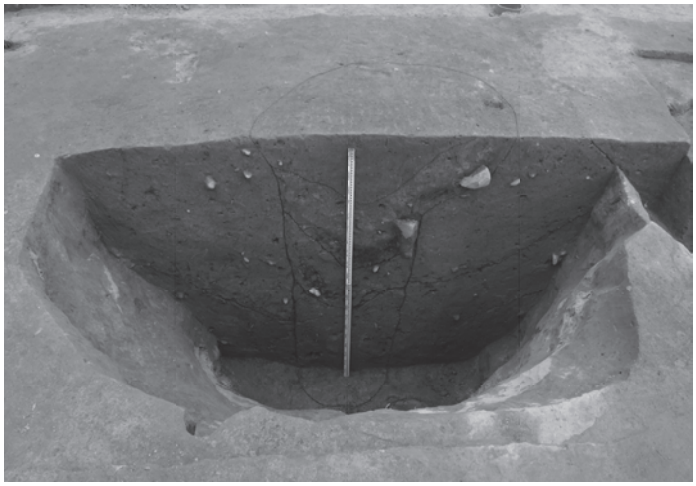
調査区③ 井戸1 下部土層断面　西から



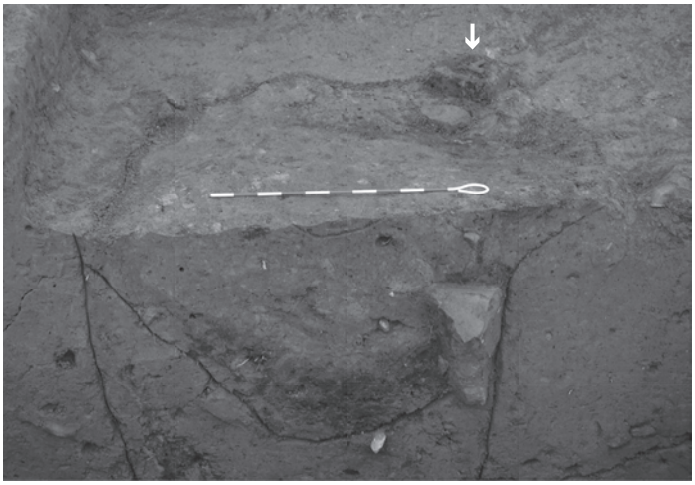
調査区③ 井戸1 底面　西から

調査区③ 井戸1 底面遺物出土状況　西から

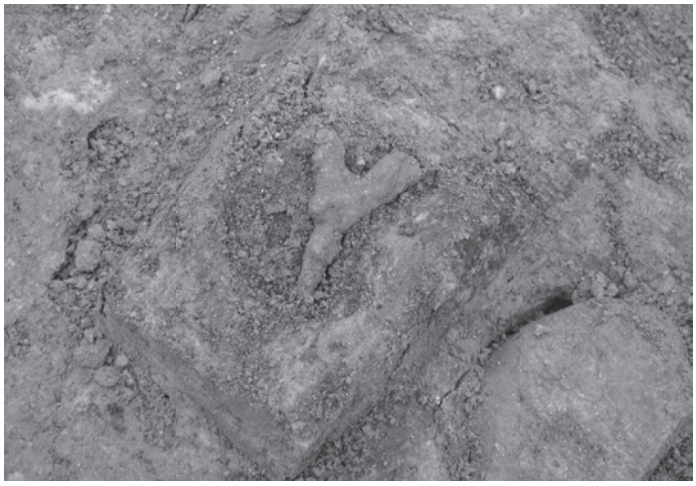
調査区③ 井戸1 桶の痕　西から



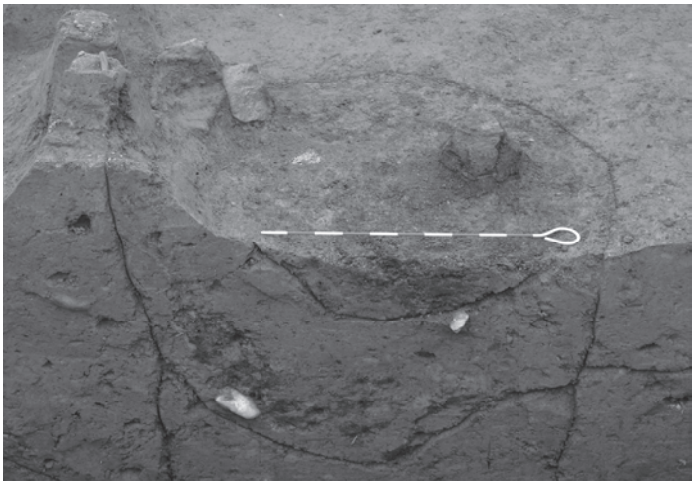
調査区③ 井戸2 上部土層断面　西から



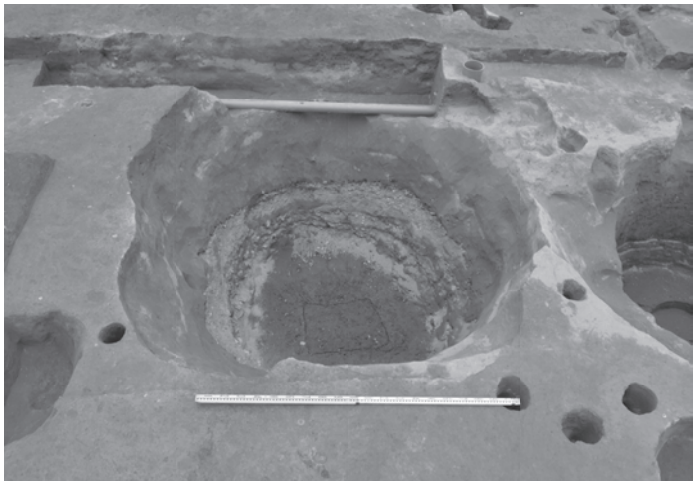
調査区③ 井戸2 雁股鏃出土状況　西から



調査区③ 井戸2 雁股鏃出土状況　北から



調査区③ 井戸2 鉄鍋出土状況　西から



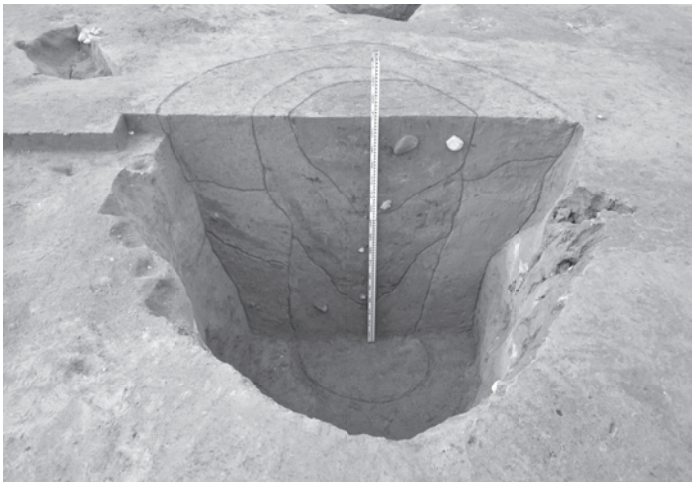
調査区③ 井戸2 上部完掘　西から

調査区③ 井戸2 下部土層断面　西から

調査区③ 井戸2 底面　西から

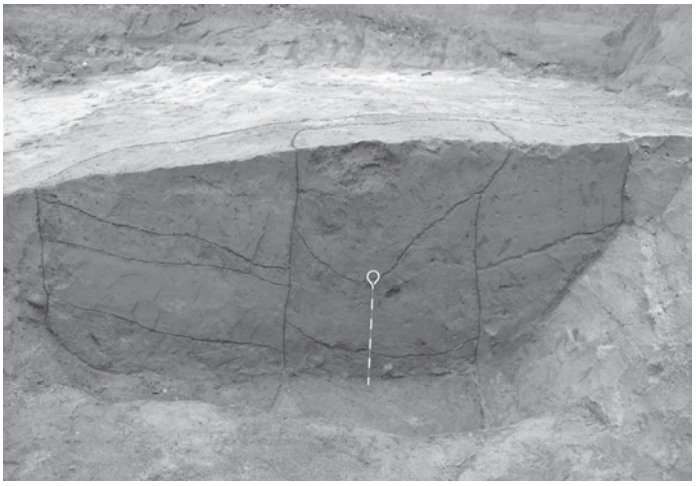
調査区③ 井戸2 底面土層断面　西から

調査区③ 井戸3 上部2層礫出土状況　南から



調査区③ 井戸3 上部土層断面　南から

調査区③ 井戸3 上部完掘　南から

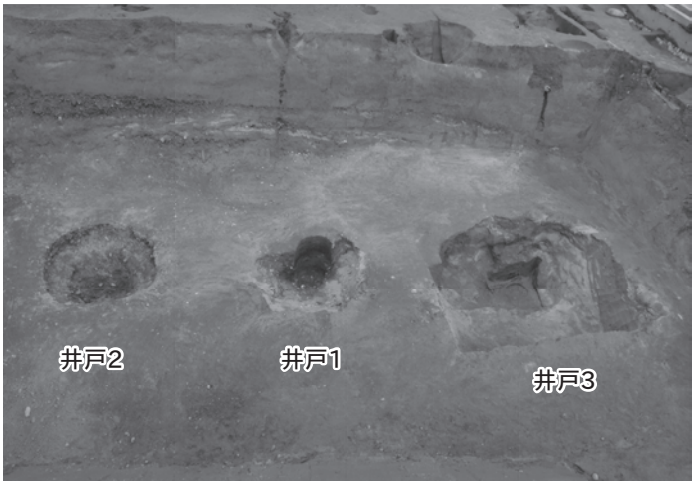


調査区③ 井戸3 下部上半土層断面　西から

調査区③ 井戸3 下部下半検出状況　南から

調査区③ 井戸3 下部下半土層断面　西から

調査区③ 井戸3 底面　西から



調査区③ 井戸1～3 完掘　西から

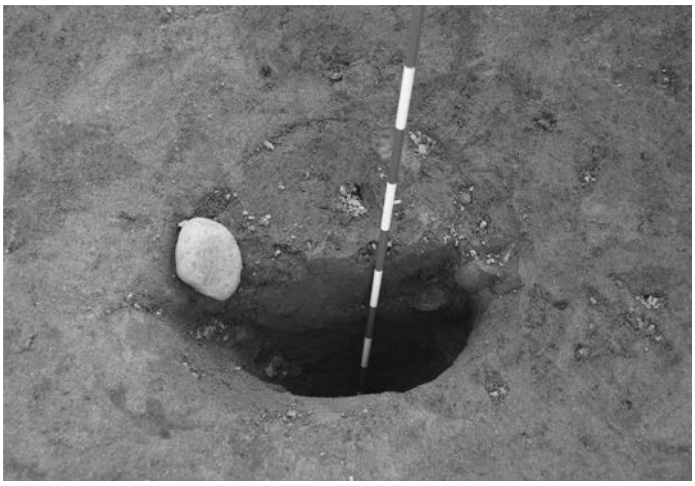
調査区⑨ 北側遺構全景　西から

調査区⑨ 中央部遺構全景　西から

調査区⑨ 南端部斜面　北から

調査区⑥ 竪穴建物1　東から

調査区⑥ 竪穴建物1 土層断面　東から



調査区⑥ 竪穴建物1－ピット1 土層断面　南西から

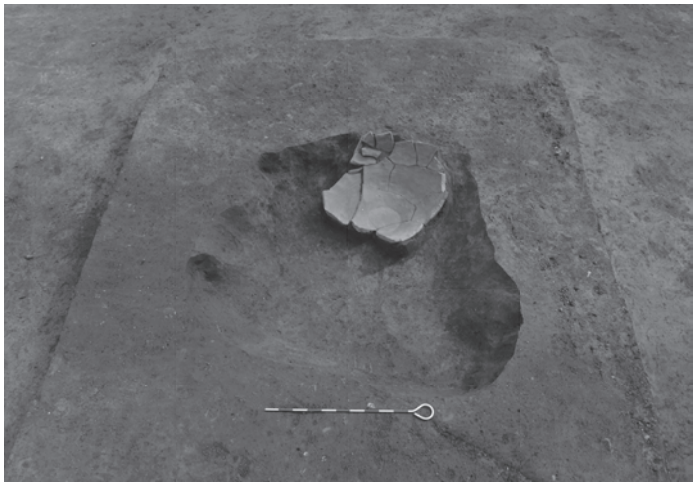
調査区⑥ 土坑1,ピット1～3　東から

調査区⑥･⑨ 溝2　東から

調査区⑨ 中央部遺構確認状況,土坑12　北から

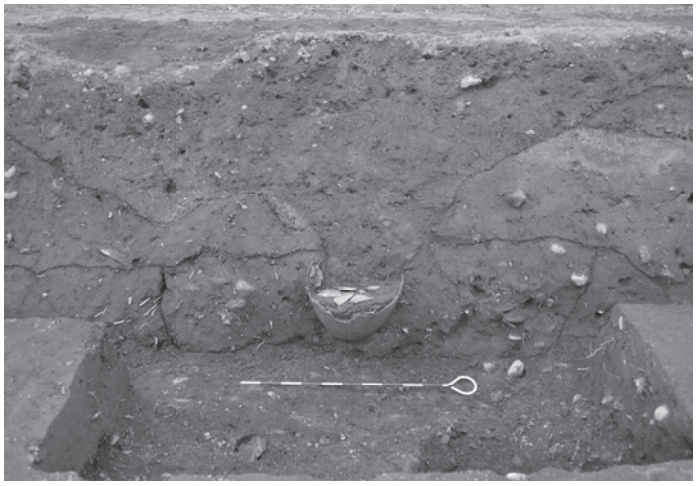
調査区⑨ 竪穴建物2 土層断面　西から

調査区⑨ 竪穴建物2　西から

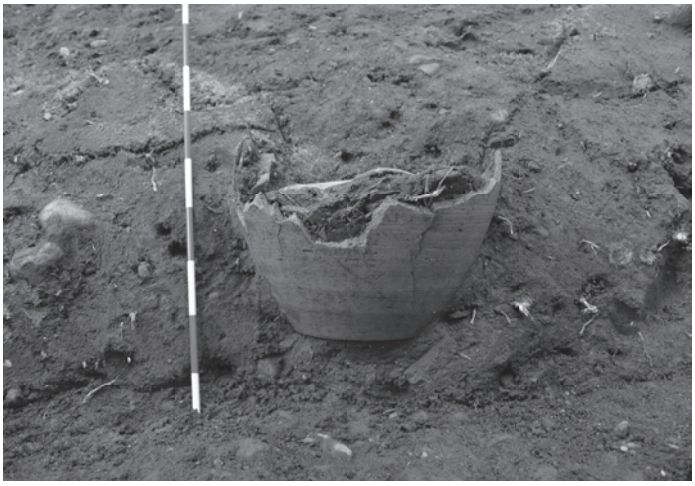


調査区⑨ 土坑12 珠洲焼大甕の埋置状況　北から

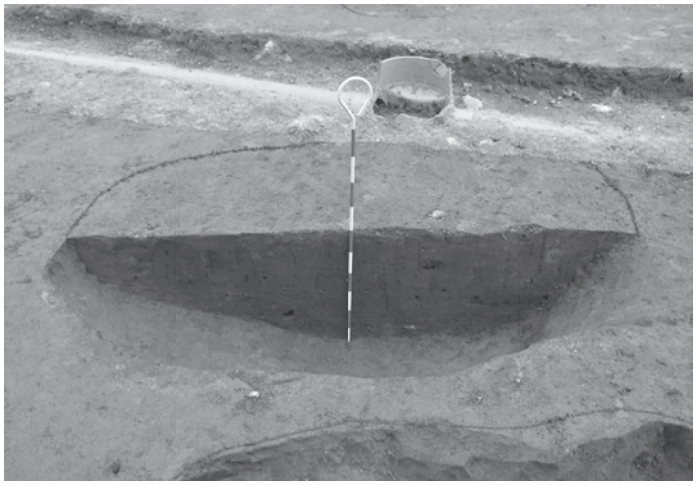
調査区⑨ 土坑13 土層断面　北から



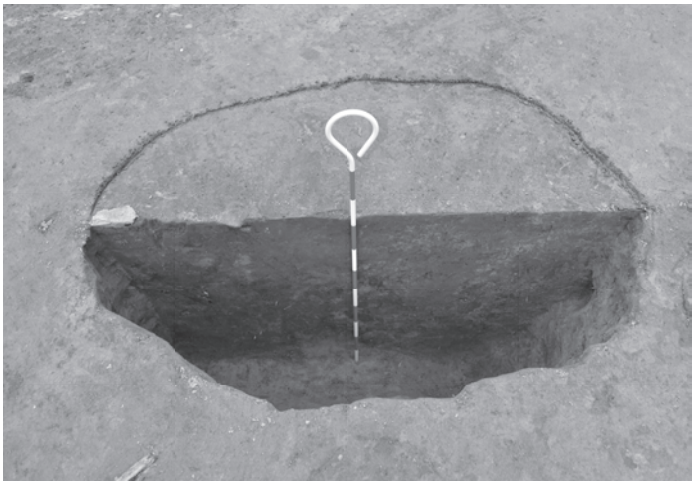
調査区⑨ 土坑14 土層断面　東から



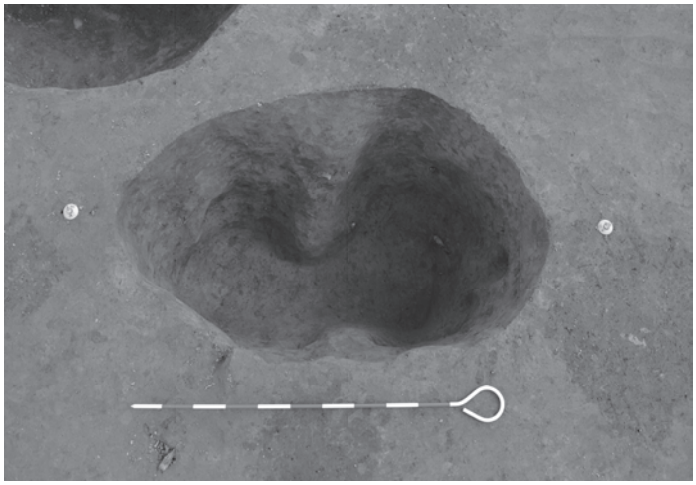
調査区⑨ 土坑14 骨蔵器出土状況　東から



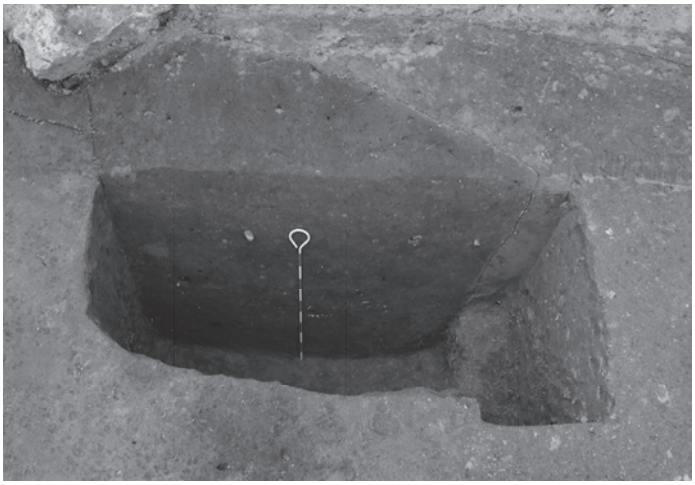
調査区⑨ 土坑15 土層断面　西から



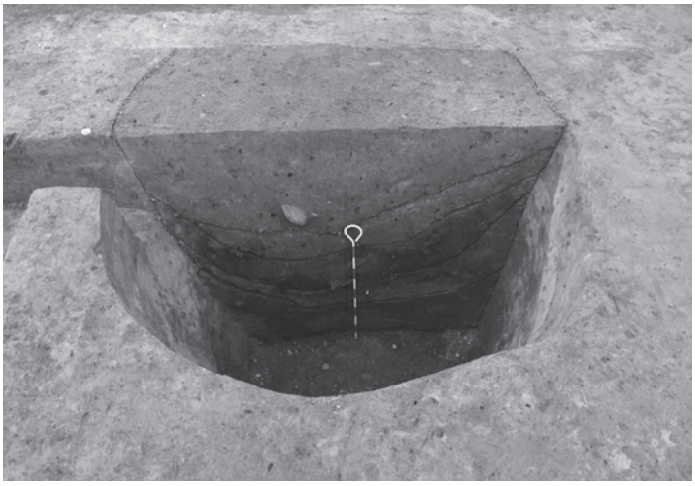
調査区⑨ 土坑16 土層断面　北から



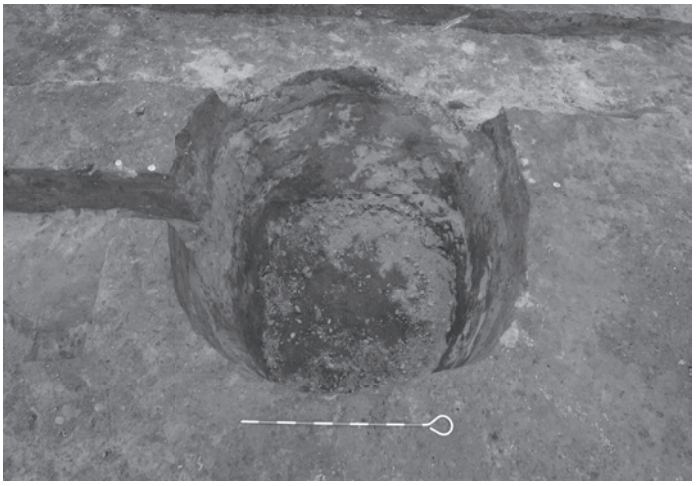
調査区⑨ 土坑16　北から



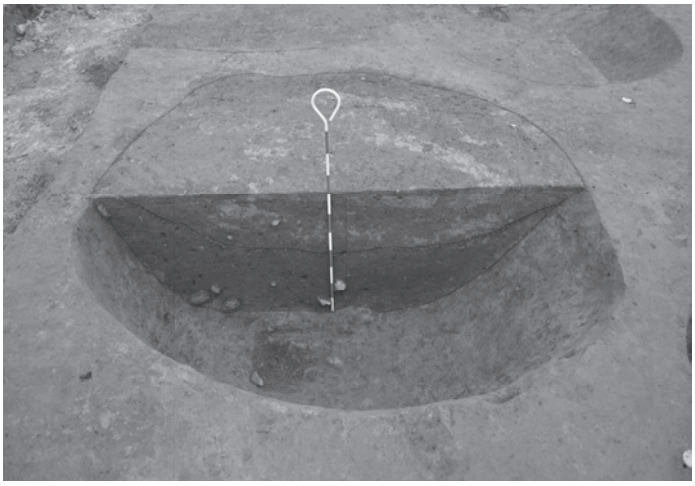
調査区⑨ 土坑18 土層断面　東から



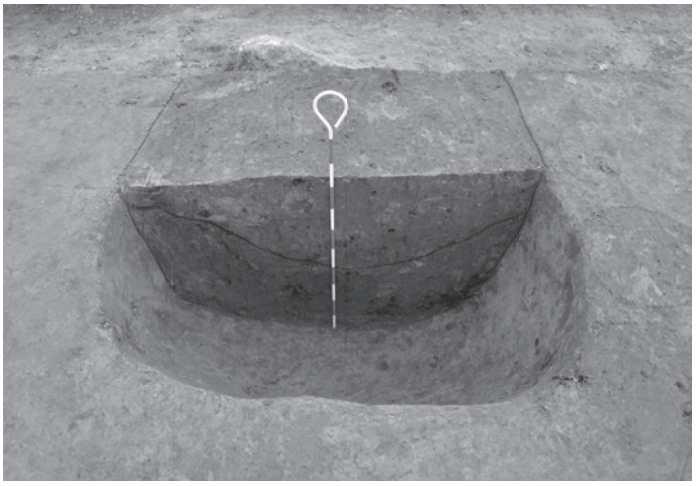
調査区⑨ 土坑19 土層断面　東から



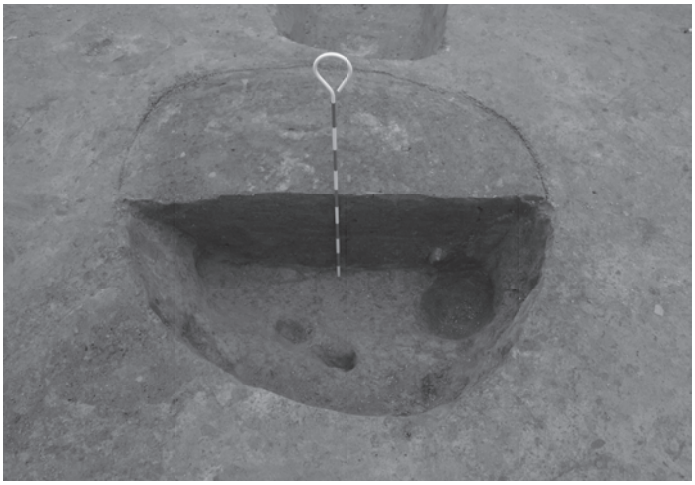
調査区⑨ 土坑19　東から



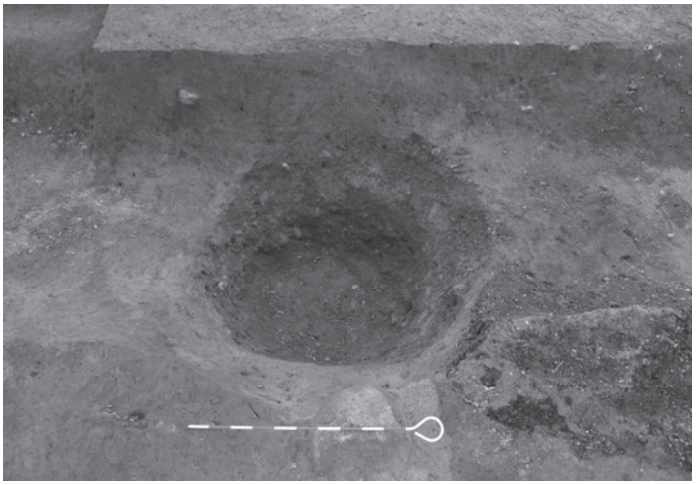
調査区⑨ 土坑20 土層断面　北から



調査区⑨ 土坑21 土層断面　西から



調査区⑨ 土坑22 土層断面　西から



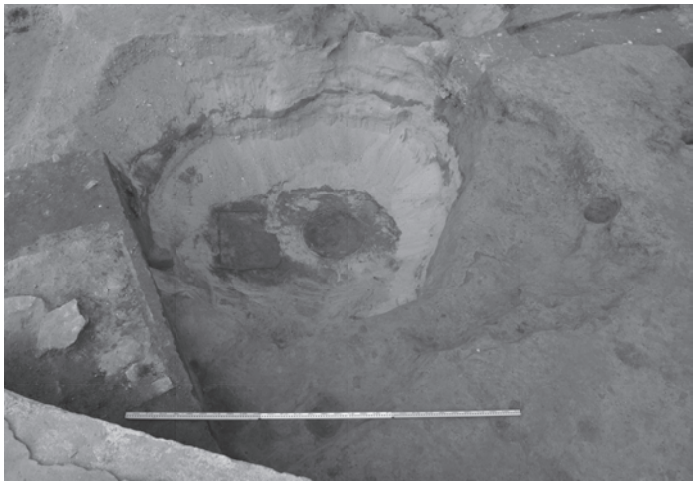
調査区⑨ 土坑23　北から

調査区⑨ 土坑24 土層断面　東から

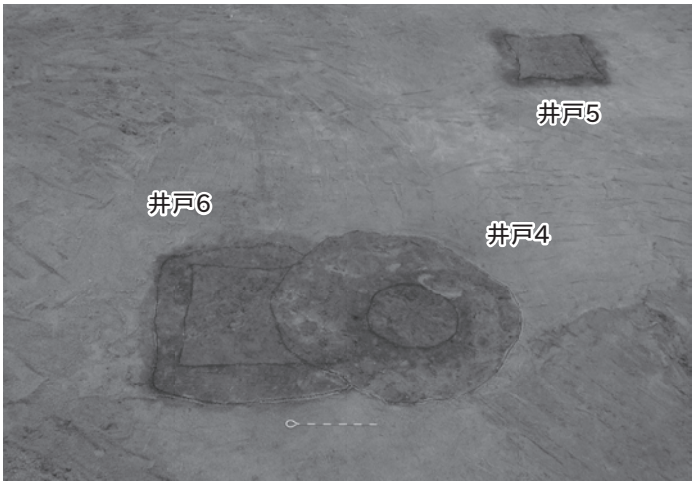
調査区⑨ 土坑26 土層断面　南東から

調査区⑨ 井戸4 上面の礫出土状況　西から

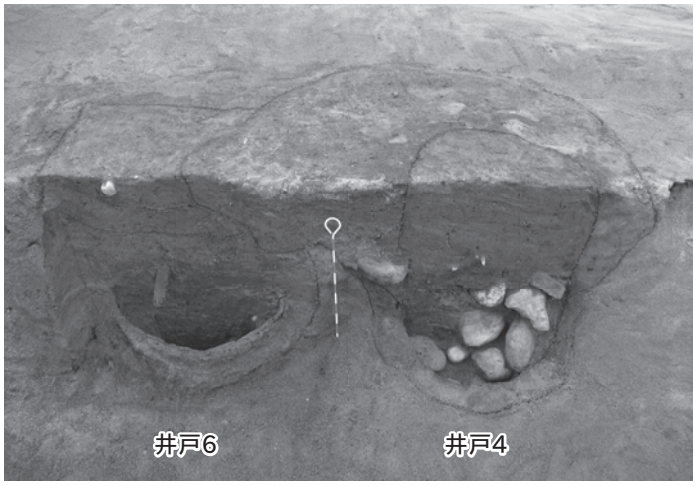
調査区⑨ 井戸4 上部土層断面　東から



調査区⑨ 井戸4･6 上部完掘　東から

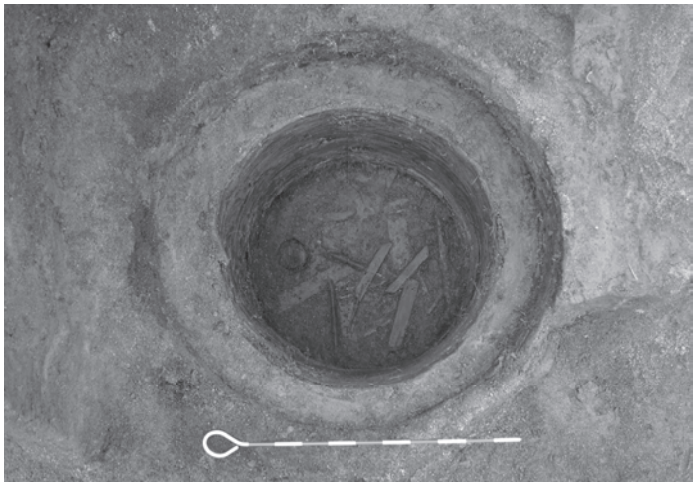


調査区⑨ 井戸4～6 下部確認状況　東から

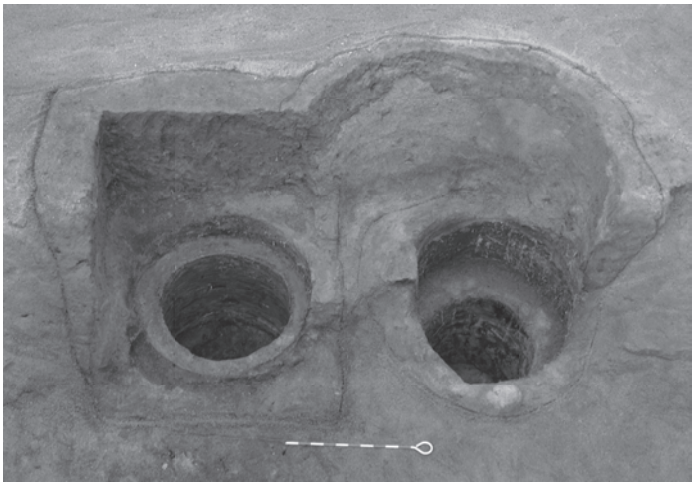


調査区⑨ 井戸4･6 下部土層断面　東から

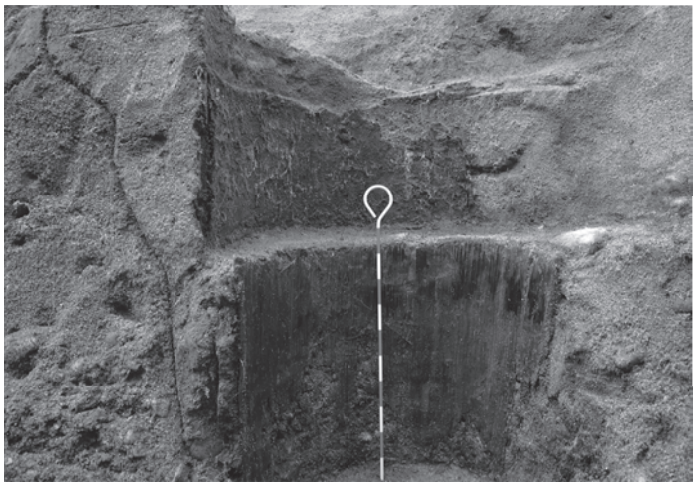
調査区⑨ 井戸4 水溜め内の礫出土状況　東から



調査区⑨ 井戸6 水溜め内の木製品出土状況　東から



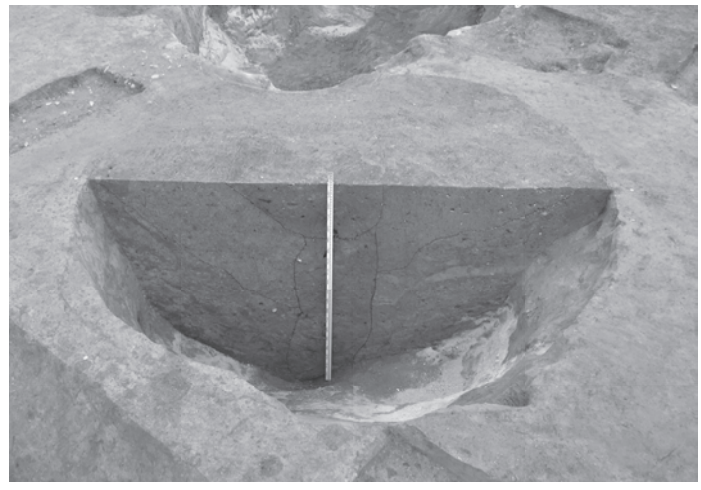
調査区⑨ 井戸4･6 水溜め　東から



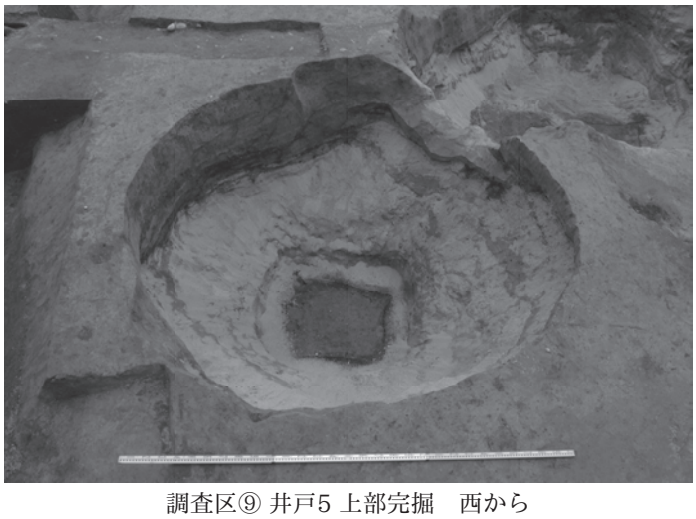
調査区⑨ 井戸4 水溜めの桶　東から

調査区⑨ 井戸6 水溜めの曲物　東から

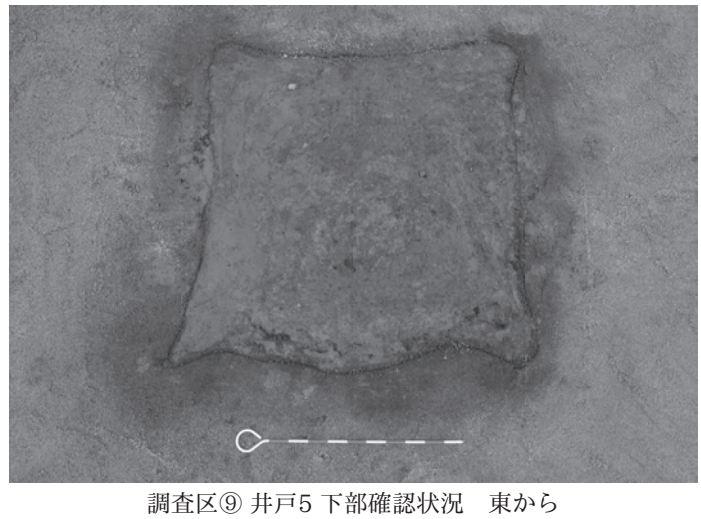
調査区⑨ 井戸4～6 下部の調査風景　東から



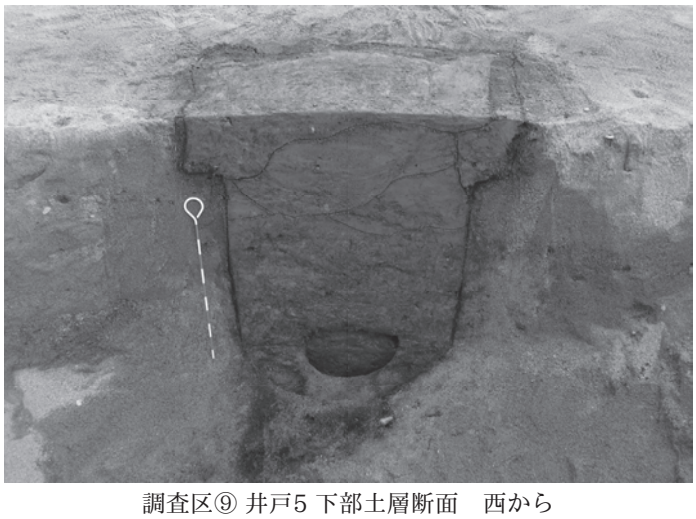
調査区⑨ 井戸5 上部土層断面　北西から



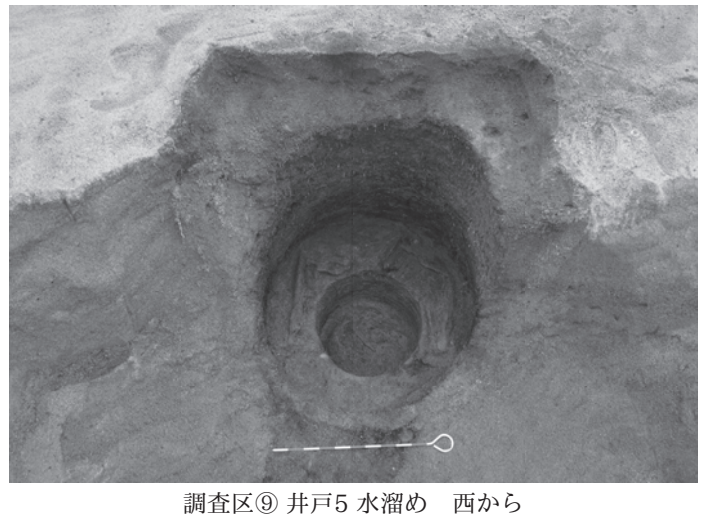
調査区⑨ 井戸5 上部完掘　西から



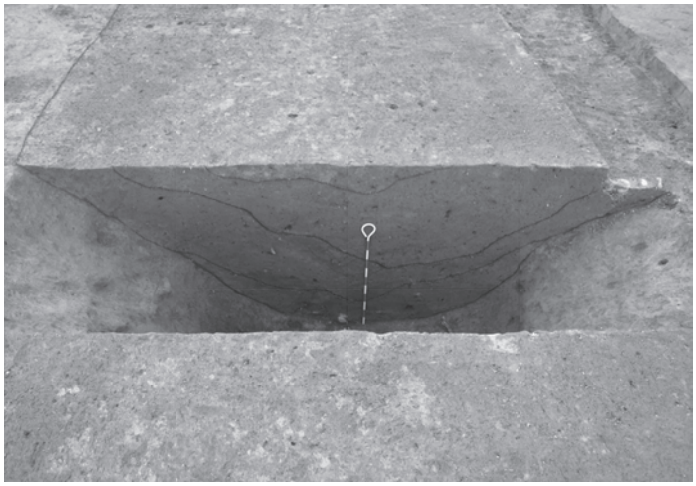
調査区⑨ 井戸5 下部確認状況　東から



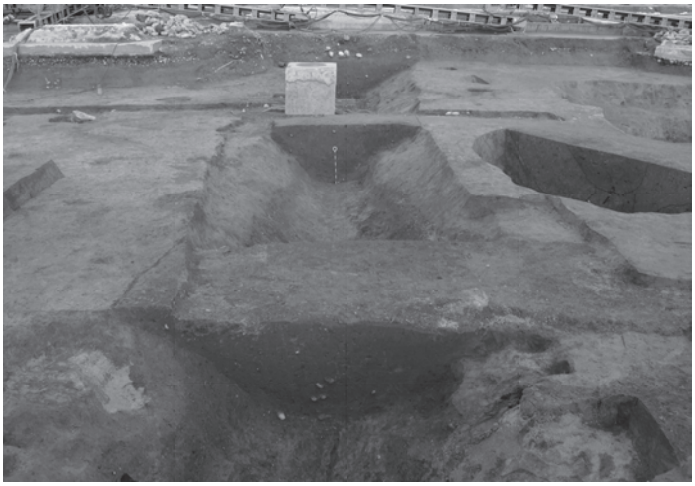
調査区⑨ 井戸5 下部土層断面　西から



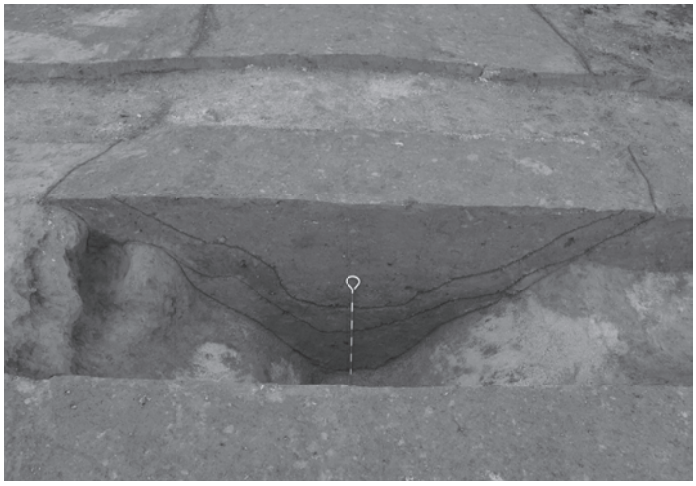
調査区⑨ 井戸5 水溜め　西から



調査区⑨ 溝2 土層断面 B-B’　東から



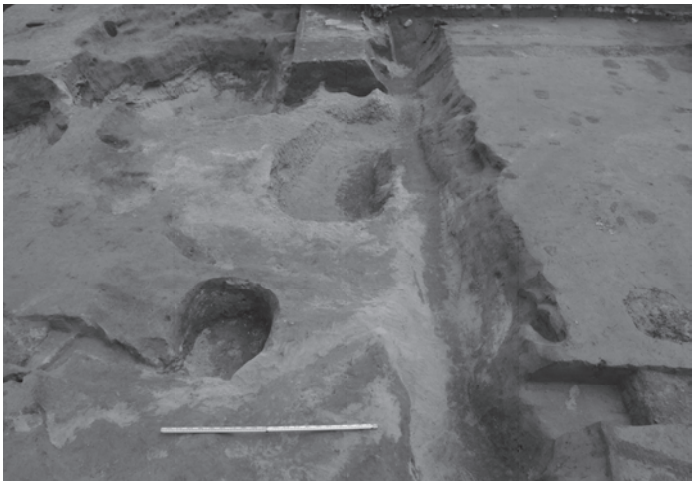
調査区⑨ 溝2　西から



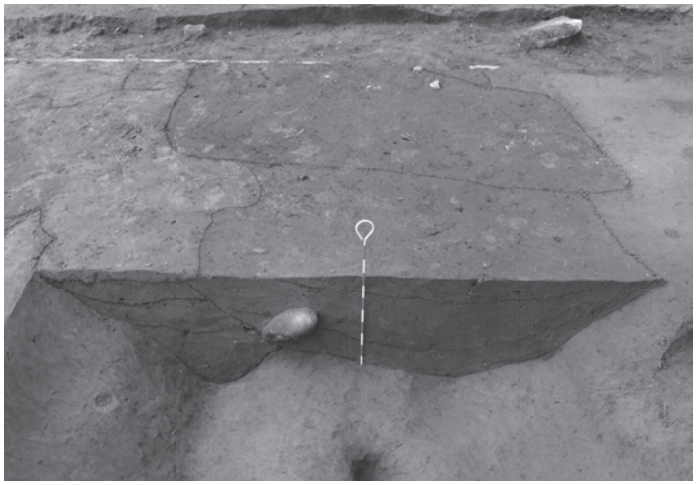
調査区⑨ 溝3 土層断面　東から

調査区⑨ 溝3　西から

調査区⑨ 溝3,土坑26 土層断面　北西から

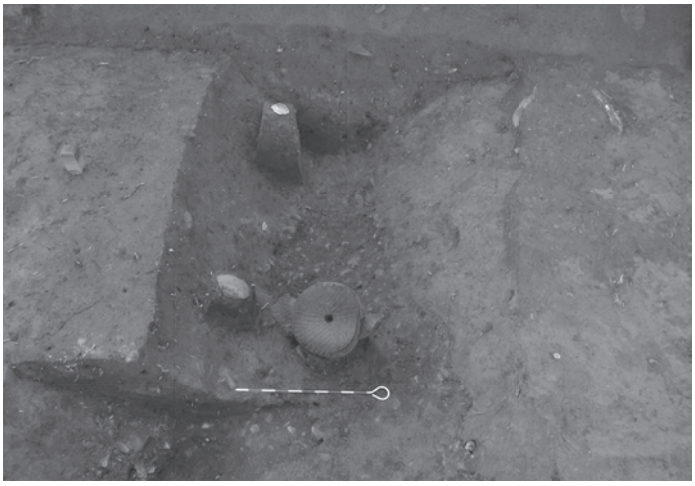


調査区⑨ 溝3,土坑26　西から



調査区⑨ 溝4･5 土層断面 A-A’　東から

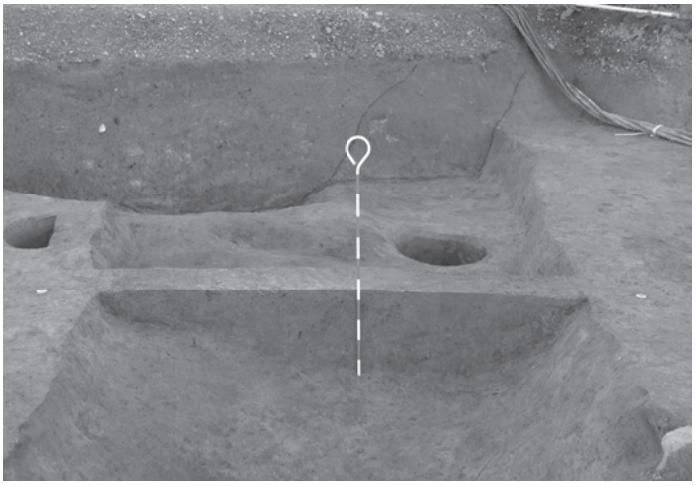
調査区⑨ 溝4 全景　西から



調査区⑨ 溝4 石臼の出土状況　東から

調査区⑨ 溝6 土層断面 B-B’　東から

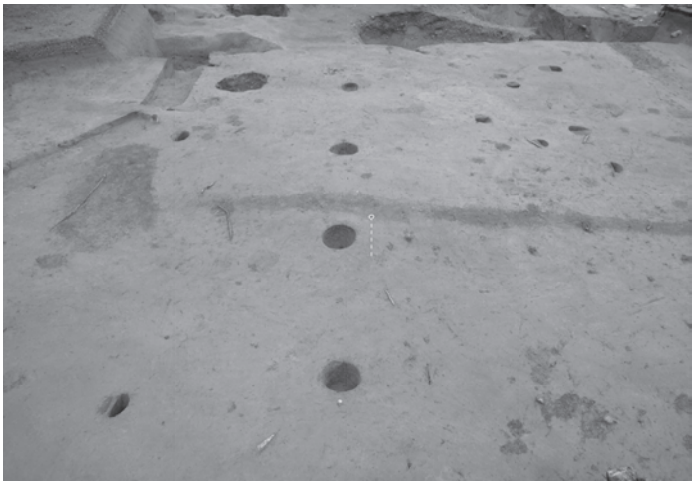
調査区⑨ 溝7　北西から



調査区⑨ 溝7 土層断面 A-A’　東から

調査区⑨ 溝8　西から

調査区⑨ 溝9･10　西から



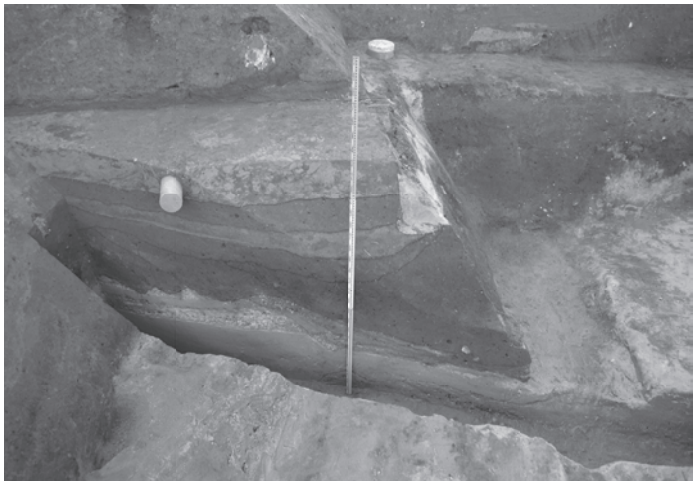
調査区⑨ ピット列1　南から

調査区⑨ ピット列2　東から

調査区⑨　溝7, ピット群, 観音立像出土状況

調査区⑨ Ceグリッドのピット群　南から

調査区⑨ 溝7とピット群　北から



調査区⑨ 斜面堆積土層断面　東から

調査区⑨ 斜面　北東から

調査区⑨ 観音立像出土撹乱抗の土層断面　南から

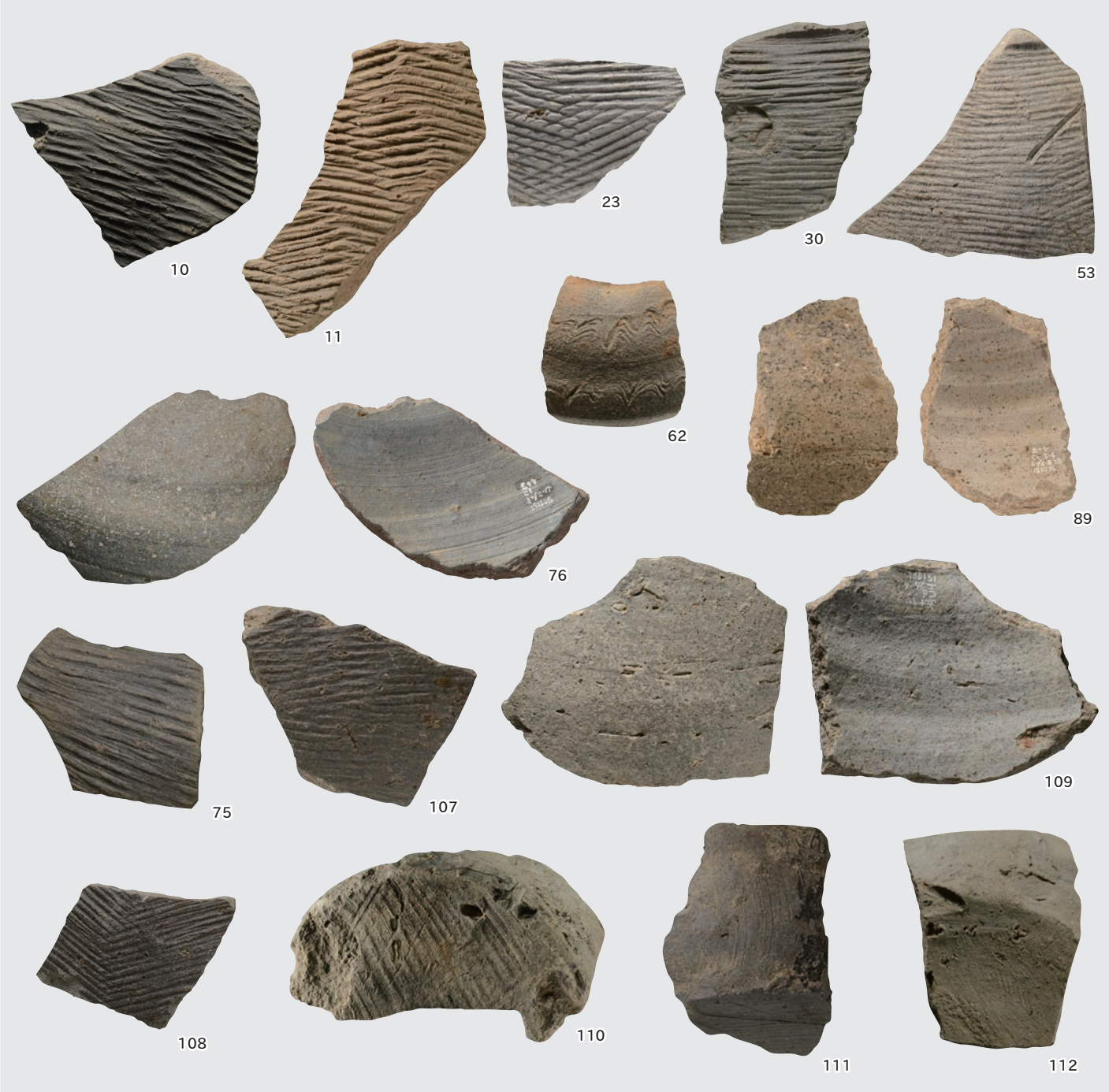
調査区⑨ 観音立像出土撹乱抗の土層断面　西から

調査区⑨ 撹乱抗出土の観音立像　南から

調査区⑨ 撹乱抗出土の観音立像　西から

中国陶磁器
1
2
3
21
40
50
51
70
71
41
73
72
85
86
87
92
97
98
99
100
101
102
103

瀬戸 美濃
36
52
22
42
74
88
93
104
105
106


10
11
23
30
53
62
89
76
75
107
109
108
110
111
112

47b

47b

47b

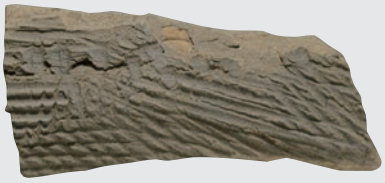
47b

47b

12

31

33


32

44

43

47a

77

90

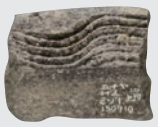
113

114

115

116

13

15

14

25

34

35

45

54

63

64

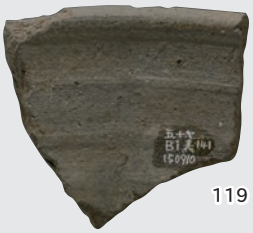
69

79

78

117

118


119

120

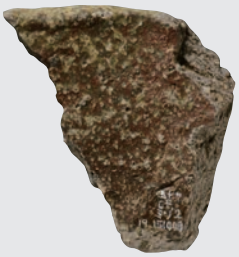
35

5
17
18
37
55a
56
57（内面）
55b
123
94
122
124
121
125
126

19
39a
39b
20
59
46
80
58
91
127
128
129
130
131
132

笹神窯

16


81

土師質土器

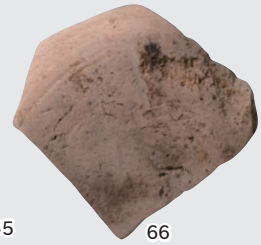
6

7

26

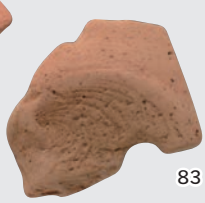
27

60

65

66

67

68

82

83

137

136

138

139

141

143

144

137

瓦器

29

84

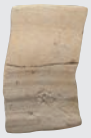
38

133

134

135

古代土器


9

28

61

95

96

140

142

147

146

145

146

95

96

近世後期～近代骨蔵器

49

48・49

148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
148

160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
186
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199

174

175

185

186

193

194

200
201
202
204
203
205
206
207
208

200

200

201

201

202

203

204

205

206

207

207

208

209

210

211

212

213

214

214

215

215

216

216

217

218

219

220

報 告 書 抄 録

ふりがな	いじみのやかたあと　はっくつちょうさほうこくしょ		
書　　名	五十公野館跡　発掘調査報告書		
副 書 名	新発田市立東小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告　第 56		
編著者名	戸根与八郎・田中耕作・秋山泰利・大谷祐司・阿部洋輔・奈良貴史・佐伯史子・井上　巖		
発　　行	新発田市教育委員会　平成 29（2017）年 3 月 31 日	市町村コード	15206
事 務 局	〒 959-2323　新潟県新発田市乙次 281 番地 2 新発田市教育委員会　文化行政課　TEL0254-22-9534		
報告書情報	A4 判　横組 1 段　本文 102 頁　写真図版 29 頁		

所収遺跡	所 在 地	遺跡 No.	地形図 1/2.5 万	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いじみのやかたあと 五十公野館跡	新潟県新発田市 五十公野字樽下 4859 ～ 4864・ 4871 番地	116	新発田	37° 55′ 40″	139° 21′ 00″	20130821 ～ 0827 （グランド部分の確認調査）	211.5㎡	新発田市立東小学校建設事業
						20140818 ～ 0827 （校舎敷地の確認調査）	141.6㎡	
						20150702 ～ 1127 （本調査）	2,535㎡	

遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五十公野館跡	遺物包含地	古代	ピット 1	土師器の杯・椀（墨書）・甕・小甕・甑・土鍋，須恵器杯 (8・9 世紀)	青銅製観音立像は，徳治 3 年（1308）埋納の阿賀野市華報寺墓跡の観音立像と同形。遺物の多くに顕著な被熱痕がある。
	城館跡	中世	竪穴建物 2，土坑 24，井戸 6，溝 10，ピット列 2，ピット 17 (時代不詳を含む)	中国製の青磁・白磁・青花・天目，国産の古瀬戸，瀬戸美濃焼，珠洲焼，越前焼，笹神窯，土師質土器，瓦器 漆器小皿，箸，曲物，折敷 刀，刀子，雁股鏃，鉄鏃，鉄鍋，金具，釘，青銅製観音立像・銅製花瓶・蓋，羽口・椀形滓・鉄滓 14 ～ 16 世紀（主体は 15･16 世紀） 石臼，硯，砥石	
	火葬墓	近世	土坑 1 (他に性格不明の土坑 1)	土師質骨蔵器	

＜要 約＞

五十公野館跡は，天正 15 年（1587）上杉景勝に攻め落とされた五十公野城の西麓に接した台地に立地する。城と一体になった根小屋型式の居館，あるいは山城の副郭の可能性が考えられる。近世は屋敷跡であり，近代以降は数度の校舎建替えによって遺構の遺存状態が悪く，調査面積の割に遺構は少ない。６基の井戸は，深さ 3.0 ～ 3.5m で，井戸側に縦板組と桶組がある。遺物は 15・16 世紀の中世陶磁器を主体とする。なお，青銅製観音立像や雁股鏃といった希少品も出土した。石臼・砥石や珠洲焼・越前焼には，炭化物の吸着や火ばね・剥落・赤橙色化といった被熱痕がみられ，遺構埋土にも大粒の炭化物が目立つことから，五十公野城の落城に関係する可能性がある。

五十公野館跡発掘調査報告書

新発田市立東小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行　平成 29（2017）年 3 月 31 日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次 281 番地 2

印刷　株式会社ライフ

本書は , 本文・図版とも中性紙を使用しています。